

タタラ山遺跡（第8・11地点）

市内遺跡群発掘調査報告書XXIX

2022

白岡市教育委員会

白岡市埋蔵文化財調査報告書第31集

タタラ山遺跡（第8・11地点）

市内遺跡群発掘調査報告書XXIX

2022

白岡市教育委員会

序

このたび白岡市教育委員会では、『タタラ山遺跡（第8・11地点）』の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

白岡市は都心への通勤圏ということもあり、平成以降住宅やマンション建設が相次いできました。平成24年10月には、目覚ましい人口増加を背景に市制が施行されました。一方で郊外ではまだ緑豊かな田園風景が広がっています。

今回報告しますタタラ山遺跡の調査は、これまで11次にわたる発掘調査を実施し、大きな成果をあげて参りました。特に、今から約5000年前の縄文時代前期の大集落として注目を集め、その豊富な出土資料から、タタラ山遺跡が白岡市を代表する縄文時代遺跡であることや、当時の遺跡としては近隣を含めた広い範囲の中での拠点となるような集落遺跡であることがわかってきました。今回の調査でも多数発見された縄文時代前期の住居跡から、縄文土器や石器などとともに、石製の装飾品も出土するなど、縄文時代の人々の活発な交流の痕跡を示す資料を得ることができました。

教育委員会では、地域文化の特色を生かしながら、あらゆる機会と場所での生涯学習を目指す「白岡らしさの発見と創造」を目標に掲げております。当報告書が市民の皆様や学校等関係機関の方々に広く活用され、郷土白岡の再発見と埋蔵文化財保護のご理解につながれば幸いに存じます。

最後に、今回の発掘調査及び報告書作成に当たり、地権者や事業主様、地域の方々には格別のご支援とご理解を賜りました。ここに心より厚く御礼申し上げます。

令和4年3月

白岡市教育委員会
教育長 長島秀夫

例 言

- 1 本書は、埼玉県白岡市内に所在するタタラ山遺跡（第8・11地点）の発掘調査報告書である。
- 2 調査地点所在地は以下のとおりである。
タタラ山遺跡（第8地点）：白岡市白岡696-1の一部
タタラ山遺跡（第11地点）：白岡市白岡760-10
- 3 発掘調査は、白岡市教育委員会と白岡市遺跡調査会が主体となって実施した。第8地点の調査費用は佐藤 智昭氏が負担した。それ以外の調査費用及び整理作業費用は白岡市教育委員会が負担した。
- 4 調査期間は、以下のとおりである。
タタラ山遺跡（第8地点）：平成25年9月2日から平成25年11月22日まで
タタラ山遺跡（第11地点）：令和3年6月8日から令和3年6月16日まで
- 5 指示通知番号は、以下のとおりである。
タタラ山遺跡（第8地点）：平成25年4月12日付け教生文第5-1597号（指示）
平成25年12月3日付け教生文第2-50号（通知）
タタラ山遺跡（第11地点）：令和3年6月4日付け教文資第5-461号（指示）
令和3年6月4日付け学び第100号（通知）
- 6 発掘調査は、第8地点を奥野 麦生と杉山 和徳が、第11地点を杉山が担当した。
整理作業及び報告書作成作業は、杉山の協力を得て奥野が担当した。
- 7 遺物の実測は、奥野と杉山が担当し、青木 美代子、増田 香織の補助を得た。
- 8 本書の執筆はⅠ・Ⅱを杉山が、Ⅲを奥野が、Ⅳを杉山と奥野が担当した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、地権者である佐藤 智昭様、小島 健一様、神 正裕様、神 素子様の御理解、御協力を得て実施した。また、下記の諸氏及び諸機関から御指導と御助言を賜った。
青木 秀雄、池尻 篤、板垣 時夫、鬼塚 知典、河井 伸一、小宮 雪晴、篠田 泰輔、鈴木 敏昭、関 絵美、田中 和之、藤波 啓容、守谷 健吾、油布 憲昭。
公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、埼玉県教育委員会文化資源課、白岡市文化財保護審議会、東部地区文化財担当者会（50音順、敬称略）。
- 10 発掘調査及び整理作業にあたっては、下記の方々に参加協力を得た。
青木 美代子、青木 健次、大野 美沙子、折原 奈美子、桂 都、興野 明夫、黒田 雅之、坂田 玲子、下田 富士子、菅原 春男、関根 政三、高橋 安代、田中 玉緒、爲國 翠子、鳥海 恵子、中村 正勝、中山 敏夫、日直 千代子、藤巻 良雄、星 和枝、堀田 勤一郎、槇島 武二、増田 香織、水澤 和子、森本 美代子、宮内 しろ子、山田 登、吉松 光夫、渡邊 宏士朗、渡辺 英子（50音順、敬称略）。
- 11 調査組織は以下のとおりである。
調査組織（令和3年度）
調査主体者 白岡市教育委員会
事務局 教 育 長 長 島 秀 夫
生涯学習部長 阿部千鶴子
兼学び支援課長
学び支援課長補佐 関 根 啓 文
学びあい図書館担当/
文化振興担当主査 奥 野 麦 生（調査担当） 同 杉 山 和 徳（調査担当）

凡 例

- 1 本書で用いる方位は国土座標の方位で、標高は海拔を表す。
- 2 使用した基準点と遺跡原点（日本測地系平面直角座標第9系）は以下のとおりである。
X = 933.591 m、Y = -15,587.587 m (5A108)
X = 906.000 m、Y = -15,654.000 m (遺跡原点)
巻末抄録の経緯度は遺跡原点を世界測地系に変換したものである。
- 3 本書で掲載した図版の縮尺は原則として以下のとおりである。
遺構：1/60 遺物：土器実測図・拓影図・石器実測図1/3
- 4 挿図と表中の略号は以下のとおりである。
H：住居跡 SK：土坑 FP：炉穴 SD：溝跡 P：ピット
- 5 住居跡の号数は、タタラ山遺跡既報告地点からの連番とし、本報告書では第49号から付した。なお、第6号住居跡は既報告地点のものと同じ遺構である。
- 6 遺物の観察表において残存値には（ ）を付して表記した。
- 7 磁着度はリング状フェライト磁石（30×17×5mm）を用いて、資料の磁着反応を1から順に数字で評価したもので、数値が大きいほど着磁性が強いことを意味する。磁石を用い、35cmの高さから木綿糸で吊り下げた状態で使用する。資料を順次接近させることにより磁石が動き始める距離単位（6mmを1単位とする）を評価台紙上で読み取り、数値化された遺物の評価をする方法である。磁着度0は非磁着を表す。

目 次

序	(2) 土坑	65
例言	(3) 炉穴	93
凡例	(4) 溝跡	93
目次	(5) 風倒木跡出土遺物	96
	(6) グリッド出土遺物	97
I 調査の概要	2 第11地点の遺構と遺物	131
1 調査に至る経緯	(1) 住居跡	131
2 調査の経過	(2) 調査区出土遺物	135
II 位置と環境	IV 総 括	139
1 遺跡の立地と地理的環境	1 第8地点の成果	139
2 歴史的環境	2 第11地点の成果	139
III 調査の成果	写真図版	
1 第8地点の遺構と遺物	報告書抄録	
(1) 住居跡		

挿 図 目 次

第1図 タタラ山遺跡と周辺の遺跡分布図	5	第16図 第52・53号住居跡遺物分布図	22
第2図 タタラ山遺跡の位置と発掘調査区	6	第17図 第52号住居跡出土遺物 (1)	23
第3図 第8地点全測図 (1)	7	第18図 第52号住居跡出土遺物 (2)	24
第4図 第8地点全測図 (2)	8	第19図 第52号住居跡出土遺物 (3)	25
第5図 サプトレンチ土層断面図	9	第20図 第52号住居跡出土遺物 (4)	27
第6図 第6号住居跡出土遺物	10	第21図 第52号住居跡出土遺物 (5)	28
第7図 第49号住居跡	11	第22図 第53号住居跡出土遺物 (1)	30
第8図 第49号住居跡出土遺物 (1)	12	第23図 第53号住居跡出土遺物 (2)	32
第9図 第49号住居跡出土遺物 (2)	13	第24図 第53号住居跡出土遺物 (3)	33
第10図 第50号住居跡	14	第25図 第53号住居跡出土遺物 (4)	34
第11図 第50号住居跡出土遺物 (1)	16	第26図 第53号住居跡出土遺物 (5)	35
第12図 第50号住居跡出土遺物 (2)	17	第27図 第53号住居跡出土遺物 (6)	37
第13図 第51・54・55号住居跡	18	第28図 第53号住居跡出土遺物 (7)	38
第14図 第51号住居跡出土遺物	20	第29図 第53号住居跡出土遺物 (8)	40
第15図 第52・53号住居跡	21	第30図 第54号住居跡出土遺物	42

第31図	第55号住居跡出土遺物	43	第68図	土坑・炉穴出土遺物	92
第32図	第56～58号住居跡	44	第69図	第1号炉穴	93
第33図	第56号住居跡出土遺物	45	第70図	炉穴・溝跡出土遺物	94
第34図	第57号住居跡出土遺物	45	第71図	第1号溝跡	95
第35図	第58号住居跡出土遺物	46	第72図	風倒木跡出土遺物	96
第36図	第59～61号住居跡	48	第73図	グリッド出土遺物 (1)	98
第37図	第57～59号住居跡遺物微細図	49	第74図	グリッド出土遺物 (2)	99
第38図	第59号住居跡出土遺物	49	第75図	グリッド出土遺物 (3)	100
第39図	第60号住居跡出土遺物	50	第76図	グリッド出土遺物 (4)	102
第40図	第61号住居跡出土遺物	50	第77図	グリッド出土遺物 (5)	103
第41図	第6・62号住居跡	52	第78図	グリッド出土遺物 (6)	104
第42図	第62号住居跡出土遺物	53	第79図	グリッド出土遺物 (7)	105
第43図	第63号住居跡	55	第80図	グリッド出土遺物 (8)	106
第44図	第63号住居跡出土遺物	56	第81図	グリッド出土遺物 (9)	108
第45図	第64・65号住居跡	57	第82図	グリッド出土遺物 (10)	109
第46図	第64号住居跡出土遺物 (1)	58	第83図	グリッド出土遺物 (11)	110
第47図	第64号住居跡出土遺物 (2)	60	第84図	グリッド出土遺物 (12)	111
第48図	第64号住居跡出土遺物 (3)	61	第85図	グリッド出土遺物 (13)	112
第49図	第64号住居跡出土遺物 (4)	62	第86図	グリッド出土遺物 (14)	114
第50図	第65号住居跡出土遺物	63	第87図	グリッド出土遺物 (15)	115
第51図	第66号住居跡	64	第88図	グリッド出土遺物 (16)	116
第52図	第66号住居跡出土遺物	64	第89図	グリッド出土遺物 (17)	118
第53図	第1～9号土坑	66	第90図	グリッド出土遺物 (18)	119
第54図	第10～15号土坑	68	第91図	グリッド出土遺物 (19)	120
第55図	第16～25号土坑	70	第92図	グリッド出土遺物 (20)	122
第56図	第26～35号土坑	72	第93図	グリッド出土遺物 (21)	124
第57図	第36～45号土坑	74	第94図	グリッド出土遺物 (22)	126
第58図	第46～54号土坑	76	第95図	グリッド出土遺物 (23)	127
第59図	第55～63号土坑	78	第96図	グリッド出土遺物 (24)	128
第60図	第64～72号土坑	80	第97図	グリッド出土遺物 (25)	130
第61図	土坑出土遺物 (1)	81	第98図	第11地点全測図及び遺構図	132
第62図	土坑出土遺物 (2)	83	第99図	第80号住居跡出土遺物	133
第63図	土坑出土遺物 (3)	84	第100図	第80・81号住居跡出土遺物	134
第64図	土坑出土遺物 (4)	86	第101図	第81号住居跡出土遺物	135
第65図	土坑出土遺物 (5)	88	第102図	調査区出土遺物 (1)	136
第66図	土坑出土遺物 (6)	89	第103図	調査区出土遺物 (2)	138
第67図	土坑出土遺物 (7)	90			

表 目 次

第 1 表	周辺遺跡地名表……………	4	第 10 表	第 62 号住居跡出土石器計測表……………	53
第 2 表	第 49 号住居跡出土石器計測表……………	13	第 11 表	第 64 号住居跡出土石器計測表……………	63
第 3 表	第 50 号住居跡出土石器計測表……………	17	第 12 表	土坑・炉穴出土石器計測表……………	91
第 4 表	第 52 号住居跡出土石器計測表……………	29	第 13 表	グリッド出土石器計測表 (1)……………	125
第 5 表	第 53 号住居跡出土石器計測表……………	41	第 14 表	グリッド出土石器計測表 (2)……………	129
第 6 表	第 55 号住居跡出土石器計測表……………	43	第 15 表	グリッド出土石器計測表 (3)……………	130
第 7 表	第 58 号住居跡出土石器計測表……………	46	第 16 表	第 80 号住居跡出土石器計測表……………	133
第 8 表	第 59 号住居跡出土石器計測表……………	49	第 17 表	調査区出土石器計測表……………	138
第 9 表	第 61 号住居跡出土石器計測表……………	50	第 18 表	第 8 地点出土鉄滓重量表……………	139

写真図版目次

図版 1	掘削作業状況 (1) 掘削作業状況 (2) 実測作業状況 (1) 実測作業状況 (2)	第 58 号住居跡埋設土器検出状況 第 59 号住居跡
図版 2	第 8 地点調査区北半部全景 第 8 地点調査区南半部全景	図版 9 第 59 号住居跡埋設土器検出状況 第 60 号住居跡 第 61 号住居跡
図版 3	第 49 号住居跡 第 49 号住居跡遺物出土状況 第 50 号住居跡	図版 10 第 6・62 号住居跡 第 6 号住居跡 第 62 号住居跡埋設土器検出状況
図版 4	第 50 号住居跡羽口出土状況 第 50 号住居跡焼土遺物出土状況 第 51 号住居跡	図版 11 第 63 号住居跡 第 63 号住居跡遺物出土状況 第 63 号住居跡炉体土器検出状況
図版 5	第 51 号住居跡遺物出土状況 第 52・53 号住居跡 第 52 号住居跡	図版 12 第 64・65 号住居跡 第 65 号住居跡 第 66 号住居跡
図版 6	第 52 号住居跡石製耳飾出土状況 第 53 号住居跡 第 54 号住居跡	図版 13 第 1 号土坑 第 1 号土坑遺物検出状況 第 4 号土坑 第 5 号土坑 第 8 号土坑 第 9 号土坑
図版 7	第 55 号住居跡 第 56 号住居跡 第 57・58 号住居跡	図版 14 第 10・11・14 号土坑 第 12・13・15 号土坑
図版 8	第 57 号住居跡埋設土器検出状況	

- 第12号土坑伏甕検出状況
- 第16号土坑
- 第19・20号土坑
- 第24・25号土坑
- 図版15 第26号土坑
- 第29～32号土坑
- 第33～35号土坑
- 第35号土坑埋設土器検出状況
- 第38・39号土坑
- 第41・42号土坑
- 図版16 第46号土坑
- 第47号土坑
- 第49号土坑
- 第50号土坑
- 第51号土坑
- 第54号土坑
- 図版17 第58号土坑
- 第60号土坑
- 第62号土坑
- 第65号土坑
- 第71号土坑
- 第72号土坑
- 図版18 第1号炉穴
- 石製耳飾出土状況 (1)
- 石製耳飾出土状況 (2)
- 図版19 第6号住居跡出土遺物
- 第49号住居跡出土遺物 (1)
- 第49号住居跡出土遺物 (2)
- 第50号住居跡出土遺物 (1)
- 第50号住居跡出土遺物 (2)
- 図版20 第51号住居跡出土遺物
- 第52号住居跡出土遺物 (1)
- 第52号住居跡出土遺物 (2)
- 第52号住居跡出土遺物 (3)
- 第52号住居跡出土遺物 (4)
- 図版21 第52号住居跡出土遺物 (5)
- 第53号住居跡出土遺物 (1)
- 第53号住居跡出土遺物 (2)
- 第53号住居跡出土遺物 (3)
- 第53号住居跡出土遺物 (4)
- 第53号住居跡出土遺物 (5)
- 第53号住居跡出土遺物 (6)
- 第53号住居跡出土遺物 (7)
- 図版22 第53号住居跡出土遺物 (8)
- 第54号住居跡出土遺物
- 第55号住居跡出土遺物
- 第56号住居跡出土遺物
- 第57号住居跡出土遺物
- 第58号住居跡出土遺物
- 第59・60号住居跡出土遺物
- 図版23 第61号住居跡出土遺物
- 第62号住居跡出土遺物
- 第63号住居跡出土遺物
- 第64号住居跡出土遺物 (3)
- 図版24 第64号住居跡出土遺物 (1)
- 第64号住居跡出土遺物 (2)
- 第64号住居跡出土遺物 (4)
- 第65・66号住居跡出土遺物
- 土坑出土遺物 (1)
- 土坑出土遺物 (2)
- 土坑出土遺物 (3)
- 図版25 土坑出土遺物 (4)
- 土坑出土遺物 (5)
- 土坑出土遺物 (6)
- 土坑出土遺物 (7)
- 土坑・炉穴出土遺物
- 炉穴・溝跡出土遺物
- 風倒木跡出土遺物
- 図版26 グリッド出土遺物 (1)
- グリッド出土遺物 (2)
- グリッド出土遺物 (3)
- グリッド出土遺物 (4)
- グリッド出土遺物 (5)
- グリッド出土遺物 (6)

- グリッド出土遺物 (7)
グリッド出土遺物 (8)
図版27 グリッド出土遺物 (9)
グリッド出土遺物 (10)
グリッド出土遺物 (11)
グリッド出土遺物 (12)
グリッド出土遺物 (13)
グリッド出土遺物 (14)
グリッド出土遺物 (15)
グリッド出土遺物 (16)
図版28 グリッド出土遺物 (17)
グリッド出土遺物 (18)
グリッド出土遺物 (19)
グリッド出土遺物 (20)
図版29 グリッド出土遺物 (21)
グリッド出土遺物 (22)
- グリッド出土遺物 (23)
グリッド出土遺物 (24・25)
第8地点出土石製装飾品
図版30 第11地点調査区北半部全景
第11地点調査区南半部全景
図版31 第80号住居跡炉跡
第81号住居跡炉跡
埋設土器検出状況 (1)
図版32 埋設土器検出状況 (2)
磨製石斧出土状況
大型石棒出土状況
図版33 第80号住居跡出土遺物
第80・81号住居跡出土遺物
第81号住居跡出土遺物
図版34 調査区出土遺物 (1)
調査区出土遺物 (2)

I 調査の概要

1 調査に至る経緯

白岡市は埼玉県東部に位置する総面積24.92km²の市で、東西約10km、南北約6kmと東西方向に長い。市域の中央部を南北にJR宇都宮線（東北本線）、東北新幹線、東北自動車道等が貫き、JR白岡駅・新白岡駅周辺や主要地方道（県道）さいたま栗橋線沿いに市街地が形成されている。しかし市街地外縁には水田や畑地、特産の梨の畑等が営まれ、水と緑の豊かな光景が広がる。

昭和29年に篠津村と日勝村及び大山村の一部の3村合併により誕生した白岡町は、当初純農村的な町であった。しかし、昭和33年の東北本線の電化、同40年代初頭の県道大宮・栗橋線（現さいたま栗橋線）や国道122号など主要道の開通などをきっかけに、都心から40km圏内である当市はベッドタウン化が顕著となった。平成以降は駅周辺にマンションや集合住宅の増加が目立ち、山林は分譲宅地に姿を変えつつある。中高層のマンション開発も進み、今後も市域における開発の激化が予想される。

また、平成22年度には、市域北部で首都圏中央連絡自動車道（圏央道）と東北自動車道を接続するジャンクション建設（久喜白岡ジャンクション）が完了し、交通網の発達が目ざましい。人口の増加を背景に、平成24年10月には市制を施行した。

このような情勢のなか、白岡市教育委員会では公共及び民間の開発事業と埋蔵文化財保護の調整に努めてきた。開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）に該当する場合は事前に試掘調査等を行い、遺跡の破壊が免れない場合には事前に発掘調査による記録保存を実施している。今回報告するタタラ山遺跡（第8・11地点）の発掘調査は、以下の経緯で調整された。

2 調査の経過

タタラ山遺跡（第8地点）は、集合住宅建設計画に伴い平成25年2月26日に実施した試掘調査の結果を受け、同年中に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の南西寄りに位置し、標高は約15mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成25年9月2日・3日	調査区南半部表土除去
9月4日～9日	周辺環境整備、基準杭設定
9月10日～10月28日	包含層掘削、遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
10月29日～31日	排土反転、調査区北半部・南西部表土除去
11月1日～11月19日	包含層掘削、遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
11月21日・22日	埋め戻し作業、調査終了

タタラ山遺跡（第11地点）は、個人住宅建設計画に伴い令和3年6月1日に実施した試掘調査の結果を受け、同年中に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の北寄りに位置し、標高は約15mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。なお、試掘調査時に調査区南半部の表土を除去した。

令和3年 6月8日・9日	遺構掘削、写真撮影、実測作業
6月10日	排土反転、調査区北半部表土除去

6月11日～15日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
6月16日	埋め戻し作業、調査終了

II 位置と環境

1 遺跡の立地と地理的環境

タタラ山遺跡の位置する地域は、近世村名をとって白岡地区といわれ、地形的には大宮台地白岡支台上にあたる。白岡支台は久喜市除堀付近から、当市の篠津地区、白岡地区、小久喜地区を経て、蓮田市黒浜付近まで南北約9kmにわたって展開している。支台の東側に広がる沖積地は「日川筋」と呼ばれる利根川水系の旧河道である。西側には元荒川の沖積低地が広がっている。

白岡支台の特徴は、北部と南部で標高や低地との比高差が異なることである。北部では標高12m、低地との比高差は1m程と低平なのに対し、南部では約15~16m、比高差5~6mと明瞭な崖線を形成する。これは埼玉県加須市を中心とする関東造盆地運動に起因するといわれている。また支台の東縁と西縁の台地形も対照的で、東縁は沖積低地との差が不明瞭なのに対し、西縁は支谷が発達し切り立った崖線を形成するという特徴がある。

2 歴史的環境

大宮台地白岡支台上に展開する遺跡の内、タタラ山遺跡周辺の代表的な遺跡を通時的に概観する。

旧石器時代の遺跡としては、層位的な出土ではないものの、入耕地遺跡をはじめ白岡支台西縁部の山遺跡やタタラ山遺跡、篠津地区の中妻遺跡や小久喜地区の南鬼窪氏館跡などで、ナイフ形石器や角錐状石器等が出土している。

縄文時代は早期から晩期までの遺跡がみられる。縄文時代前期初頭の花積下層式期では、タタラ山遺跡で70軒に及ぶ住居跡などが検出され、埼玉県下でも屈指の規模の集落であったことが判明した。同遺跡の豊富な遺構、遺物量、ことに造形豊かな石製装飾品群の出土は、今後の該期文化の研究を強力に推進するものとなる。前期後半以降は、諸磯b式期に茶屋遺跡やタタラ山遺跡で住居跡や土坑等が検出されるものの、集落規模は縮小傾向にある。

再び集落遺跡が確認されるようになるのは、縄文時代中期後半の加曾利E式期からで、山遺跡をはじめ、沖山西遺跡やタタラ山遺跡などでも一定規模の集落の展開が明らかになっている。

縄文時代後期から晩期になると、遺跡数は限定されるものの、一遺跡において膨大な量の遺物を伴うようになる。昭和26年に國學院大學考古学会が発掘調査を行ったことで著名な入耕地遺跡では、正福院貝塚との間に入る小支谷の谷頭を囲むように環状盛土遺構を形成しており、堀之内式期と加曾利B式期及び安行3a~3d式期の遺物が確認される。

弥生時代から古墳時代にかけては遺跡分布が希薄になる。古墳時代前期では入耕地遺跡や茶屋遺跡で住居跡が認められ、一定規模の集落規模の展開が窺われるほか、正福院貝塚では方形周溝墓が検出されている。一方、古墳時代中・後期は中妻遺跡や神山遺跡で住居跡が数軒検出される程度である。

奈良・平安時代では、中妻遺跡が居住域及び生産域の中心であったと考えられる。中妻遺跡では精錬作業を含む製鉄を行っていた8世紀代の鍛冶工房跡が検出された。山遺跡や南鬼窪氏館跡においても同時期の木炭窯跡が検出されており、鍛冶関連遺構への炭の供給が想定される。

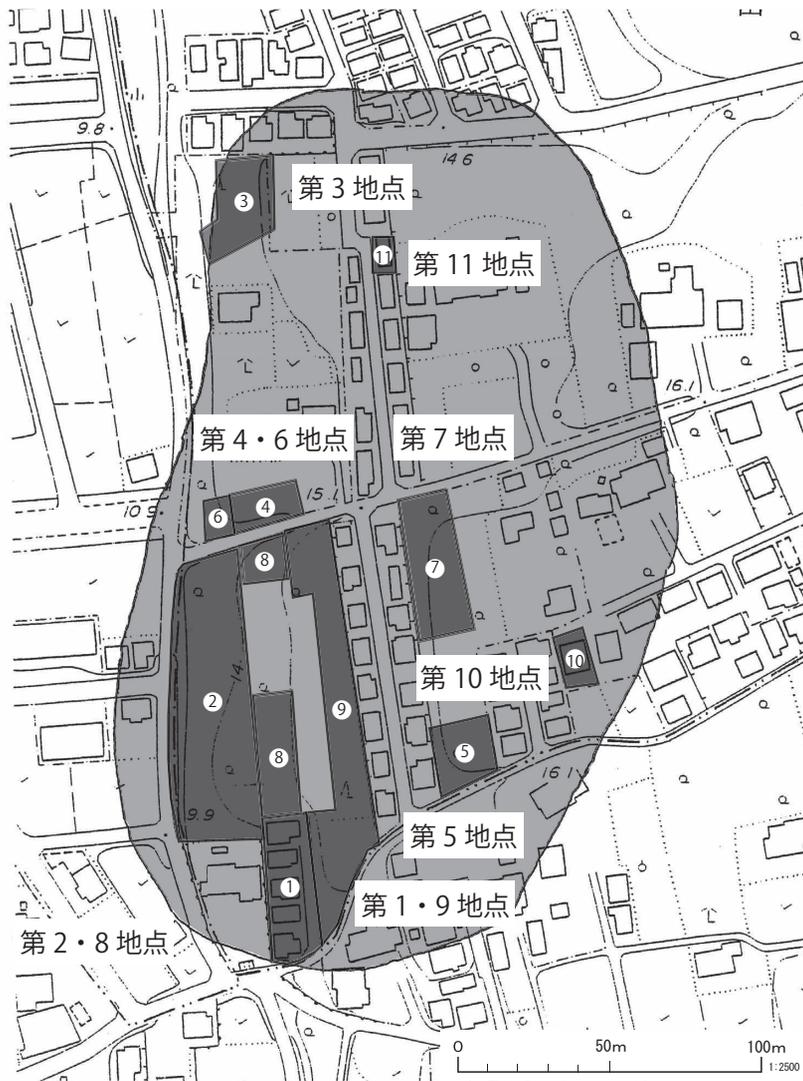
中世では、入耕地遺跡で堀に囲まれた14～16世紀の館跡とともに舶載陶磁器類が多数出土している。また、中妻遺跡においても掘立柱建物跡群や大規模な堀が検出されている。白岡支台は中世の埼玉西郡に属し、武蔵七党の野与党の有力一族、鬼窪氏が本貫地としたといわれる。遺跡周辺に存在する白岡八幡宮や正福院、篠津久伊豆神社などは、草創や社殿造立に同氏との関わりが伝承されている。

第1表 周辺遺跡地名表

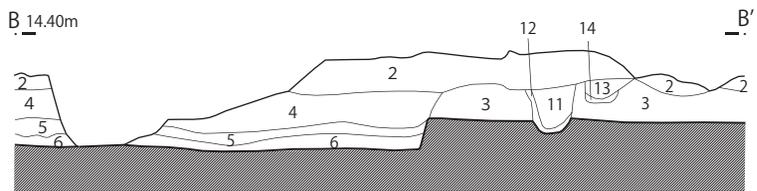
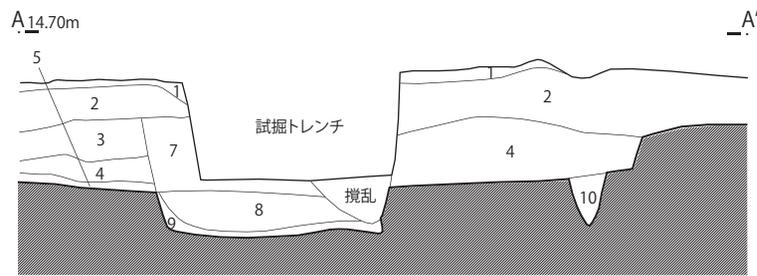
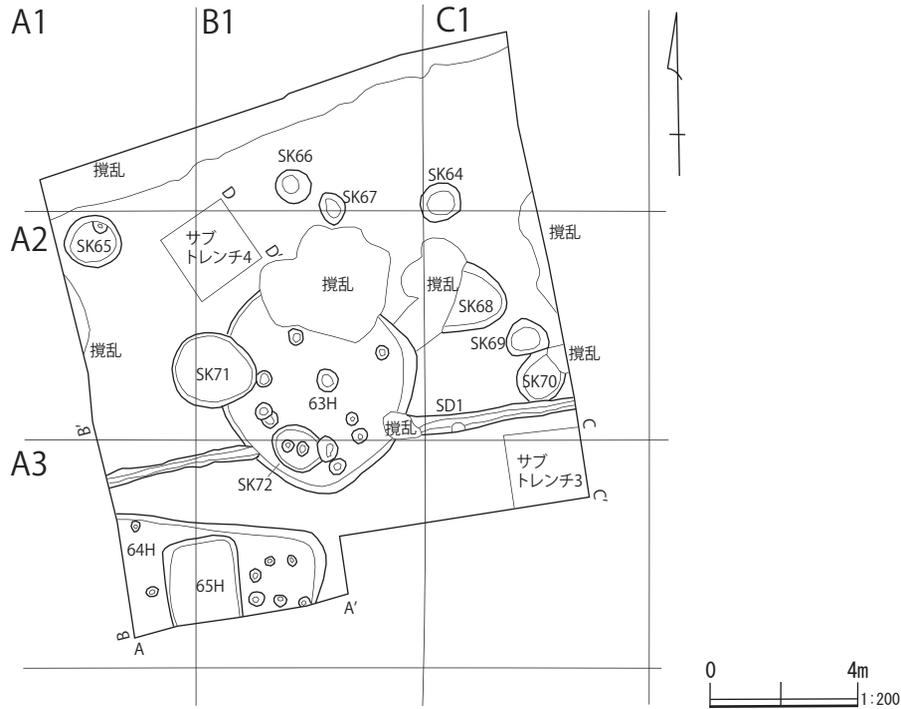
番号	遺跡名	所在地	時代	発掘調査(年度)
1	タタラ山遺跡	白岡字山	旧石器、縄文中～後、古墳前、奈良・平安、中世、近世	昭和59・平成4・6・11・12・13・25・29・令和2・3
2	中妻遺跡	篠津字中妻・神山・磯・宿	縄文早～後、古墳前～後、奈良・平安、中世、近世	平成12・14・16・18・21・22・24・25・26・27・28・29・令和元・2・3
3	神山遺跡	篠津字神山・白岡字東	縄文前・中、古墳中・後、中世、近世	昭和51・平成5・12・17・25・26・29・令和元
4	西下谷遺跡	白岡字西下谷・東	縄文中、古墳前	
5	白岡東遺跡	白岡字東	縄文早・前・後、中世	
6	七カマド遺跡	白岡字東下谷	縄文後、中世、近世	平成22
7	正福院貝塚	白岡字茶屋	縄文早～晩、古墳前、中世、近世	昭和62・平成13
8	入耕地遺跡	白岡字茶屋・東	縄文早・前・後・晩、古墳前、中世、近世	昭和26・平成3・4・7・15・16・17・19・23・25・28・30・令和2・3
9	茶屋遺跡	白岡字茶屋	縄文早・前・後、古墳前	昭和57・平成6・8・13・14・18・令和3
10	新屋敷遺跡	白岡字茶屋	縄文早～後、平安、近世	平成6・令和元
11	山遺跡	白岡字山	旧石器、縄文中～後、古墳前、奈良・平安、中世、近世	昭和62・平成2・9・11・12・18・21・23・25・27・令和元・2・3
12	南鬼窪氏館跡	小久喜字中村	旧石器、縄文中～晩、奈良・平安、中世、近世	平成7・9・18・19
13	神辺遺跡	小久喜字神辺	縄文中、近世	



第1図 タタラ山遺跡と周辺の遺跡分布図



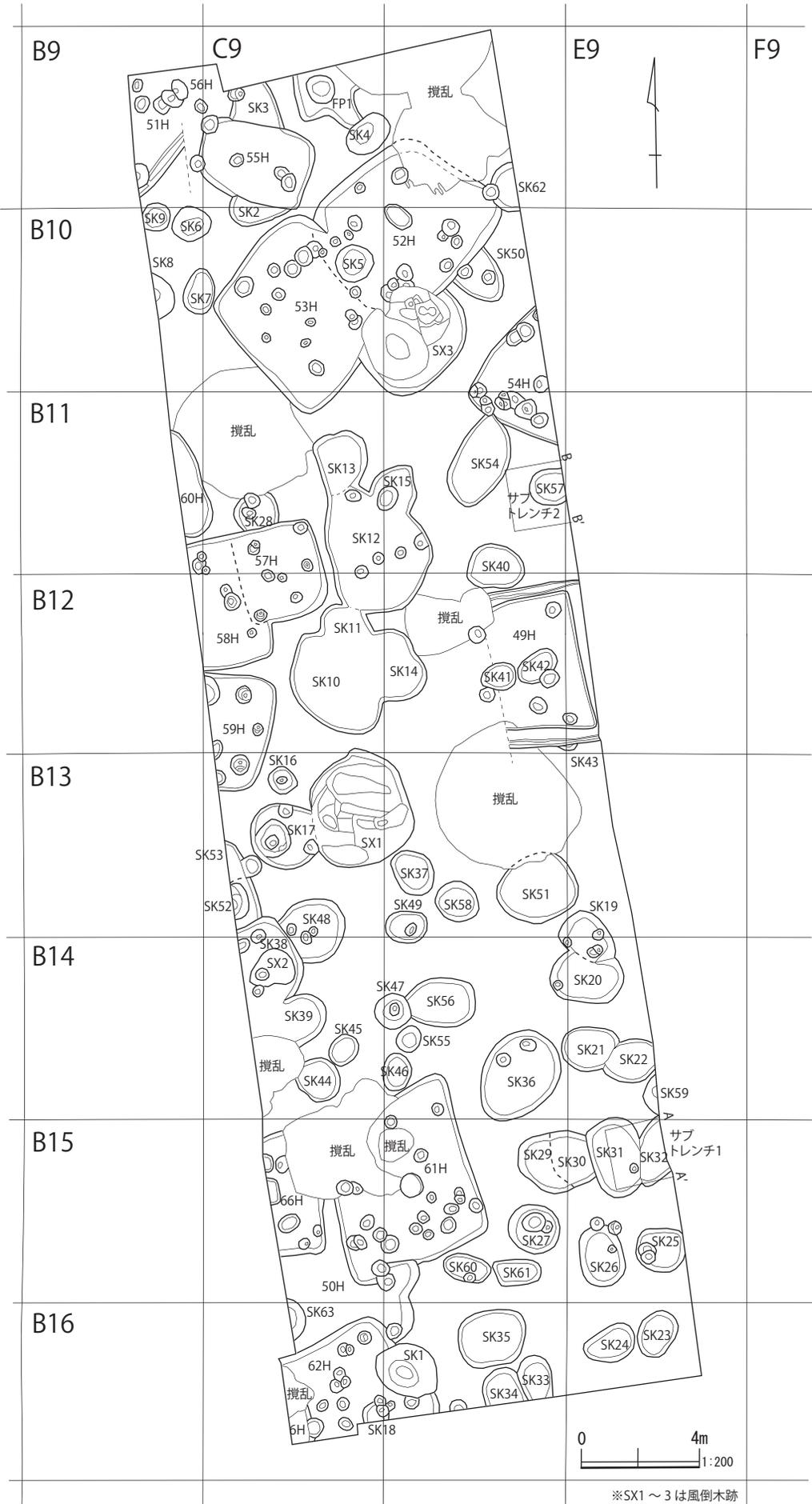
第2図 タタラ山遺跡の位置と発掘調査区



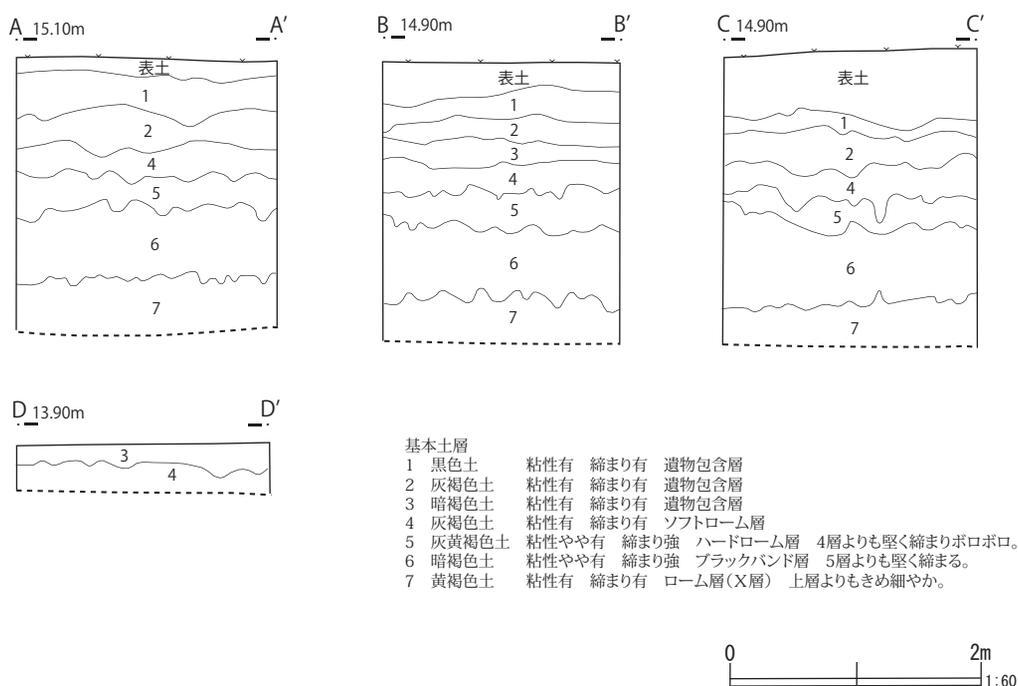
- 基本土層
- 1 灰褐色土 粘性やや強 締まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を多く含む。
 - 2 黒色土 粘性有 締まり有
 - 3 黒褐色土 粘性有 締まり有 径0.3~0.4cmのローム粒子を少し含む。
 - 4 褐色土 粘性有 締まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を多く含む。
 - 5 暗褐色土 粘性有 締まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を多く含む。
 - 6 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。
 - 7 暗褐色土 粘性有 締まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を多く含む。
 - 8 黄褐色土 粘性有 締まりやや強 径3~5cmのロームブロックを多く含む。
 - 9 黄褐色土 粘性やや有 締まりやや強 ローム土を多く含む。
 - 64Hピット
 - 10 灰黄褐色土 粘性有 締まり有 径3~5cmのロームブロックを多く含む。
 - SD2
 - 11 黒褐色土 粘性有 締まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を少し含む。
 - 12 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。
 - SD3
 - 13 黒褐色土 粘性有 締まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を少し含む。
 - 14 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。



第3図 第8地点全測図(1)



第4図 第8地点全測図(2)



第5図 サブトレンチ土層断面図

Ⅲ 調査の成果

1 第8地点の遺構と遺物

(1) 住居跡

●第6号住居跡 (第41図)

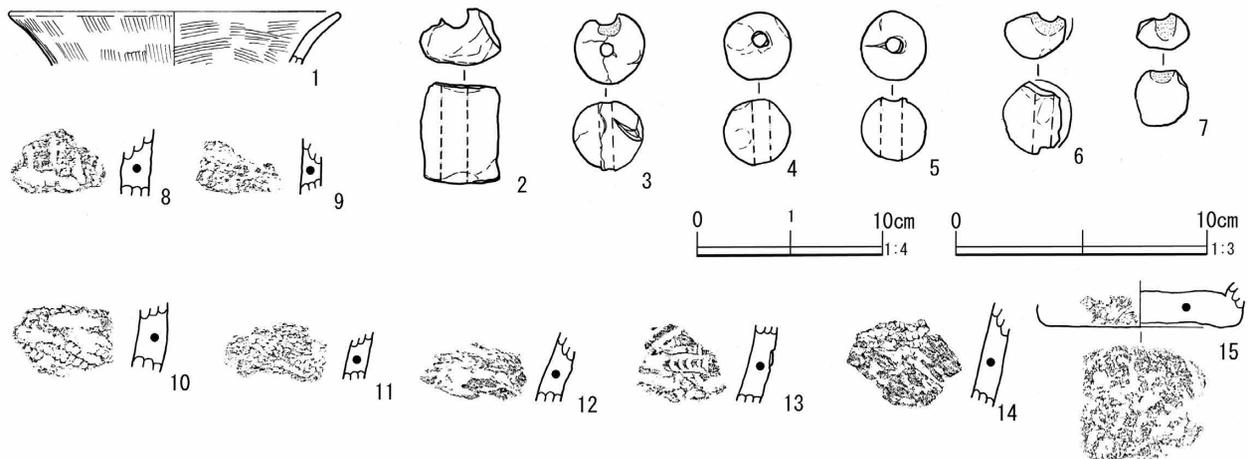
C16グリッドに位置し、第2地点で検出した第6号住居跡と同一遺構である。住居跡の北東隅のみ長径約1.5m、短径約0.8mの範囲が検出された。確認面から床面までの深さは約0.6mであった。

第2地点の調査では、古墳時代前期五領式期の住居跡で、平面形は一辺5m程の方形を呈し、壁溝が認められた。

出土遺物 (第6図)

土器 1は、五領式の台付甕の口縁部資料で、外面には縦位の、内面には横位の刷毛目がまばらに観察される。推定口径は17.5cm、残存高3cmを測る。2~7は土玉である。8~15は、覆土に混入した縄文土器である。このうち8は貝殻背圧痕文の施された花積下層式土器の胴部資料、10は単節RL縄文の観察できる胴部資料である。13は、半裁竹管に爪形文の押された関山I式土器、14は単節縄文の観察できる加曾利E式土器である。15は胎土に多量の繊維を含む平底の底部資料である。

土製品 2は、円筒形の土錘、3~7は球形のもので、いずれも中央に貫通孔が穿たれる。



第6図 第6号住居跡出土遺物

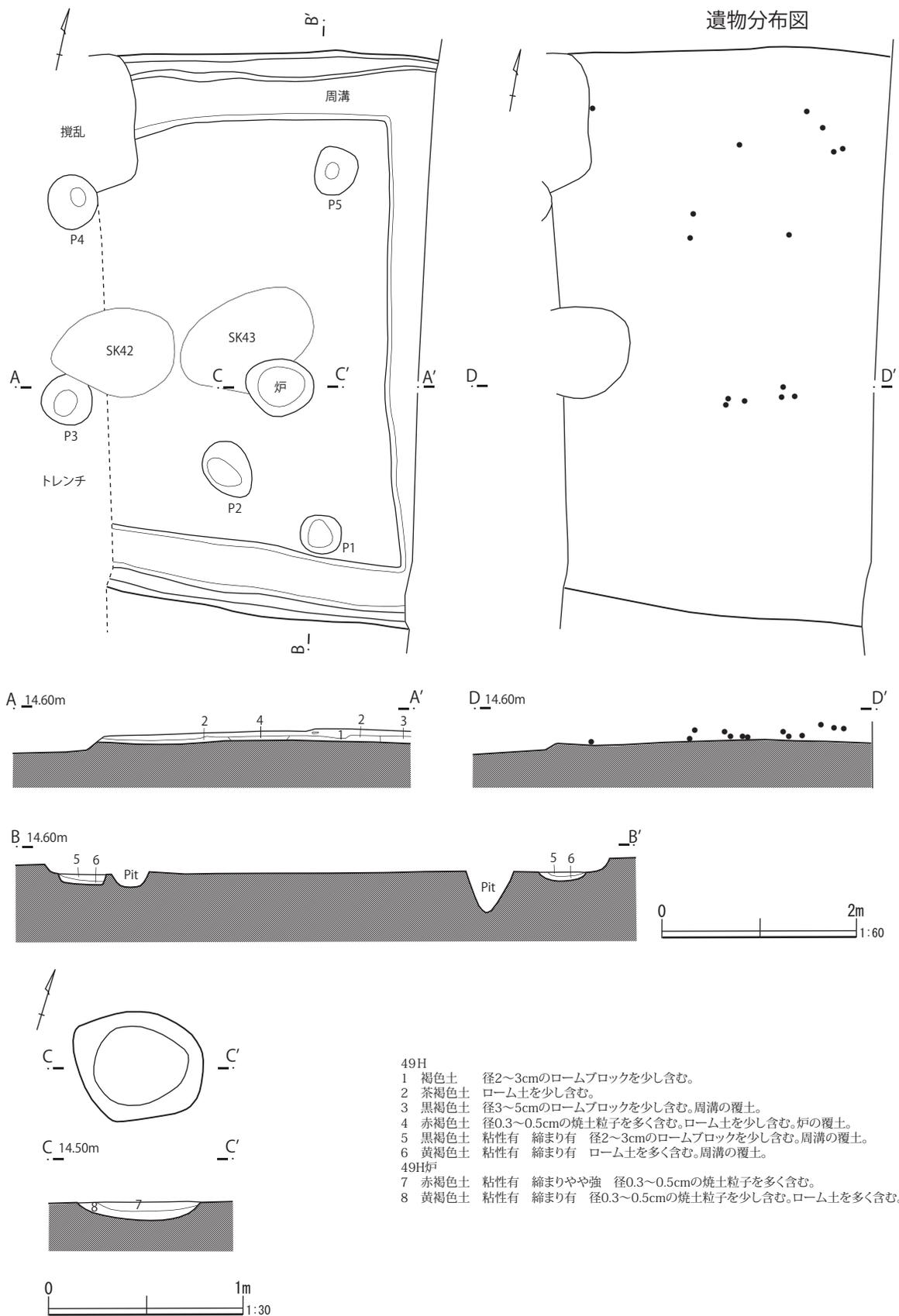
●第49号住居跡 (第7図)

D12・E12グリッドに位置し、東端は調査区外、西端を試掘トレンチと攪乱で切られる。第43号土坑を切り、第41・42号土坑に切られる。東西両端を切られているため不確定な部分もあるが、検出部分のみで長径約5.8m、短径約3.4mを測る。確認面から床面までの深さは浅く約0.1mであった。住居跡に伴うピットは5基検出した。住居跡の壁際には周溝が認められ、最大幅は約0.6m、確認面からの最大深は約0.1mを測る。

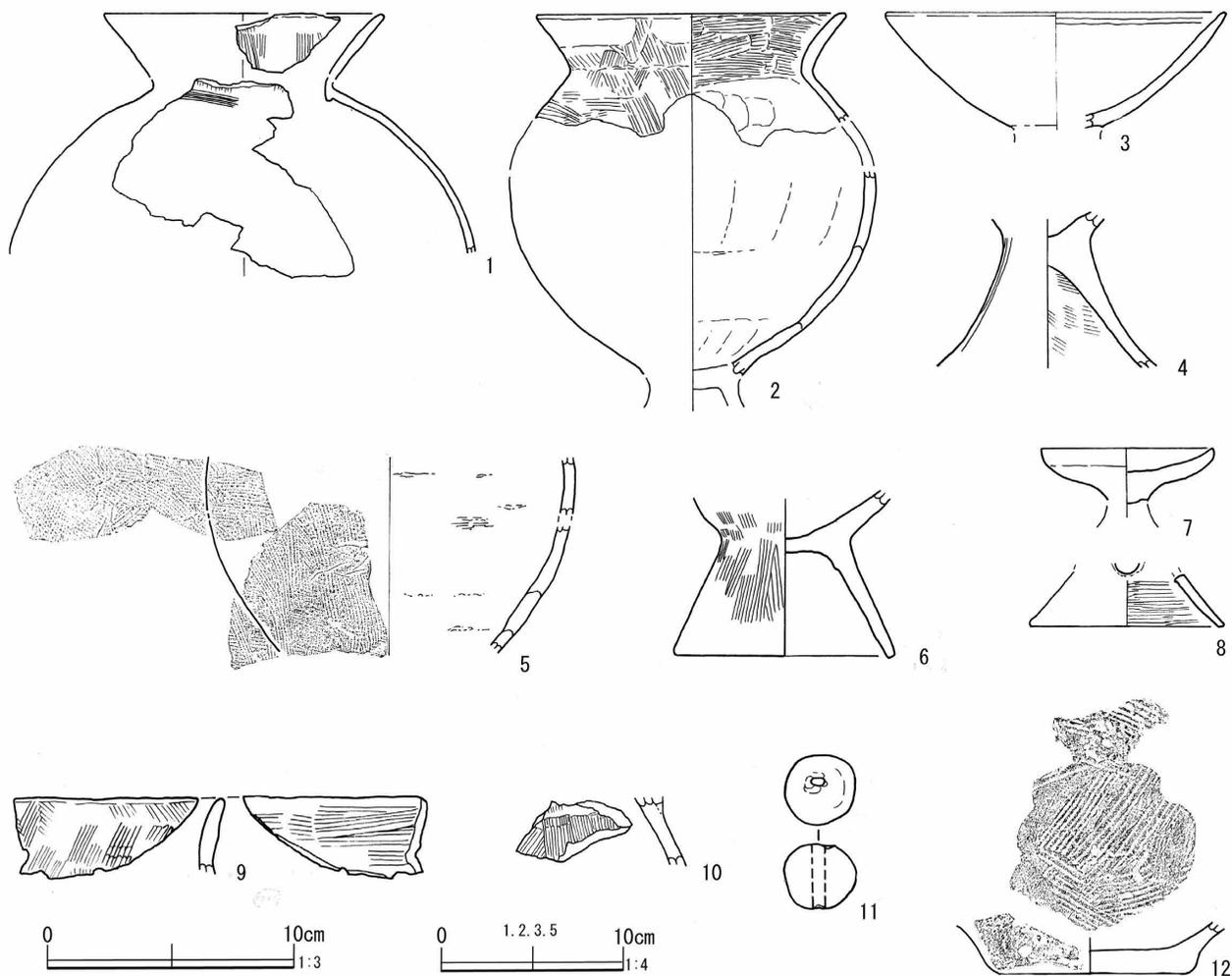
炉跡は住居跡の中央からやや南寄りで見出し、平面形は長径約0.7m、短径約0.6mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物 (第8・9図)

土器 第8図1は、推定口径13cm、残存高13cmを測る壺型土器で、胴部最大径は25cm程度と思われる。口縁部から頸部にかけては刷毛目が残る。球形をなす胴部に別に作られた口頸部をあとから差し込んで接着したものと思われ、頸部内面に突き出した口頸部が一部整形されず残されている。2と5は台付甕である。前者は、口径16.7cm、残存高19.5cmを測り外面には斜行する刷毛目が乱雑に残る。内面は、口縁部の内面は丁寧な横位の刷毛目が残される。胴上半部は横位の、中位以下には縦位の篋撫での痕跡が残される。後者は、胴部最大径が20cmほど、残存高12cmほどの胴部資料で、外面には縦横に走る刷毛目が不規則に残される。2はわずかに輪積痕が観察されるが良く撫でられている。3は高坏の坏部資料で、口径18.5cm、残存高6cmほどである。内外ともに良く撫でられている。4も高坏であるが、3とは別個体の脚部資料である。残存部最大径は11.5cm、残存高8.5cmほどを測る。内面には横位から斜位の刷毛目が確認できる。6は台付甕の脚台部と思われる。胴部がやや立ち気味となることから比較的後出の要素が強いものと思われる。外面には縦位の乱雑な刷毛目が観察される。7、8は器台である。前者は上部の坏部で径7cmほど、後者は脚部で最大径8cmを測る。ともに篋磨きが施されるが別個体と思われる。9、10は刷毛目の観察される小片で甕等の一部と思われる。12は内面に刷毛目の残された底部資料、11は土玉である。



第7図 第49号住居跡



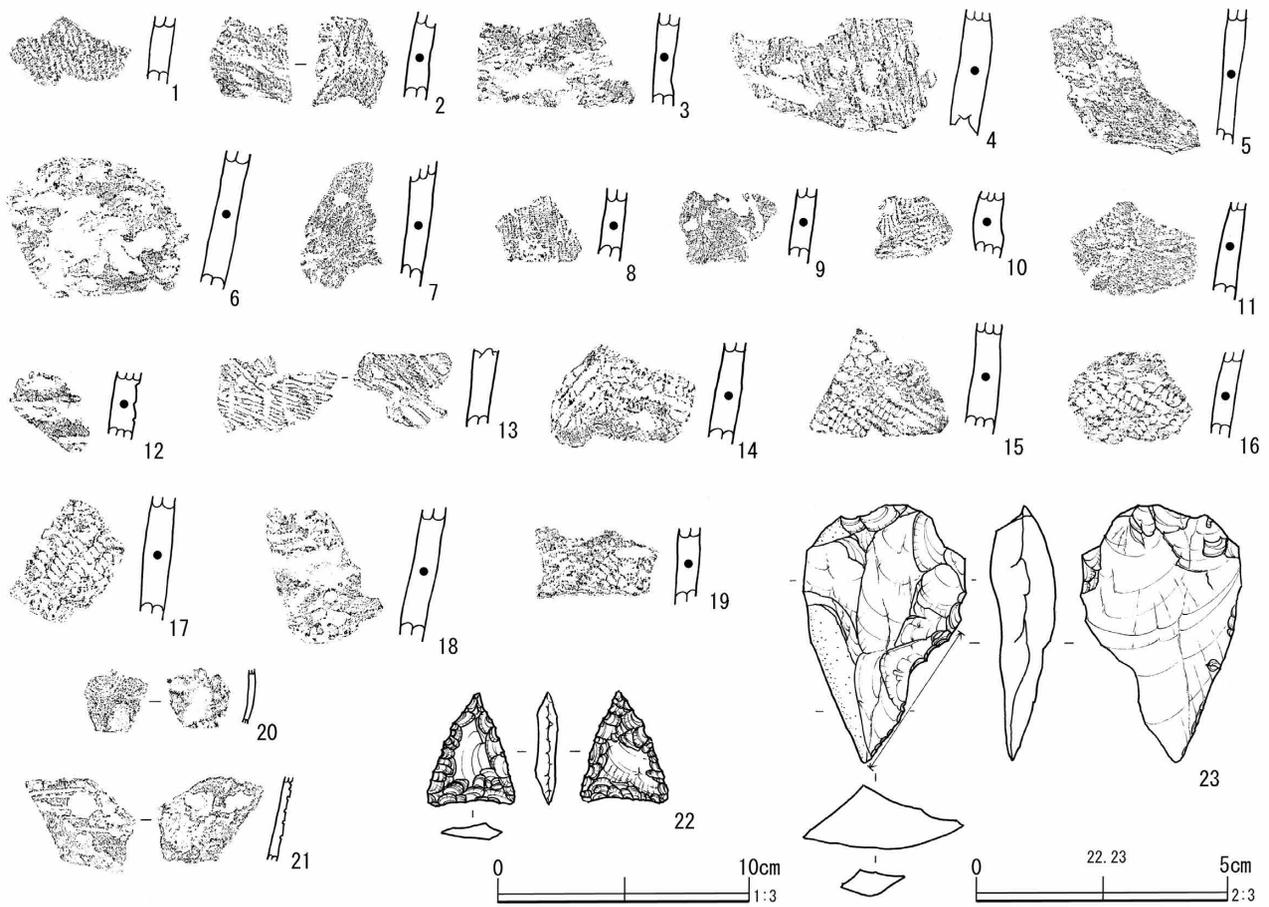
第8図 第49号住居跡出土遺物 (1)

第9図1は撚糸文の観察される小片である。撚糸文期でも古手の一群であろう。2~9は表裏に条痕が施されたもので、5~7などはこれを撫で消したものである。6は壁溝出土のものである。10、11は貝殻背圧痕文の観察されるもの、12~19は縄文の観察されるもので、12~14は無節縄文、15~19は単節縄文が観察される。13の外面は0段3条の無節縄文で内面は条痕が観察される。20、21は小片であるが指痕薄手の木島式である。

石器 第9図22は平基無茎の石鏃である。表裏とも中央部に素材剥片の主剥離面を残している。23は2次加工剥片である。正面右側縁に細かな剥離が観察される。

●第50号住居跡 (第10図)

C15・16・D15・16グリッドに位置し、西端は調査区外、北端を攪乱で切られる。第61・62・66号住居跡と第63号土坑と重複するが、新旧関係では本住居跡の方が新しい。検出部分のみで長径約5.7m、短径約4.5mを測る。確認面から床面までの深さは浅く約0.1mであった。住居跡に伴うピットは5基検出した。

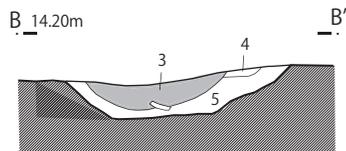
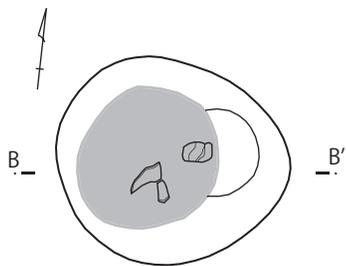
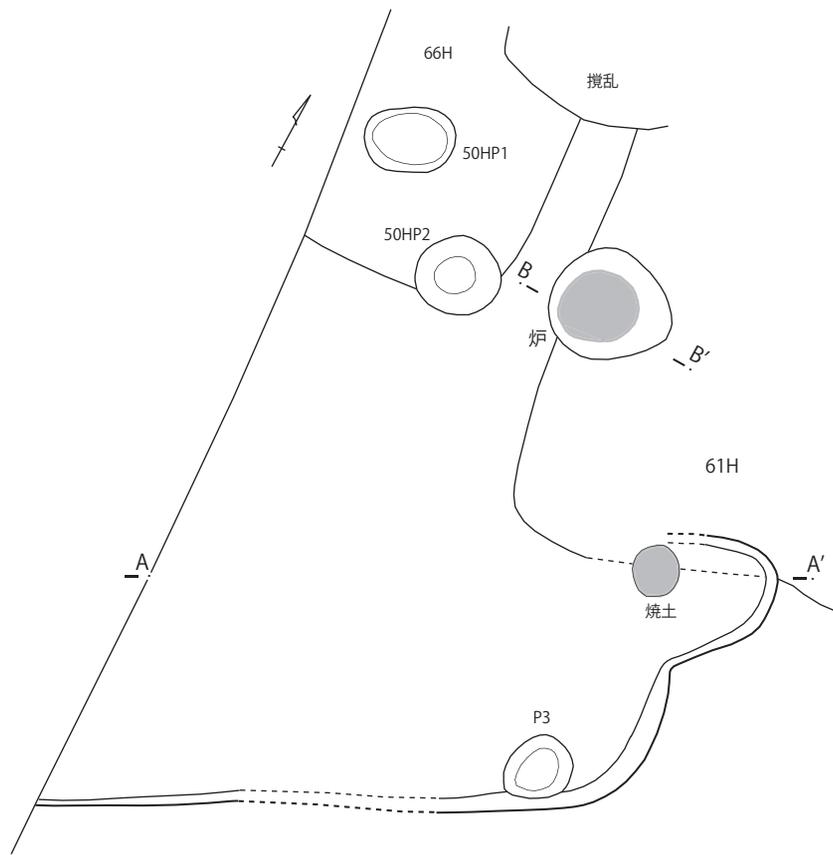


第9図 第49号住居跡出土遺物(2)

第2表 第49号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
9	22	石鏃	チャート	2.2	1.8	0.4	1.3	
9	23	2次加工剥片	石材不詳	6.1	3.2	1.3	15.4	

炉跡は住居跡の北寄りで見出し、平面形は長径約1.0m、短径約0.8mの不整形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りの方が浅く窪む。炉跡内の焼土の広がり直径約0.6m、深さ径0.1mの範囲で認められた。炉跡の覆土下層で須恵器片が出土している。また、南東部で認められる突出部はカマドの痕跡であるが、遺存度は悪い。焚口付近と推定される部分に長径約0.4m、短径約0.3mの焼土の広がりが確認できたほか、炉材の可能性が考えられる石が土層断面図の第2層で検出されている。その他、煙道や袖等の痕跡は認められなかった。



- 50H
- 1 黒色土 粘性有 締まり有 径0.3cm程のローム粒子を少し含む。
 - 2 赤褐色土 粘性有 締まりやや強 径3~4cmの焼土ブロック、径0.5cm程の炭化粒子を多く含む。カマドの焼土。
- 50H炉
- 3 赤褐色土 粘性有 締まりやや強 径0.2~0.3cmの炭化粒子と径4~5cmの焼土ブロックを多く含む。
 - 4 黄褐色土 淡黄褐色の粘土を主体とする層位。暗茶褐色土(下位の住居跡覆土)ブロック(2cm)が混じる。
 - 5 黒褐色土 粘性強 締まり強 被熱粘土(ロームの被熱)、ローム土を多く含む。

第10図 第50号住居跡

出土遺物（第11・12図）

土器 第11図1、3は、須恵器瓶子である。前者は、口唇部を欠くものの口縁部から肩部まで残存する。推定口径22cmほど、残存部の最大径は25cmほどを測る。外面にはロクロ水挽痕が残り、内面には当て具の痕跡が残される。後者は、口径24cmを測る広口の瓶子で、口縁部は滑らかに外側に引き出され口唇端は断面が三角形になるよう整形されている。2は、口径15.5cm、器高5cm、高台径7cmを測る灰釉陶器の皿である。外面にはロクロ水挽痕が残される。高台は削り出し高台である。4は、須恵器の大甕で、残存部の最大径は60cmを測る。外面には縦位の叩き目が明瞭に残され自然釉がかかる。内面にも当て具の痕跡が観られる。

第12図1は、縄文早期撚糸文系土器群に該当する。2～5は縦位の条痕が施される胴部資料である。このうち2は胎土に含まれる繊維の少ないもので、早期の条痕文系土器群に比定される。3～5は花積下層式土器で、5では条痕文の上から単節縄文が施文されている。6～8、10～14は、いずれも縄文の施された花積下層式土器である。6では、外面に原体長3cmを超える比較的長めの単節羽状縄文が整然と施されるが、内面には横位の条痕文も観察される。9は貝殻背圧痕文の観察されるもの、14は無繊維の土器で中期加曾利E式土器であろう。17、18は平底となる資料である。底径は復元しえない。

石器 第12図19は、平基無茎石鏃で、中央部にやや厚みを残すが、両側縁の調整加工は押圧剥離による丁寧なものである。20はいわゆる石鏃ブランクと呼ばれる石鏃未製品であろう。表裏に素材の主剥離が観られるが、周囲から階段状の成形剥離が施されている。21、22は共に軽石製品である。前者では中央にややくぼみ部が観察されるが、敲きなどによる潰痕ではない。23は、打製石斧の刃部残欠である。左側縁も失われており、刃部の幅の正確には把握できない。

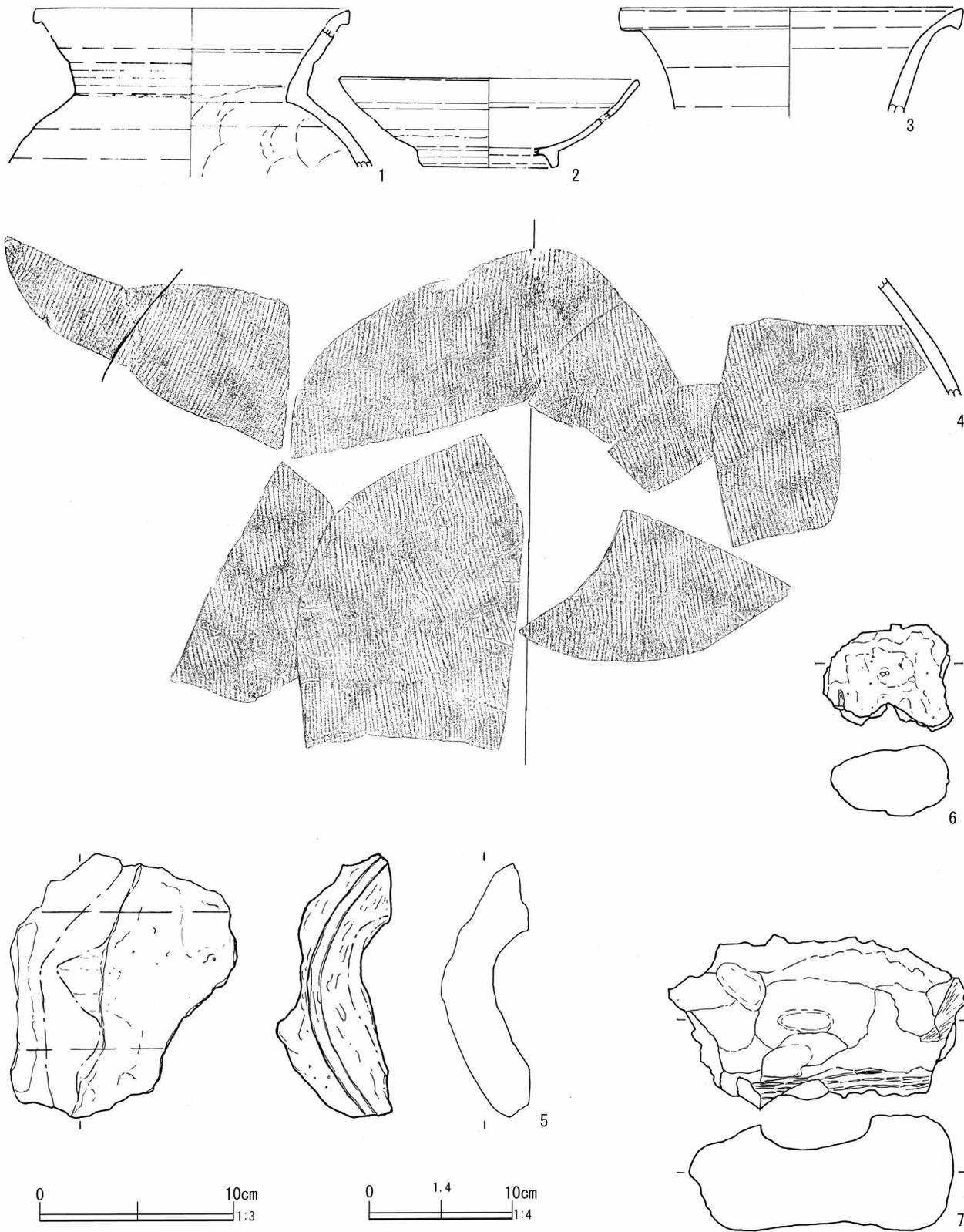
鍛冶関連遺物 第11図5は、大口径の羽口である。残存長は11.8cm、残存高は13.5cm、最大厚5.2cmを測り、半円状に残存する。重量は430gを測る。残存部位から算出した羽口の内径は直径7.2cm程、外径は直径14cm程になると考えられる。断面形状は楕円形を呈すものと推定される。混入物として径7～10mmの砂礫や白色鉱物、黒色鉱物を含む。外表面の溶解部は珪酸質滓化しており、磁性3を計測した。6、7は鉄滓である。6は鍛錬鍛冶滓で、長さ5.5cm、幅6.7cm、厚さ3.6cm、重量123gを測る。磁着度は3を計測した。鍛造作業によって生成されたものと考えられ、表面の発泡が目立つ。7は炉内滓で、長さ9.0cm、幅15.4cm、厚さ7.0cm、重量740gを測る。磁着度は3を計測した。裏面で砂礫と粘土が滓化しているのが確認できる。スサの痕跡や燃料と考えられる木質付着が顕著なことから、炉壁ないしは底面付近の炉内滓と考えられる。6は鍛冶炉に伴う鉄滓、7は製鉄炉に伴う鉄滓であることから、両工程に伴う操業が本遺跡付近で行われて可能性が想定される。

●第51号住居跡（第13図）

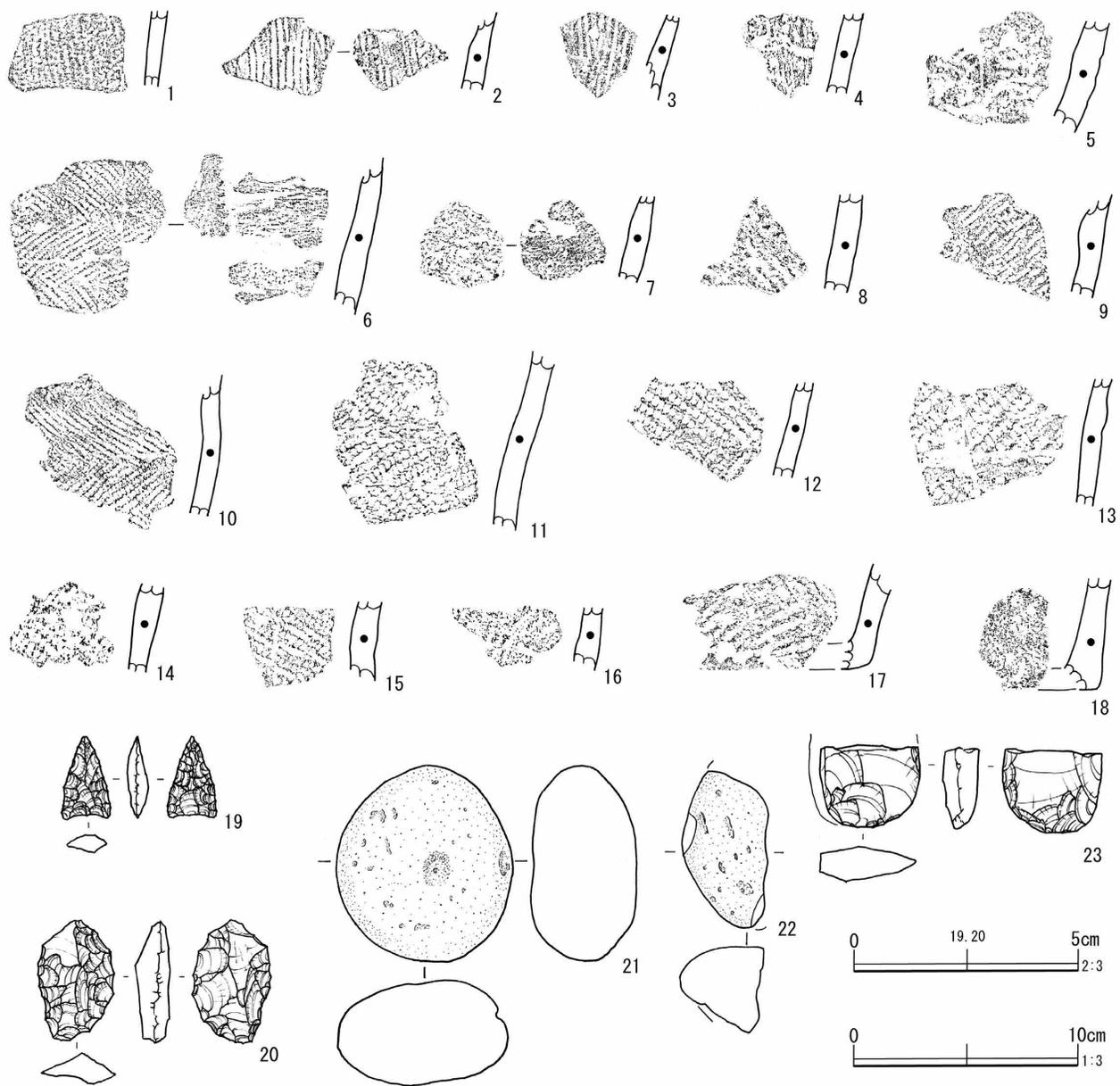
B9・C9グリッドに位置し、北半部は調査区外、南東部は試掘トレンチで切られる。第56号住居跡と重複するが、新旧関係は本住居跡の方が新しい。検出部分のみで長径約4.5m、短径約3.0mを測る。確認面から床面までの深さは浅く約0.1mであった。住居跡に伴うピットは2基検出した。住居跡の壁際には周溝が認められ、最大幅は約0.3m、確認面からの最大深は約0.1mを測る。炉跡の痕跡は認められなかった。

出土遺物（第14図）

土器 1は、口径15.8cm、胴径20.8cm、残存高23cmほどを測る台付甕である。外面は、肩部に縦位の、以



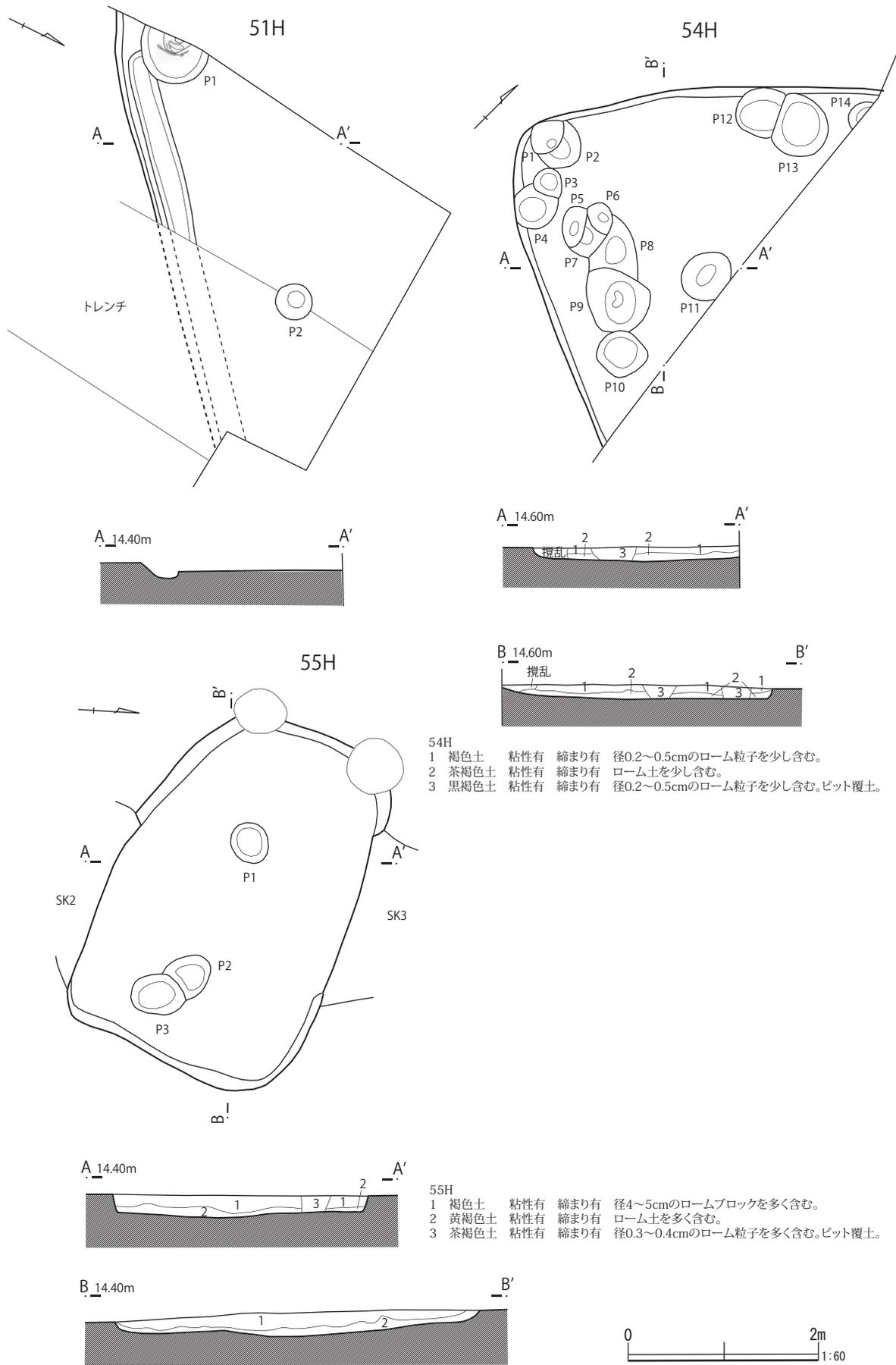
第11图 第50号住居跡出土遺物(1)



第12図 第50号住居跡出土遺物 (2)

第3表 第50号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
12	19	石鏃	チャート	1.8	1.1	0.4	0.7	
12	20	石鏃未製品	チャート	2.7	1.8	0.8	3.6	
12	21	軽石製品	軽石	8.6	7.8	4.6	145.1	
12	22	軽石製品	軽石	(6.7)	(3.7)	(3.7)	(46.9)	
12	23	打製石斧	ホルンフェルス	(3.3)	4.5	1.5	(31.4)	



第13図 第51・54・55号住居跡

下は概ね横位を中心とする刷毛目が残される。内面は概ね横位を主体とする刷毛目が観察される。2は球胴をなす壺型土器と思われ、胴部下半にある最大径は25.6cm、残存高20cmを測る。外面は横位から斜位の刷毛目の上から乱雑な篋磨きが施される。胴上部内面では横位の刷毛目と縦位の篋削りの痕跡が観察される。3は、小型の壺型土器と思われ、外面に縦位の刷毛目が残る。残存部最大径は10cmほどである。4は、広口の壺型土器で、胴部最大径14.1cmを測る。括れ部には横位の刷毛目が残される。胴部は刷毛目の上から縦位の篋磨きが施される。5は、折り返し口縁を持つ鉢形土器で、口径22cm、残存高10cmほどを測る。口縁部は内外ともに横位の刷毛目が、胴部外面は右下がり斜行する刷毛目が観察される。6は、機種不明ながら推定胴径30cmほどの土師器である。内面には刷毛目が残される。7は、台付甕の脚台部である。残存部最大径は8cmほどである。8～11は、赤彩された土師器口縁部破片である。いずれも別個体であり、機種の異なる複数の赤彩土器があったことがわかる。

12～32は縄文土器で、12は撚糸文系土器群の口縁部資料、13～17は条痕文の施されたもの、18は貝殻背圧痕文も施されたもの、19～30は単節縄文の施されたもので、このうち20はやや肥厚する口縁部資料、24は無節と単節で羽状構成をとる胴部資料である。31は棒状施文具による刻みの付された横走隆帯を挟んで、2条1組の撚糸側面圧痕が施される資料である。32は平底を呈する底部資料である。

●第52号住居跡（第15・16図）

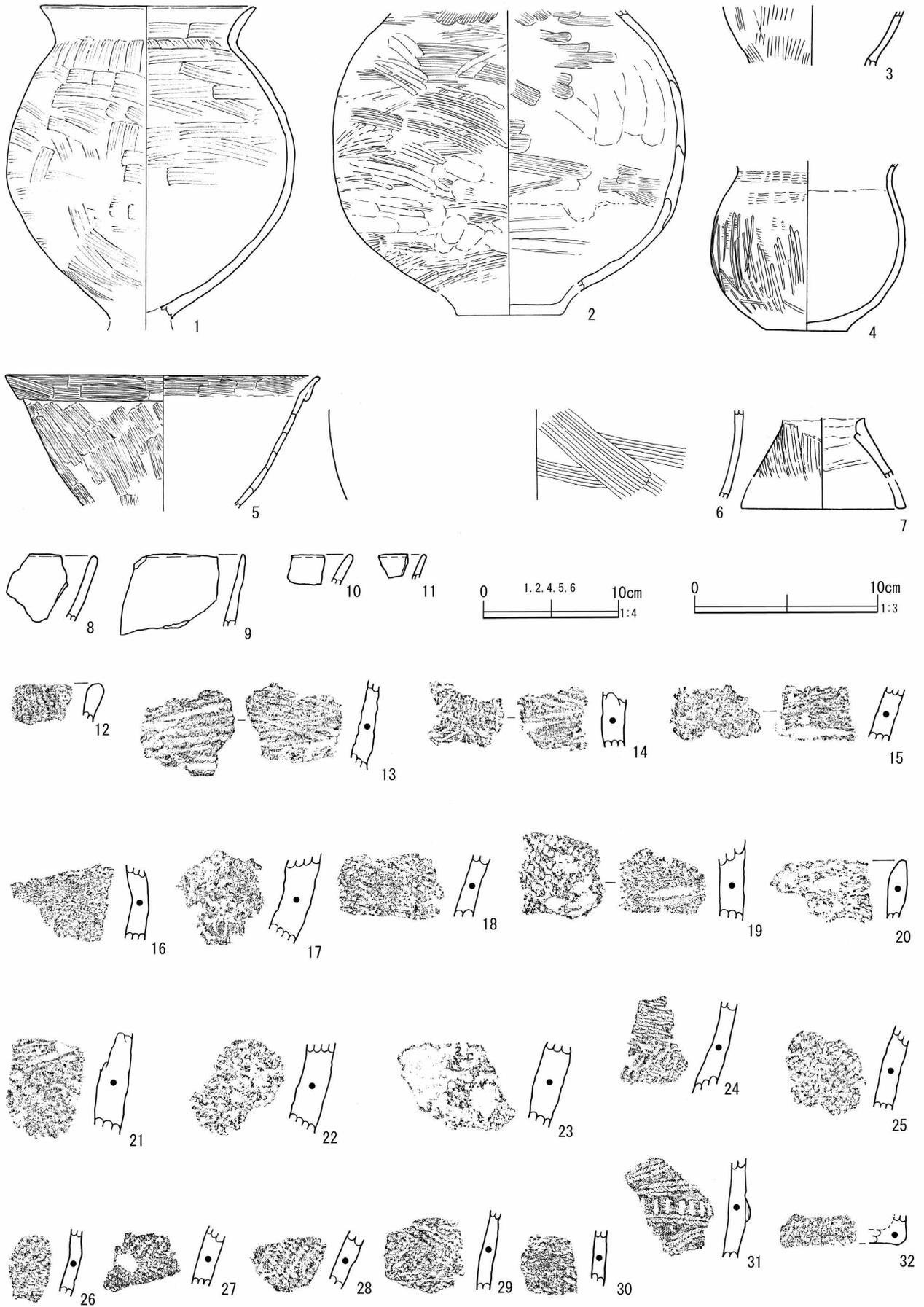
C9・10・D9・10グリッドに位置し、北東端は攪乱に、南西端は風倒木跡（SX3）に切られる。第53号住居跡と第62号土坑と重複するが、新旧関係は明確でない。第50号土坑を切り、第5号土坑に切られる。平面形は長径約5.5m、短径約5.0mの隅丸方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mであった。住居跡に伴うピットを12基検出し、P1・2・5・6が支柱穴と考えられる。

炉跡は住居跡のほぼ中央で検出し、平面形は長径約1.1m、短径約0.7mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。炉跡内の焼土の広がり直径約0.3m、深さ径0.1mの範囲で認められた。

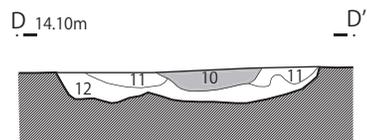
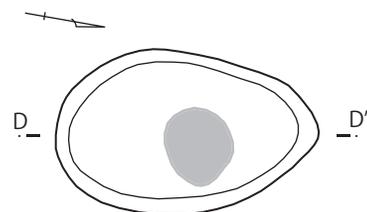
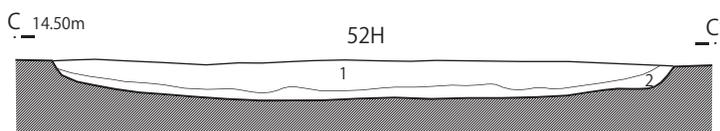
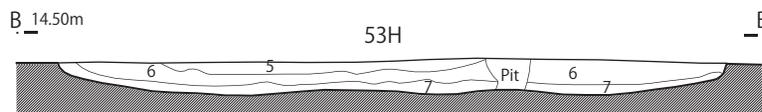
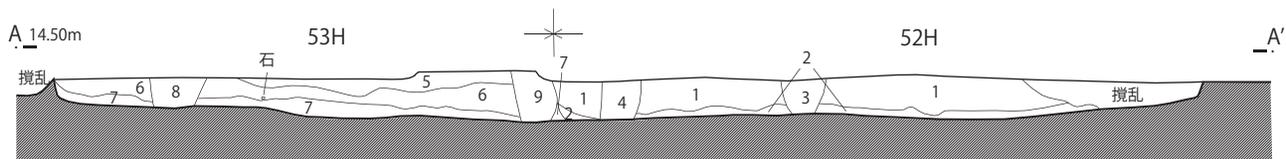
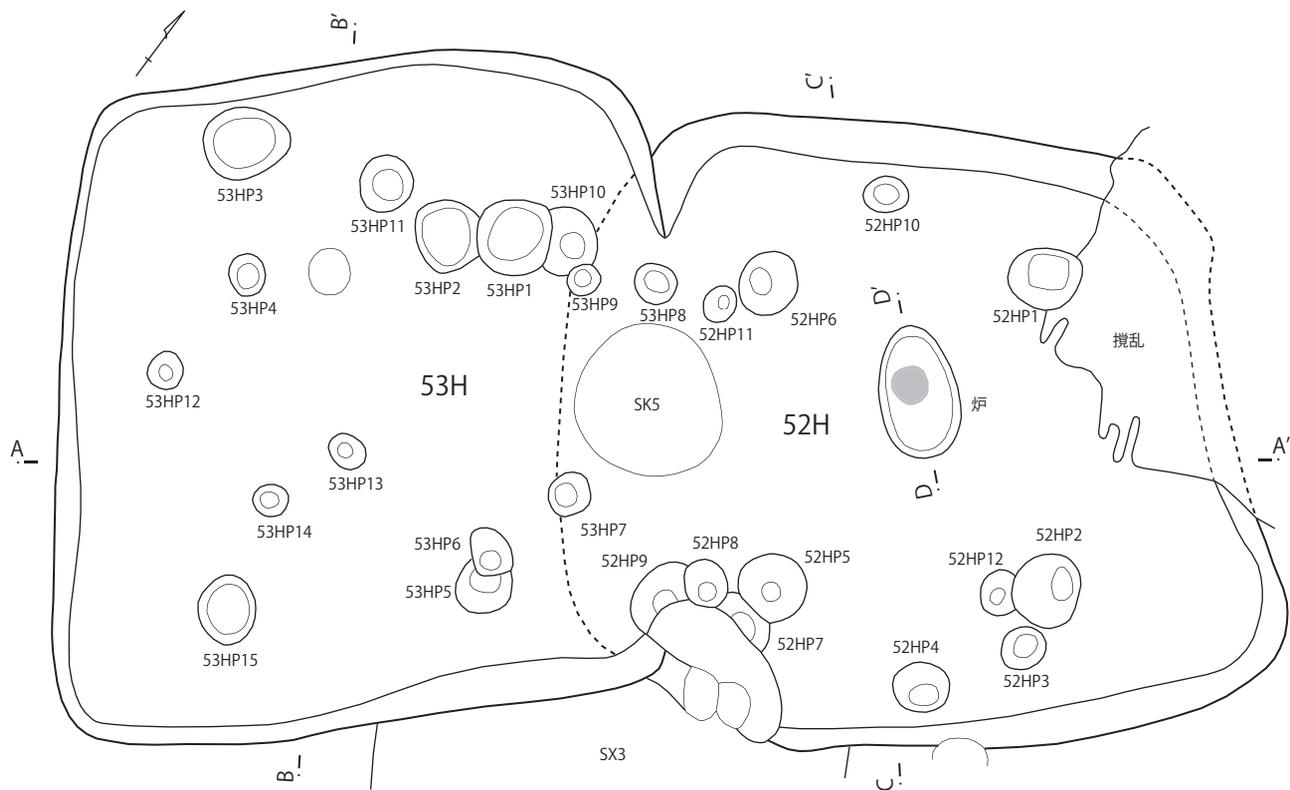
出土遺物（第17～21図）

土器 第17図1は、斜行する撚糸文の観察される胴部資料、2、3、7は鋸歯状をなす集合沈線の観察される条痕文系土器、5、6は細隆起線の観られる条痕文系土器、8～11は胎土に含有する繊維量の少ない焼成良好な条痕文系の土器である。いずれも早期野島式に比定されよう。12～29はいずれも花積下層式土器期の条痕文系の土器群で、12～16は、平縁をなす口縁部資料である。15と16は同一個体で、29の胴部資料とも同一個体である。背面に比較的幅が広く彫り浅い条痕文が施される。17や19はやや摩耗が激しく条痕は判然としない。18、20～27は花積下層式土器に特徴的な胎土に多量の繊維を含む土器群である。28は、丸底となる底部資料である。

第18図1～12は、条痕を撫で消す一群である。1はかなり角度のある波状縁土器、2は、口縁部に横走する蛇行沈線の観られるもの、4は、横走したり斜行したりする沈線の観られるものである。また、1、6～9は胎土に白色針状物質を顕著に含む。13～22は貝殻背圧痕文も施された胴部資料である。23～35、38、39は外面に無節縄文が観察される一群である。このうち23は内面に横位の条痕が観られる口縁部資料、24、25は口縁部を肥厚させる平縁土器、30は、1段の施文幅が2cmに満たない幅狭の羽状縄文を施したもの、31は、縦位の羽状縄文の境目がミミズ腫れ状になったものである。41は肥厚する口縁部に単節LR縄文

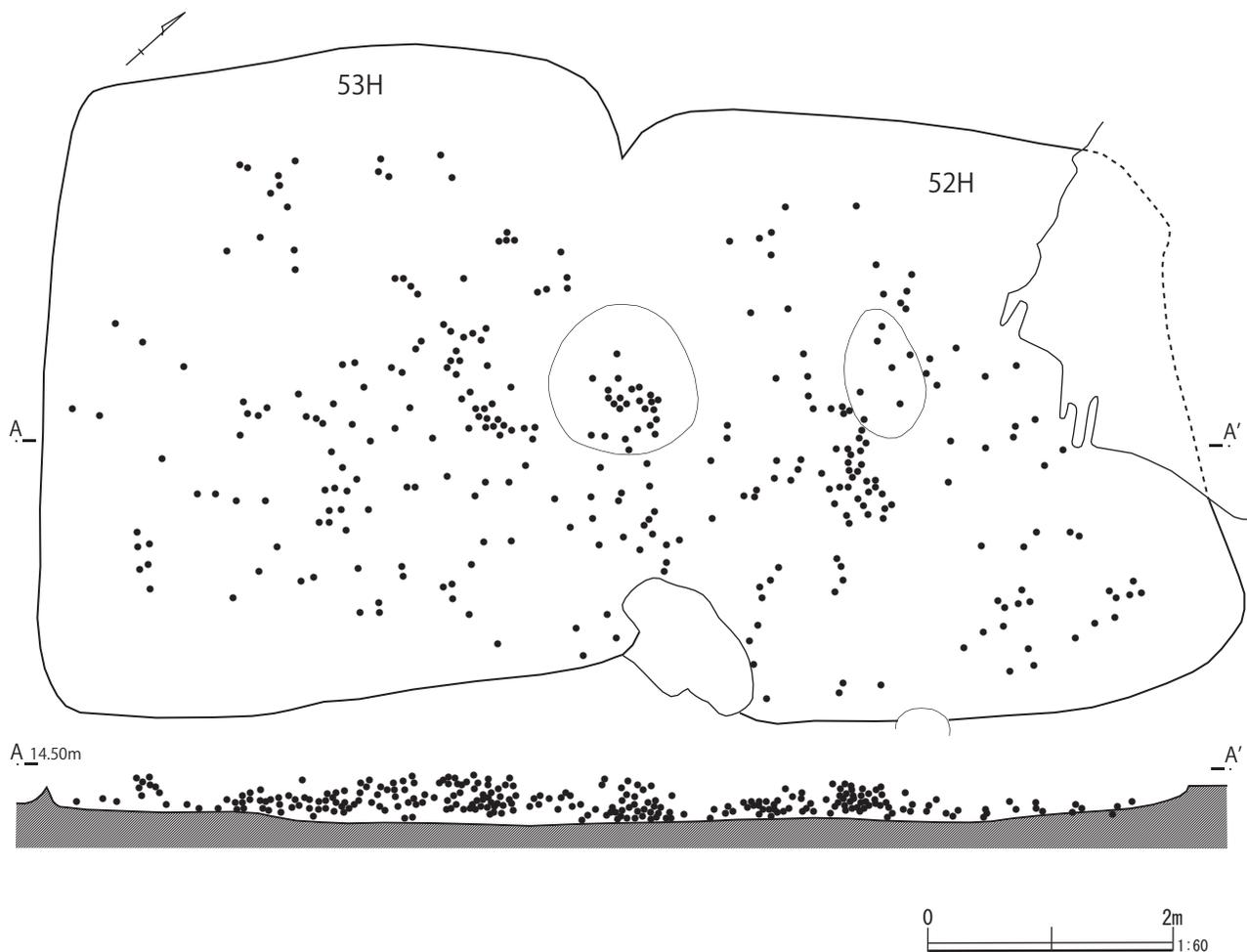


第14图 第51号住居跡出土遺物



- 52H
 1 褐色土 粘性有 締まり有 径0.1~0.3cmの焼土粒子とローム粒子を少し含む。
 2 黄褐色土 粘性有 締まり有 径3~5cmのロームブロックを多く含む。
 3 黒褐色土 粘性やや弱 締まりやや有 径0.1~0.3cmのローム粒子を少し含む。ピット覆土。
 4 黒褐色土 粘性やや弱 締まりやや有 径0.1~0.3cmのローム粒子を少し含む。ピット覆土。
 53H
 5 褐色土 粘性有 締まり有 径0.1~0.3cmのローム粒子を少し含む。
 6 茶褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を少し含む。
 7 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。
 8 黒褐色土 粘性やや弱 締まりやや有 ピット覆土。
 9 黒褐色土 粘性やや弱 締まりやや有 ピット覆土。
 52H炉
 10 赤褐色土 粘性有 締まりやや強 径0.1~0.3cmの炭化粒子、径1~3cmの焼土ブロックを多く含む。
 11 黒褐色土 粘性有 締まり有 径0.1~0.3cmの焼土粒子を少し含む。
 12 黄褐色土 粘性有 締まり有 被熱を受けたローム土。

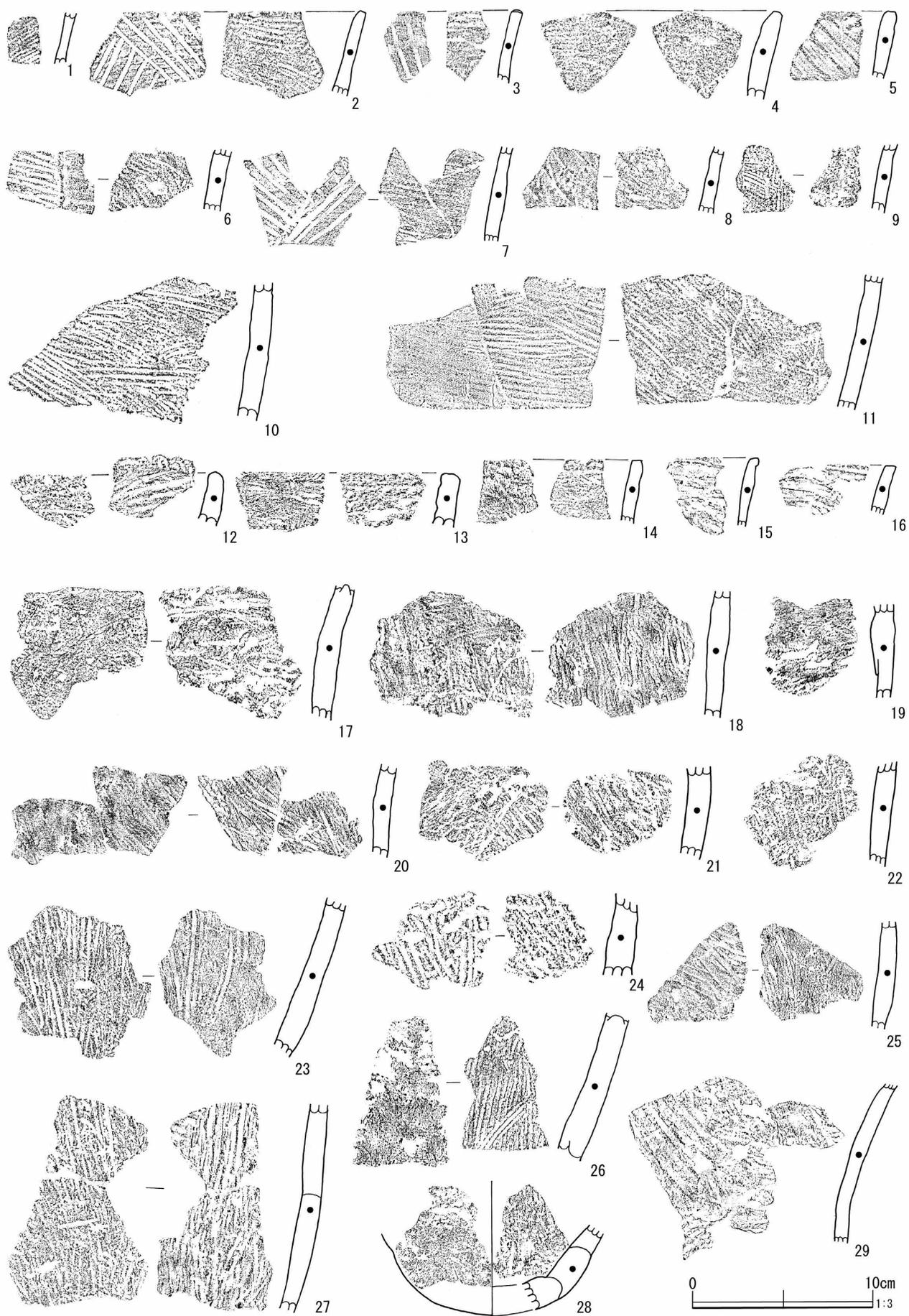
第15図 第52・53号住居跡



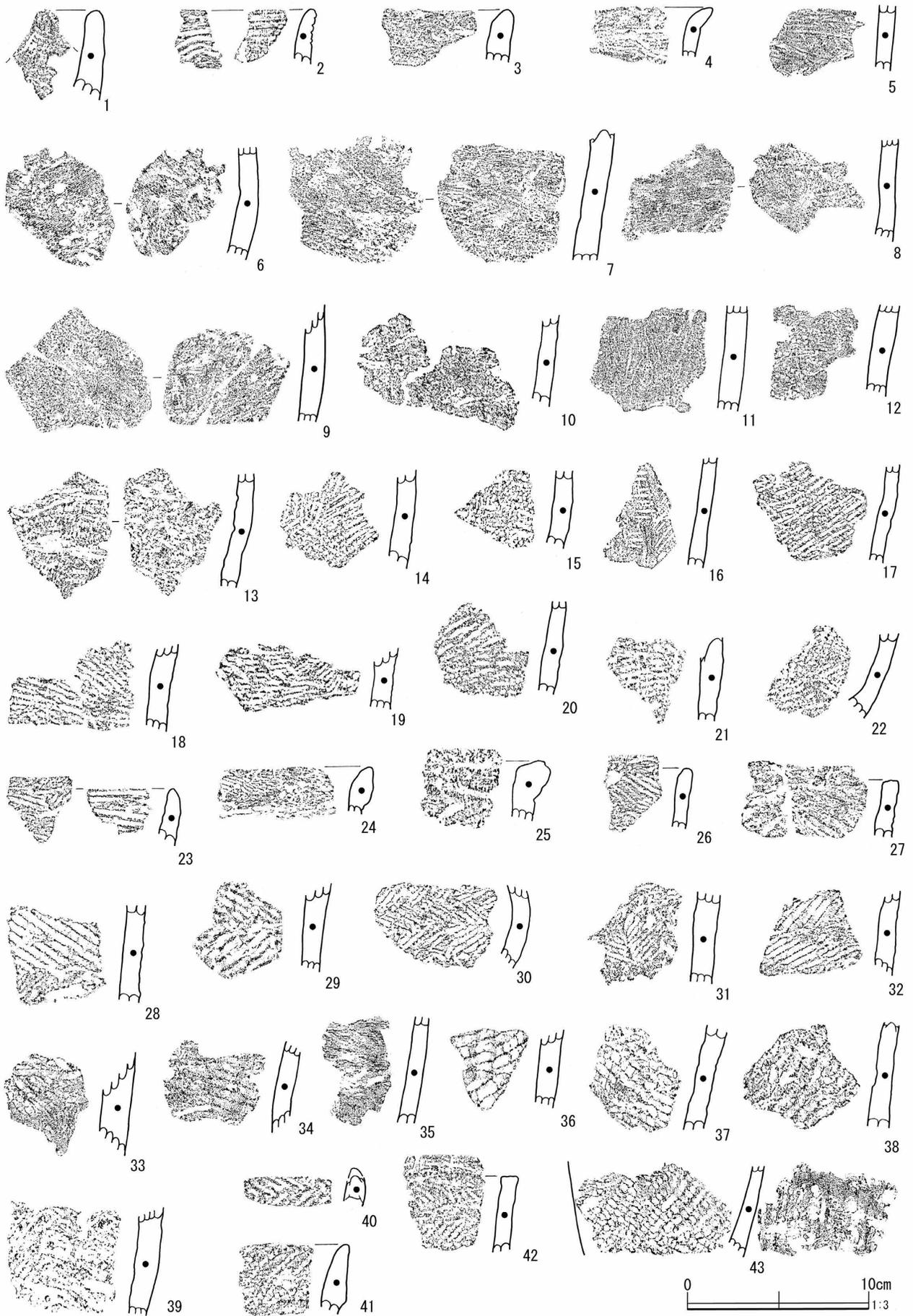
第16図 第52・53号住居跡遺物分布図

が施された口縁部資料、42は口唇部が角頭状となる単節羽状縄文の口縁部、43は、残存部最大径が11cmほどとなる深鉢形土器の胴下半部で、節の大きな単節縄文を用いた帯間構成の羽状縄文を形成するもので、内面には縦位の条痕文が観られるものである。

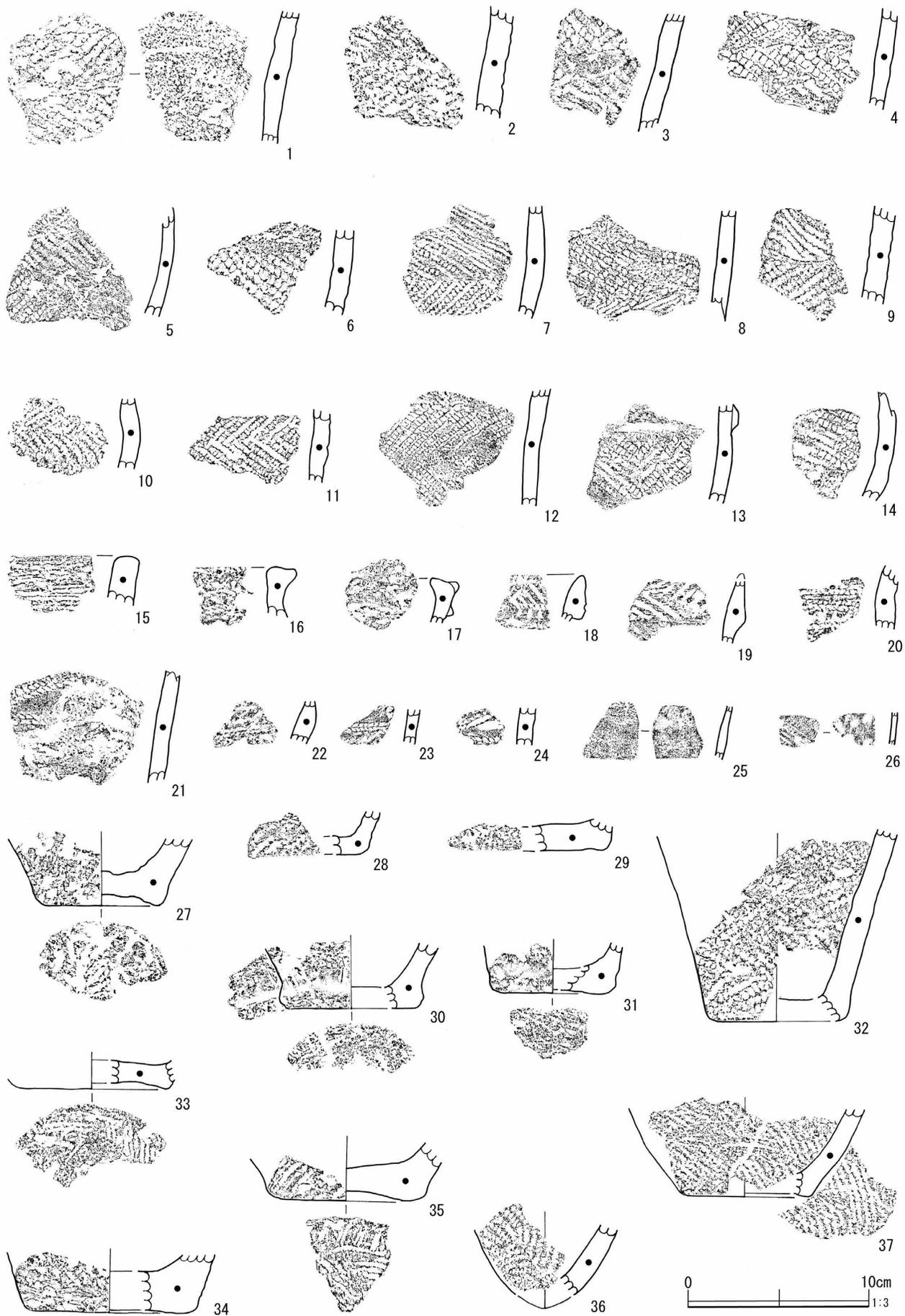
第19図1～14は、単節縄文の施された一群で、1では内面に条痕が観察される。7と11は、LR、RLともに0段の太さを変えているもの、8は、単節RLと無節Lとで帯間構成の羽状縄文を施すもの、13は口縁部の文様帯下端を区画すると思われる横走隆帯の観察されるものである。15～17、20～24は、撚糸側面圧痕文の看取される一群である。15～17は口縁部資料で、15は角頭状となる口縁部外面に2条1組の撚糸側面圧痕が観察されるもの、16は、口唇部を外側に引き出すように成形されたもの、17は2条の横走隆帯の施される内湾する口縁部資料である。21は横走る撚糸側面圧痕と山形をなす撚糸側面圧痕の間に渦巻状の撚糸側面圧痕を施したものである。刺突など撚糸側面圧痕以外の施文要素は見当たらない。18、19は肥厚する口縁部外縁に鋸歯文の描かれる一群である。25、26の両者は木島式の小片で、後者では斜行する集合沈線が観察される。27～37は底部資料である。27、33、35は上げ底となるもので、27、33の底面には無節縄文が、35の底面には、接地部分には放射状の沈線、上げ底部には無節縄文が観察される。32は残存部最大径13cm余り、残存高11cm、推定底径8cmほどを測る胴部下半の資料で、比較的節の大きな単節縄文を使い帯間構成の羽状縄文を施すもので、1段の原体長は2.5cm、ほぼ2指頭幅に相当する。36は尖底となると思われる羽状縄文土器である。



第17图 第52号住居跡出土遺物(1)



第18图 第52号住居跡出土遺物(2)

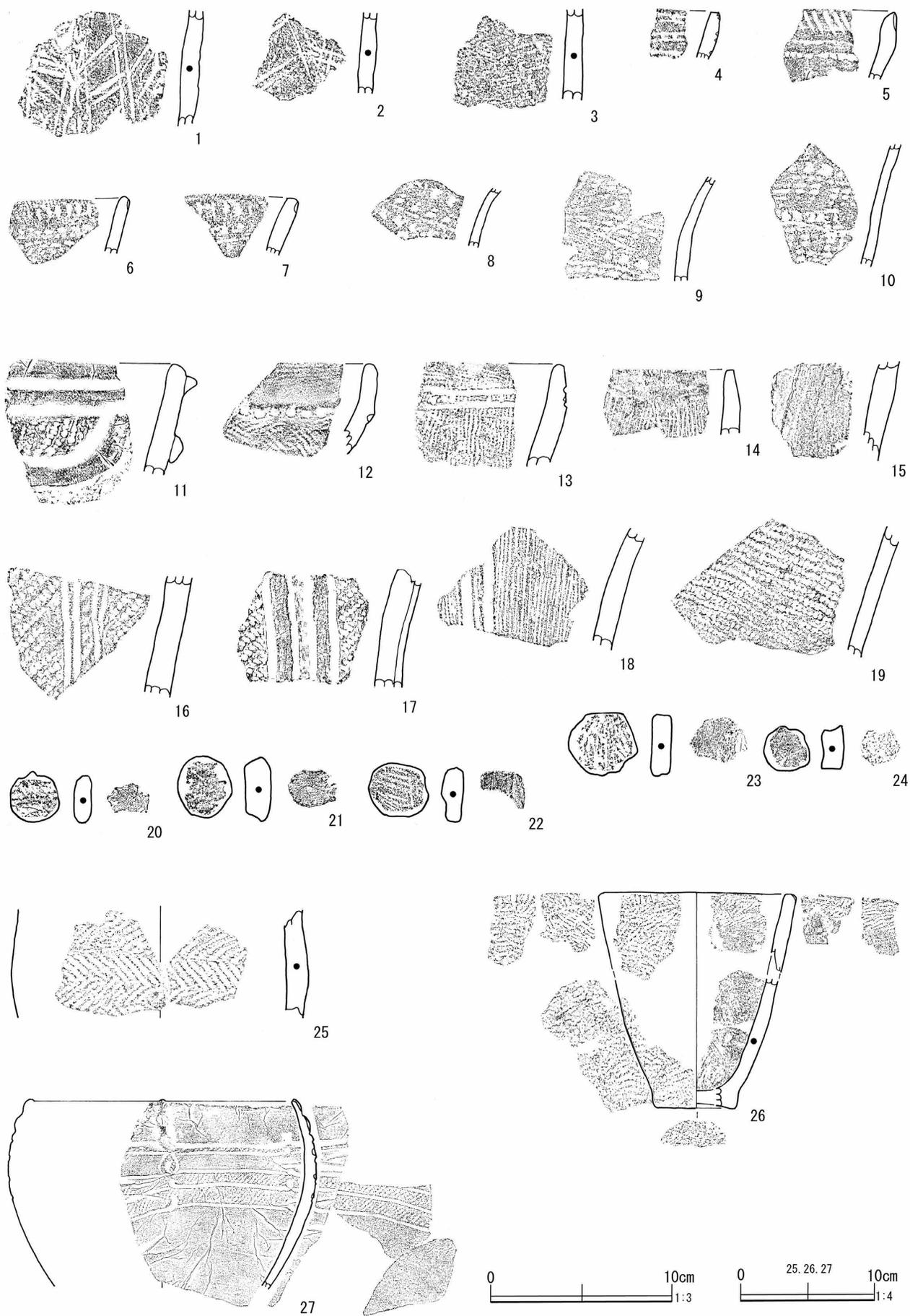


第19图 第52号住居跡出土遺物(3)

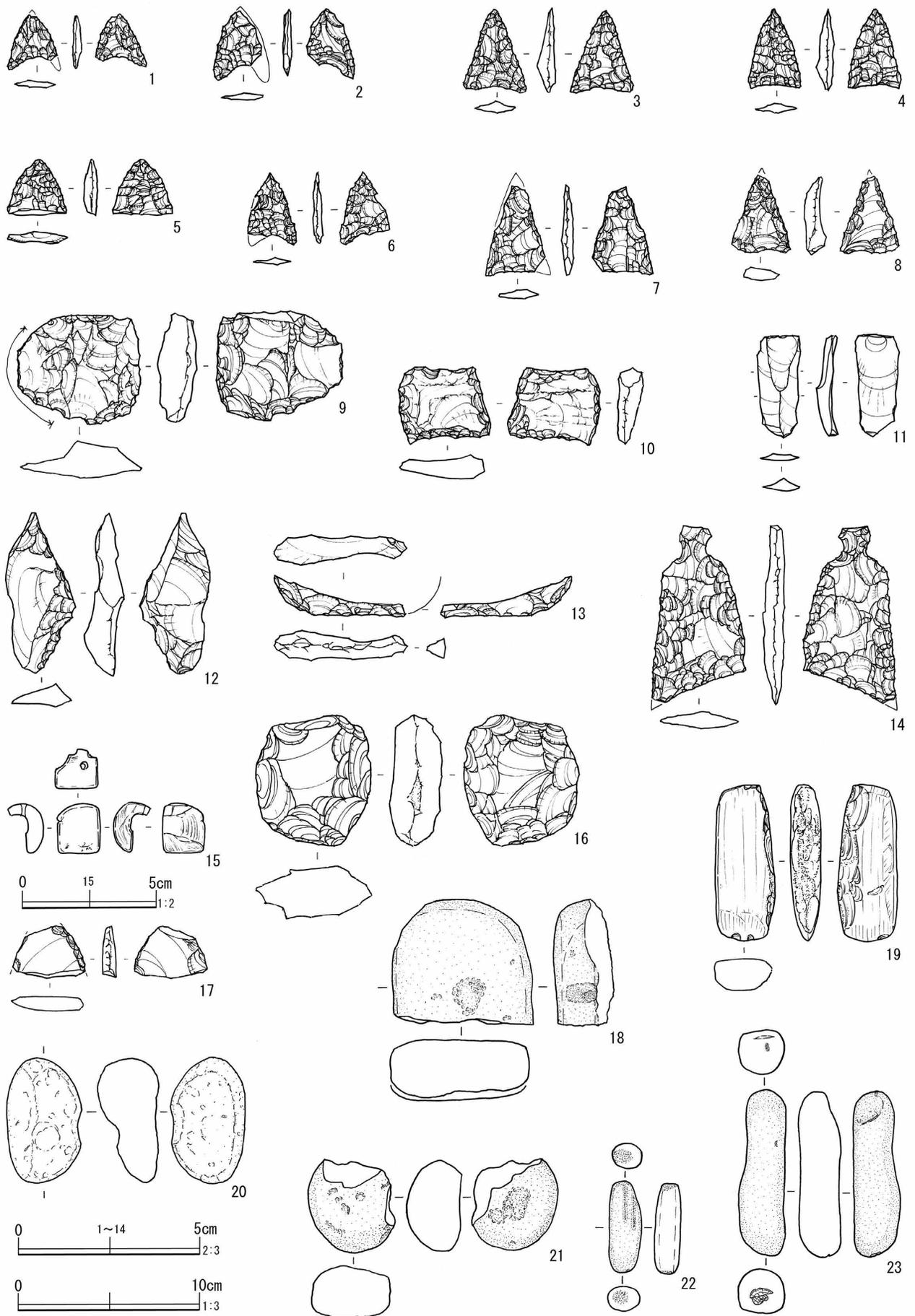
第20図1、2は半裁竹管による平行沈線で肋骨文を描出する黒浜式土器である。直接接合しないが同一個体であると思われる。3は拓本では判然としないが附加条2種縄文の施された胴部資料である。4は、半裁竹管による平行沈線間に爪形文を付す諸磯a式土器、5～10は浮島式土器で、5～7では口縁部外面に縦位の刻みが付されるもの、9、10は施文具を寝かせてやや引きずるようにロッキングさせる波状貝殻文が施される。同一個体と思われる。11～19は中期加曾利E式土器である。11は比較的丈の高い隆帯による弧状の区画の中に単節縄文が充填されるもの、12は口縁部無文帯の下端に微隆帯とこれに沿う円形刺突列を施すもの、13は撚糸文の地文上に棒状施文具による平行沈線を引きその中に先端の尖った細い棒状施文具による刺突を加えた口縁部資料、14は縦位の条線文が施された口縁部資料である。25は、花積下層式土器の胴部資料で残存部最大径22cmほどを測る。外面には単節縄文によるしっかりとした帯間構成の羽状縄文、内面には指頭による横位の撫で整形の痕跡が残される。26は、器高16cm、口径15cm、底径6cmほどと推定される小型の深鉢形土器である。外面は口唇端面から底面まで貝殻背圧痕文が施される。施文に規則性は認められないが、隙間なく重複施文している。内面は、口縁部周辺の2～3cmほどの範囲に単節LR縄文が乱雑に施される。27は、後期加曾利B式に該当する鉢形土器で、無文となる口縁部には垂下隆帯を付し指頭圧痕を加える。口縁部無文帯下端は半肉彫り状に盛り上げた細い縄文帯で画され、胴上部の帯縄文帯とを画している。内外面とも丁寧に撫でられている。

土製品 第20図20～24は土製円盤である。いずれも条痕文系の繊維土器で周囲を打ち欠き円形に仕上げている。

石器 第21図1～8は石鎌である。1、2は、先端と右脚端を欠く凹基無茎石鎌である。前者は表裏に後者は裏面に素材剥片の主剥離面を残す。3、4、7は平基無茎石鎌である。3、4は、両側縁に押圧剥離による、規則的で丁寧な調整剥離が加えられるもので、3では裏面中央に素材剥片の主剥離が覗られる。5は基部を欠く。両側縁の調整加工は丁寧なもので、石鎌として完成後欠損したものであろう。7は、先端と右脚端を欠く。側縁の調整剥離は大きさ剥離順も不規則である。8は、形態的には平基無茎石鎌と思われ、先端部を欠く。正面中央に右側縁側からの加撃による主剥離が、裏面には基部方向からの加撃による主剥離が大きく残る。側縁の加工は右側縁については裏面からの連続的な規則的な調整が行われるものの左側縁の調整は乱雑なもので、断面からわかるように素材剥片のよじれを修正できておらず、未製品である可能性が高い。9、10、12は2次加工剥片、11は使用痕剥片である。9は、裏面上部に打点とバルブを残す大き目の貝殻状剥片を素材とし、右側縁から階段状の剥離を加え薄く剥ぎ、半円形に整えて刃部を形成している。10は、裏面右側縁に打点とバルブを持つ剥片を素材とし、周囲に調整加工を施し四角く整形している。刃部は正面下端で表裏から押圧剥離を加え直刃に整えている。11は、刃器状剥片様の縦長剥片であるが、縄文時代の所産と思われる。目立った剥離は加えられていないものの先端に近い両側縁に刃こぼれ状の使用痕が認められる。12は、横長の剥片を素材とし、正面右側縁にブランディング風の調整加工を施している。先端部にも裏面方向からの粗い剥離が加えられている。13は、篋状石器の刃部残欠と思われる。両面からの調整加工が加えられ直刃に仕上げられているが、何らかの衝撃が正面中央付近から加わり欠損したものであると思われる。14は縦型の石匙である。素材剥片は大型の横長剥片と思われ、表裏にその痕跡を留める。摘み部は両側からの挟り込みを加え左右均等に作り出している。大まかな成形剥離を両面から加えたのち、左側縁端部が尖るように細かく丁寧に押圧剥離による調整加工が施されている。特に左側縁は表裏両面から丁寧に剥離されていることがわかる。16は礫器である。本来短冊状の打製石斧で



第20图 第52号住居跡出土遺物(4)



第21图 第52号住居跡出土遺物 (5)

あったものと思われ、体部で欠損したのち、裏面側の割れ口を加工している。17は筥状石器の基部残欠と思われ、表裏に素材剥片の主剥離を大きく残す。19は磨製石斧である。右側縁に剥離痕と敲打痕が明瞭に残されることから、さらに幅広の磨製石斧であったものが欠損し再加工して小振りに作り直したものである可能性が高い。18、21は磨石兼用敲石、22、23は細長い礫を素材としその両端に敲打痕が残されるタイプの敲石である。間接打撃を加える際に用いられたものと思われる。20は、軽石製品で、正面にくぼみが観られ、ほぼ同じ位置の側縁にもくぼみが観られる。

石製装飾品 第21図15は、玦状耳飾が欠損したのち穿孔し垂飾に転用したものと思われる。玦状耳飾としての穿孔は正面左側一方向から行われており、その痕跡は裏面側に良く残されている。欠損後上部に小孔を穿ち垂飾としている。

第4表 第52号住居跡出土石器計測表

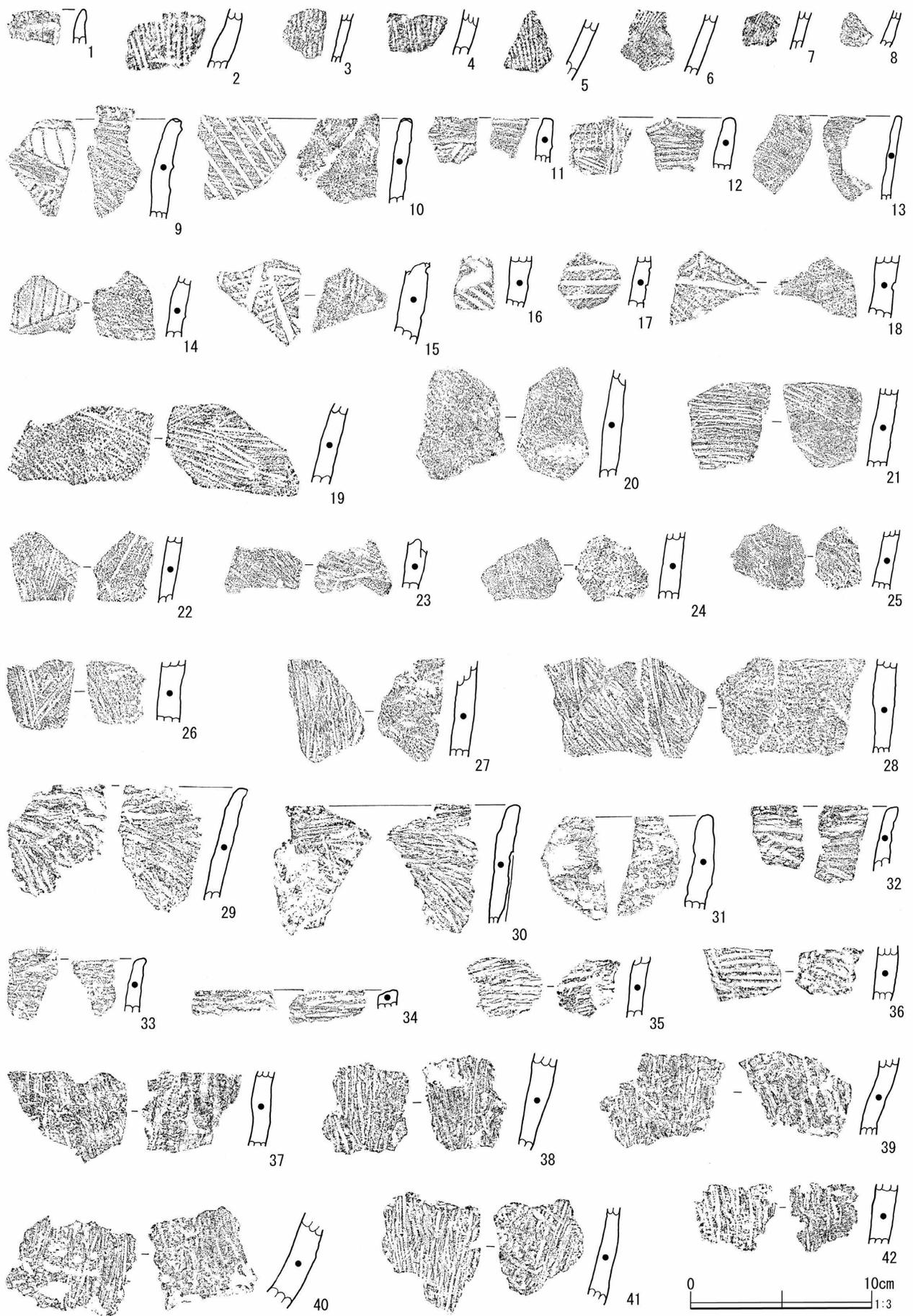
図	No	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
21	1	石鏃	チャート	1.5	(1.3)	0.2	(0)	
21	2	石鏃	チャート	(2.0)	(1.3)	0.3	(1)	
21	3	石鏃	チャート	2.3	1.8	0.5	1	
21	4	石鏃	チャート	2.2	1.5	0.5	1	
21	5	石鏃	チャート	(1.5)	(1.7)	0.4	(1)	
21	6	石鏃	チャート	2.0	1.3	0.2	1	
21	7	石鏃	チャート	(2.5)	(1.6)	0.3	(2)	
21	8	石鏃(未製品)	チャート	2.1	1.7	0.6	1	
21	9	2次加工剥片	チャート	3.0	3.5	1.1	11	
21	10	2次加工剥片	チャート	2.2	2.5	0.7	4	
21	11	使用痕剥片	チャート	2.8	1.2	0.4	1	
21	12	2次加工剥片	チャート	4.5	1.7	0.9	5	
21	13	筥状石器残欠	ホルンフェルス	(0.8)	(3.7)	(0.8)	(2)	
21	14	石匙	チャート	(4.9)	2.6	0.6	(6)	
21	15	垂飾	滑石	1.9	1.5	0.6	3	玦状耳飾からの転用
21	16	礫器	石材不詳	7.1	6.3	2.3	160	打製石斧から転用
21	17	筥状石器残欠	ホルンフェルス	(2.6)	(4.0)	0.7	(10)	
21	18	磨石兼用敲石	閃緑岩	(6.7)	7.6	3.0	(287)	
21	19	磨製石斧	緑色岩	8.5	3.2	1.7	89	再加工
21	20	軽石製品	軽石	7.0	4.1	3.0	45	
21	21	磨石兼用敲石	安山岩	(5.0)	(4.5)	2.8	(48)	
21	22	敲石	砂岩	5.0	1.7	1.4	17	
21	23	敲石	不明	9.1	2.3	1.9	81	

●第53号住居跡 (第15・16図)

C10・11グリッドに位置し、南東端は風倒木跡(SX3)に切られる。第52号住居跡と重複するが、新旧関係は明確でない。平面形は長径約5.1m、短径約5.0mの隅丸方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mであった。住居跡に伴うピットは15基検出したが、炉跡の痕跡は認められなかった。

出土遺物 (第22～29図)

土器 第22図1～8は、撚糸文系土器群である。1は口縁部資料である。口唇部は外側に引き出され、体部との間にわずかに段を持つように整形される。2は胴部下半の資料である。いずれも小片ながら同一遺構からの出土という意味では注意しておきたい。9～28は野島式前後に該当する早期の条痕文系土器群である。9、11、12、14はミミズ腫れ状の細隆起線の観られるものである。12では小波状縁をなす口縁部に貝殻腹縁による刺し切るような刺突が付される。10、15～18は太い沈線区画の中に細い沈線を充填するような手法が用いられるものである。19～28は条痕文のみが観察される胴部資料であるが、胎土には砂



第22图 第53号住居跡出土遺物(1)

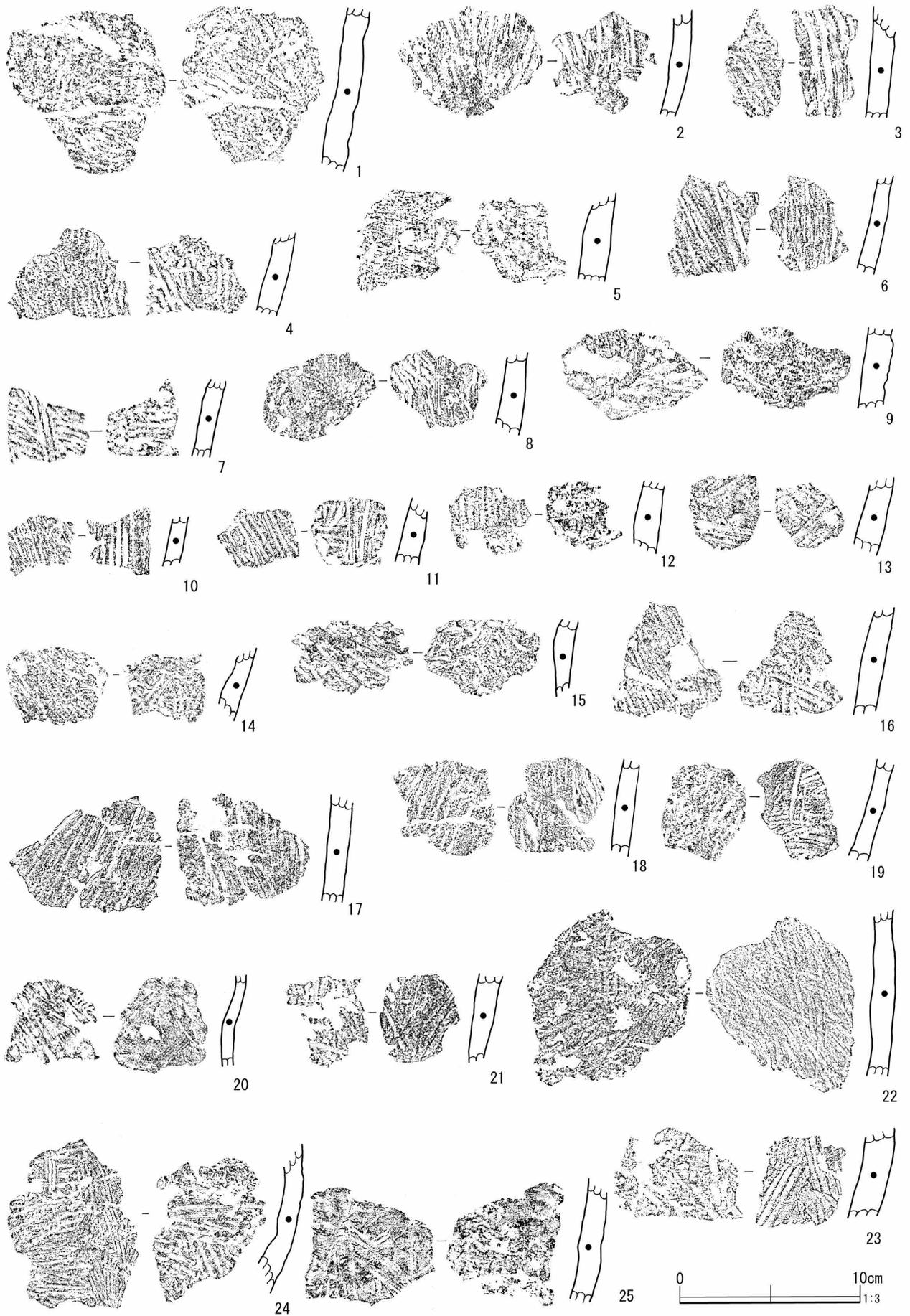
粒を多く含み繊維含有量の低い焼成の良好な一群である。29～第24図10までは花積下層式土器に該当する条痕文系の土器群である。概して胎土への繊維含有量が高く脆い。29～34は口縁部資料で、29はやや外反気味に立ち上がり口唇部が外側へ引き出されるような作りのものである。多裁竹管のような工具を用いて器面整形を行っているのかもしれない。30は、直立気味の口縁部資料で内外とも口縁部付近は横位の以下は縦位の条痕が観察される。34はやや内削状の口唇部を持つ。口唇端面まで条痕が及ぶ。39はやや屈曲を持つ胴部資料、40は底部周辺の資料である。

第23図1は大振りな土器の体部と思われ、繊維脱虚痕が著しい。2と8は同一個体と思われるもので、縦位の条痕が観察される。2は底部に近い資料である。20はやや薄手で屈曲を持つものである。22は厚手で大振りの資料であるが、条痕施文後表裏ともやや撫でが加えられているようである。25は、多裁竹管が用いられており、縦位斜位に彫りの浅い沈線を引くようにも観えるが、条痕文の一形態と把握した。

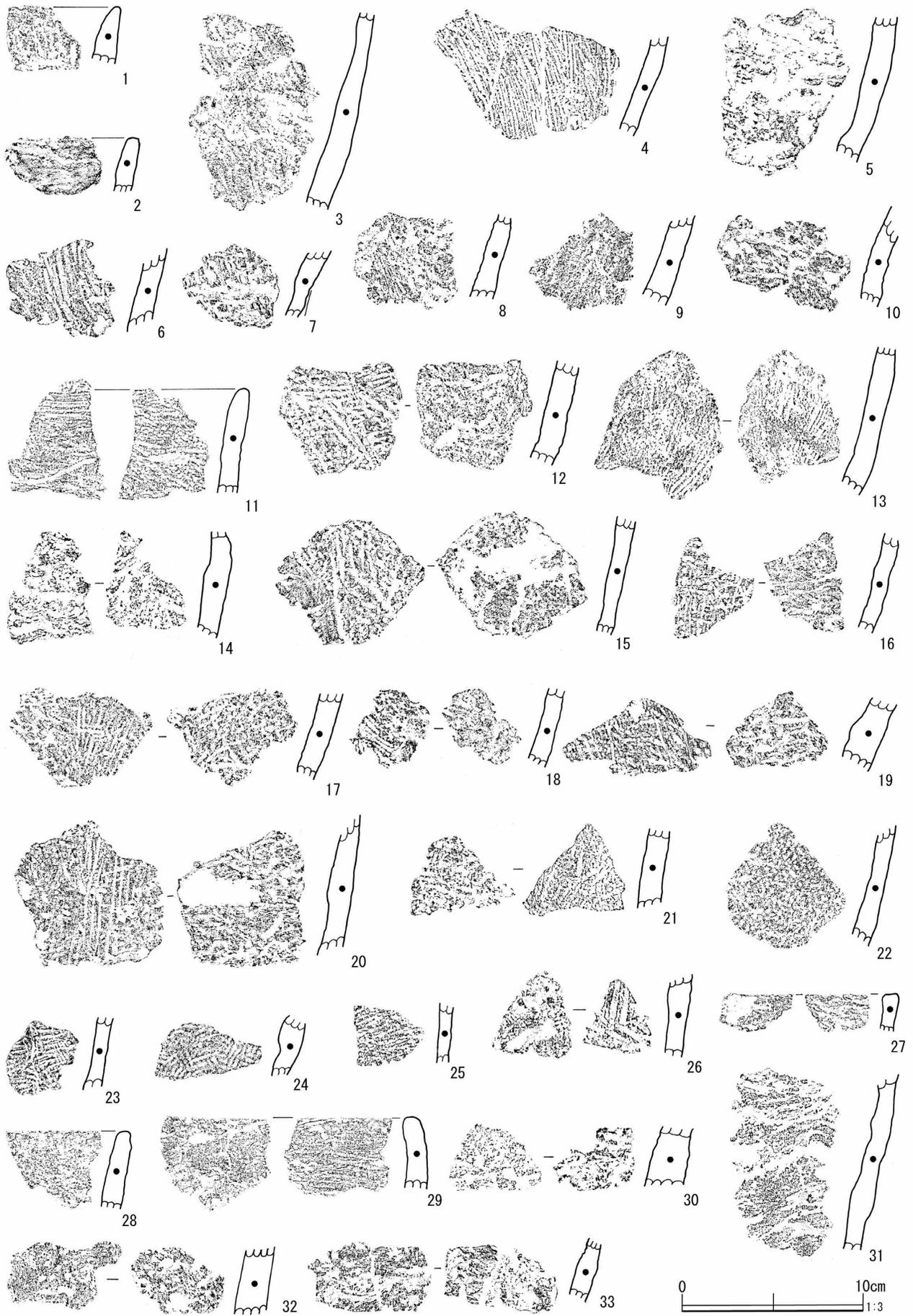
第24図1～10は外面にのみ条痕の認められる資料である。1、2は口縁部資料で、前者は内面を削ぐように立ち上がるもので外面に縦位の条痕が認められるもの、後者は器厚を保って口唇部にいたるもので、条痕施文後横位の撫でが加えられているものである。11～26は、貝殻背圧痕文の施された一群である。11は外面には横位の浅い条痕が観られ、内面に貝殻背圧痕文が施されるもの、12は外面に貝殻背圧痕文が観られるもので、貝殻の押捺は小振りな貝殻を横位に押したのち、大振りの貝殻を右下がりに斜位施文している。13は表裏にまばらな貝殻背圧痕文が観られるもの、14は口縁部に近く表裏に貝殻背圧痕文が観られるもの、15は外面に縦位の条痕文と斜行する貝殻背圧痕文が併施文されるもの、16、19は縦位の条痕と横位の貝殻背圧痕文が併施文されるもの、22～25は細かな貝殻背圧痕文が間断なく施されたもので、25では左下がりに肋を揃えている。27～第25図19は条痕撫で消しとする一群である。この一群は、下吉井式に近似する一群で、条痕の撫で消し方は一様ではなくしっかりと撫で消すものから、撫で痕を意図的に残すかのようなものまで存在する。また、第25図1～19に掲げた資料は胎土に白色針状物質を明瞭に含む特徴を持つ。この一群は、同時期の条痕文系の土器群と繊維含有量は同程度と思われるが、撫で整形が加えられるためか、繊維脱虚痕はあまり観察されず、器面は滑らかで遺存状態が良いものが多いと感ぜられる。第24図27～29は口縁部資料で、条痕はしっかりと撫で消される。29は内湾気味に立ち上がる資料である。31は、器壁の凹凸の激しいもので繊維脱虚痕も目立つ。

第25図1は外反する平縁資料で外面の条痕は比較的明瞭に残る。2は表裏とも条痕がよく撫でられた緩波状縁の深鉢形土器である。3～9は口縁部ないし口縁部に近い胴部上半の資料で、半裁竹管状の施文具による平行沈線が引かれる。沈線の状態は、3のように蛇行するものや5～9のように単に横走するものなどバラエティが認められる。3では断面三角形の横走隆帯が貼られる。4では、口唇部に沿う横走沈線と、右下がりに斜行する沈線とが看取される。16は胴下半の資料で、丸底になるものと思われる。20～第26図5は、無節縄文の観察される一群である。20～22は口縁部資料である。21、22は帯内でも羽状構成をとるものであることがわかる。21は口唇部にも無節縄文を施す。内面は条痕である。23は帯間、帯内ともに羽状構成をとるもので残存部ではX字状の羽状縄文が観察される。24は帯間、帯内羽状構成をもつものの、上段では無節Rのみが観察できる。下段では羽状構成の切り替えし部が重複施文されており、やや見にくいが無節Lの上端を結束する細紐の回転圧痕も見て取れる。25、26は比較的細い無節縄文が観察されるもの、28はための無節縄文が観察されるものである。

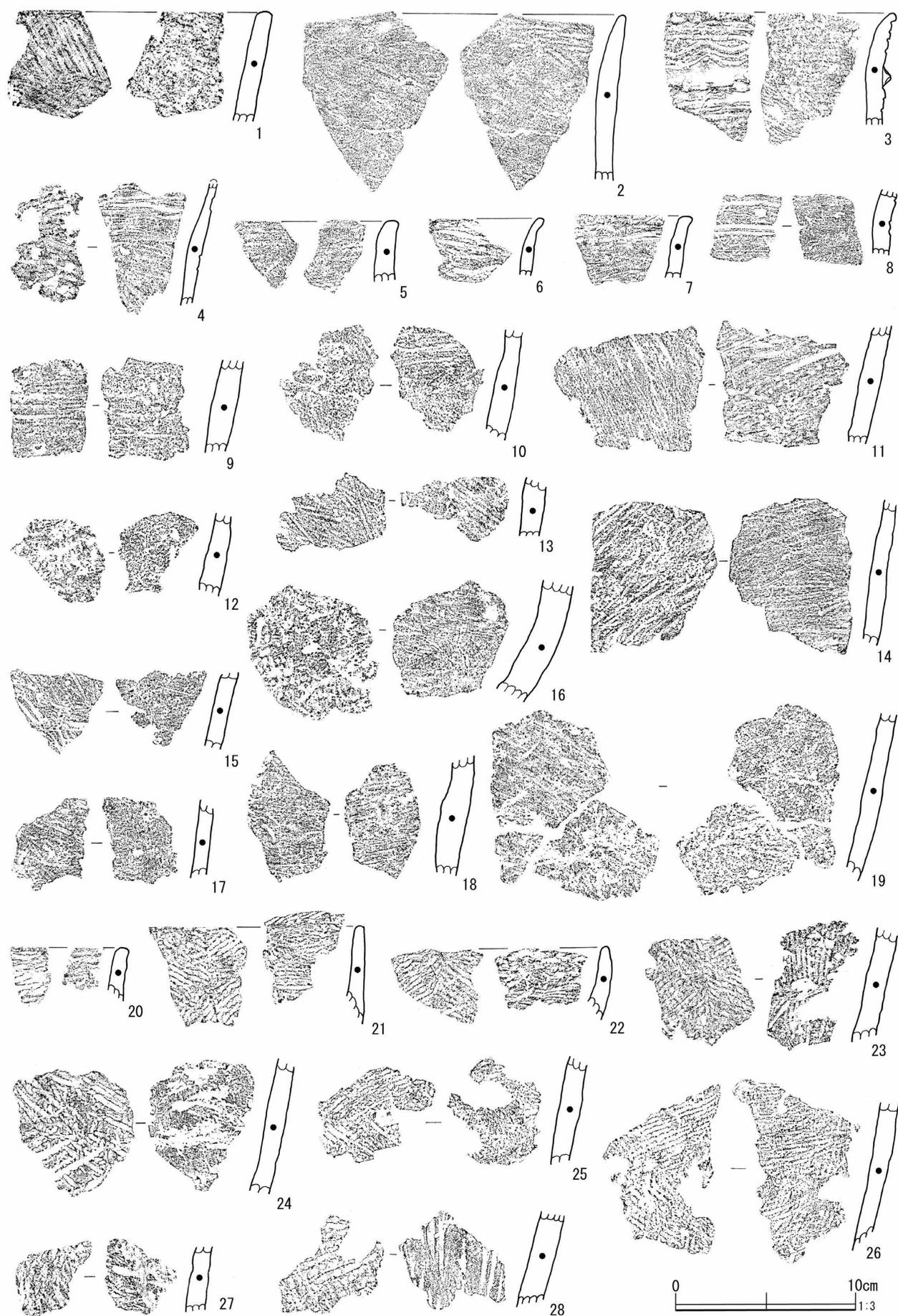
第26図1～5はいずれも比較的太くしっかりとした無節縄文が施された資料である。6～第27図27まで



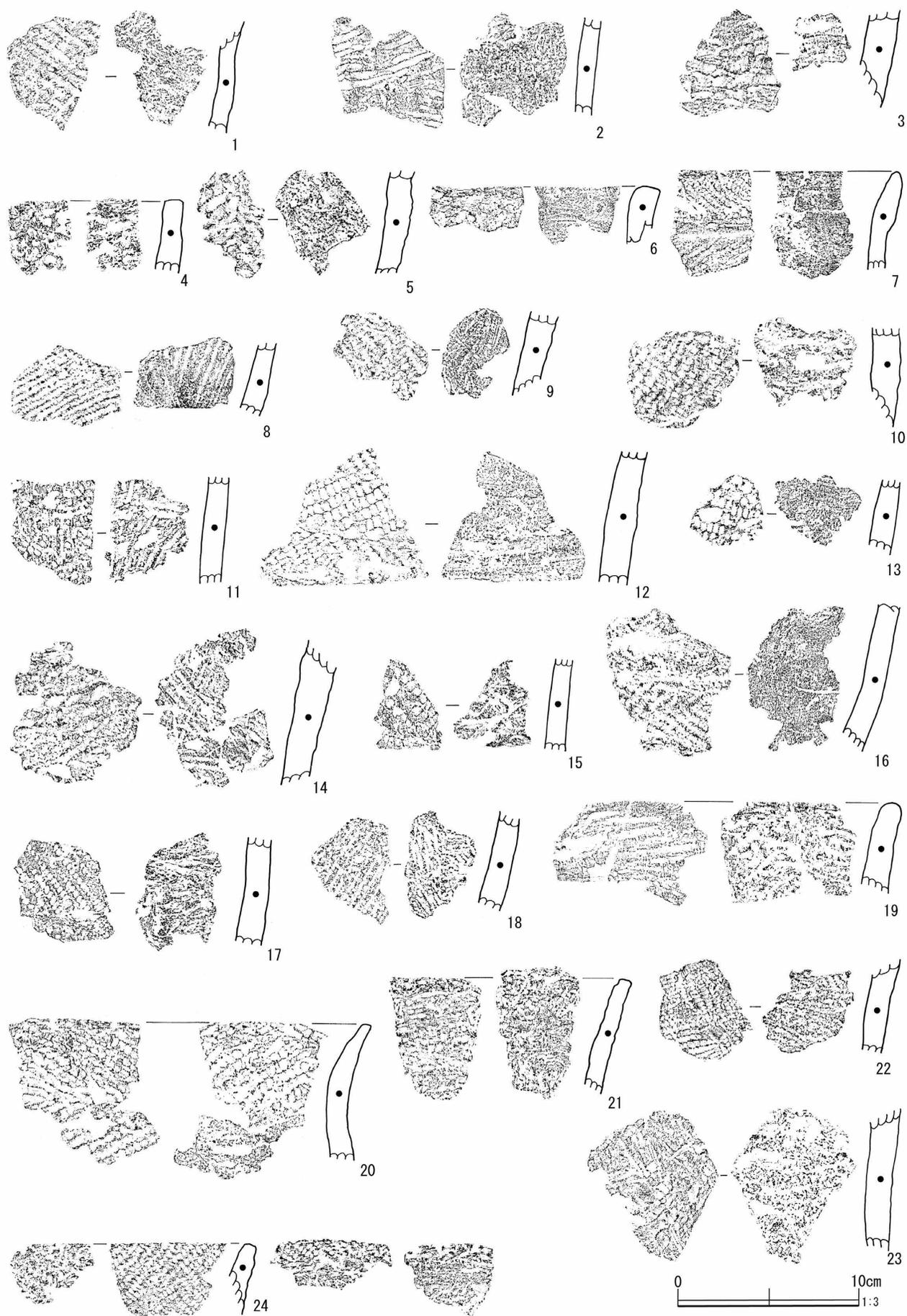
第23图 第53号住居跡出土遺物(2)



第24图 第53号住居跡出土遺物(3)



第25图 第53号住居跡出土遺物(4)

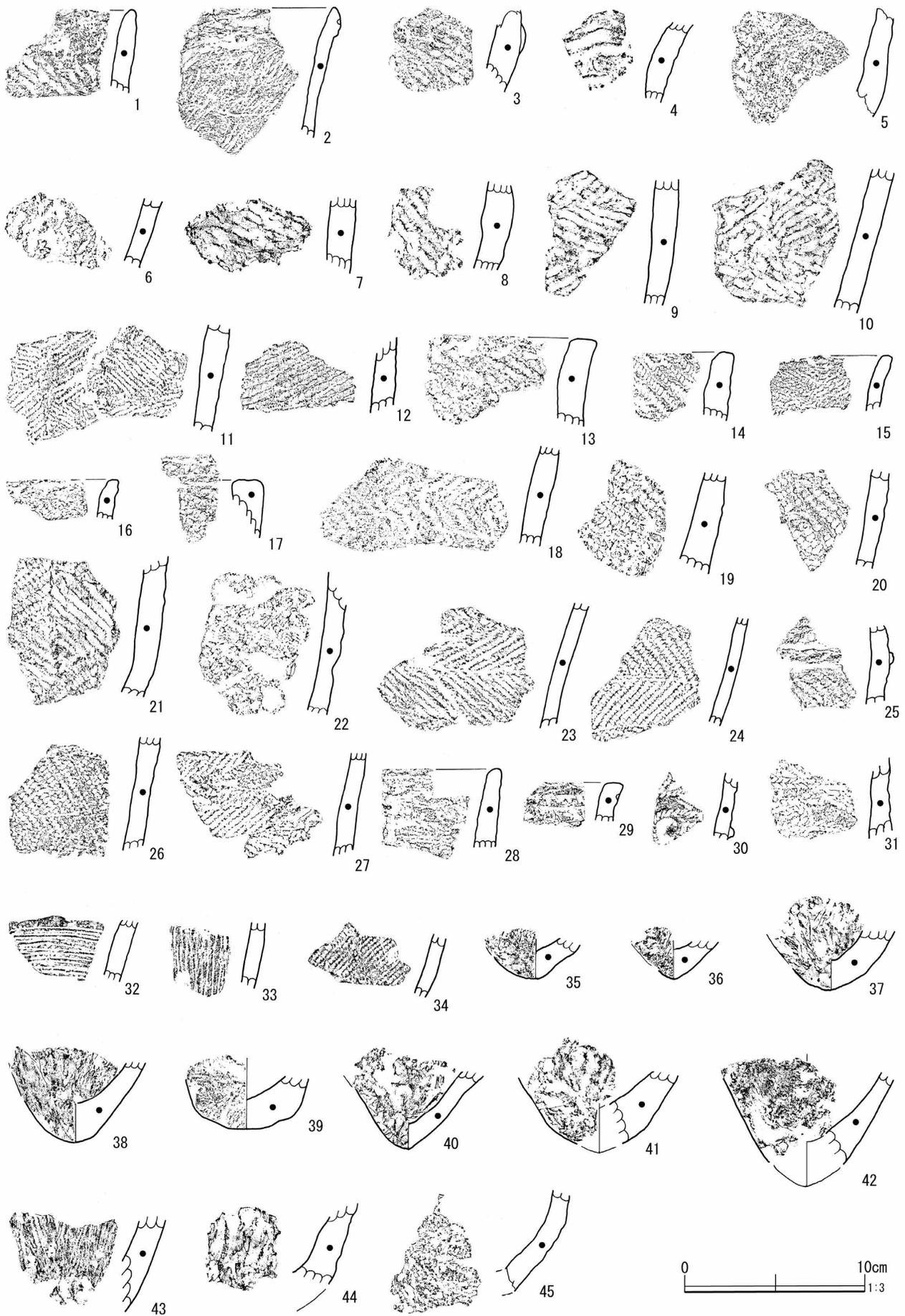


第26图 第53号住居跡出土遺物 (5)

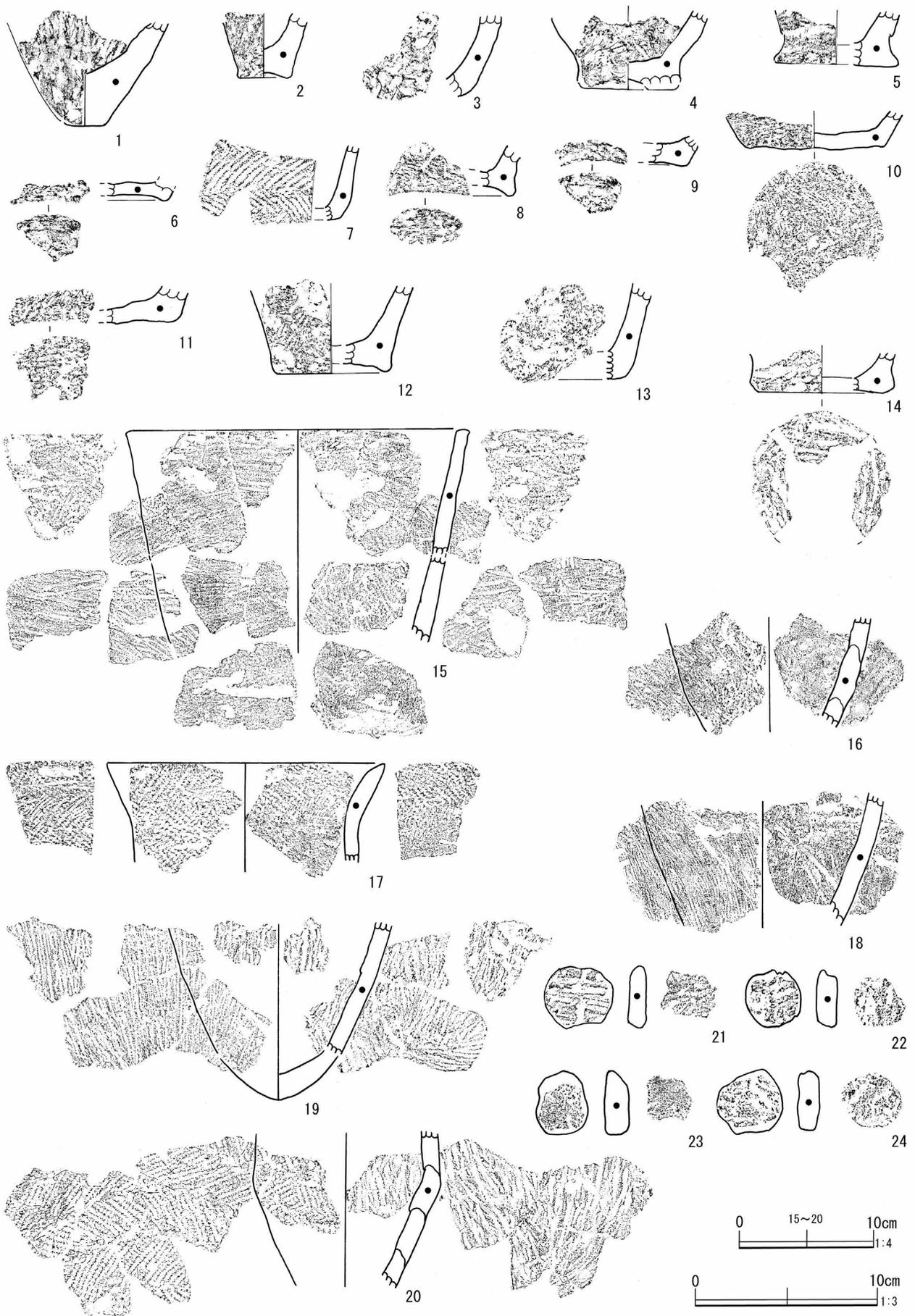
は単節縄文の施された資料である。第26図6～17は外面に単節縄文、内面に条痕を認めるものである。7は口縁部の肥厚する平縁資料で内面は条痕撫で消してある。12は節の大きな単節縄文で整然とした帯間構成の羽状縄文を施した胴部資料である。残存部では3段にわたって縄文帯が観察できるが、施文は下から行われ施文幅はおよそ3cm、約2指幅である。14は、条幅が8mmほどもある縄文が施されたもので、内面には条痕文が顕著に残される。16は、内面の条痕は良く撫でられており拓本では判然としないが横位の条痕の痕跡が認められる。20～22は表裏に縄文の観られるものである。20は、口縁部の外反する平縁土器で、外面は帯間構成の単節羽状縄文、内面はLR単節縄文が施される。口唇端面は外面上端と同じRL縄文である。21は、単節縄文を斜位回転させ条が横走するよう施文している。口唇端面も同様の手法がとられる。内面はRL縄文を横回転させている。22は、外面は帯間、帯内羽状縄文が施され、内面は上部に単節RL縄文が施される。以下は斜行する条痕文が残される。24は口唇端面にも縄文の施された資料、23は、条痕の上から単節縄文が施された資料である。

第27図1は無節縄文の施された口縁部資料、2は口縁部を肥厚させ2条の刺突列を施した貝殻背圧痕文の施された資料である。3～12はいずれも無節縄文の施された資料で、このうち7～10はPit7から出土した同一個体と思われる資料である。11は、菱形羽状構成の胴部資料、12は斜行する細い無節縄文の施された資料である。13～17は単節縄文の施された口縁部資料である。15はごく緩い波状縁ないし小突起を持つ資料である。17は節の大きな単節縄文を口唇端面まで施文するもので、厚みのある器壁と角頭状に整えられた口唇部は花積下層式期古手の大型土器を思わせる。18～27は単節縄文の施された胴部資料である。21は菱形構成の羽状縄文が看取されるもの、23、24は原体末端の結束回転が観られるものである。25は横走隆帯の付された資料である。28～31は撚糸側面圧痕文が看取されるものである。28は器面の損傷が激しいが複数本の撚糸側面圧痕が横走するものであることがわかる。29は1本押しの側面圧痕間に下から突き上げるようにして直径2mmほどの細い円形竹管を用いた刺突を施したもので、30は、1本押しの側面圧痕をタイトに巻いた渦巻文を形成し、その中央部を瘤状に浮き上がらせるものである。この土器は胎土にほとんど繊維を含まないもので上川名2式土器と思われる。31は、2本1組の撚糸側面圧痕を数条横走させ、その上からタイトに巻いた側面圧痕の渦巻文を施すものである。32～34は、前期後半諸磯式期の資料で、32は諸磯b3式の胴部資料、33は細い撚糸文の施された胴部資料で、東関東系のいわゆる八幡脇類と呼ばれるものである。34は諸磯a式期の縄文施文土器である。35～第28図14は本址出土の底部資料を一括したものである。35～45は尖底となるものと思われるが、39は丸底といっても良く、44、45も丸底に近いものである可能性がある。

第28図1、2はわずかに底面を持つものであるが、安定して自立するには小さすぎる。3は丸底の可能性もある。4は丸底の周囲に高台風の粘土帯を設けたもの、5は同様に張り出しを設けたものである。6～14は平底の資料で、6、8、12は上げ底となるものである。6の底面に単節縄文が施される。7では底部間際まで羽状縄文が施される。10、11は底面に貝殻背圧痕文が、14は条痕が観察される。15は、推定口径25cm、残存高22cmほどを測る平縁深鉢である。表裏に横位主体の条痕を施したのちこれを撫で消している。同一個体と思われる小片が多数存在するものの接合は限定的で器形復元にとどめた。16は、残存部の最大径15cm、残存高8.5cmほどを測る。外面は条痕文と貝殻背圧痕文は併施文され、内面は粗い条痕文が残される。17は推定口径20cm、残存高8cmを測る平縁深鉢である。頸部から口縁部は大きく外反する。外面には単節羽状縄文が観察される。口唇部から外反した口縁部内面にも単節縄文が残される。以下はよく



第27图 第53号住居跡出土遺物(6)

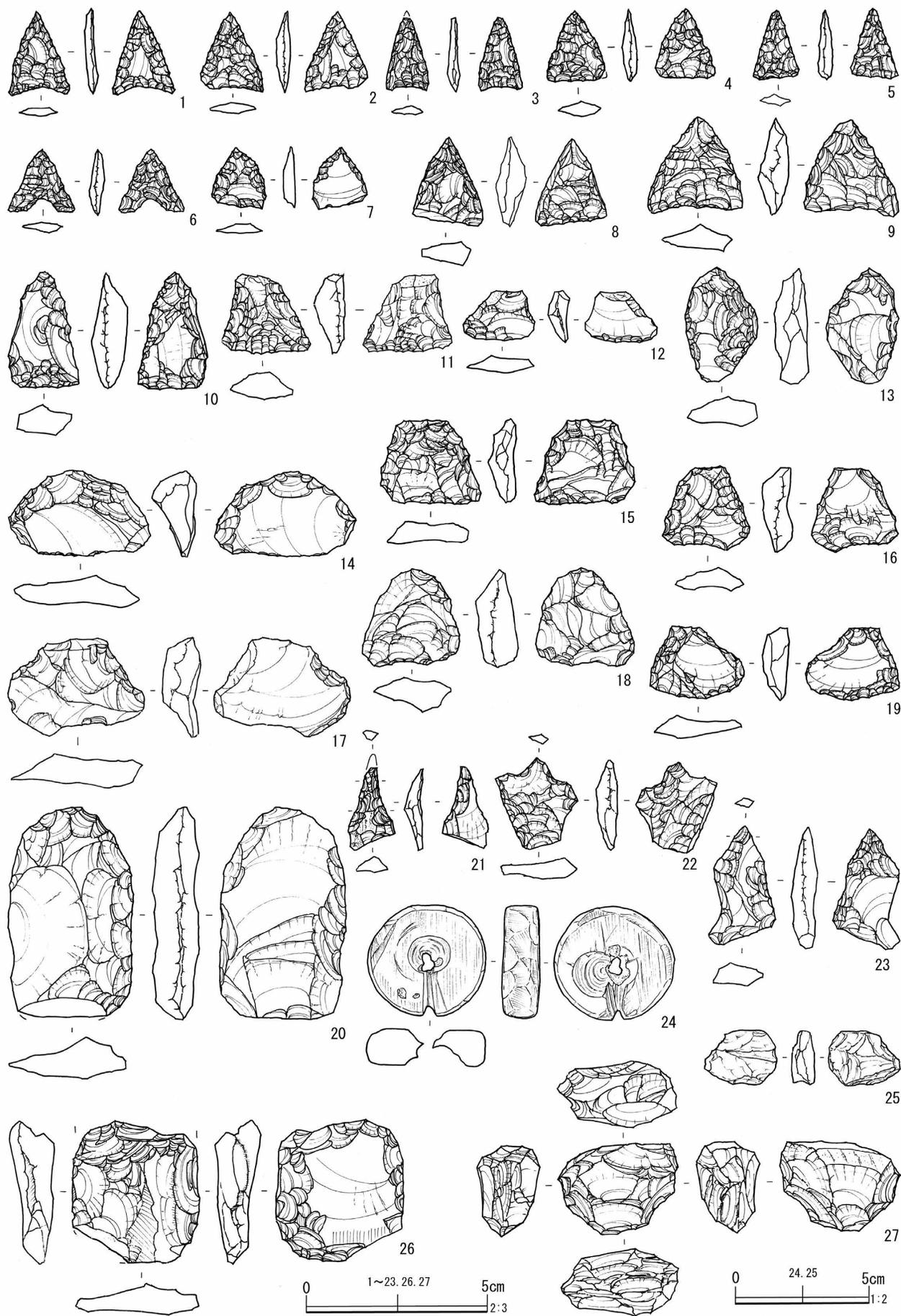


第28图 第53号住居跡出土遺物(7)

撫でられている。18は、残存部最大径16cm、残存高11cmほどを測る胴部下半の資料である。表裏全体に縦位を基調とする条痕が施される。尖底をなすものと思われる。19は、残存部最大径14cm、残存高12cmほどを測る胴部下半の資料である。外面は帯間構成の単節羽状縄文が施され、内面には縦位を基調とする条痕が施される。20は、残存部最大径17.5cm、残存高9cmほどを測る胴部下半の資料である。表裏に縦位を基調とする細い条痕文が密に施される。内面はやや撫でが加えられる。

土製品 第28図21～24は、土製円盤である。21は横位の条痕が施された胴部破片を素材とする。残り3点も条痕文系の土器を素材とするようであるが、摩滅しており判然としない。

石器 第29図1～9は石鏃である。1は基部にわずかな抉りが入る。裏面中央に素材剥片の主剥離を残す。両側縁及び基部の加工は規則的かつ丁寧なもので薄く仕上げられている。2は右脚端をわずかに欠くが、欠損後修正されている。裏面に素材剥片の主剥離を残す。3は細身に仕上げられたもので先端部をわずかに欠く。4は基部を全く抉り込まない平基無茎の石鏃である。周縁部からの調整加工は不規則で中央部分がやや厚めに残る。5も平基無茎石鏃であるが左に比べ右脚端がわずかに短い。6は凹基無茎石鏃である。左右の脚端が尖らずいわゆる鏃形鏃と呼ばれる一群に該当する。本址では燃糸文系土器群が出土しており(第22図1～8)、これに伴うものである可能性が高い。7は不整形のいわゆる剥片鏃で、裏面に素材剥片の主剥離を大きく残す。8、9は石鏃未製品と思われる。前者はやや厚みのある不整形剥片を素材とし周縁部から成形剥離を重ね三角形の概形を整えつつあるが、両側縁と基部の調整加工はこれからという段階である。9は成形加工を終了し調整加工を始めている。しかし全体にかなりの厚みを残しており製品とはいえない。10～19は2次加工剥片である。10は横長の不整形剥片を素材としたもので、バルブを剥ぎ薄くしようと試みている。三角形の概形と周縁部からの加工から、いわゆる石鏃ブランクまたはドリルを志向したものである可能性が高い。11は、中央部を高く残すが、下端は表裏両面からの調整加工を加え直刃に仕上げている。削器であるものと思われる。12は横長の貝殻状剥片を素材としたもので、やや尖る左下端から下縁部に押圧剥離を加えている。削器としての機能が想定される。12は横長で厚みのある不整形剥片を素材とするものである。打面とバルブのある正面右側縁に集中的に剥離を加えると同時に、対極の左側縁にも表裏から押圧剥離を加えている。左側縁を刃部とする削器または石鏃などを意識していたものかもしれない。14は左側縁に打面を持つ母岩から連続剥離されたことわかる縦長の不整形剥片で、正面にネガティブな、裏面にポジティブな主剥離が観察される。正面上部大きく厚みを残したことからこちらにブランディングを加え、薄い下端部をエッジとして使用している。削器としての機能を持つものと思われる。15は11と近似した台形をなすもので、正面下端を刃部とした削器であろう。16、18はいわゆる石鏃ブランクであろう。17、19は不整形剥片を用いた削器と思われる。20～22は石錐である。20は不整形剥片を素材としたもので、嘴状に丁寧な加工が施される。先端部を欠く。21は、一見すると有茎石鏃のような形状を持つが、やや扁平な錐部を作りだしていることがわかる。22は、不整形剥片を素材とし、錐部と握部には表裏から規則的な剥離を加え形状を整えている。23は、籠状石器である。縦長の剥片を素材とし、やや厚みのある打面側を刃部に、先端部側を基部にしたものである。正面側の厚みは裏面側からの階段状剥離で剥ぎ、裏面のバルブを剥いで刃部を整え、平行する両側縁を整形している。緩い円刃ないし、角の丸い直刃であったものと想像される。24は、玦状耳飾の未製品である。扁平で中央に天然の窪みを持った素材を用い当該期としては大型の耳飾りを志向している。外形を円形に整え面取りをしながら両面から円孔を穿つ作業を進めている。また両面から擦り切り手法で開口部を開こうとしている。25は、



第29图 第53号住居跡出土遺物(8)

玉素材剥片である。滑石製で、大きくはないものの、白玉程度であれば十分採れるサイズである。26は局部磨製の石斧と思われる。上部方向に打面を持つ剥片を素材としたもので、四方から階段状剥離を加え正方形に近い形状に整えている。さらに両側縁と表裏の下端方向に研磨を加えている。27は石核である。不整形の剥片を剥離したもので、すでに残核であるものと思われる。晩期には比較的に見られる資料であるが、当該期の資料としては多くないものと思われる。

第5表 第53号住居跡出土石器計測表

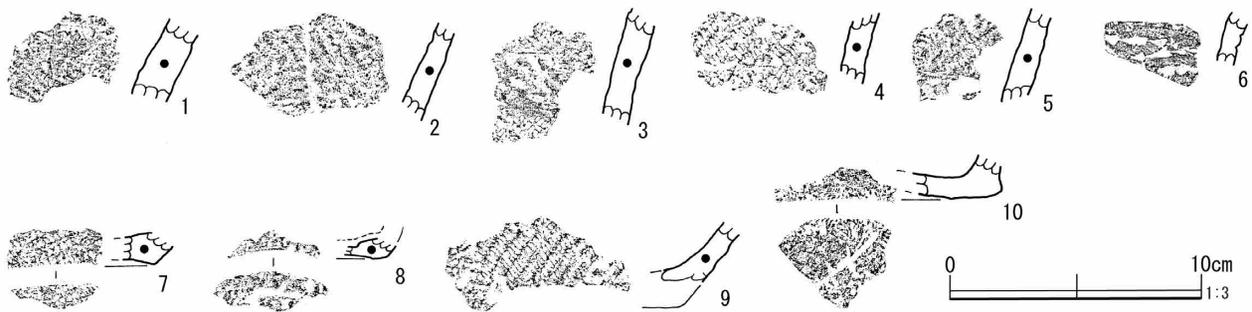
図	No	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
29	1	石鏃	チャート	2.4	1.8	0.3	1	
29	2	石鏃	チャート	2.1	1.8	0.4	1	
29	3	石鏃	チャート	(2.0)	1.2	0.3	(1)	
29	4	石鏃	チャート	1.6	1.7	0.4	1	
29	5	石鏃	チャート	1.9	1.3	0.4	1	
29	6	石鏃	チャート	1.8	1.8	0.4	1	
29	7	石鏃	チャート	1.7	1.6	0.3	1	
29	8	石鏃未製品	チャート	2.5	2.0	0.8	3	
29	9	石鏃未製品	チャート	2.7	2.7	0.9	4	
29	10	2次加工剥片	チャート	3.2	1.9	1.0	6	
29	11	2次加工剥片	チャート	2.2	2.5	0.9	4	削器
29	12	2次加工剥片	チャート	1.4	2.0	0.5	1	削器
29	13	2次加工剥片	チャート	3.2	2.0	0.9	6	
29	14	2次加工剥片	チャート	2.4	4.0	1.3	8.2	削器
29	15	2次加工剥片	チャート	2.3	2.8	0.7	5.0	削器
29	16	2次加工剥片	石材不詳	2.4	2.4	0.8	4.1	石鏃ブランク
29	17	2次加工剥片	赤チャート	2.8	3.8	0.8	9.3	削器
29	18	2次加工剥片	チャート	2.6	2.7	1.1	7.4	石鏃ブランク
29	19	2次加工剥片	チャート	2.0	2.6	0.7	3.2	削器
29	20	石錐	黒耀石	(2.3)	1.2	0.5	(0.7)	
29	21	石錐	チャート	2.5	2.1	0.6	2.8	
29	22	石錐	チャート	3.3	1.6	0.7	3.2	
29	23	篋状石器	ホルンフェルス	5.9	3.5	1.2	31.6	
29	24	扶状耳飾	滑石	4.1	4.4	1.4	34.9	未製品
29	25	玉素材剥片	滑石	2.0	2.4	1.1	4.6	
29	26	局部磨製石斧	ホルンフェルス	(4.0)	3.7	1.3	(17.4)	
29	27	石核	チャート	2.5	3.3	1.8	17.1	残核

●第54号住居跡 (第13図)

D10・11グリッドに位置し、東半部は調査区外である。第54号土坑に切られる。検出部分のみで長径約3.7m、短径約3.4mを測る。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mであった。住居跡に伴うピットは14基検出したが、炉跡の痕跡は認められなかった。

出土遺物 (第30図)

土器 1、2は、無節縄文の施されたものである。3~5は単節縄文の施された胴部資料で、3はRL縄文が3帯にわたって施文される。1帯は約2cmで2指幅以下である。4は帯間構成の羽状縄文が観察されるものである。6は変形爪形文の観察される浮島式である。7~10は底部資料である。7~9は花積下層式期のもので、いずれも底部外周まで単節縄文の施される平底の資料である。9は0段3条の単節LR縄文である。10は、諸磯式に該当する底部資料で、胎土に砂粒や小礫を多く含む。



第30図 第54号住居跡出土遺物

●第55号住居跡 (第13図)

B9・C9・10グリッドに位置し、第56号住居跡と第2・3号土坑を切る。平面形は長径約3.9m、短径約2.5mで長方形に近い形状を呈す。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mであった。住居跡に伴うピットは3基検出したが、炉跡の痕跡は認められなかった。

出土遺物 (第31図)

土器 1、2は、表裏に条痕文の残る胴部小片である。前者は、胎土の繊維含有量は少なく早期の所産と思われる。後者は胎土に多量の繊維を含み脱虚痕が目立つもので、花積下層式土器である。条の細い無節縄文を重複施文した胴部資料である。内面は横位の磨きを加えられ丁寧に仕上げられている。4は無文の胴部資料、5は単節縄文施文後にこれを潰すように撫でが加えられたものと思われる。6は縦位の羽状構成をとる無節縄文の観察される胴部資料である。内面は撫でが加えられるが、繊維脱虚痕が目立つ。7は無節縄文の観察される底部付近の資料である。8は外面に貝殻背圧痕文、内面に条痕の観られる底部付近の資料である。尖底となるものと思われる。9は外面に単節RL縄文と貝殻背圧痕文とが併施文され内面は貝殻背圧痕文が施された胴部下位の資料である。11は、表裏に条痕の施された胴部下位の資料である。残存部最大径は9.5cmを測る。12は外面に細い条線の観られる木島式土器である。

土製品 10は、土製円盤である。花積下層式に該当する節の大きな単節羽状縄文の土器片を素材とする。

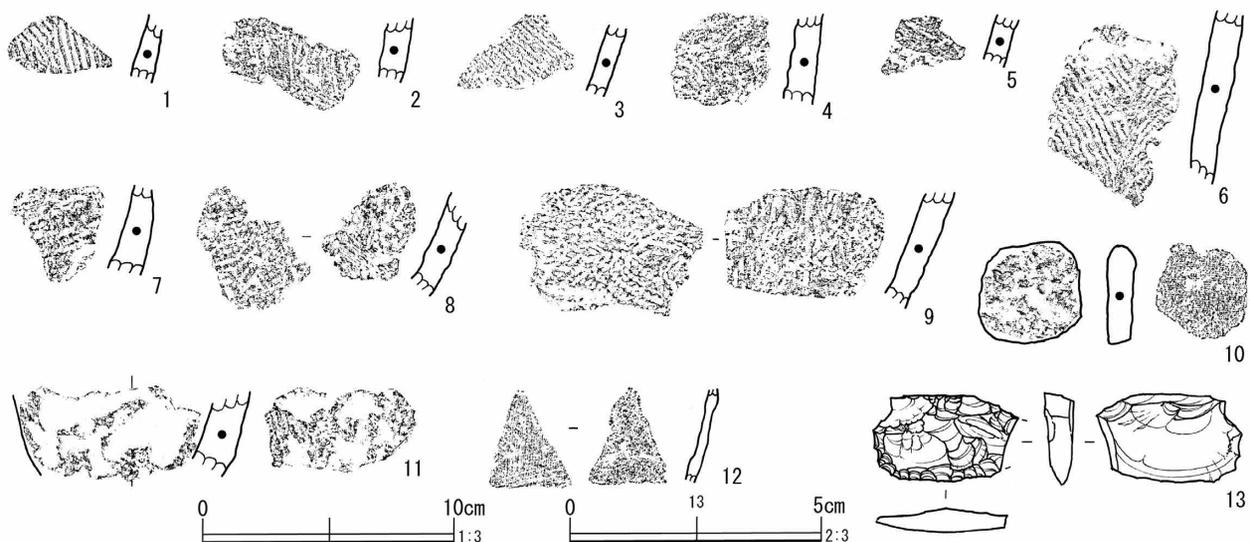
石器 13は、貝殻状剥片を素材とする2次加工剥片で、正面下端に裏面方向からの押圧剥離を丁寧に加え、刃部を作り出している。刃部は右方向に伸びたものと思われるが欠損している。裏面は素材剥片の主剥離をそのまま残す。

●第56号住居跡 (第32図)

B9・C9グリッドに位置し、北半部は調査区外、西端は第55号住居跡と第3号土坑に切られる。第51号住居跡と重複するが、新旧関係は本住居跡の方が古い。検出部分のみで長径約4.2m、短径約3.6mを測る。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mであった。住居跡に伴うピットは10基検出したが、炉跡の痕跡は認められなかった。

出土遺物 (第33図)

土器 1は、表裏に条痕文の観察される胴部資料で胎土に含まれる繊維量の少ないものである。胎土に白色の砂粒を多く含む。2は、外面に貝殻背圧痕文、内面に条痕を施す厚手の胴部資料である。3は外面に単節縄文内面に条痕が施されたものである。繊維含有量が非常に多く脆い。4は、無節縄文が施されるも



第31図 第55号住居跡出土遺物

第6表 第55号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
31	13	2次加工剥片	チャート	1.8	2.8	0.6	3	

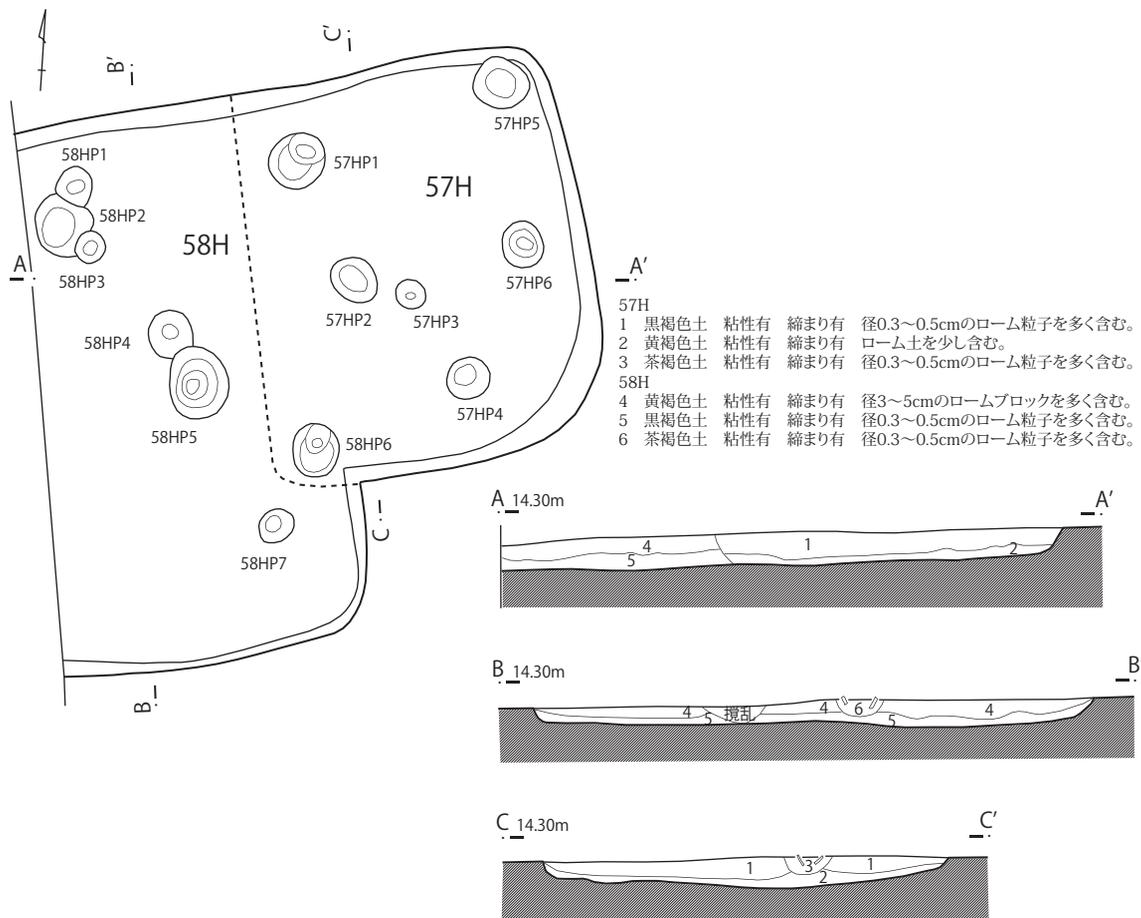
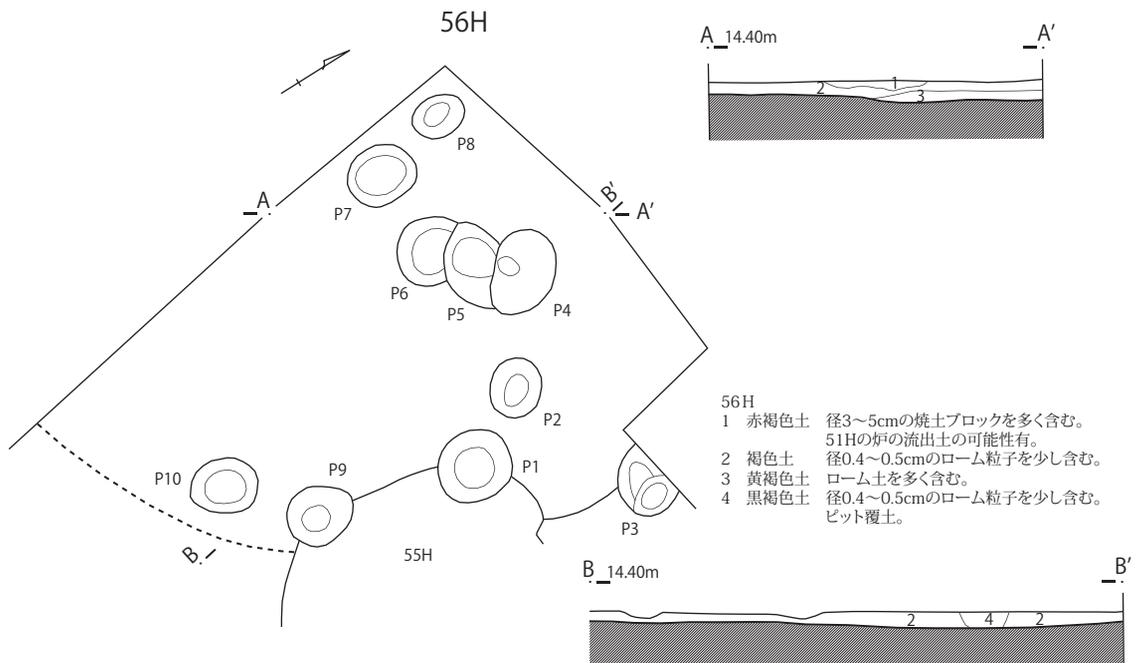
ので、輪積による接合痕が顕著に残る。5は外面に節の大きな単節RL縄文が、内面には条痕が施された厚手の胴部資料である。6は、外面には帯内羽状構成をとる単節縄文が施され、内面には横位の条痕が顕著に残されるものである。内面は条痕施文後軽く撫でられているが条痕自体を撫で消す意図は感じられない。7は単節LR縄文が縦位施文された土器で、内面は横位から斜位の条痕を顕著に観察することができる。8は、単節LR縄文が観察される胴部資料、9は帯間構成の単節羽状縄文が観られる胴部資料である。内面は横位に撫でられている。10は単節LR縄文の施される無繊維土器で諸磯a式土器に該当する。11は内湾する口縁部に横走隆帯を貼り棒状施文具による刺突を加えるもので後期前半堀之内式に該当する。12は、小振りの深鉢形土器である。頸部に大きな括れを持ち口縁部は外傾する。口唇部は内側に反しを持つ緩波状縁と思われる。器面には単沈線によるモチーフが描かれ、括れの上部にあたる口縁部文様帯では波頂部から幅の狭い磨消文帯が垂下し直角にまがる。括れ以下の胴部文様帯ではJ字文が施されるようである。後期初頭称名寺式に該当する。推定口径13cm、残存高8cmを測る。

●第57号住居跡 (第32・37図)

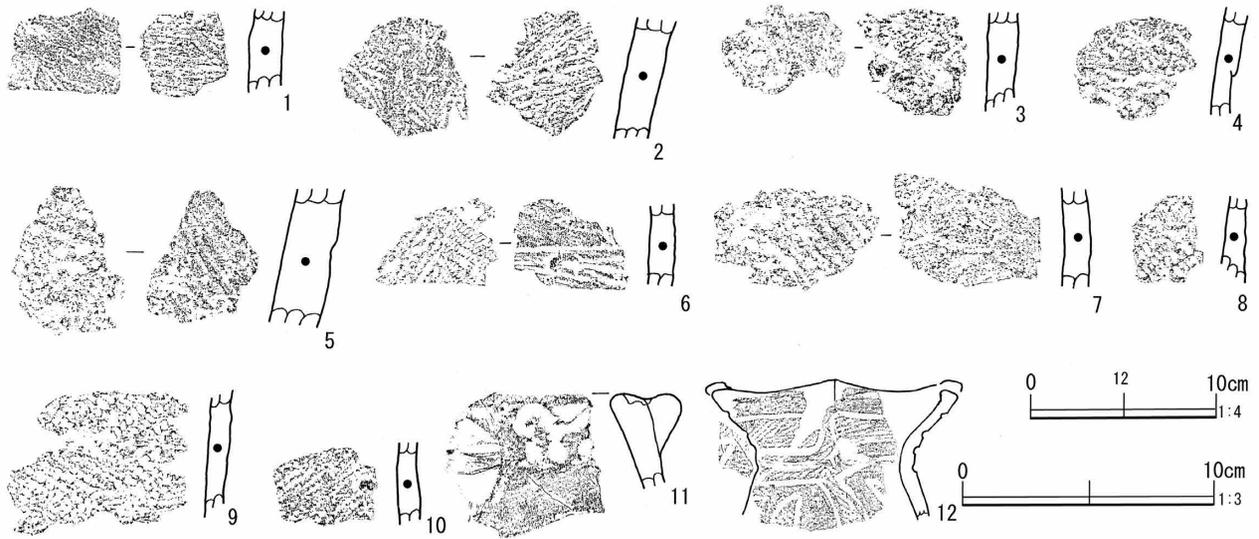
C11・12グリッドに位置し、第58号住居跡と第28号土坑を切る。平面形は長径約3.3m、短径約2.7mの隅丸方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mであった。住居跡に伴うピットは6基検出したが、炉跡の痕跡は認められなかった。住居跡ほぼ中央で埋設土器の痕跡が認められ、大破片が重なって出土している。

出土遺物 (第34図)

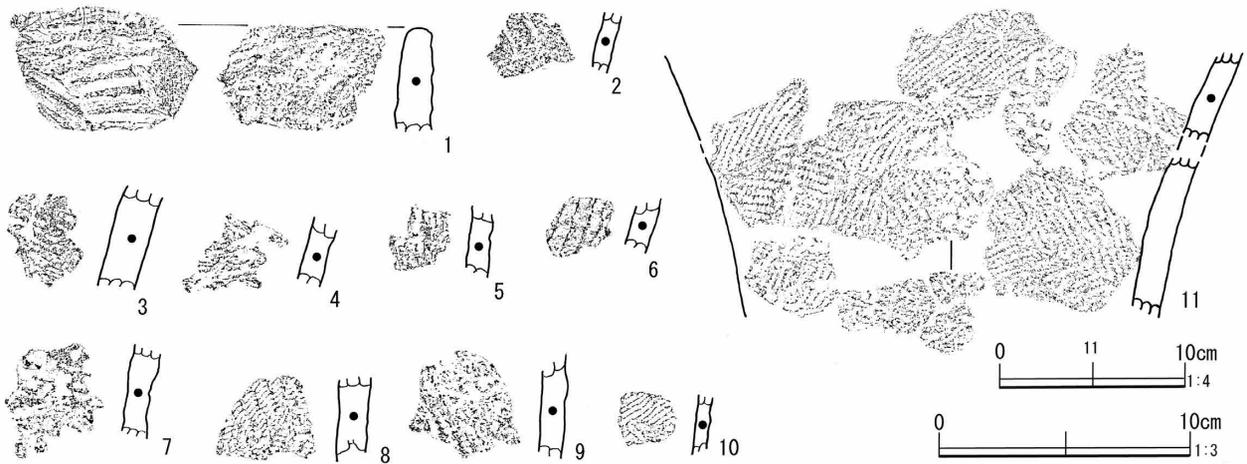
土器 1は、口縁部が直立する丸頭の平縁資料で、表裏に条痕文を残す。2は表裏無文の小片である。3は外面に貝殻背圧痕文が観察されるものである。4は繊維脱虚痕が著しいものであるが、外面には半裁竹管



第32図 第56~58号住居跡



第33図 第56号住居跡出土遺物



第34図 第57号住居跡出土遺物

による斜行沈線が引かれることがわかる。5は外面に条痕文を残す。6は外面に無節縄文が施されるもの、7は繊維脱虚痕が著しく施文は不明、8、9は単節縄文が施される胴部資料、9は単節縄文、10は無節縄文が施されることがわかる。11は、本址の埋設土器である。残存部最大径31cm、残存高18cmを測る外反する深鉢形土器の胴部上半の資料である。帯間、帯内双方で羽状構成をとる単節羽状縄文が施される。1帯の施文幅は3cm、ほぼ2指幅に相当する。RL縄文LR縄文ともに原体末端を撚り掛けしていない繊維束で結束しており、その回転圧痕もところどころ観察できる。内面は条痕施文後撫でられており、消えている部分が多いが一部で残存する。胎土の繊維含有量が多く、内面に脱虚痕が目立つ。

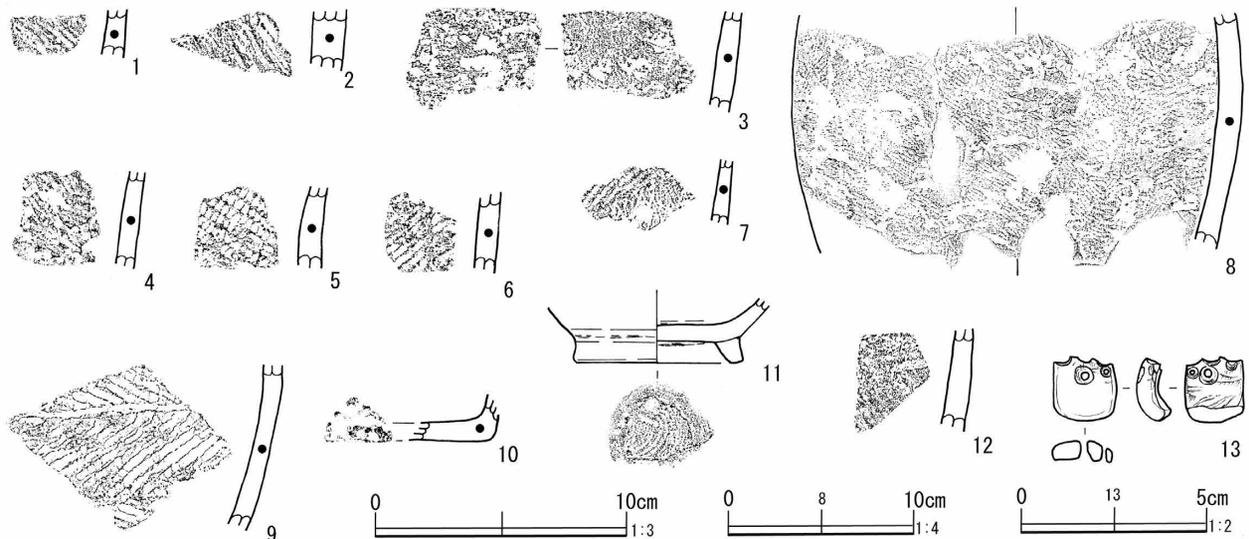
●第58号住居跡 (第32・37図)

B11・12・C11・12グリッドに位置し、西半部は調査区外、北東端は第57号住居跡に切られる。検出部分のみで長径約4.4m、短径約2.5mを測る。確認面から床面までの深さは約0.3mであった。住居跡に伴うピットは7基検出したが、炉跡の痕跡は認められなかった。住居跡ほぼ中央で埋設土器の痕跡が認められ、大破片がP4を中心として取り囲むように出土している。

出土遺物 (第35図)

土器 1、2は、表裏に条痕の施された胴部小片で、前者は早期の条痕文系土器群、後者は花積下層式に位置付けられよう。3は、表裏とも条痕撫で消しとなる一群で、胎土に白色針状物質を顕著に含む。4は外面に条痕、内面に貝殻背圧痕文が施されるが内面は摩耗が激しい。5～9は縄文の施される胴部資料である。5は単節RL縄文が、6は無節L縄文が施される。7は、上部に単節LR、下部に網目状撚糸文が施されたものである。8は、本址の埋設土器である。残存部最大径24cm、残存高12cmほどを測る深鉢形土器の胴部資料である。外面は貝殻背圧痕文、内面は丁寧に撫でられている。貝殻背圧痕文は殻頂部に近い放射肋の細い部分を使い肋が斜行するように押捺している。9は無節の帯間構成羽状縄文が施された資料である。R原体の末端を細い紐で結束している。10は底部資料、12は無繊維の無文の縄文土器である。11は9世紀代のものと思われる須恵器の高台付坏の底部付近の資料である。生焼けの資料で、表裏両面が黒色を呈する。ややぼつりとした高台を付し、表裏両面を撫でつけた中央に糸切痕が残される。底径6.9cmを測る。

石製品 13は、玦状耳飾転用垂飾である。耳飾の直径は2cmほどであったものと思われる。欠損後補修孔を穿ち使用しており、実測図上部に複数の小孔が確認できる。垂飾に転用する段階で中央部の穴をあけたのであろう。



第35図 第58号住居跡出土遺物

第7表 第58号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
35	13	垂飾	滑石	1.7	1.7	0.6	3	玦状耳飾からの転用

●第59号住居跡（第36・37図）

C12・13グリッドに位置し、西半部は調査区外である。検出部分のみで長径約3.9m、短径約2.5mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mであった。住居跡に伴うピットは6基検出したが、炉跡の痕跡は認められなかった。住居跡南西寄りでは土器の大破片がまとまって出土している。

出土遺物（第38図）

土器 1～3は、表裏に条痕文の残される早期の条痕文系土器群に位置付けられる一群である。2は突起を有する口縁部破片と思われる。4、6は、表裏とも条痕撫で消しとする胴部使用である。両者とも白色針状物質は含まない。5は、本址の埋設土器である。残存部最大径は19cmほど、残存高4cmほどの胴部中葉の資料であるが、外面は摩耗が著しく施文を判別することができない。内面は丁寧に撫でられている。7は、外面に節の大きな単節縄文で帯間羽状縄文を施文し、内面を条痕撫で消しとする胴部資料である。8は外面に貝殻背圧痕文を施すもの、9は節の大きな単節RL縄文を斜位回転させた資料である。

石器 10は、横長の不整形剥片を素材とした2次加工剥片である。正面は周縁部からの階段状剥離で表皮を剥いているが、上部には礫表皮を残す。裏面は不規則な剥離で器厚を減じ、できるだけ平らに仕上げようとする意図が見える。正面下縁に押圧剥離による丁寧な調整加工を加え刃部としている。

●第60号住居跡（第36図）

C11・C11グリッドに位置し、西半部は調査区外である。検出部分のみで長径約3.5m、短径約1.0mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mであった。炉跡の痕跡は認められなかった。

出土遺物（第39図）

土器 1は、表裏に条痕文の施される口縁部破片である。胎土に含まれる繊維量は極端に少ない。2は、帯間、帯内構成の単節羽状縄文が施される胴部資料である。3は、単節LR縄文を重複施文した胴下位の破片資料である。内面には丁寧な縦位の撫でが加えられる。

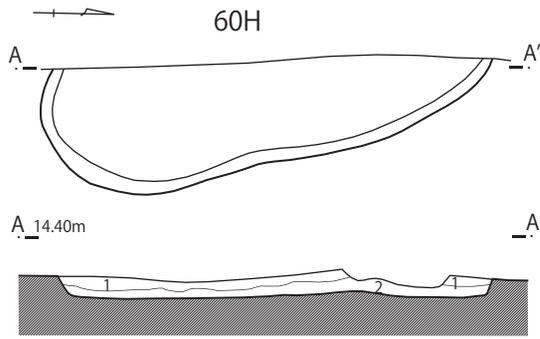
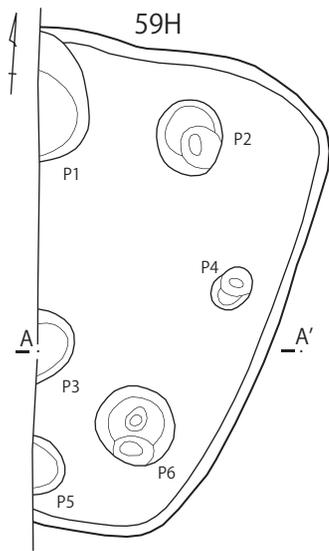
●第61号住居跡（第36図）

C15・D14・15グリッドに位置し、北西端は攪乱に切られる。第50号住居跡と重複するが、新旧関係では本住居跡の方が古い。平面形は長径約5.6m、短径約4.7mの隅丸方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mであった。住居跡に伴うピットを20基検出し、P2・9・17が支柱穴と考えられる。

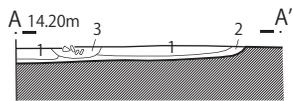
炉跡は住居跡のほぼ中央で検出し、平面形は直径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。炉跡内の焼土の広がり、西端は攪乱で切られているが、直径約0.2mの範囲で認められた。

出土遺物（第40図）

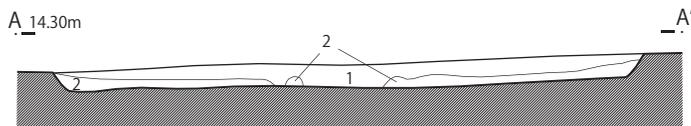
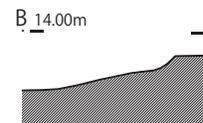
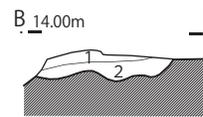
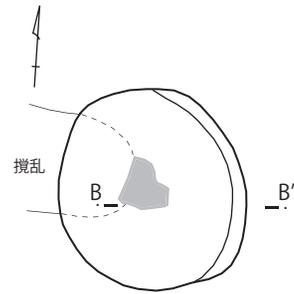
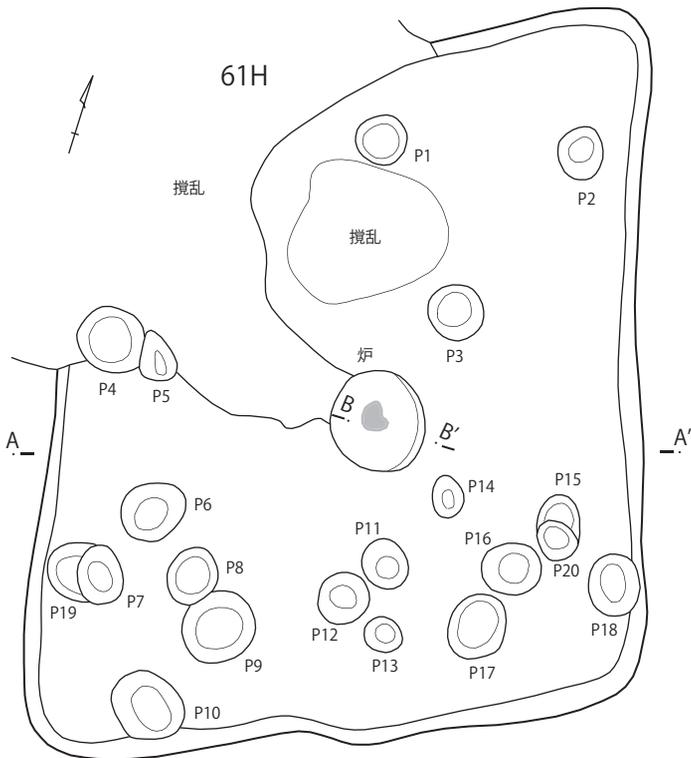
土器 1は、口縁部に1条の横走隆帯を施す平縁土器で、隆帯上を含め単節RL縄文が施される。胎土に粗粒砂を顕著に含む。2は、口唇外縁部をわずかに肥厚させる平縁土器である。帯間構成の単節羽状縄文が観察されるが、器面の剥落が著しい。3は、口縁部内外面を肥厚させる平縁土器で、口唇端面を含め単節羽状縄文が観察される。4は、棒状施文具による鋸歯文が施される肥厚口縁の平縁土器である。5は、表裏条痕撫で消しの一群、6は表裏条痕の一群と思われるが外面は剥落が著しい。7、9～11は貝殻背圧痕文、8、11は単節縄文の施されるものである。12は、破片上部に条痕文が下部に節の大きな単節縄文が施され



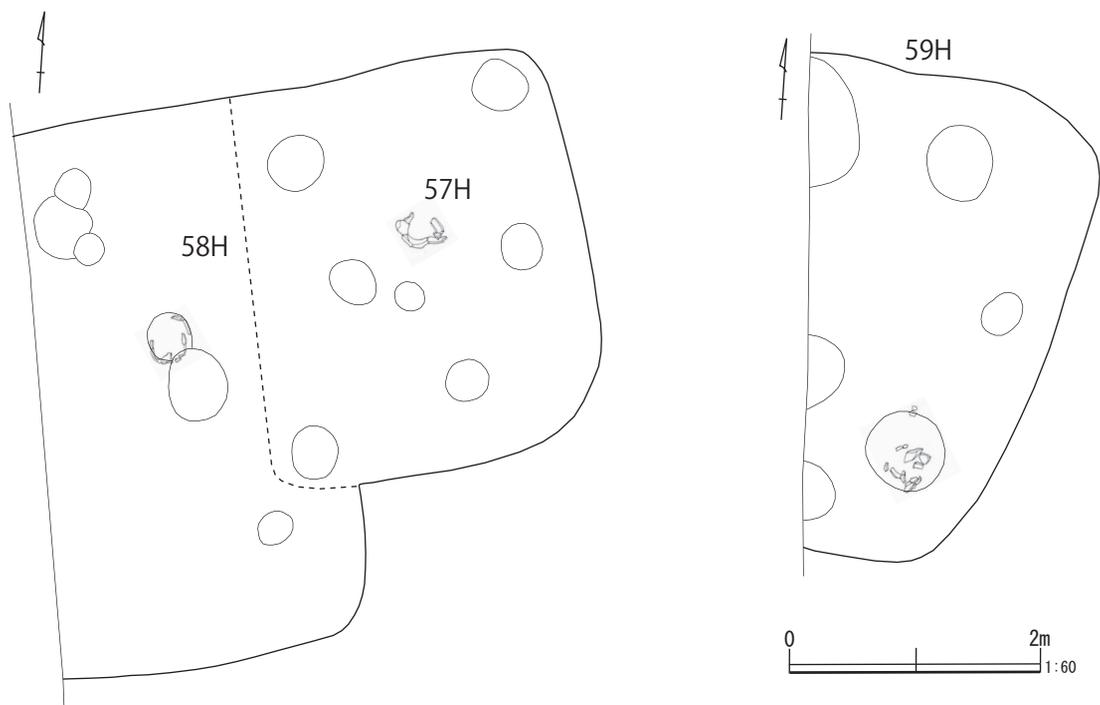
- 59H
 1 褐色土 粘性有 締まり有 径3~4cmのロームブロックを少し含む。
 2 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。
 3 茶褐色土 粘性有 締まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を多く含む。
 60H
 1 褐色土 粘性有 締まり有 径2~3cmのロームブロックを多く含む。
 2 茶褐色土 粘性有 締まりやや強 径2~3cmのロームブロックを多く含む。



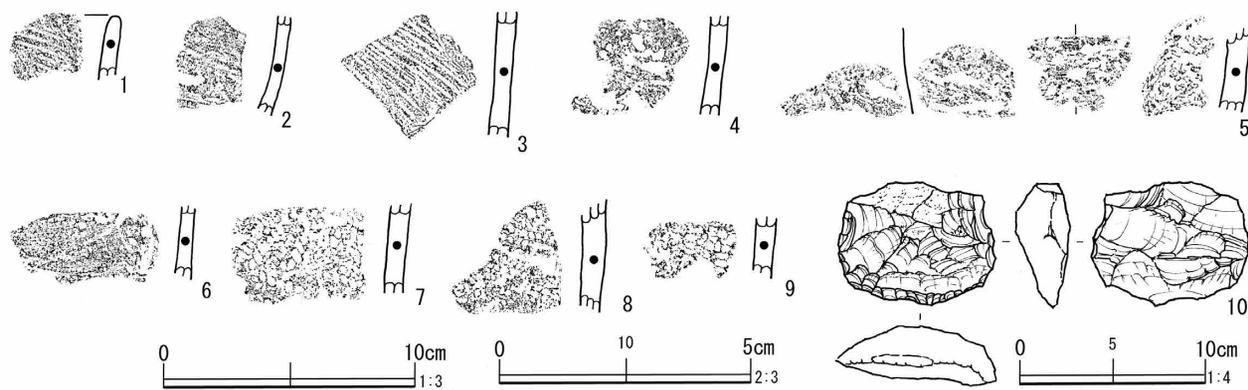
- 60H
 1 暗褐色土 粘性有 締まり 径0.1~0.2cmの赤色粒子を少し含む。
 2 灰褐色土 粘性有 締まり 径2~3cmのロームブロックを多く含む。
 61H
 3 赤褐色土 粘性有 締まりやや強 径4~5cmの焼土ブロックとロームブロックを多く含む。
 4 黒褐色土 粘性有 締まり有 径3~4cmのロームブロックを多く含む。被熱焼土ブロックが広がる。



第36図 第59~61号住居跡



第37図 第57～59号住居跡遺物微細図



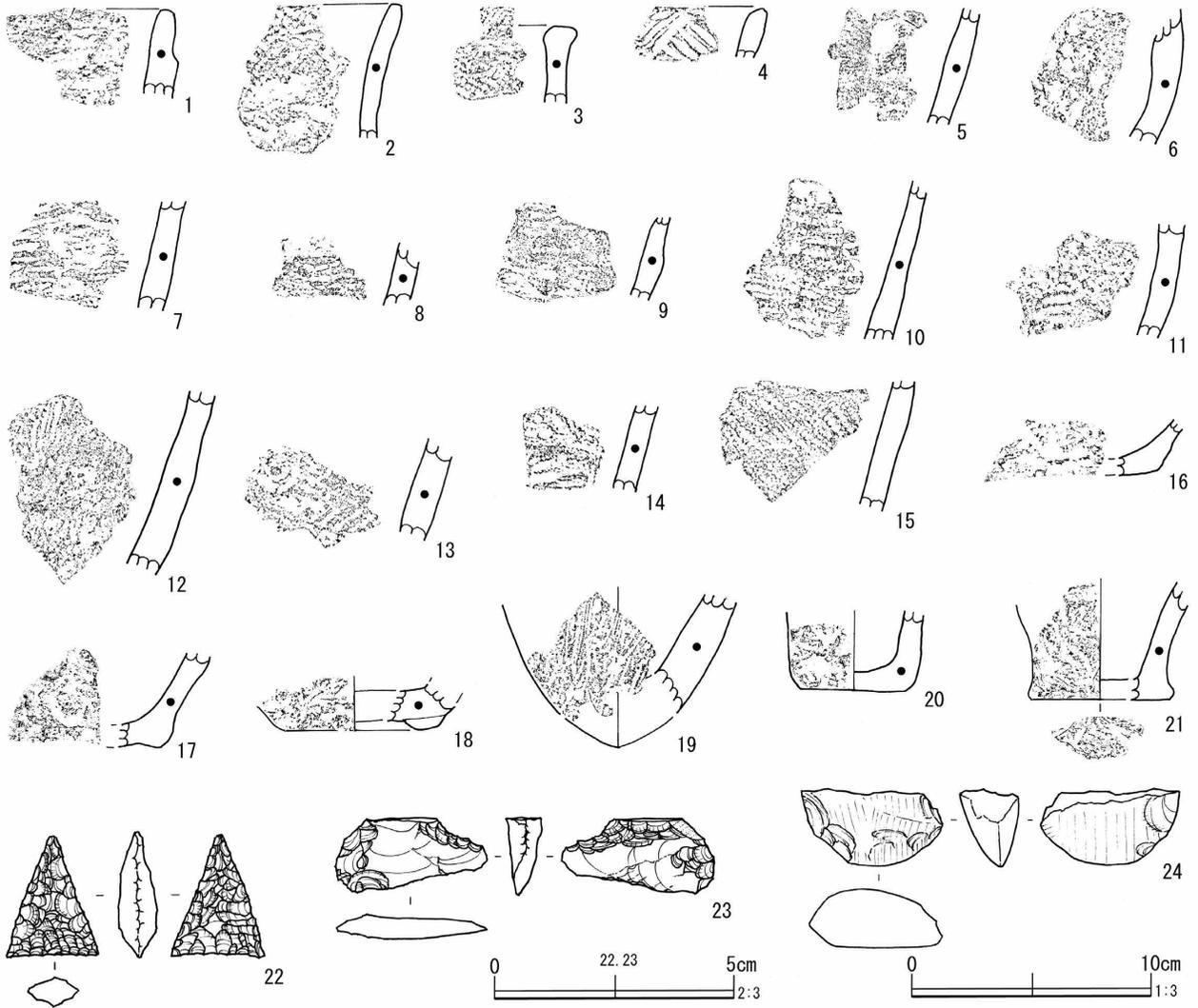
第38図 第59号住居跡出土遺物

第8表 第59号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
38	10	2次加工剥片	チャート	2.6	3.2	1.1	8	



第39図 第60号住居跡出土遺物



第40図 第61号住居跡出土遺物

第9表 第61号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
40	22	石鏃	黒色緻密安山岩	2.6	2.0	0.8	3	
40	23	2次加工剥片	チャート	1.6	3.4	0.8	3.0	
40	24	磨製石斧		(6.0)	(2.4)	(2.4)	(60.6)	

た胴部資料である。内面には条痕文が残される。13は単節羽状縄文施文後撫でられたもの、14は無節の帯間羽状縄文が観察されるものである。15は単節縄文が施された加曾利E式土器である。16～21は、本址出土の底部資料を一括したものである。16～18、20、21は平底となるもので、17と18は高台風の粘土の輪が付される。20はコップほどの小型のもの、21は底面が大きく外へ張り出すものである。19は尖底となるもので外面には条痕が観られる。

石器 22は、平基無茎の石鏃である。周縁部から規則的で丁寧な剥離を加えたものであるが、器厚が非常に厚い。23は、2次加工剥片である。上部に打面を持つ横長不整形剥片を素材とする。裏面のバルブは上部方向からの剥離で剥ぎ取っている。ここから連なる上縁部に表裏から剥離を加え背潰しとし、下縁部を刃部としている。24は磨製石斧の刃部残欠である。刃部だけであるため不明瞭であるが、正面側の刃部の研磨痕の下に剥離痕が確認できることや刃部の角度が裏面と不釣り合いに大きいことなどから、一度欠損したものを再加工しているものである可能性が高い。

●第62号住居跡（第41図）

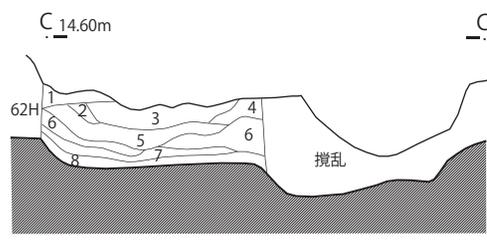
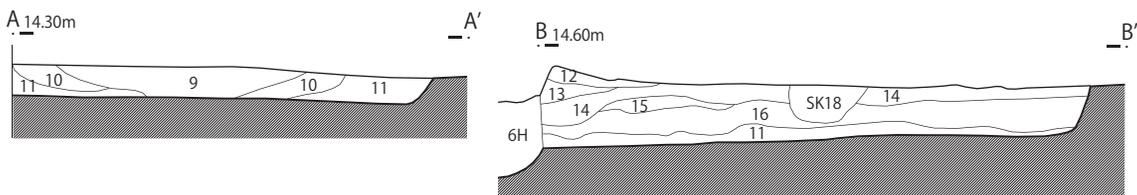
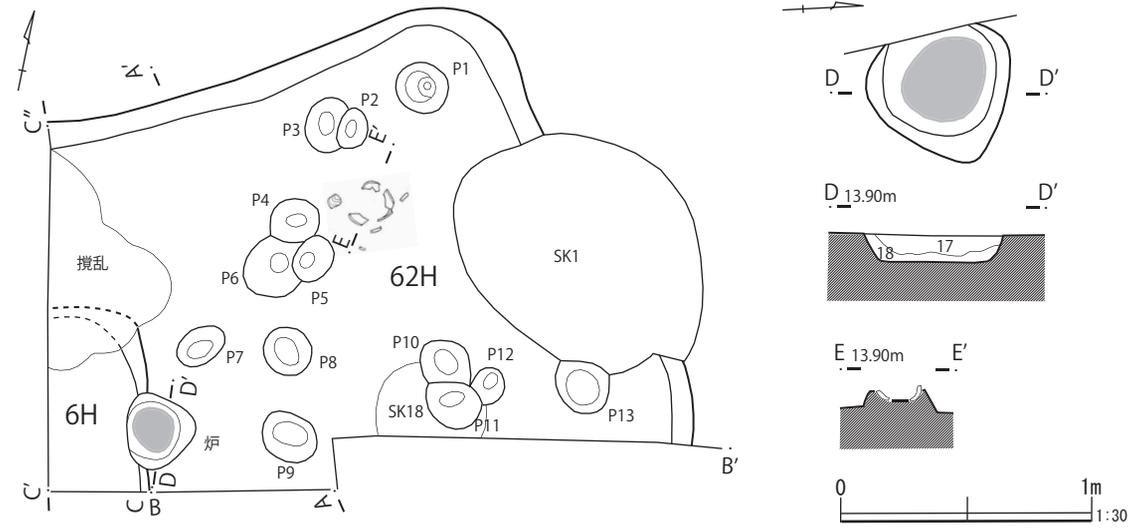
C16・D16グリッドに位置し、南半部と西端は調査区外である。第6号住居跡と第1・18号土坑に切られ、第50号住居跡と重複するが、新旧関係では本住居跡の方が古い。検出部分のみで長径約4.1m、短径約3.9mを測る。確認面から床面までの深さは約0.5mであった。住居跡に伴うピットは13基検出した。住居跡中央やや北寄りて埋設土器の痕跡が認められ、大破片が重なって出土している。

炉跡は住居跡の中央やや西寄りて検出し、西端は第6号住居跡に切られる。検出部分のみで長径約0.6m、短径約0.5mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。炉跡内の焼土の広がり長径約0.4m、短径約0.3mの範囲で認められた。

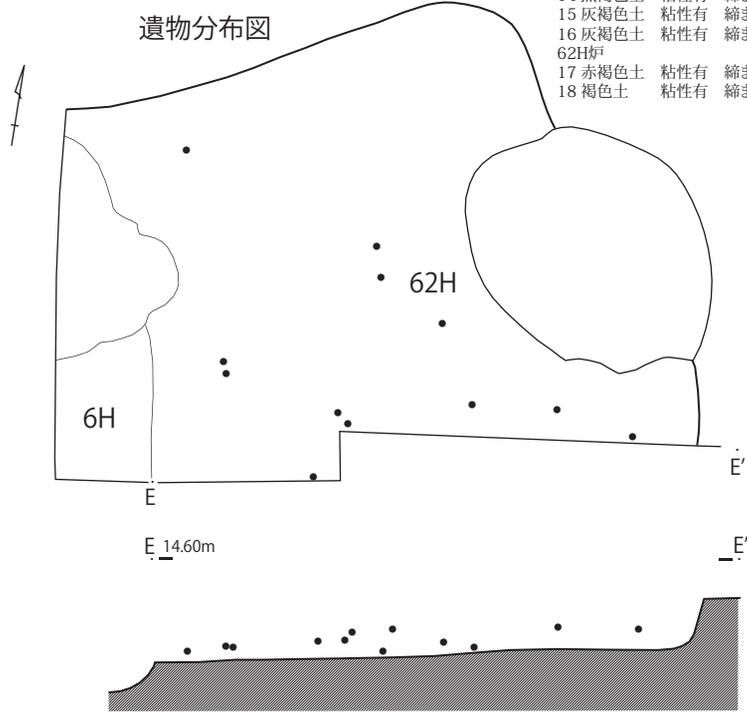
出土遺物（第42図）

土器 1は、口唇部が大きく外側へ引き出される平縁土器で、背面にわずかに条痕が観られる。2は口縁部を肥厚させる平縁土器で単節LR縄文が観察される。3は器面の剥落が進んだもので判然としないが単節縄文が施されるようである。4は、本址の埋設土器で、帯間構成の単節羽状縄文が観察される。小振りの深鉢の胴部資料で、残存部最大径15cm、残存高4cmほどである。5は、外面に貝殻背圧痕文の残る胴部資料、6は表裏に条痕の観察される胴部下半の資料である。7は横走隆帯の付されたもの、8は、無文の底部付近の資料である。9は外面が無節、内面が横位の条痕の施された胴部、10～14は、単節縄文が観察されるもので、12は底部付近の資料、14は帯間構成の羽状縄文である。16、17は同一個体で、単節LR縄文の施された横走隆帯下部に刺し切るような斜行する短沈線帯を持つ胴部資料である。18は単節縄文の施された平底の底部資料である。推定底径は8cmほどを測る。19、20は撚糸側面圧痕文の施された胴部資料である。前者では、胴部縄文帯との区画描線として横位の撚糸側面圧痕が施されるが、その上部には刺し切るような刺突文が並ぶ様子が観察される。後者にも同様の刺突文が観察される。

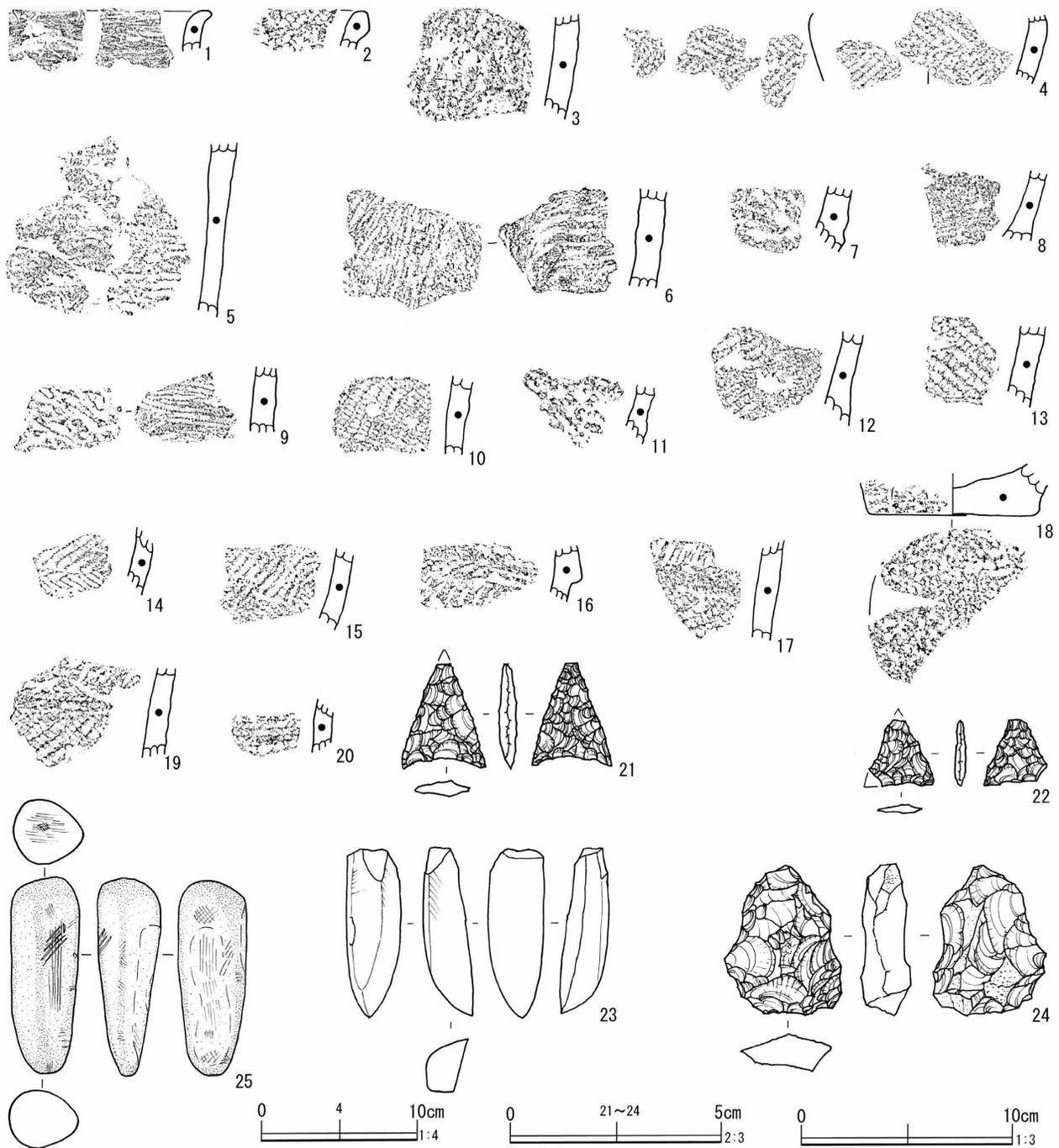
石器 21、22は、基部の抉りのごく浅い無茎石鏃である。前者は先端を欠くが、丁寧な整形で薄く仕上げられている。後者は左脚端と先端を欠く。23は磨製石斧残欠である。縦長に側縁が残るほか、円刃を呈すると思われる刃部の一部が残される。24は2次加工剥片である。表裏から特に両側縁を剥ぎ取ろうとするように剥離が施されているが、裏面には素材の表皮が残る。形状からいわゆる石鏃ブランクであろうか。25は、周囲前面に擦痕の観察される砥石と思われる資料である。被熱しており赤褐色を呈する。



- 6H
- 1 茶褐色土 粘性有 締まりやや弱 径0.3~0.4cmのローム粒子を多く含む。
- 2 茶褐色土 粘性有 締まりやや弱 径3~4cmのロームブロックを少し含む。
- 3 黒褐色土 粘性有 締まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を多く含む。
- 4 黒褐色土 粘性有 締まり有 径4~5cmのロームブロックを少し含む。
- 5 黒褐色土 粘性有 締まり有 径1~2cmのロームブロックを少し含む。
- 6 茶褐色土 粘性やや有 締まりやや弱 径0.2~0.3cmのローム粒子を多く含む。
- 7 灰褐色土 粘性有 締まり有 径2~3cmのロームブロックを多く含む。
- 8 黄褐色土 粘性有 締まりやや強 ローム土を多く含む。床付近の覆土。
- 62H
- 9 茶褐色土 粘性有 締まりやや弱 径0.3~0.4cmのローム粒子を多く含む。
- 10 茶褐色土 粘性有 締まりやや弱 径3~4cmのロームブロックを少し含む。
- 11 茶褐色土 粘性有 締まりやや強 ローム土を多く含む。床付近の覆土。
- 12 茶褐色土 粘性有 締まり有 径0.3~0.4cmのローム粒子を多く含む。
- 13 茶褐色土 粘性有 締まり有 径2~3cmのロームブロックを少し含む。
- 14 黒褐色土 粘性有 締まり有 径2~3cmのロームブロックを少し含む。
- 15 灰褐色土 粘性有 締まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を多く含む。
- 16 灰褐色土 粘性有 締まりやや強 径2~3cmのロームブロックを少し含む。
- 62H炉
- 17 赤褐色土 粘性有 締まり有 径0.3~0.4cmの炭化粒子と焼土粒子を多く含む。
- 18 褐色土 粘性有 締まり有 径0.3~0.4cmの焼土粒子とローム粒子を少し含む。



第41図 第6・62号住居跡



第42図 第62号住居跡出土遺物

第10表 第62号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
42	21	石鏃	チャート	(2.4)	2.0	0.4	(2)	
42	22	石鏃	石英	(1.5)	(1.5)	2.5	(1)	
42	23	磨製石斧残欠	緑色岩	(4.0)	(1.0)	(1.3)	(6)	
42	24	2次加工剥片	チャート	3.6	2.6	1.2	11	石鏃プランクか
42	25	砥石	石材不詳	9.2	3.3	3.0	98	

●第63号住居跡（第43図）

B2・3グリッドに位置し、北端は攪乱に切られる。第71・72号土坑と第1号溝跡に切られる。平面形は長径約5.2m、短径約5.1mの不整円方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mであった住居跡に伴うピットは11基検出した。

炉跡は住居跡のほぼ中央で検出し、平面形は直径約0.5mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。炉跡は炉体土器を有しており、上層に大破片が重なって出土し、下層で焼土の広がり認められた。

出土遺物（第44図）

土器 1、2は、表裏に条痕の施された資料である。前者は平縁となる口縁部資料で、口縁部周辺は表裏とも横位の、以下は斜行する条痕文が施される。補修孔が穿たれる。後者は外面縦位、内面横位の条痕文が観察される。3は外面に縦位の条痕と単節RL縄文を併施文し、内面にランダムな条痕の施された胴下位の破片資料である。4は外面貝殻背圧痕文、内面条痕文、5は無節L地文上に横位の平行沈線が引かれるもの、6、7は無文の胴下位の資料、8は無節R縄文の施された資料である。9は、加曾利E式後半のキャリパー型深鉢の口縁部資料で、口縁部に無文帯を置き以下に単沈線で画された磨消文帯が縄文地文に陥入するように施される。10は平縁深鉢の口縁部資料である。口縁部に幅広の沈線を引き、以下に縄文が施される。11は内湾する薄手のキャリパー形深鉢の口縁部資料で、 \cap 状の縄文帯が観察される。12は、丈の高い隆帯で画された口縁部文様帯に撚糸文が充填されるもの、13は無文の平縁資料である。14は、沈線区画の中に集合沈線が充填されるもの、15は2条1組の横走隆帯が観察されるもの、16は厚手の胴部破片で、丈の低い横走隆帯から磨消文帯が垂下すると思われるものである。17、18は無文の浅鉢と思われる資料の括れ部付近の資料である。19～21は櫛状施文具による条線文の施された胴部資料、22～24は、縦位施文の縄文と垂下する沈線帯、磨消文帯が観られるものである。25は浅鉢と思われる無文の底部資料、26はキャリパー形深鉢の胴下半資料である。垂下する磨消文帯と縦位施文の単節縄文が観察される。28は、本址の炉体土器である。いわゆる梶山類型の土器群で、内湾する口縁部には2条1組の隆帯で渦巻文が描かれる。胴部以下には2条1組の隆帯を垂下させ、その間に単節縄文を充填する。残存部最大径は49cm、残存高30cmほどを測る。

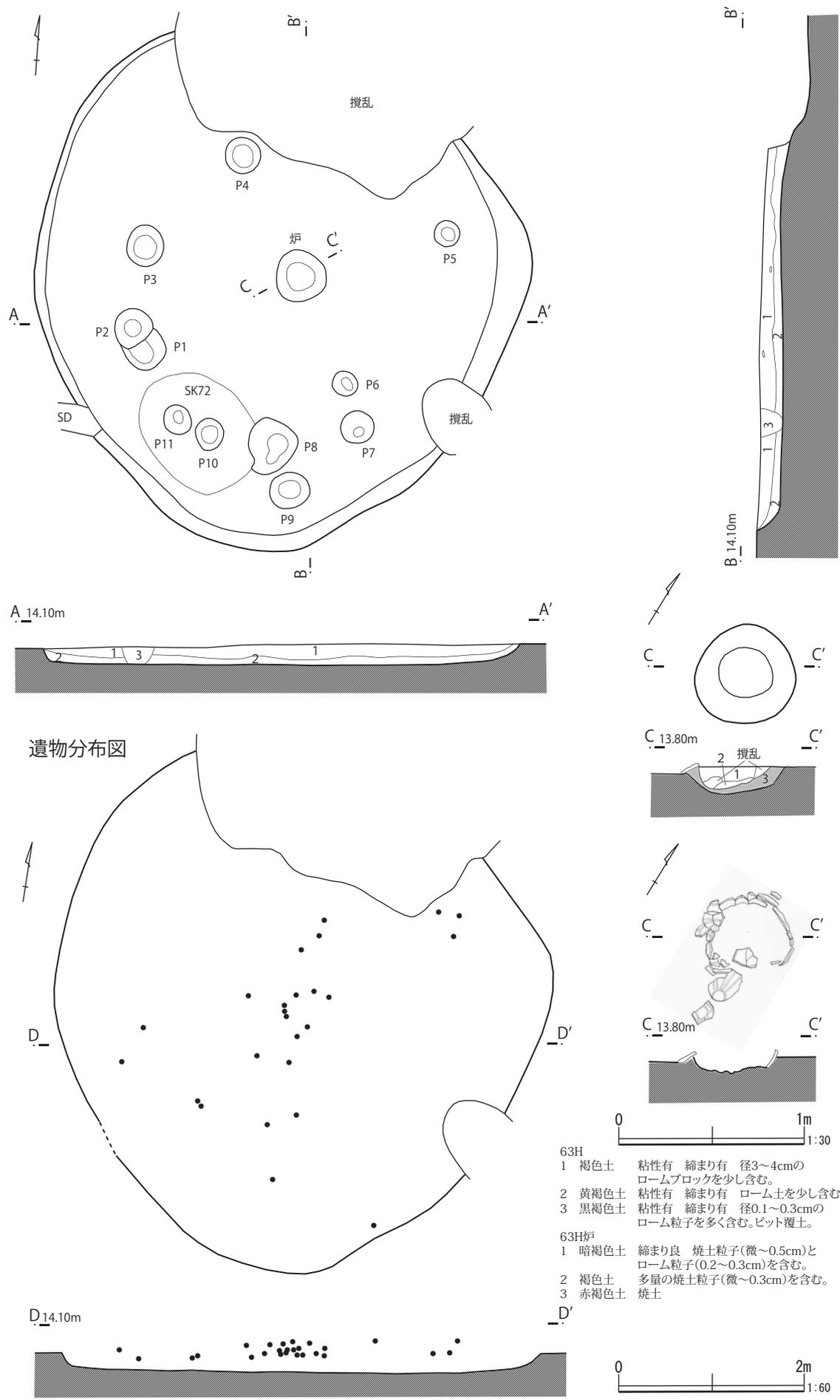
土製品 27は、土製円盤である。節の大きな単節縄文の施された花積下層式土器の胴部資料を素材とし、楕円形に整形されている。

●第64号住居跡（第45図）

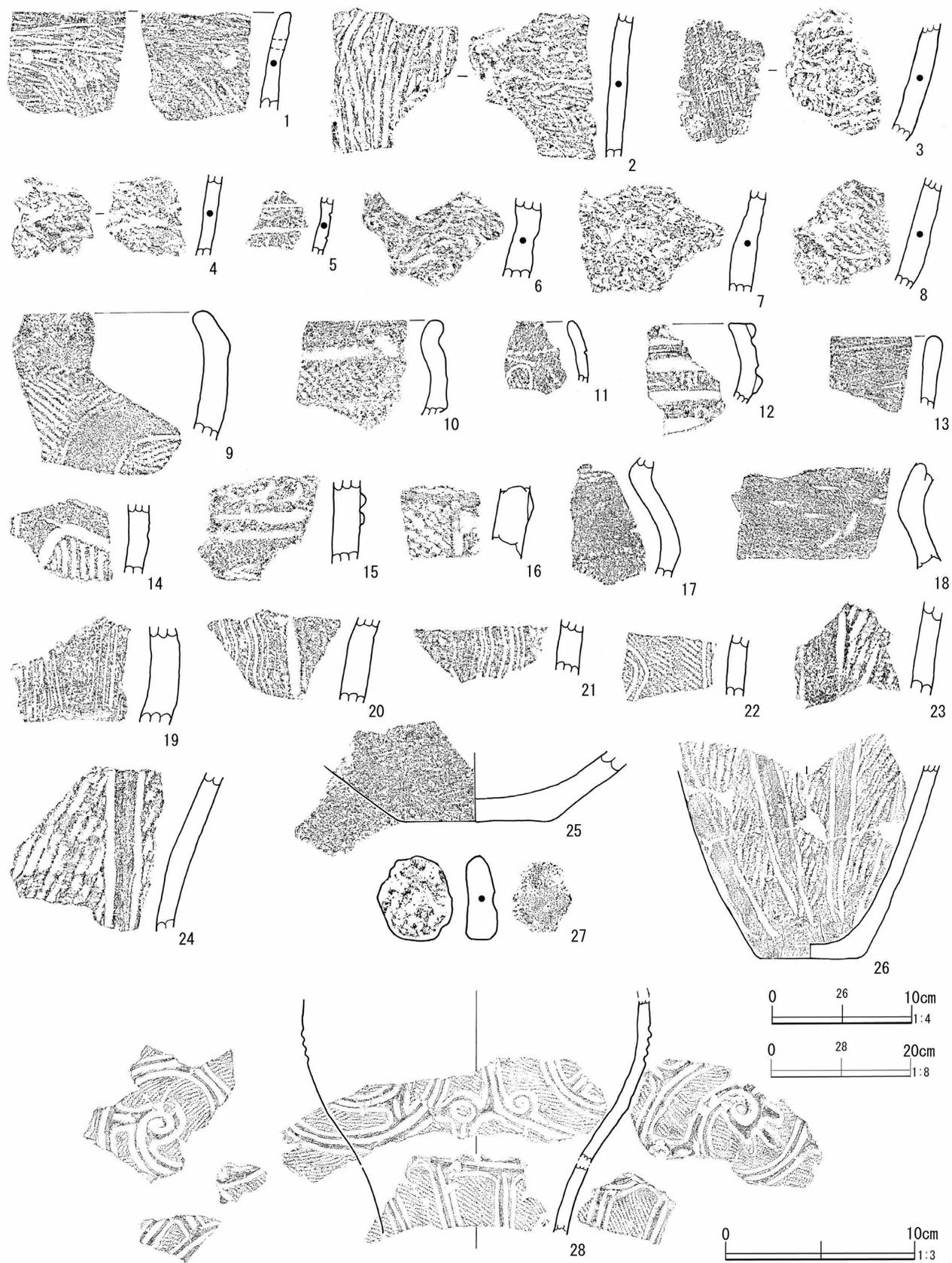
A3・B3グリッドに位置し、南半部は調査区外である。第65号住居跡を切る。検出部分のみで長径約5.5m、短径約3.4mを測る。確認面から床面までの深さは約0.7mであった。住居跡に伴うピットは8基検出したが、炉跡の痕跡は認められなかった。

出土遺物（第46～49図）

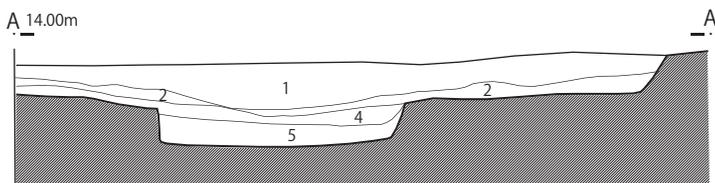
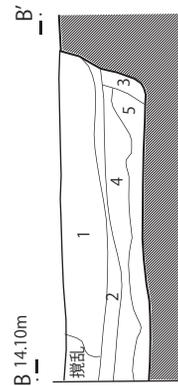
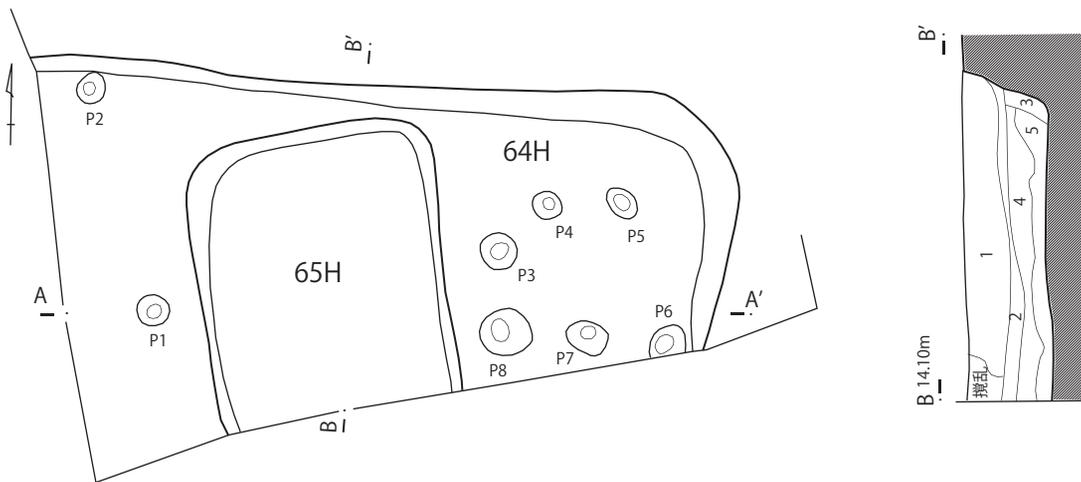
土器 第46図1は、早期初頭撚糸文系土器群、2は微量含繊維の早期条痕文系土器群である。3～18は、花積下層式期の条痕文系土器群である。3は、口縁部資料で大きく外傾するもの、4はわずかに内湾するものである。5は内面に横位の幅広の条痕が観察されるもの、6は外面にくっきりと幅の広い条痕が施される。7～9などは細めの条痕が密に施されるものである。19～22は表裏どちらかに撫でを加えた一群で



第43図 第63号住居跡

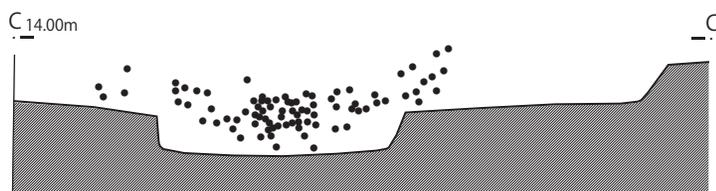
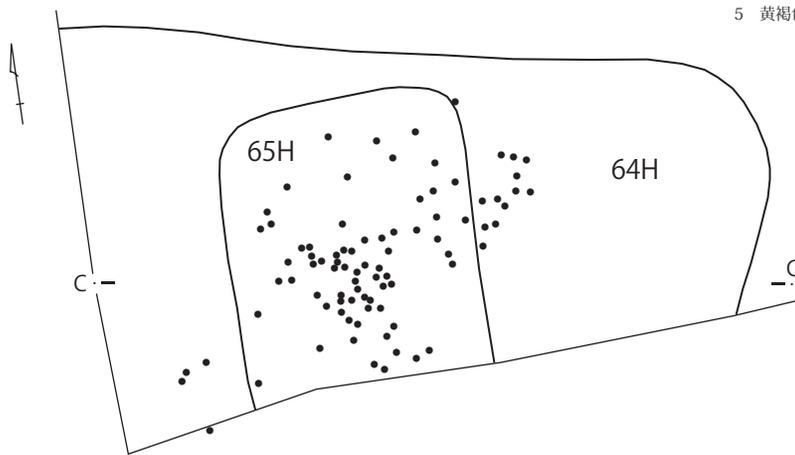


第44图 第63号住居跡出土遺物

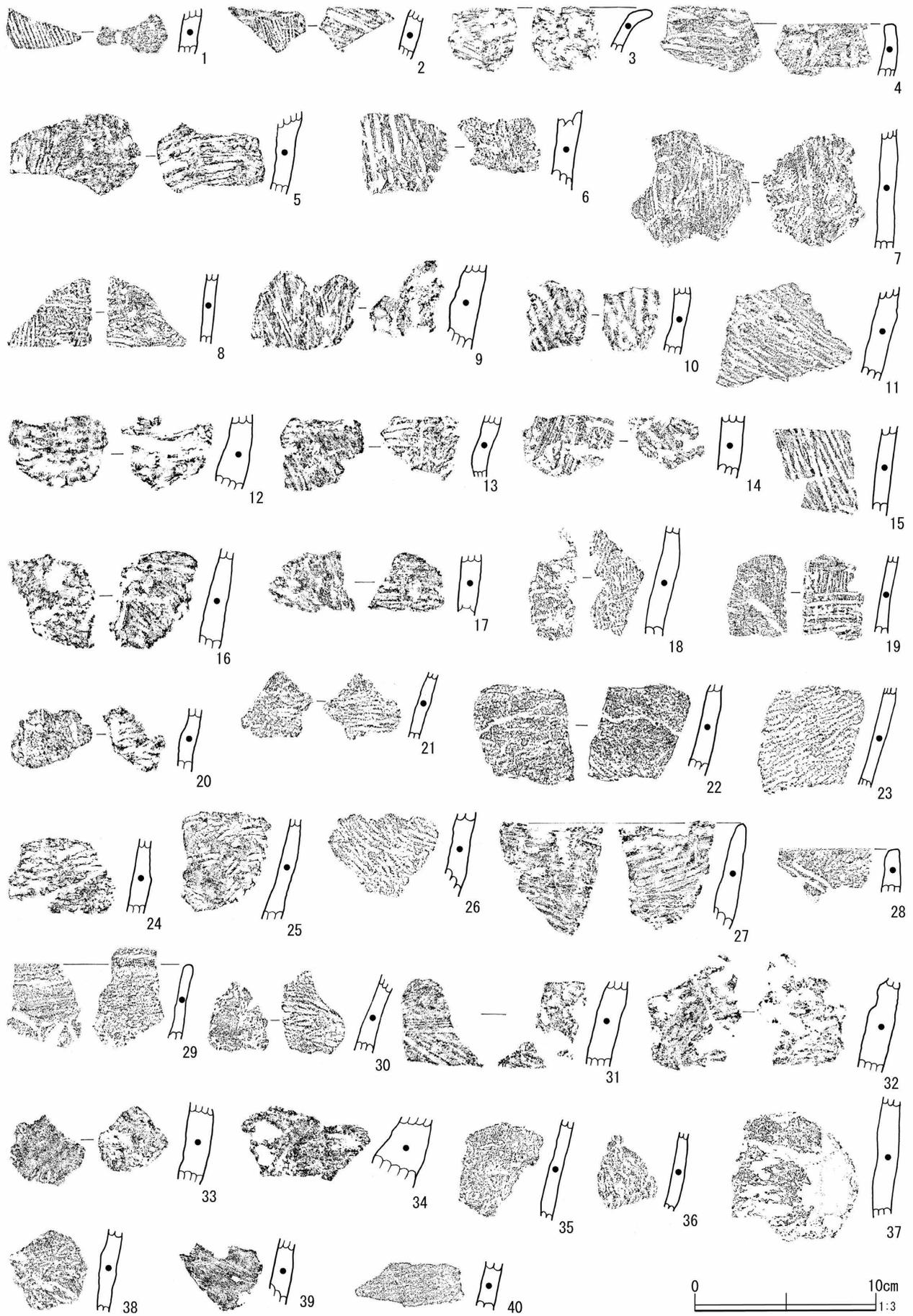


- 64H
- 1 黒褐色土 粘性有 締まり有
径0.3~0.4cmのローム粒子を少し含む。
 - 2 褐色土 粘性有 締まり有
径0.2~0.3cmのローム粒子を多く含む。
 - 3 黄褐色土 粘性やや有 締まりやや強
ローム土を多く含む。
- 65H
- 4 暗褐色土 粘性有 締まり有
径0.2~0.3cmのローム粒子を多く含む。
 - 5 黄褐色土 粘性有 締まりやや強
径3~5cmのロームブロックを多く含む。

遺物分布図



第45図 第64・65号住居跡

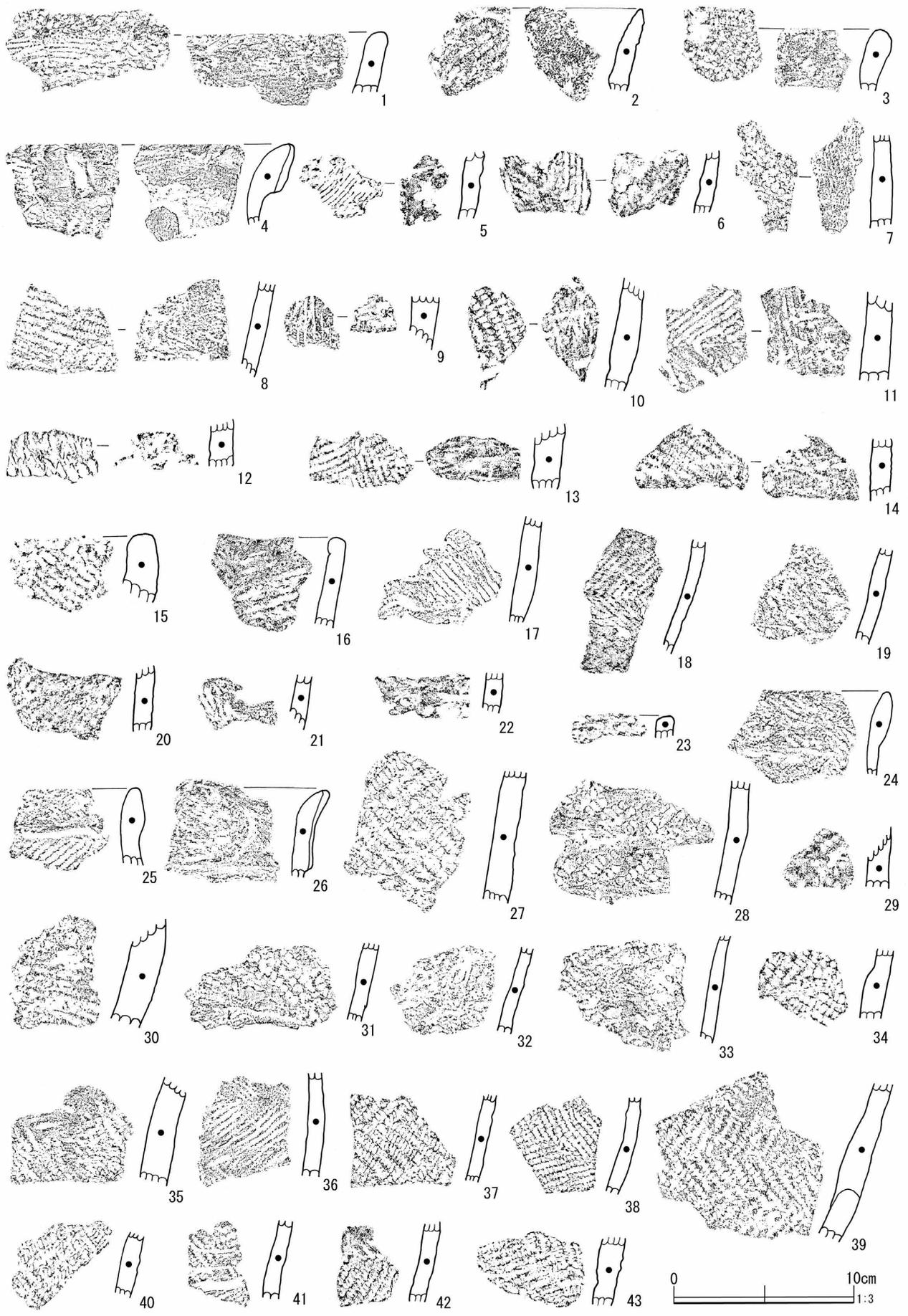


第46图 第64号住居跡出土遺物(1)

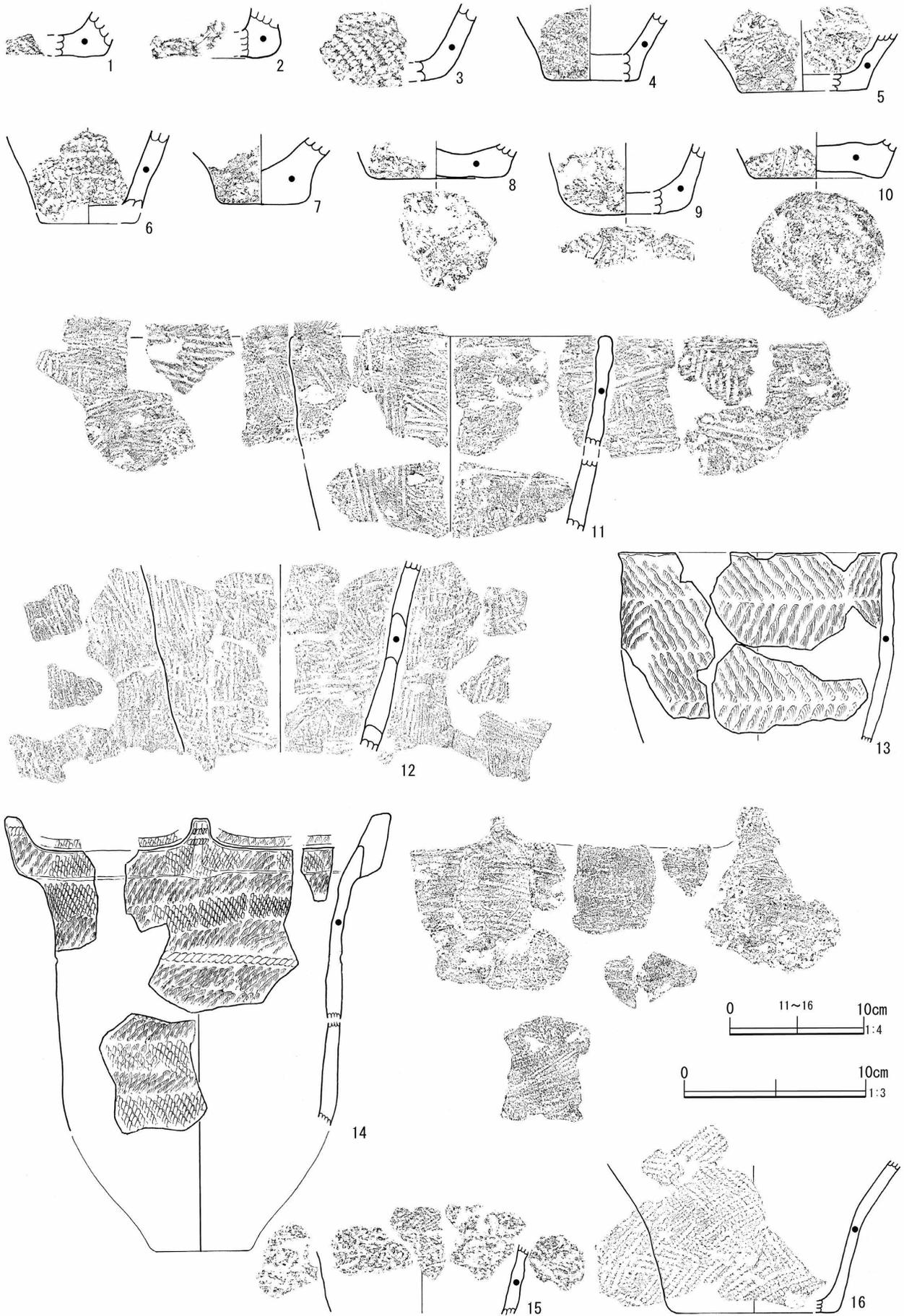
ある。23～26は、貝殻背圧痕文の施される一群である。この一群の内面は極めて丁寧に撫でられている。27～40は、条痕撫で消しの一群である。胎土に白色針状物質を含み、繊維脱虚痕は目立たない。27は大振りの平縁深鉢である。28は斜行する平行沈線が観られる。31は胴部に多裁竹管による浅い沈線が観られるものである。34は底部付近の資料である。

第47図は、縄文の観察される土器群である。1は、わずかに外傾する口縁部資料で、横位の条痕とともに節の大きな単節LR縄文が観察される。同一原体で口唇端面及び口縁部内面にも施文している。2も節の大きな単節LR縄文で、内面は横位の条痕とともに指痕が観られる。3はやや肥厚する口縁部に単節LR縄文を施すもので、口唇端面にも同一原体を用いて施文している。4は、肥厚口縁に刻みのある2条の棒状隆帯を付すもので、肥厚口縁部には単節RL縄文、以下には単節LR縄文を施し帯間構成の羽状縄文としている。5、6は無節縄文の施された胴部資料、7～14は外面に縄文、内面に条痕の観られる胴部資料である。15は単節縄文の観られる口縁部資料、16は無節の帯内構成の羽状縄文の観られる口縁部資料である。17～22は無節縄文の施される胴部資料である。23～26は単節縄文の施された口縁部資料である。24、25は肥厚口縁とそれ以下で帯間構成の羽状縄文を形成するもの、26は、やや幅広にとった肥厚口縁に環状ないし三日月状の隆帯を付したものである。27～43は単節羽状縄文を構成する胴部資料である。このうち27、39は節の大きな単節羽状縄文を持つ器厚の厚い大振りの土器で、古手の様相を示すものと思われる。28は帯間、帯内双方の羽状構成をとり残存部ではX字状の羽状構成となる。37、42、43は0段3条の単節縄文を用いる繊維量の少ない土器である。

第48図1～10は本址出土の底部資料を一括したものである。すべて平底を呈すが、10ではやや上げ底となる。9は、底面にやや丸みを持つもので、貝殻背圧痕文が施される。8も底面は貝殻背圧痕文が施される。11は、推定口径23.5cm、残存高15cmを測る平縁深鉢である。表裏両面に粗雑な撫で整形を施したのち、縦横に不規則な条痕を施している。口縁部の作りはところによって丸頭から角頭となり一様ではない。焼成は比較的良いが、繊維含有量は少なくなく、一部に繊維脱虚痕が窺われる。12は、残存部最大径21cm、残存高14cmほどの深鉢形土器の胴部資料である。表裏に粗雑な撫でを加えたのち表裏に乱雑な条痕を施している。輪積整形の痕跡を顕著に残し、特に内面では器壁の凹凸が激しい。13は、口径21cm、残存高13cmほどを測る平縁深鉢の胴部上半の資料である。口縁部はわずかに外側へ引き出され、角頭状の口唇部形態をとり無節縄文が施される。器面を平滑に整えたのち外面には帯間、帯内双方の構成をとる無節羽状縄文が施される。1帯の施文幅は3cmほどで約2指幅に相当する。内面は横位の条痕が施される。胎土に含まれる繊維量は極めて多く脆い。14は、推定口径28.5cm、残存高23cmほどの平縁深鉢形土器で口縁部に4単位の突起を持つ。口唇部は角頭状に整えられ単節縄文が施される。肥厚する口縁部及び胴部には羽状縄文が施される。帯間構成を基本とするが一部に帯内構成の羽状縄文とする部分が観られる。施文原体は、単節RLと無節のLを基本とするようである。頸部及び口縁部の装飾突起に太目の1本押しの際糸側面圧痕が観られる。内面には条痕が施されるが、撫でを加えて消している部分も見られる。15は、残存部最大径15cm、残存高5cmほどを測る深鉢形土器の胴部資料である。器面の剥落が進行しており判然としないが、貝殻背圧痕文の施された部分と無節縄文の施された部分が認められる。内面は横位の撫で整形が加えられる。16は、底径12.5cm、残存部最大径21.5cm、残存高14cmほどを測る平底の深鉢形土器の胴下半の資料である。帯間、帯内双方の構成をとる単節羽状縄文が施された資料である。1帯は3cmほどであるが、重複施文させる部位もあり、帯間の境界はやや不明瞭である。内面は斜位の撫で整形が加えら



第47图 第64号住居跡出土遺物(2)

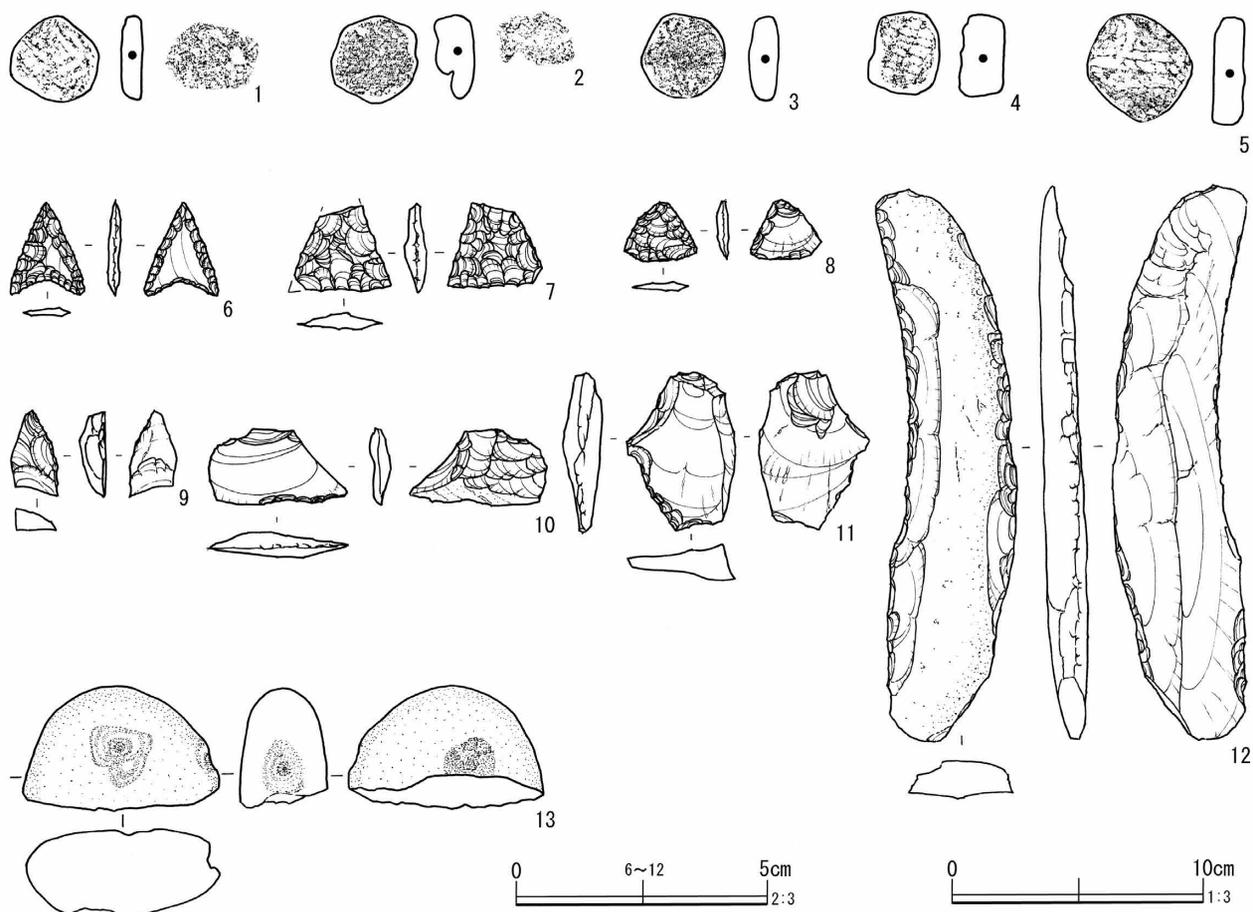


第48图 第64号住居跡出土遺物(3)

れる。

土製品 第49図1~5は土製円盤である。1は無節縄文の施された胴部破片を素材とするもの、2、3は無文、4は単節縄文の施された胴部破片を素材とするもの、5は、撚糸側面圧痕の施された土器を素材とするものである。

石器 第49図6、7は石鏃である。前者は、横長の不整形剥片を素材とする凹基無茎石鏃で、表裏に素材剥片の主剥離を残す。周縁部を中心に丁寧で規則的な調整加工を施している。後者は、平基無茎の石鏃で先端部と左脚端を欠く。丁寧な剥離で主剥離を除いている。8~11は2次加工剥片である。8は貝殻状の剥片を素材としたもので、裏面に素材の主剥離を大きく残すものの、正面側は丁寧な剥離を加え、刃部を整えている。9は、不整形剥片を用い先端の尖った錐状にしようとしたものと思われるが製品に至っていない。10は正面に素材剥片のポジティブバルブが観察される。右下へ伸びる先端部から剥片下端部に細かな剥離が加えられている。削器として機能したものと推定される。11は表裏に大きく主剥離を残す不整形剥片を素材としたもので、左側縁から下端部に調整加工が施されている。12は、湾曲した扁平な2次加工剥片で、両側縁に主に裏面からの加撃による調整加工が認められる。正面中央には礫表皮、裏面には主剥離を大きく残す。13は、磨石兼用凹石である。楕円形で扁平な転石を素材としたものと思われる。凹みが欠損に大きくかかっていることから欠損後も継続して使用していたものと思われる。



第49図 第64号住居跡出土遺物(4)

第11表 第64号住居跡出土石器計測表

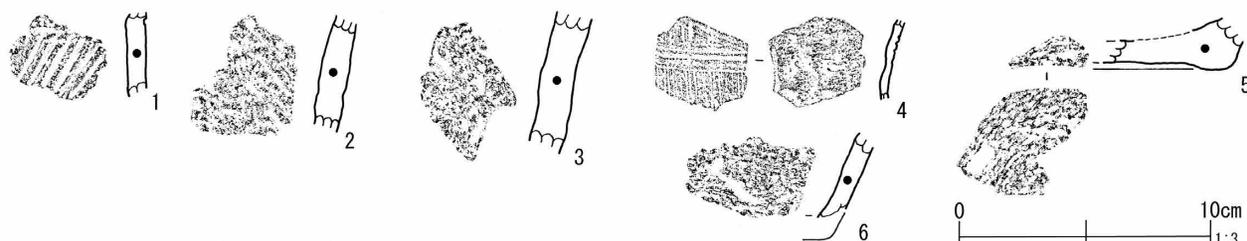
図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
49	6	石鏃	チャート	1.9	1.5	0.2	1	
49	7	石鏃	チャート	(1.7)	(1.8)	0.4	(1)	
49	8	2次加工剥片	チャート	1.2	1.5	0.2	0	
49	9	2次加工剥片	チャート	1.7	1.0	0.5	1	
49	10	2次加工剥片	チャート	1.6	2.8	0.4	2	
49	11	2次加工剥片	チャート	3.2	2.2	0.7	4.4	
49	12	2次加工剥片	硬砂岩	11.1	2.1	0.8	25.1	
49	13	磨石兼用凹石	安山岩	(4.7)	7.8	3.4	(132.7)	

●第65号住居跡 (第45図)

A3・B3グリッドに位置し、南半部は調査区外である。第64号住居跡に切られる。検出部分のみで長径約2.2m、短径約2.0mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mであった。炉跡の痕跡は認められなかった。

出土遺物 (第50図)

土器 1は、左下がりに斜行する集合沈線が観察される胴部破片である。内面は横位の条痕が観察される。早期野島式に該当する。2は単節LR縄文の観察される胴部資料、3は、外面に貝殻背圧痕文、内面に条痕の観察される胴部資料である。4は、外面に条線文、内面に指頭圧痕を残す胴部資料で、東海の木島式に該当する。5、6は底部及び底部周辺の資料である。前者はわずかに上げ底を呈する平底の資料で、底面に貝殻背圧痕文が施される。後者は外面に貝殻背圧痕文の施されたものである。



第50図 第65号住居跡出土遺物

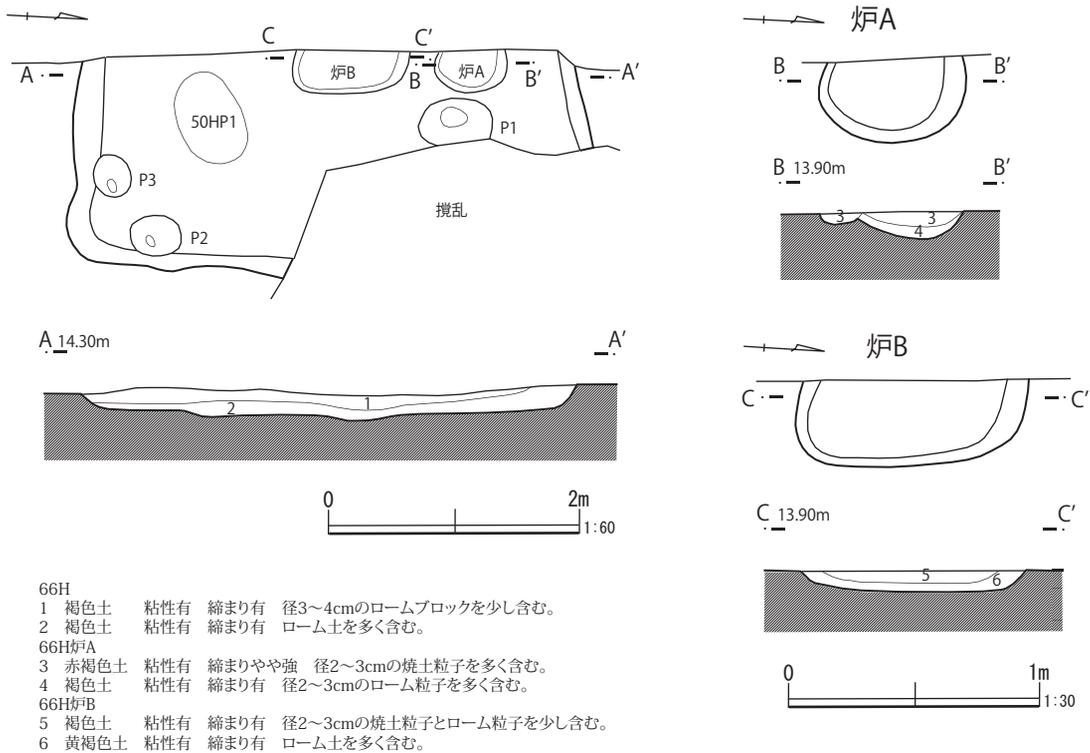
●第66号住居跡 (第51図)

B15グリッドに位置し、西半部は調査区外、北東部を攪乱に切られる。第50号住居跡と重複するが、新旧関係では本住居跡の方が古い。検出部分のみで長径約4.1m、短径約1.8mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mであった。住居跡に伴うピットは3基検出した。

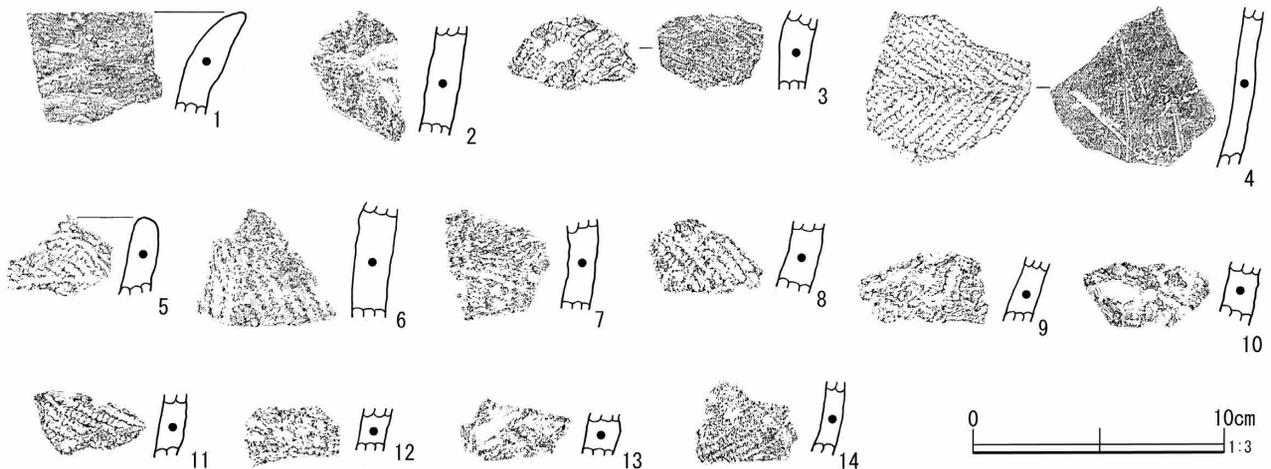
炉跡はA・Bの2基を検出した。炉Aは住居跡の北寄りで見出し、西半部は調査区外であるが、平面形は長径約0.6m、短径約0.3m不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。炉Bは住居跡のほぼ中央で見出し、西半部は調査区外であるが、平面形は長径約0.9m、短径約0.4m楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは浅く約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第52図)

土器 1は、外反する肥厚口縁を持つ平縁土器で、まばらな貝殻背圧痕文が施される。内面は横位の撫である。2は無文の胴部資料、3は単節 LR 縄文の施された胴部資料、4は、帯間構成の単節羽状縄文の施された胴部資料である。内面は縦位の擦痕風の整形痕が残される。5は、単節 RL 縄文の施された波状縁土器である。6~8、11は単節 RL 縄文の観察される胴部資料、9は表裏に条痕の残された胴部資料である。12~14は単節 LR 縄文の観察される胴部資料である。



第51図 第66号住居跡



第52図 第66号住居跡出土遺物

(2) 土坑

●第1号土坑 (第53図)

C16・D16グリッドに位置し、第62号住居跡を切る。平面形は長径約2.1m、短径約1.7mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.5mを測り、底面は中央が浅く窪む。土坑内から土器片が集中して出土している。

●第2号土坑 (第53図)

C9・10グリッドに位置し、第55号住居跡に切られる。残存部で長径約2.0m、短径約1.0mを測る。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第3号土坑 (第53図)

C9グリッドに位置し、北半部は調査区外である。第55号住居跡に切られ、第56号住居跡を切る。残存部で長径約1.9m、短径約1.6mを測る。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第4号土坑 (第53図)

C9・D9グリッドに位置し、第1号炉穴を切る。平面形は長径約1.6m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第5号土坑 (第53図)

C10グリッドに位置し、第52号住居跡を切る。平面形は長径約1.2m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.6mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第6号土坑 (第53図)

B9・10・C10グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第7号土坑 (第53図)

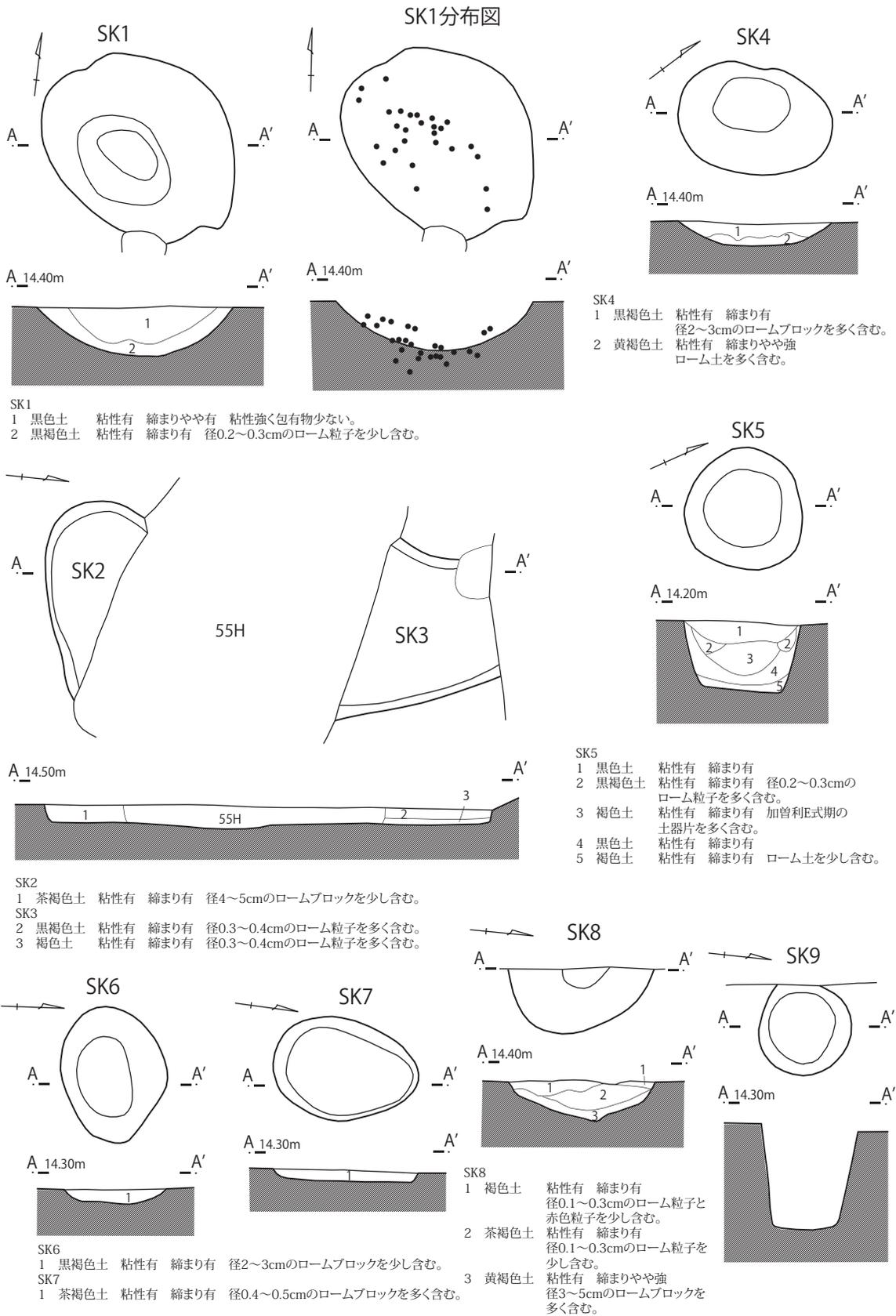
B10・C10グリッドに位置する。平面形は長径約1.5m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第8号土坑 (第53図)

B10グリッドに位置し、西半部は調査区外である。残存部で長径約1.5m、短径約0.7mを測る。確認面から底面までの深さは約0.4mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第9号土坑 (第53図)

B9・10グリッドに位置し、西端は調査区外である。平面形は直径約0.9mの円形を呈す。確認面から底面までの深さは約1.0mを測り、底面は平坦である。



第53図 第1~9号土坑

●第10号土坑（第54図）

C12グリッドに位置し、第11号土坑を切る。第14号土坑と重複するが、新旧関係は明確でない。平面形は長径約3.2m、短径約3.0mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第11号土坑（第54図）

C12グリッドに位置し、第10・12号土坑に切られる。第14号土坑と重複するが、新旧関係は明確でない。残存部で長径約1.7m、短径約1.0mを測る、確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第12号土坑（第54図）

C11・12・D11・12グリッドに位置する。第11号土坑を切り、第13号土坑に切られる。第15号土坑と重複するが、新旧関係は明確でない。平面形は長径約3.9m、短径約3.4mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第13号土坑（第54図）

C11グリッドに位置し、第12号土坑を切る。平面形は長径約2.1m、短径約1.7mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第14号土坑（第54図）

C12・D12グリッドに位置する。第10・11号土坑と重複するが、新旧関係は明確でない。平面形は長径約2.3m、短径約1.6mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第15号土坑（第54図）

C11・D11グリッドに位置する。第12号土坑と重複するが、新旧関係は明確でない。平面形は長径約1.5m、短径約1.6mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第16号土坑（第55図）

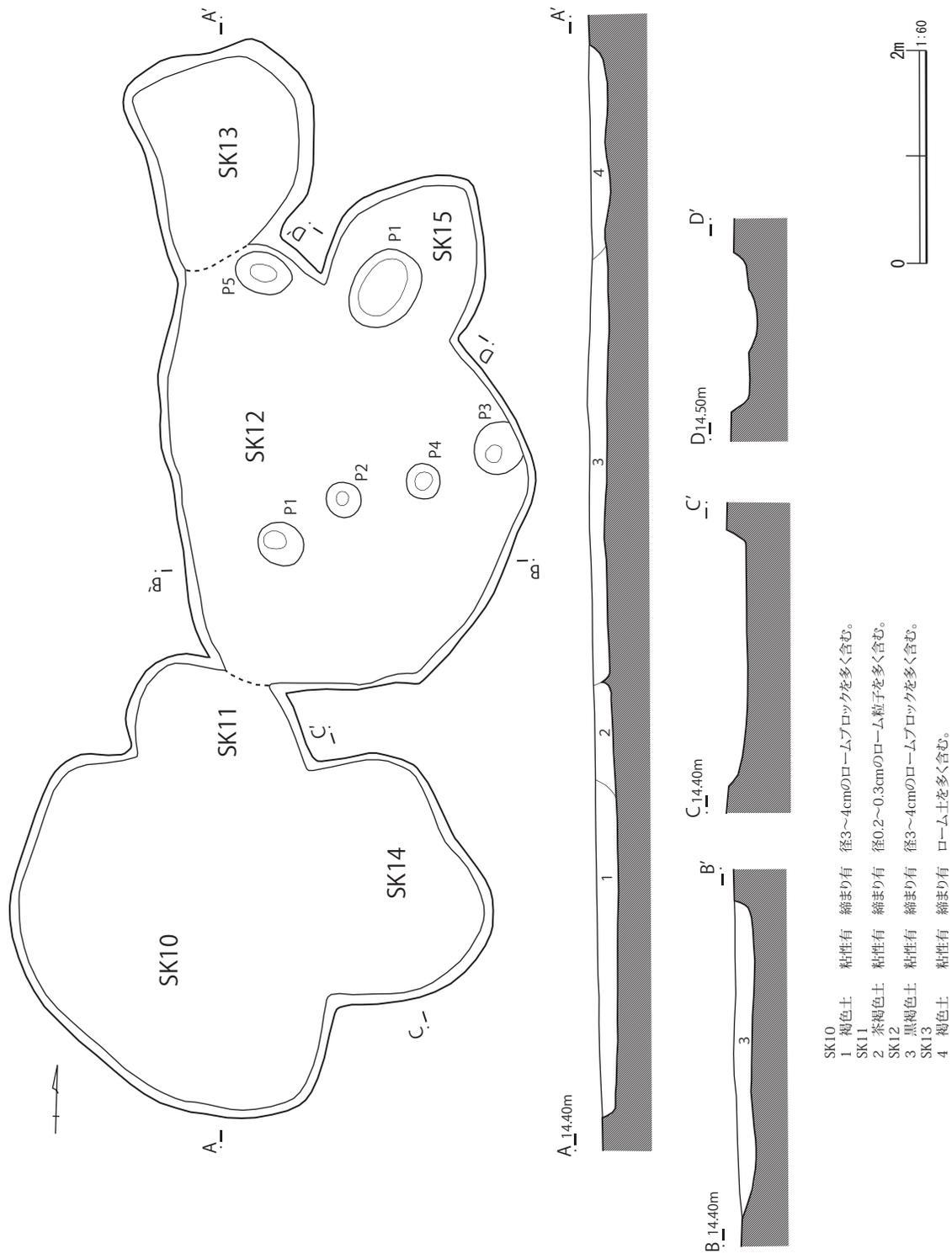
C13グリッドに位置する。平面形は長径約0.9m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第17号土坑（第55図）

C13グリッドに位置し、東端は風倒木跡（SX1）に切られる。平面形は長径約2.2m、短径約2.1mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第18号土坑（第55図）

C16・D16グリッドに位置し、南半部は調査区外である。第62号住居跡を切る。残存部で長径約0.9m、



- SK10 1 褐色土 粘性有 締まり有 径3~4cmのロームブロックを多く含む。
- SK11 2 茶褐色土 粘性有 締まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を多く含む。
- SK12 3 黒褐色土 粘性有 締まり有 径3~4cmのロームブロックを多く含む。
- SK13 4 褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。

第54図 第10~15号土坑

短径約0.6mを測る、確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第19号土坑（第55図）

D13・14・E13・14グリッドに位置し、第20号土坑を切る。平面形は長径約2.0m、短径約1.5mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第20号土坑（第55図）

D14・E14グリッドに位置し、第19号土坑に切られる。平面形は長径約2.5m、短径約1.6mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第21号土坑（第55図）

D14・E14グリッドに位置し、第22号土坑を切る。平面形は長径約1.8m、短径約1.5mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第22号土坑（第55図）

E14グリッドに位置し、東端は調査区外である。第21号土坑に切られる。残存部で長径約1.6m、短径約1.5mを測る、確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第23号土坑（第55図）

E16グリッドに位置する。平面形は長径約1.6m、短径約1.2mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第24号土坑（第55図）

E16グリッドに位置する。平面形は長径約1.8m、短径約1.2mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

●第25号土坑（第55図）

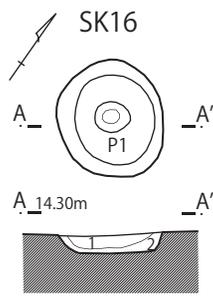
E15グリッドに位置し、東端は調査区外である。平面形は長径約1.6m、短径約1.4mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第26号土坑（第56図）

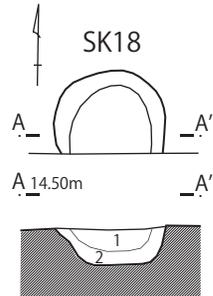
E15グリッドに位置する。平面形は長径約2.0m、短径約1.4mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

●第27号土坑（第56図）

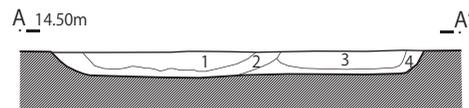
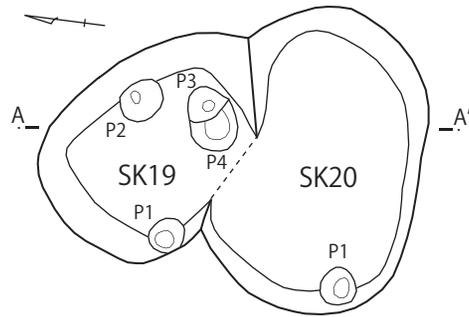
D15グリッドに位置する。平面形は長径約1.8m、短径約1.7mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。



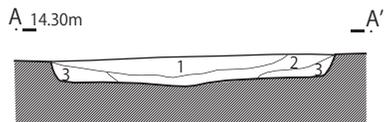
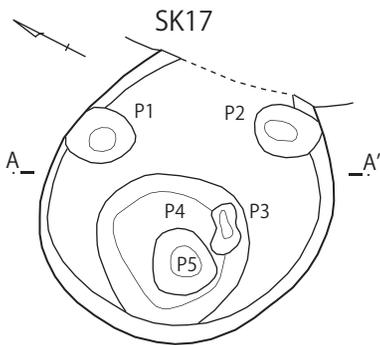
- SK16
 1 褐色土 粘性有 縮まり有 径0.3~0.4cmのローム粒子を多く含む。
 2 黄褐色土 粘性有 縮まり有 ローム土を多く含む。



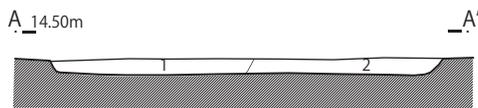
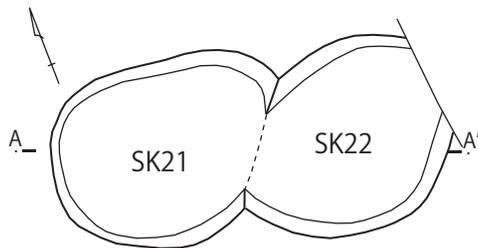
- SK18
 1 黒褐色土 粘性有 縮まり有 径0.1~0.2cmのローム粒子を多く含む。
 2 灰褐色土 粘性有 縮まり有 径0.3~0.4cmのローム粒子を多く含む。



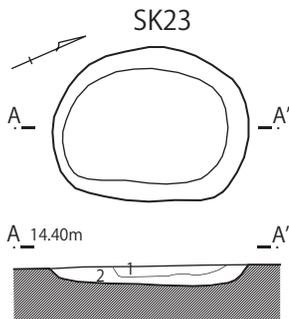
- SK19
 1 黒褐色土 粘性有 縮まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を多く含む。
 2 茶褐色土 粘性有 縮まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を多く含む。
 SK20
 3 褐色土 粘性有 縮まり有 径3~5cmのロームブロックを多く含む。
 4 黄褐色土 粘性有 縮まり有 ローム土を多く含む。



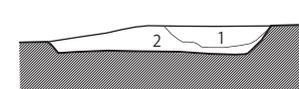
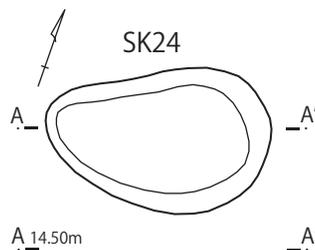
- SK17
 1 黒褐色土 粘性有 縮まり有 径3~4cmのロームブロックを多く含む。
 2 黄褐色土 粘性有 縮まり有 径3~4cmのロームブロックを多く含む。
 3 褐色土 粘性有 縮まり有 ローム土を多く含む。



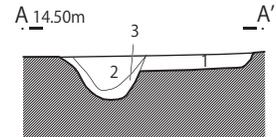
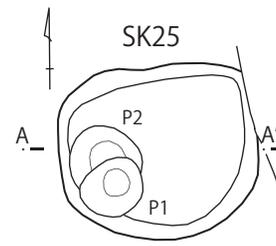
- SK21
 1 褐色土 粘性有 縮まり有 径3~5cmのロームブロックを少し含む。
 SK22
 2 黄褐色土 粘性有 縮まり有 ローム土を多く含む。



- SK23
 1 褐色土 粘性有 縮まり有 径0.3~0.5cmのローム粒子を多く含む。
 2 黄褐色土 粘性有 縮まり有 径3~5cmのロームブロックを少し含む。



- SK24
 1 茶褐色土 粘性有 縮まり有 径0.3~0.4cmのローム粒子を少し含む。
 2 黄褐色土 粘性有 縮まり有 ローム土を多く含む。



- SK25
 1 黒褐色土 粘性有 縮まり有 径0.2~0.5cmのローム粒子を多く含む。
 2 灰褐色土 粘性有 縮まり有 径5~6cmのロームブロックを少し含む。
 3 黄褐色土 粘性有 縮まり有 ローム土を多く含む。



第55図 第16~25号土坑

●第28号土坑（第56図）

C11グリッドに位置し、北端を攪乱に、南端を第57号住居跡に切られる。残存部で長径約1.5m、短径約1.2mを測る、確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第29号土坑（第56図）

D15グリッドに位置し、第30号土坑に切られる。平面形は長径約2.0m、短径約1.4mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第30号土坑（第56図）

D15・E15グリッドに位置し、第29号土坑を切り、第31号土坑に切られる。平面形は長径約1.8m、短径約0.9mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第31号土坑（第56図）

E14・15グリッドに位置し、第30号土坑を切り、第32号土坑に切られる。平面形は長径約2.6m、短径約1.7mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第32号土坑（第56図）

E14・15グリッドに位置し、東半部は調査区外である。第31号土坑を切る。残存部で長径約1.9m、短径約1.1mを測る。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第33号土坑（第56図）

D16グリッドに位置し、南半部は調査区外である。第34号土坑を切る。残存部で長径約1.4m、短径約1.1mを測る。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第34号土坑（第56図）

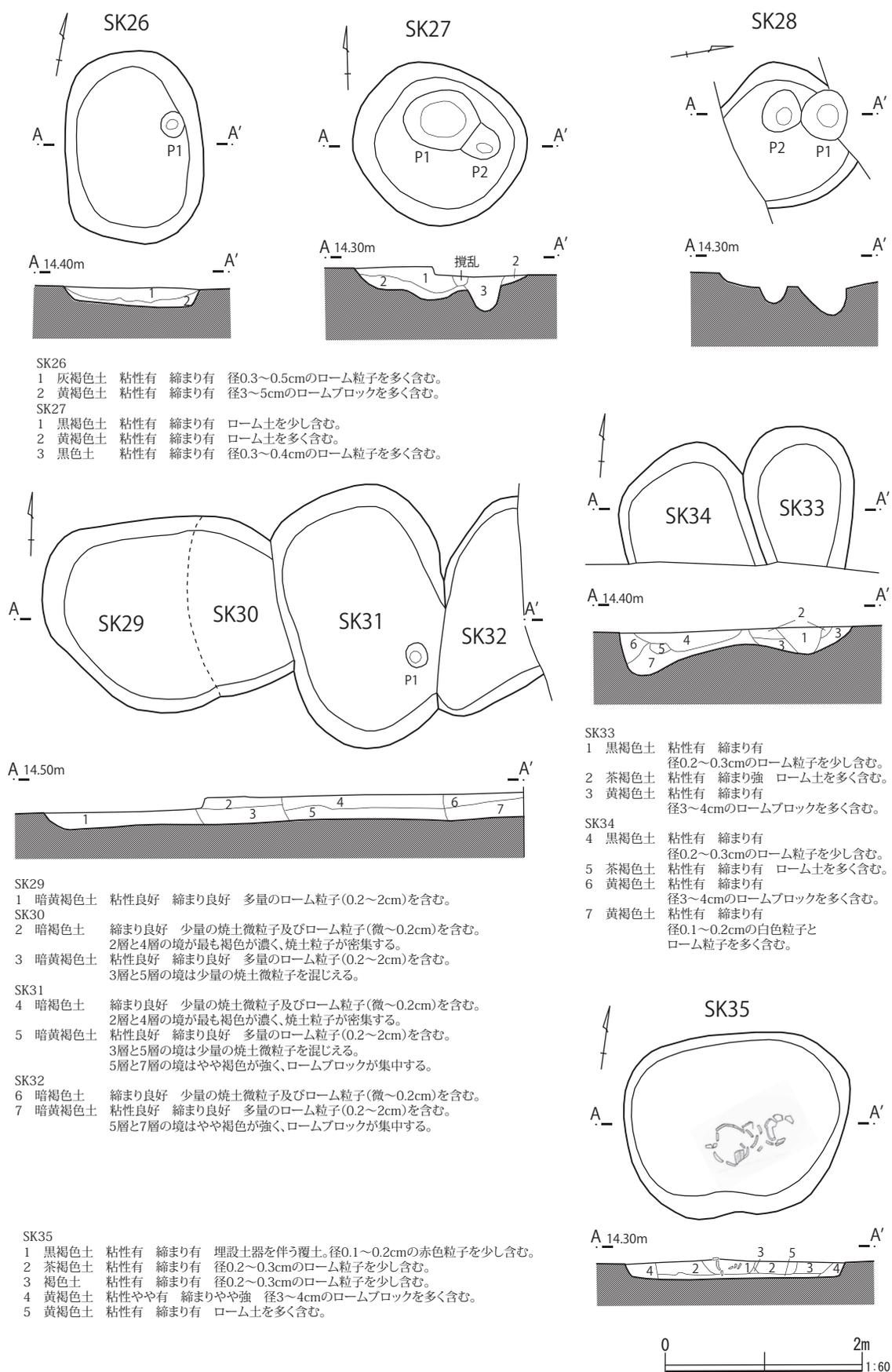
D16グリッドに位置し、南半部は調査区外である。第33号土坑に切られる。残存部で長径約1.3m、短径約1.2mを測る。確認面から底面までの深さは約0.5mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第35号土坑（第56図）

D16グリッドに位置する。平面形は長径約2.3m、短径約1.8mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。中央付近の覆土中から土器の大破片が集中して出土した。

●第36号土坑（第57図）

D14・15グリッドに位置する。平面形は長径約3.2m、短径約2.5mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。



第56図 第26~35号土坑

●第37号土坑（第57図）

D13グリッドに位置する。平面形は長径約1.7m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第38号土坑（第57図）

C13・14グリッドに位置し、西半部は調査区外である。第39・48・52号土坑を切る。中央付近に風倒木跡（SX2）が入る。残存部で長径約3.2m、短径約2.0mを測る。確認面から底面までの深さは約0.5mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第39号土坑（第57図）

C14グリッドに位置し、西半部は調査区外である。第38号土坑に切られる。残存部で長径約2.6m、短径約1.6mを測る。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第40号土坑（第57図）

D11・12グリッドに位置する。平面形は長径約1.9m、短径約1.5mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第41号土坑（第57図）

D12グリッドに位置し、第49号住居跡を切る。平面形は長径約1.3m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第42号土坑（第57図）

D12グリッドに位置し、第49号住居跡を切る。平面形は長径約1.5m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第43号土坑（第57図）

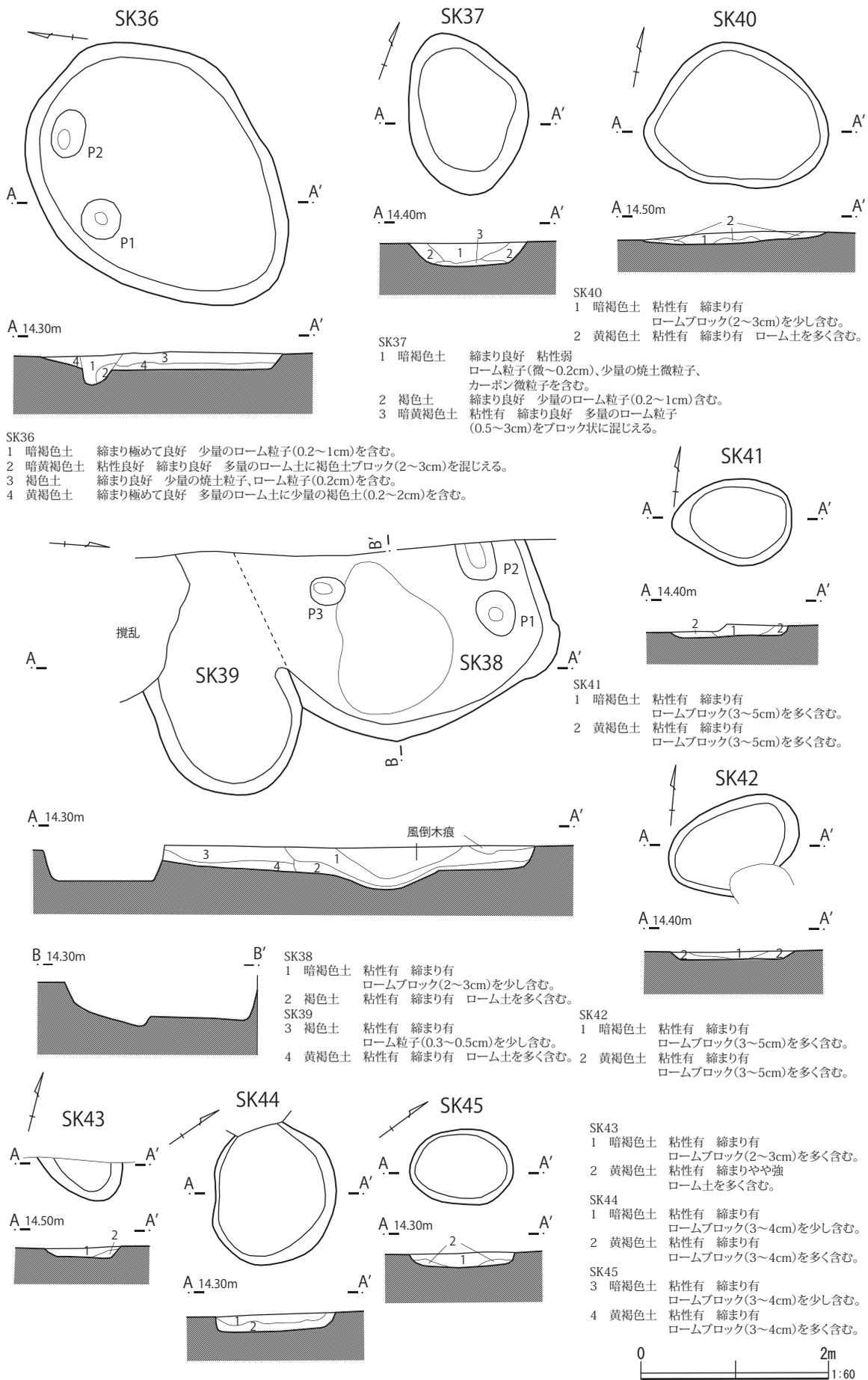
D12・E12グリッドに位置し、第49号住居跡に切られる。残存部で長径約0.9m、短径約0.5mを測る。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

●第44号土坑（第57図）

C14グリッドに位置し、北西端は攪乱に切られる。平面形は長径約1.5m、短径約1.3mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第45号土坑（第57図）

C14グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。



第57図 第36~45号土坑

●第46号土坑（第58図）

D14グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約1.0mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第47号土坑（第58図）

C14・D14グリッドに位置し、第56号土坑を切る。平面形は長径約1.3m、短径約1.1mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

●第48号土坑（第58図）

C13・14グリッドに位置し、第38号土坑に切られる。平面形は長径約2.2m、短径約2.0mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第49号土坑（第58図）

D13・14グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.0mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第50号土坑（第58図）

D10グリッドに位置し、第52号住居跡に切られる。残存部で長径約1.6m、短径約1.5mを測る。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第51号土坑（第58図）

D13・E13グリッドに位置し、北端は攪乱に切られる。平面形は長径約2.6m、短径約2.2mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第52号土坑（第58図）

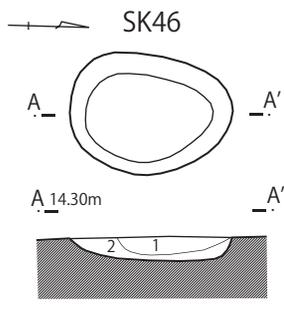
C13グリッドに位置し、西半部は調査区外である。第53号土坑に切られる。残存部で長径約1.5m、短径約1.0mを測る。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第53号土坑（第58図）

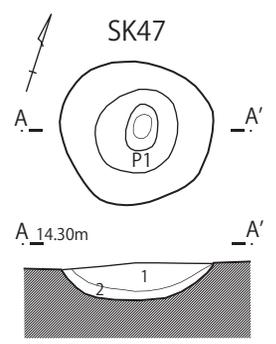
C13グリッドに位置し、西半部は調査区外である。第52号土坑を切る。残存部で長径約1.5m、短径約0.6mを測る。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第54号土坑（第58図）

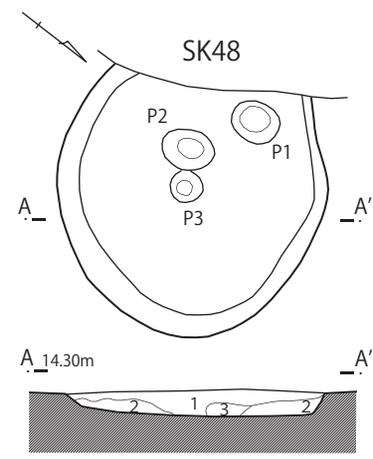
D11グリッドに位置し、第54号住居跡を切る。平面形は長径約3.1m、短径約1.8mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。



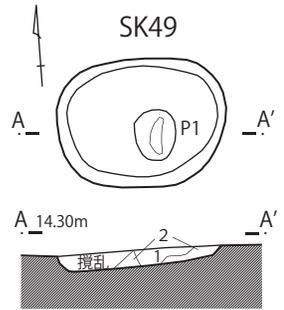
SK46
1 暗褐色土 粘性有 締まり有 径3~4cmのロームブロックを多く含む。
2 褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。



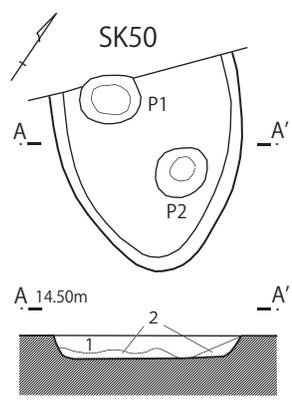
SK47
1 黒褐色土 粘性有 締まり有 径0.1~0.2cmの白色粒子とローム粒子を少し含む。
2 褐色土 粘性有 締まり有 径2~3cmのロームブロックを少し含む。



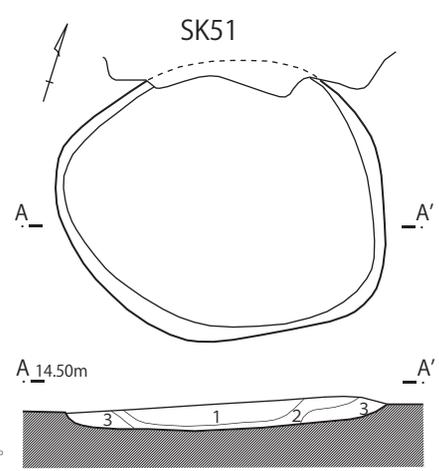
SK48
1 暗褐色土 粘性有 締まり有 径0.3~0.4cmのローム粒子を多く含む。
2 褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。
3 茶褐色土 粘性有 締まりやや強 径3~4cmのロームブロックを多く含む。



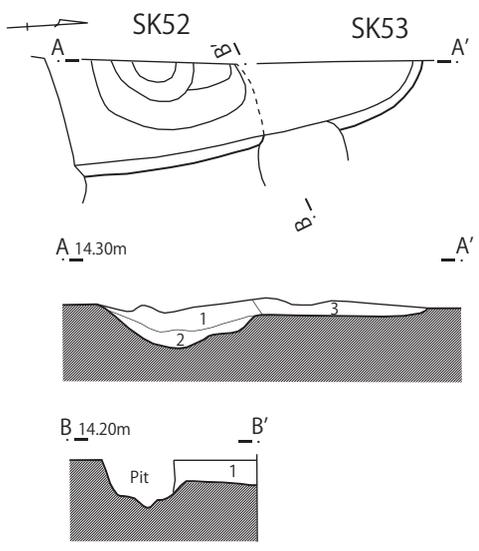
SK49
1 黒褐色土 粘性有 締まり有 径3~4cmのロームブロックを多く含む。
2 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。



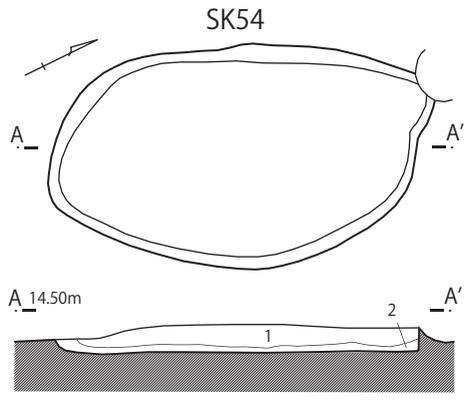
SK50
1 黒褐色土 粘性有 締まり有 径3~4cmのロームブロックを多く含む。
2 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。



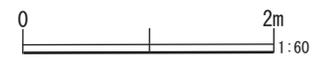
SK50
1 黒褐色土 粘性有 締まり有 径0.3~0.4cmのローム粒子を多く含む。
2 灰褐色土 粘性有 締まり有 径3~4cmのロームブロックを多く含む。
3 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。



SK52
1 灰黄褐色土 粘性有 締まり有 径0.3~0.4cmのローム粒子を多く含む。
2 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。
SK53
3 褐色土 粘性有 締まり有 径0.3~0.4cmのローム粒子を多く含む。



SK54
1 褐色土 粘性有 締まり有 径3~4cmのロームブロックを多く含む。
2 黄褐色土 粘性有 締まり有 径3~4cmのロームブロックを多く含む。



第58図 第46~54号土坑

●第55号土坑（第59図）

D14グリッドに位置する。平面形は長径約0.9m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第56号土坑（第59図）

D14グリッドに位置し、第47号土坑に切られる。平面形は長径約2.4m、短径約1.6mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第57号土坑（第59図）

D11グリッドに位置し、東半部は調査区外である。残存部で長径約1.2m、短径約1.1mを測る。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

●第58号土坑（第59図）

D13グリッドに位置する。平面形は長径約1.5m、短径約1.3mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第59号土坑（第59図）

E14グリッドに位置し、東半部は調査区外である。平面形は長径約1.4m、短径約0.5mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.5mを測り、底面は中央が浅く窪む。覆土第1層から塊状耳飾が出土している。

●第60号土坑（第59図）

D15グリッドに位置する。平面形は長径約1.6m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第61号土坑（第59図）

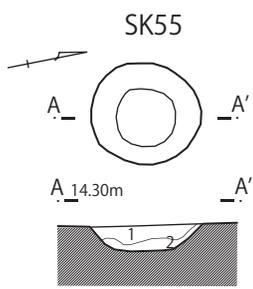
D15グリッドに位置する。平面形は長径約1.6m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第62号土坑（第59図）

D9・10グリッドに位置し、東半部は調査区外である。第52号住居跡を切る。残存部で長径約1.6m、短径約0.8mを測る。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第63号土坑（第59図）

C15・16グリッドに位置し、西半部は調査区外である。第50号住居跡を切る。残存部で長径約1.3m、短径約0.4mを測る。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は中央が浅く窪む。

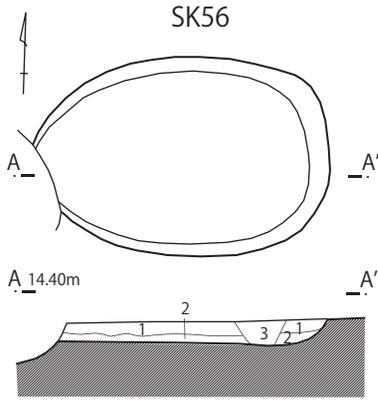


SK55

- 1 暗褐色土 粘性有 締まり有 径2~3cmのロームブロックを少し含む。
 2 褐色土 粘性有 締まり有 径2~3cmのロームブロックを少し含む。

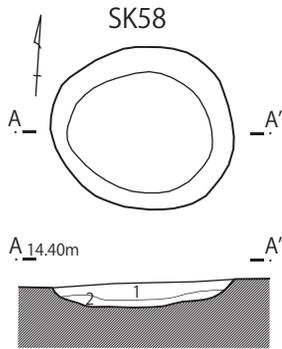
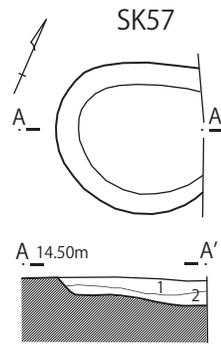
SK56

- 1 灰褐色土 粘性有 締まり有 径3~4cmのロームブロックを多く含む。
 2 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。
 3 褐色土 粘性有 締まり有 径0.3~0.4cmのローム粒子を少し含む。



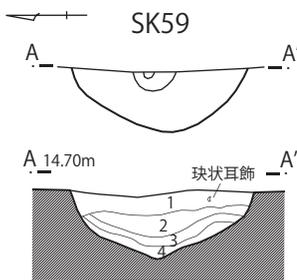
SK57

- 1 褐色土 粘性有 締まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を少し含む。
 2 黄褐色土 粘性有 締まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を少し含む。



SK58

- 1 褐色土 粘性有 締まり有 径2~3cmのロームブロックを少し含む。
 2 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。

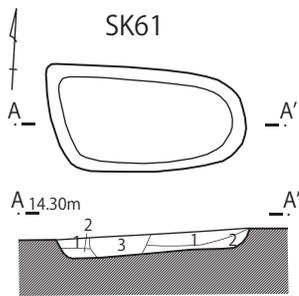
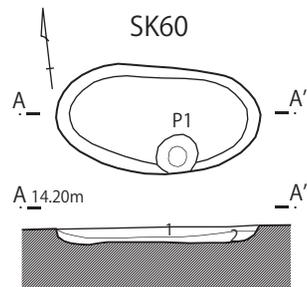


SK59

- 1 灰褐色土 粘性有 締まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を多く含む。
 2 褐色土 粘性有 締まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を多く含む。
 3 灰黄褐色土 粘性有 締まり有 径3~4cmのロームブロックを多く含む。
 4 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。

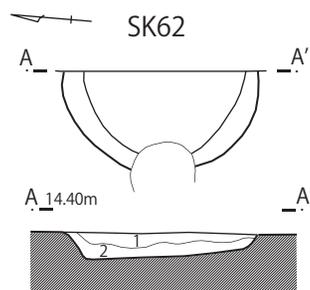
SK60

- 1 褐色土 粘性有 締まり有 径0.3~0.4cmのローム粒子を多く含む。
 2 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。



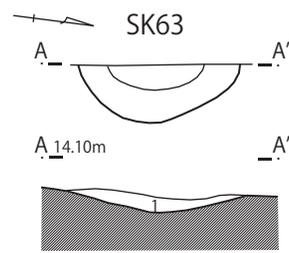
SK61

- 1 灰褐色土 粘性有 締まり有 径0.3~0.4cmのローム粒子を少し含む。
 2 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。
 3 黒褐色土 粘性有 締まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を少し含む。



SK62

- 1 褐色土 粘性有 締まり有 径0.3~0.4cmのローム粒子を少し含む。
 2 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。



SK63

- 1 褐色土 粘性有 締まり有 径3~4cmのロームブロックを多く含む。



第59図 第55~63号土坑

●第64号土坑（第60図）

B1・2・C1・2グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約1.0mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.5mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第65号土坑（第60図）

A2グリッドに位置する。平面形は長径約1.5m、短径約1.4mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第66号土坑（第60図）

B1グリッドに位置する。平面形は長径約0.9m、短径約0.8mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第67号土坑（第60図）

B1・2グリッドに位置する。平面形は長径約0.9m、短径約0.7mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第68号土坑（第60図）

C1グリッドに位置し、西半部を攪乱に切られる。残存部で長径約1.9m、短径約1.4mを測る。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第69号土坑（第60図）

C1グリッドに位置し、第70号土坑に切られる。平面形は長径約1.1m、短径約1.0mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第70号土坑（第60図）

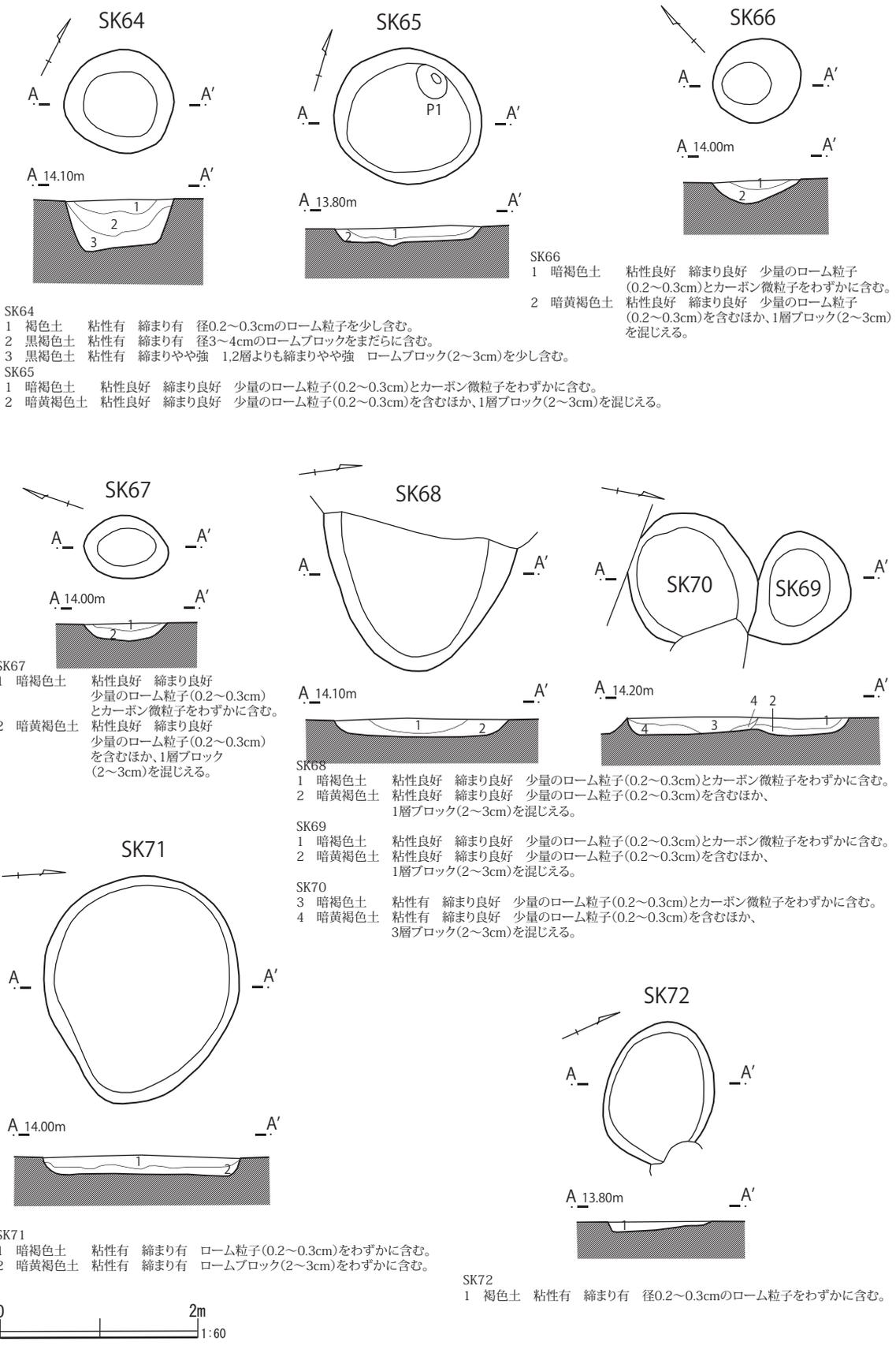
C1グリッドに位置し、第1号溝跡に切られ、第69号土坑を切る。平面形は長径約1.3m、短径約1.2mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第71号土坑（第60図）

B1・2グリッドに位置し、第63号住居跡を切る。平面形は長径約2.3m、短径約2.0mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第72号土坑（第60図）

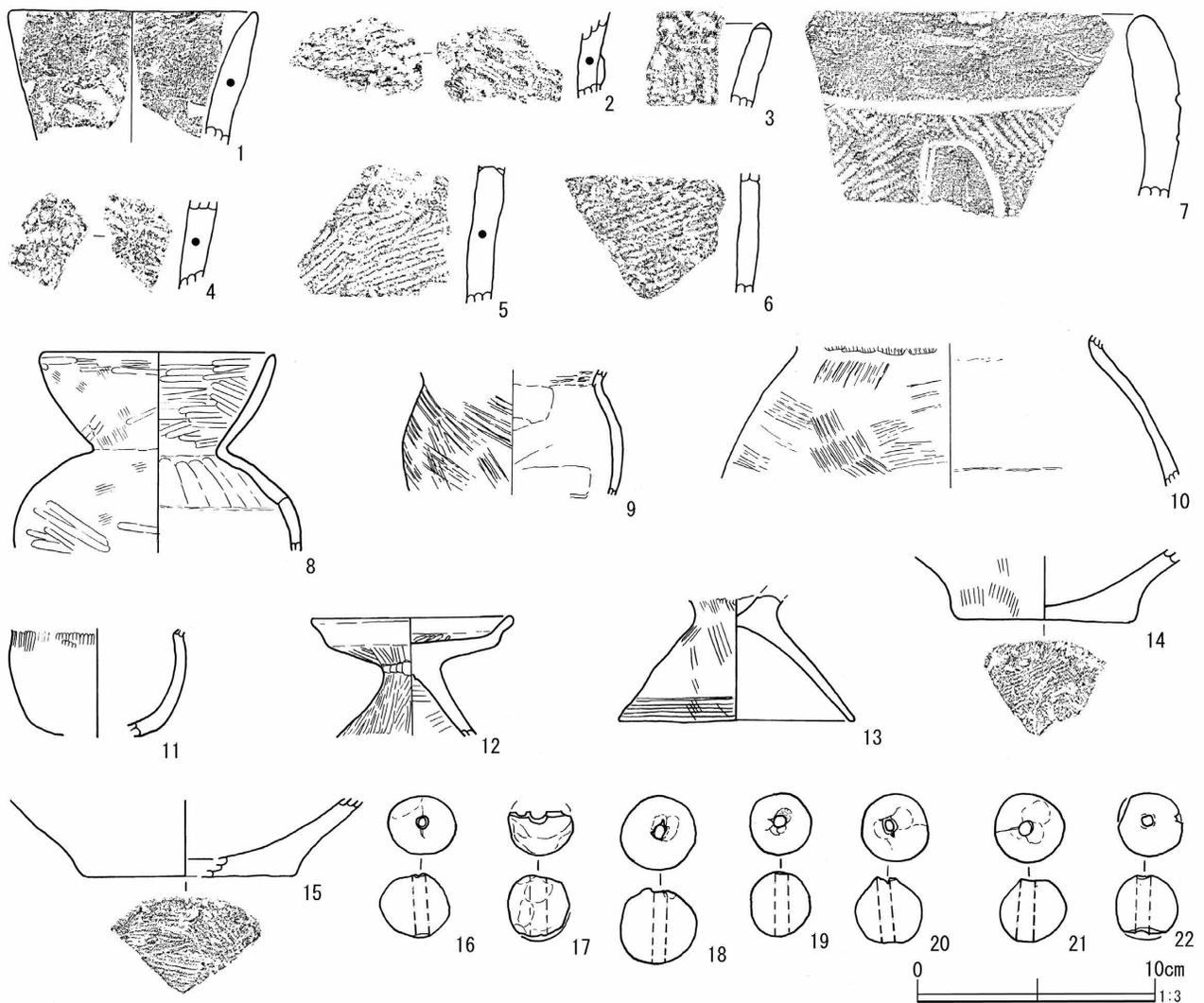
B2・3グリッドに位置し、第63号住居跡を切る。平面形は長径約1.4m、短径約1.1mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。



第60図 第64~72号土坑

●土坑出土遺物 (第61~68図)

土器 第61図は第1号土坑出土資料である。1は、表裏無文の小型の平縁土器である。推定口径は10.5cm、残存高は5.5cmほどである。2は横走隆帯の看取される胴部上半の破片資料である。3は、貝殻腹縁の施された口縁部資料で、口唇部には鋭い筥状施文具による刻みが付される。浮島式土器と思われる。4は外面に単節縄文、内面に条痕の施された胴部資料である。5は、無節縄文の施された胴部の比較的上位に相当すると思われる破片資料である。6は、単節縄文の施された胴部資料である。破片上部に結節回転痕が観られる。胎土に砂礫を多く含む土器である。中期初頭に位置付けられるものであろう。7は、わずかに内湾する大型の口縁部資料で、無文の口縁部の下端を1条の沈線で閉じ、口縁部文様帯には∩状の磨消文帯と地文の単節縄文とが観られる。加曾利E式後半の資料である。8は、小型丸底壺の口縁部から胴部にかけての資料である。口径10cm、胴部最大径12cm、残存高13cmほどを測る。外面は刷毛目を撫で消し散漫な筥磨きを施している。内面は口縁部に横位の筥磨き、肩部から胴部には指頭による縦長の連続圧痕が顕著に認められる。胴部と口縁部の接合痕であろう。9は、小型の広口壺と思われる。頸部推定径は7.4cm、胴部最大径は8.2cm、残存高5cmほどを測る。外面に刷毛目を残し内面は横位の撫でである。外面は赤色

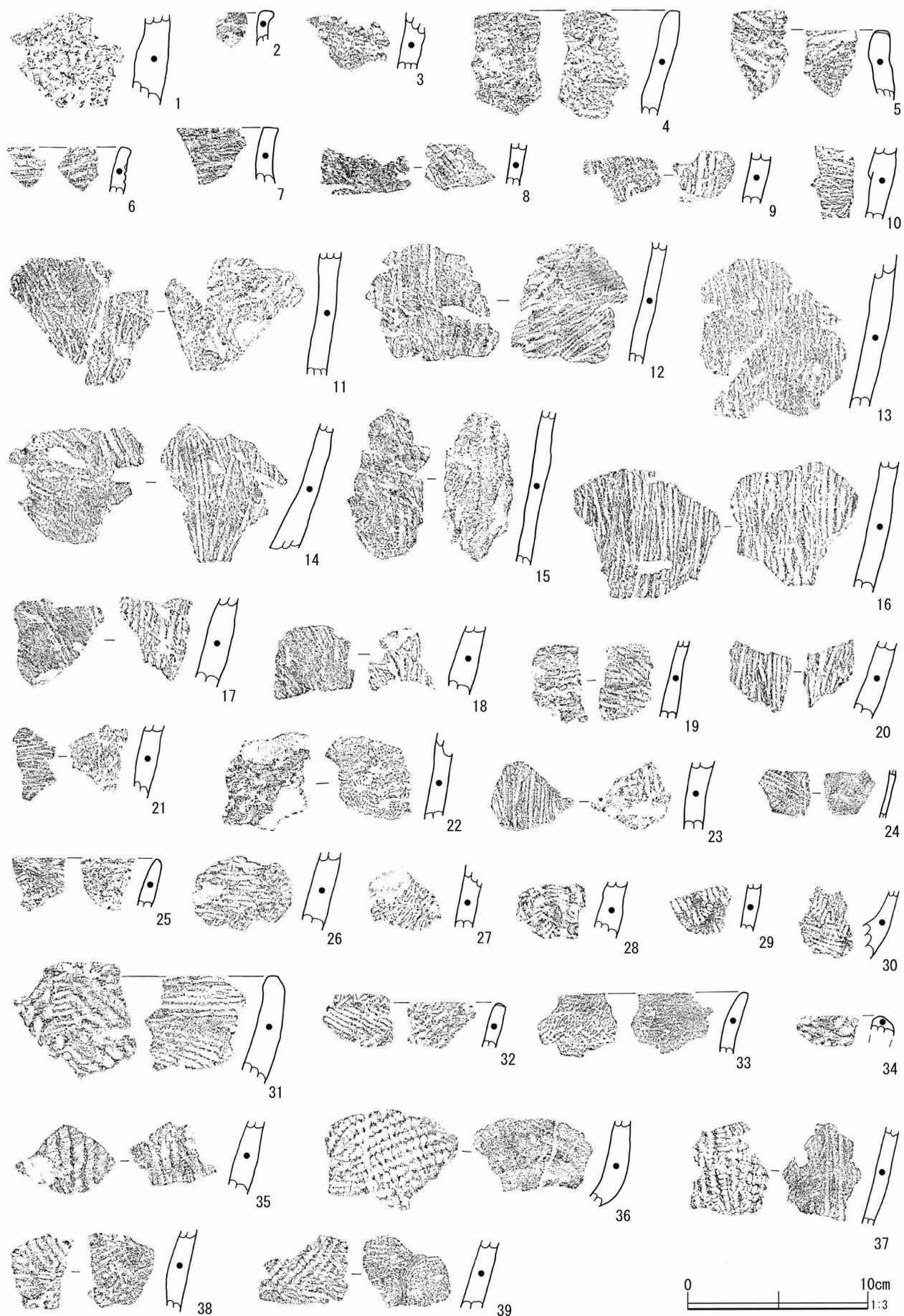


第61図 土坑出土遺物 (1)

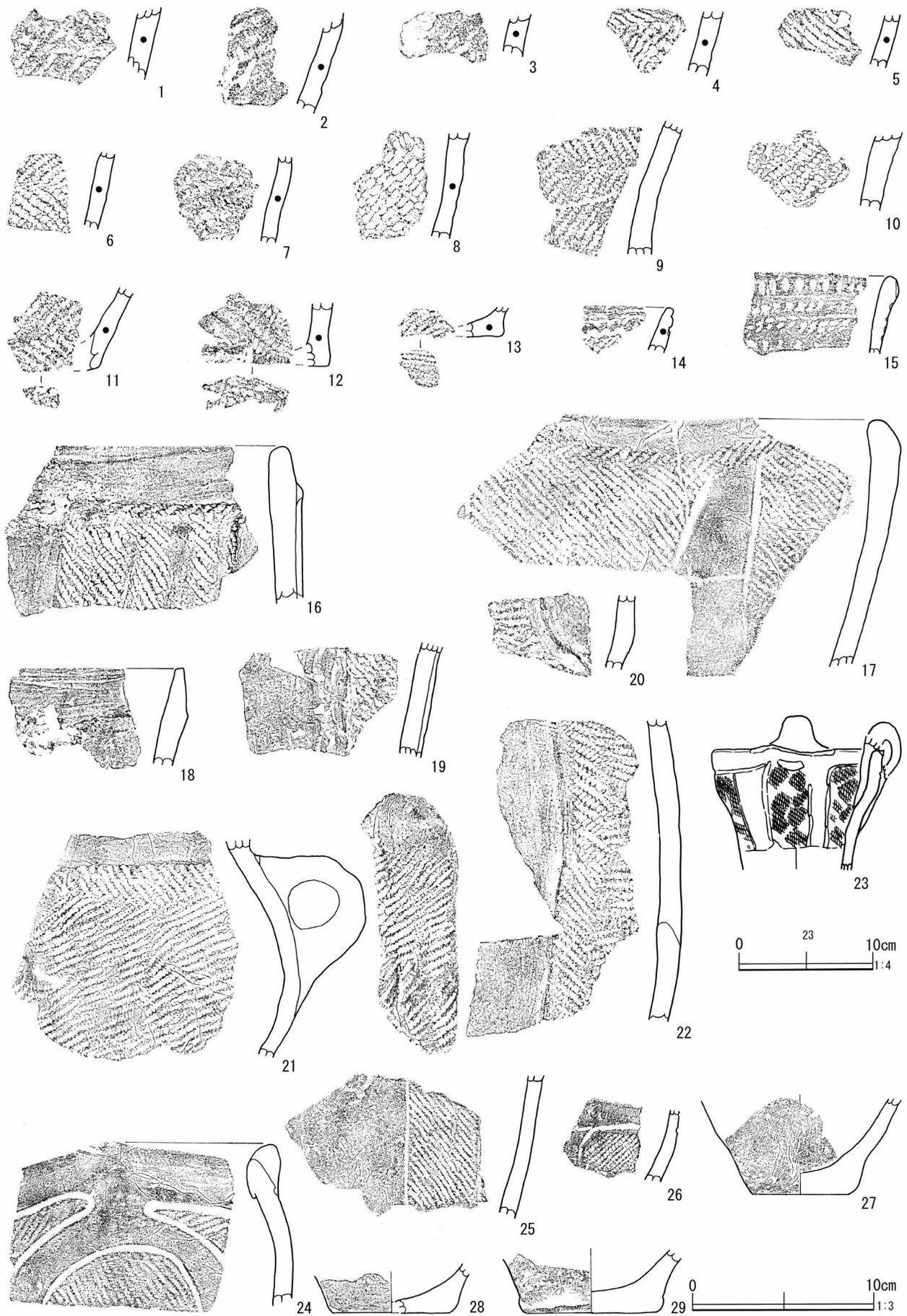
塗彩の痕跡が残される。10は、甕あるいは台付甕の肩部から胴部にかけての資料である。外面には刷毛目が内面には撫でが施される。11は、小型壺の胴部資料である。胴部最大径は7.6cm、残存高4.6cmほどである。外面は頸部から肩部にかけて縦位の刷毛目が観察される。12は器台である。口径8.5cm、残存高5cmを測り、脚端を欠く。整形は坏部下面と脚部内面には刷毛目の痕跡を認めるが、総じて丁寧に撫でられており良い作りである。13は、台付甕の脚台部であり、外面には刷毛目を消す撫でが、内底面には横位の撫でが施される。14、15は土師器の底部資料である。前者は外面及び底面に刷毛目が観察される。後者は、外面は篋磨き、内面は刷毛目が残される。

第62図1は、第2号土坑出土資料である。外面に条痕の施された胴部下半の破片資料である。内面には条痕は観察されない。2、3は第4号土坑出土資料で、前者は、口唇部を外側に引き出すように整形された口縁部資料、後者は無節縄文の看取される胴部資料である。4～39及び第63図1～29は第5号土坑出土の資料である。4～7は条痕の看取される口縁部資料で、5は口唇部に棒状施文具を用いたと思われる斜位の刺突痕が残される。6、7は共に表裏に横位の条痕が観られる平縁土器である。11～23は、表裏に条痕の観察される胴部資料である。焼成は比較的良好であるが、胎土には多量の繊維を含み器面に脱虚痕を認めるものが多い。24は木島式土器で、外面には右下がり斜行する条線が観られる。25～30は貝殻背圧痕文の施された資料である。28、30は底部周辺の資料である。31～35と第63図1～5は、無節縄文の施される一群である。31は極太の無節縄文を外面と口唇端面に施し、内面は横位の彫りの深い条痕が施される。条痕は外面にも一部残される。33は撚り戻しの無節縄文が観察される。内面は横位の撫でである。第63図1～3も極太の無節縄文が施されるもので同一個体と思われる。36～39及び、第63図6～13は、単節縄文の施される一群である。35は節の大きな単節LR縄文が観察されるもの、37は重複施文で判然としないうが、X字状になる帯間、帯内羽状構成の変換点である。内面には顕著な縦位の条痕が観られる。第63図6～9は帯間構成の単節羽状縄文が施されるもので、8は極太の単節縄文が用いられる。11～13は平底となる底部資料で、いずれも縄文施文は底面に及ぶ。12は、外面は極太の単節縄文であるが、底面施文の原体はやや細い別原体を用いる。14は平縁の深鉢形土器で外面に半裁竹管を用いたコンパス文が施され、地文を附加条2種とするものである。黒浜3式に比定される。15は、引きずるような貝殻腹縁の施された口縁部資料である。浮島式に比定される。16～29は中期加曾利E式土器である。16～18は口縁部資料、いずれも口縁外縁に無文帯を置き、丈の低い隆帯で以下の文様帯を区画する。16は平縁深鉢で、縄文を施した比較的文のある横走隆帯から隆帯を垂下させ縄文帯と磨消文帯を交互に形成するものと思われる。17は、緩波状縁をなすもので、体部には振幅の大きな鋸歯文が描出されるものであろう。19、20、22は体部のモチーフ区画に隆帯を用いるもので、19、22はまっすぐ垂下するもの、20は弧線を描くものである。21は、両耳壺である。無文となる口縁部が直立し、橋状把手の付される胴部は球胴となる。地文は単節RL縄文で、最上部1段だけ横位回転させ、以下は縦位回転とする。口縁部及び内面は横位の丁寧な撫で整形が加えられる。23は小型の深鉢形土器で、推定口径12.6cm、残存高7.5cmほどを測る。口縁部には環状となる把手が付されたものと思われるが脱落している。胴部には垂下する幅の狭い磨消文帯と約2倍の幅を持つ縄文帯とが交互に巡るようである。24は、キャリパー形深鉢の口縁部資料である。口縁部に無文帯を置き、棒状施文具による沈線で玉抱きとなるモチーフを描き単節縄文を充填する。25、26は沈線区画でモチーフを描出する胴部資料である。27～29は底部資料で、いずれも無文、平底を呈する。

第64図1は、第8号土坑出土資料で、表裏に条痕の施されたものである。2～14は第9号土坑出土資料



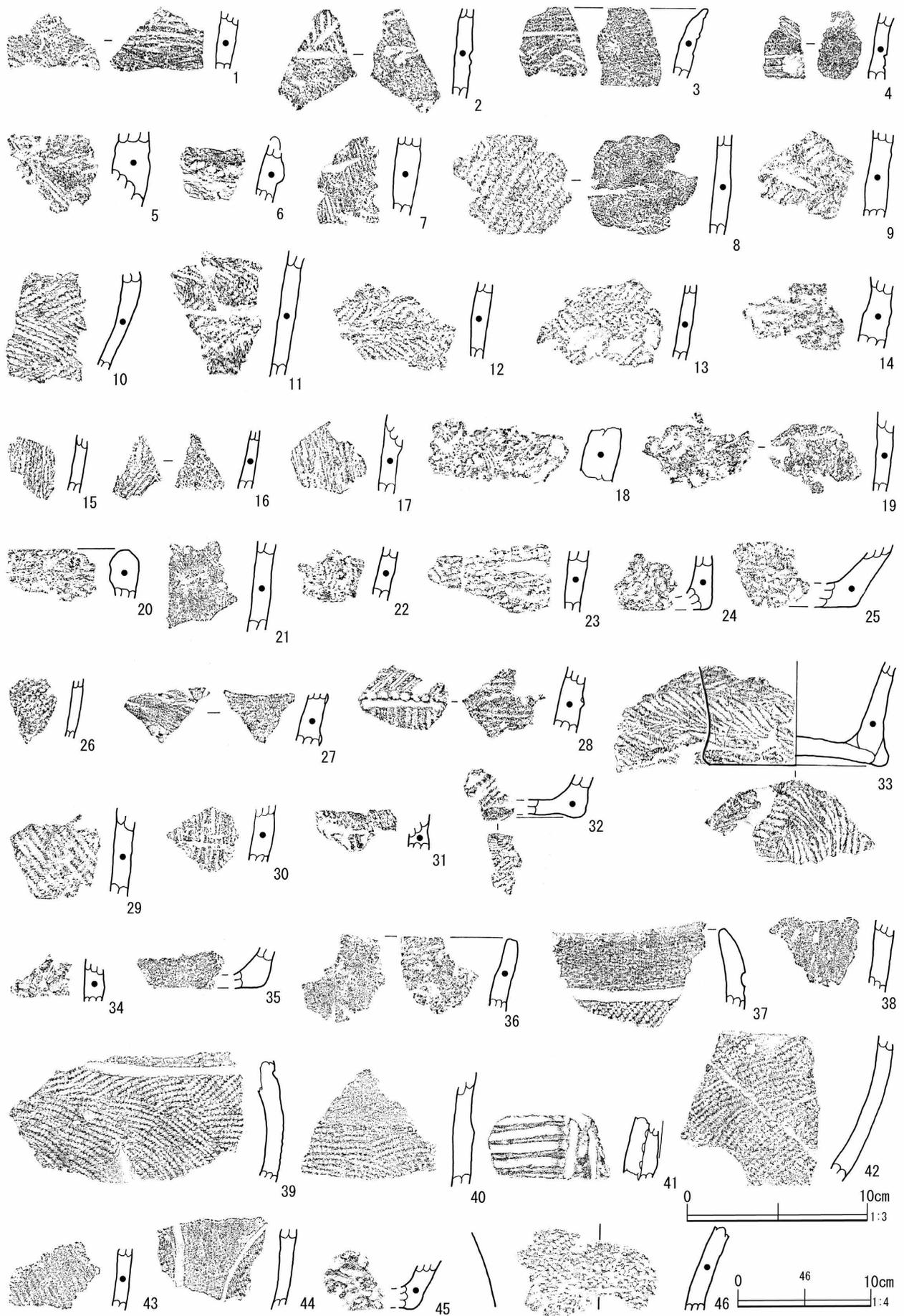
第62图 土坑出土遗物(2)



第63图 土坑出土遺物 (3)

である。2は沈線区画内に集合沈線を充填する早期野島式、3、4は条痕撫で消して胎土に白色針状物質を含む下吉井式土器である。多裁竹管を用い鋸歯文風のモチーフを描くようである。5、7は縄文の施された胴部資料、6は、横走隆帯を貼り複合口縁とする資料で、隆帯上には単節縄文が施される。8～14は縄文の施された胴部資料である。8は、含繊維量の少ないもので、単節LR縄文を3帯にわたって施文している。胎土に数mm程度の粗粒砂を含む。9、11、14は無節縄文が、10、12、13は単節縄文が看取される。15～19は10号土坑出土資料である。このうち15は撚糸文系土器群、16は早期の条痕文系土器群である。17は花積下層期の条痕文系土器群、18は貝殻背圧痕文、19は白色針状物質を含む条痕撫で消しの一群である。20～25は第12号土坑出土資料である。このうち20は表裏に条痕の施された口縁部資料、21は条痕撫で消しとなる胴部資料、22は貝殻背圧痕文、23は無節縄文の観察されるものである。24、25は平底となる底部資料である。26は第16号土坑出土の撚糸文系土器群の胴部資料である。27～33は第17号土坑出土の資料である。27、28は細隆起線の観察される早期野島式土器、29は単節RL縄文の観られる胴部資料、30は条痕の施される胴部資料である。32、33は底部資料で両者とも上げ底を呈す。前者は、外面に無節縄文、底面に貝殻背圧痕文、後者は外面に無節の帯間構成羽状縄文、底面も同一原体による無節縄文が施される。34、35は第18号土坑出土資料で、前者は無節縄文が観察される胴部資料、後者は無文の平底底部資料である。36～42は第19号土坑出土資料である。36は無文の平縁深鉢の口縁部資料である。37、39は同一個体と思われ、無文の口縁部と縄文施文の体部とを棒状施文具による沈線で画するものである。加曾利E式終末のキャリパー形深鉢である。40は無文の口縁部と胴部縄文帯とを微隆帯で区画するもの、42は縄文の施された胴部資料、41は垂下する丈の高い隆帯の両側に隙間なく太目の沈線を引くものである。43～45は第20号土坑出土資料である。43は単節縄文が施される胴部資料、44は沈線で画された磨消文帯が垂下する胴部資料、45は平底となる底部資料である。46は、第21号土坑出土資料で、残存部最大径13cm、残存高5cmを測る単節縄文が観察される深鉢形土器の胴部資料である。

第65図1、2は、第22号土坑出土資料で、ともに条痕文の施された胴部資料である。3、4は第24号土坑出土の胴部資料である。前者は無文、後者は貝殻背圧痕文が施される。5は、第25号土坑出土の胴部資料である。太い無節縄文を用いた帯間構成の羽状縄文が施される。内面は横位の撫である。6は第26号土坑出土資料で、白色針状物質を含む条痕撫で消しの胴部資料である。7～11は第27号土坑出土の資料である。7、8では外面に貝殻背圧痕文が観られる。9は無文、10は無節縄文が施される。11は表裏に条痕の観察される尖底底部資料である。12は第30号土坑出土の胴部資料で無文となるものである。13～16は第31号土坑出土の資料で、13は、繊維含有量の少ない表裏条痕の胴部資料で早期条痕文系土器群に該当する。14、15は、器面の剥落が著しい資料で文様の判別は難しい。16は、無繊維で胎土に粗粒砂の目立つ胴部資料である。単節RL縄文が2帯にわたって施される。縄文前期末葉の資料であろうか。17、18は第32号土坑の出土資料である。前者は縦位の条痕、後者は単節縄文が観察される。19～22は第34号土坑出土資料である。19は器面が荒れているが撚糸側面圧痕の施された肥厚口縁の資料である。21は条痕撫で消しとなる胴部資料、22は横走隆帯上に縄文が施される胴部資料である。23～28は、第35号土坑出土の資料である。すべて埋設土器として取り上げられた資料であるが、25と同一個体と思われる資料は、23、26であり他は別個体である。25は、残存部最大径22cm、残存高13cmほどの深鉢形土器の胴部資料で、帯間構成の単節羽状縄文が施される。単節RLは0段3条撚りの原体を用い、原体上端を細い繊維束で結束しておりその回転圧痕が観察される内面は横位の撫で調整が施される。29～31は第36号土坑出土資料である。

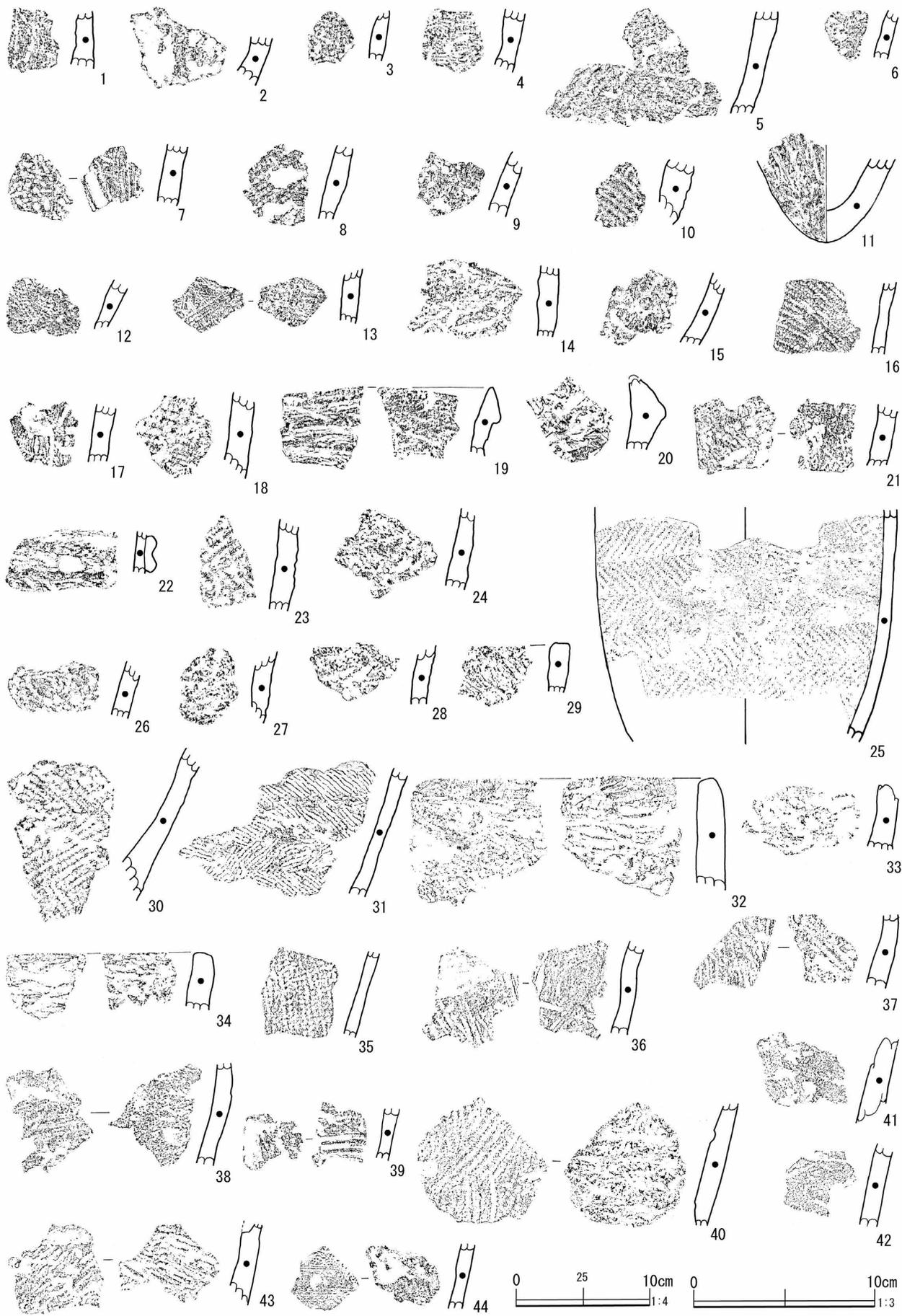


第64图 土坑出土遗物(4)

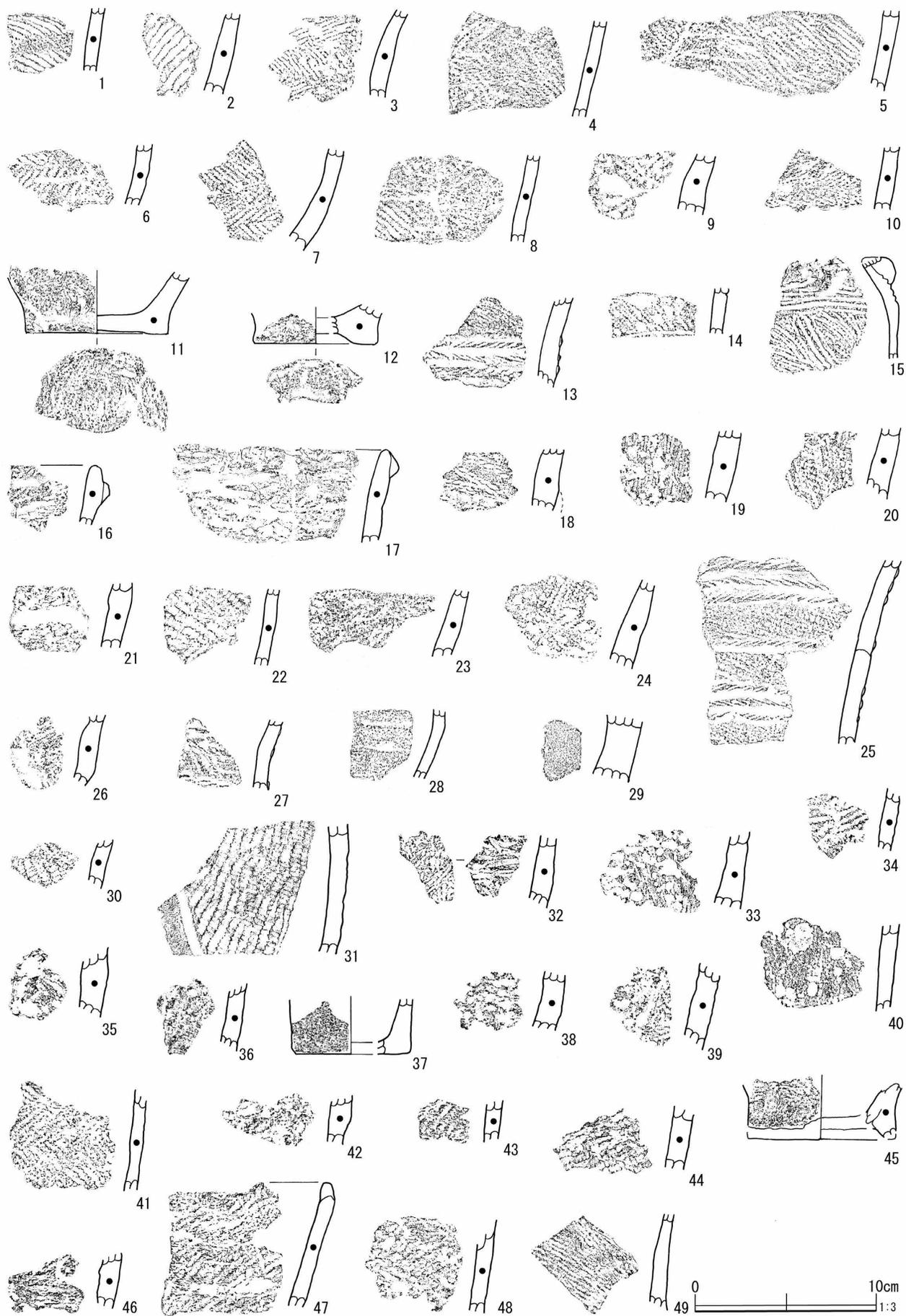
29は細い無節縄文が観察される口縁部資料、30は外面に帯間構成の単節羽状縄文、内面に貝殻背圧痕文の施された胴下半の資料、31は帯間構成の無節羽状縄文が施される胴部下半の資料である。32～34は第37号土坑出土資料である。32と34は表裏に条痕の施される口縁部資料で同一個体である。33は外面の剥落が激しく判然としない。内面は横位の条痕が残る。35～第66図15は、第38号土坑出土資料である。35は撚糸文系土器群である。36～39は表裏に条痕の観察される胴部資料である。40は、胎土に繊維とともに径5mmを超える小礫を顕著に含む胴部資料で、外面には縦位回転の単節羽状縄文を施すものである。内面は剥落が著しい。横方向に走る繊維脱虚痕が顕著に確認できる。41、42は表裏無文の胴部資料、43は外面貝殻背圧痕文、内面条痕の胴部資料、44は白色針状物質を含む条痕撫で系の土器群である。

第66図1～5は、無節縄文の施された胴部資料である。3は、細く短い原体を用いたもので帯間構成の羽状縄文が残される。4、5は同一個体と思われ、4では帯間構成の羽状縄文となることがわかる。6～10は単節縄文の施された胴部資料で、6、7、10では帯間構成の羽状縄文となる。11、12は底部資料で、前者は、わずかに上げ底となるもので外面及び底面に貝殻背圧痕文が観察される。後者は、高台風粘土紐を回したものである。13～15は諸磯b式土器後半の資料で、13は刻みのある浮線文の胴部資料、14は単節斜縄文の地文上に横位の集合沈線が巡ると思われるもの、15は、風車状の入組文を持つ口縁部資料である。16～29は第39号土坑出土資料である。16、17は横走隆帯を貼る平縁の口縁部資料である。前者は貝殻背圧痕文が観られる。後者は器面の摩滅が激しく施文は不明である。18は、2本1組の撚糸側面圧痕の観察されるもので破片下端には横走隆帯の脱落痕も観られる。19は表裏条痕の胴部、20は条痕と貝殻背圧痕文を併施文するものである。21～24は単節縄文の施された胴部資料である。25は、単節縄文の地文上に刻みのある浮線文を巡らせた胴部資料である。27とともに諸磯b2式に該当しよう。28、29も無繊維の無文資料である。中期加曾利E式に該当する。30は、第40号土坑出土の単節縄文が観察される胴部資料である。31は、第42号土坑出土の資料で、単沈線で区画した磨消文帯と縄文帯とが残された胴部資料で加曾利E式に該当する。32～36は第44号土坑出土資料である。32は外面に貝殻背圧痕文、内面に横位の条痕が観察されるもの、33は表裏に条痕が観察されるもの、34は貝殻背圧痕文、35、36は条痕の痕跡が観られるものである。37は第45号土坑出土の資料で、無繊維無文の平底底部資料である。後期堀之内式に該当する。38、39は第46号土坑出土資料である。両者とも条痕文の残るものである。40、41は第47号土坑出土資料で、前者は無文無繊維の胴部資料である。加曾利E式に該当しよう。後者は単節羽状縄文の施されたものである。42～45は第48号土坑出土資料である。42、43は無節縄文が施されたもの、44は単節縄文が観察されるものである。45は粘土紐を環状に張り付け高台風にした底部資料である。施文は判然としない。46～49は第50号土坑出土資料である。46は無節縄文の胴部資料、47は無節縄文の施された口縁部資料で、口唇部には摘み上げの突起が付される。数個単位で形成されたものと思われる。48は単節縄文の施された胴部資料、49は無繊維で、撚糸文と思われる回転圧痕が残される胴部資料である。

第67図1～6は第51号土坑出土資料である。1、2は早期の条痕文系土器群であろう。3は花積下層式期の条痕文系土器群、4は無文、5は無節縄文の施された胴部資料である。6は加曾利E式土器である。7～12は第52号住居跡出土資料である。7、8は条痕の施された胴部資料、9～11は単節縄文の観察されるものである。12は諸磯b3式のキャリパー形深鉢の口縁部資料である。13～18は第54号土坑出土資料である。13、14は条痕文の施された資料である。前者は直立する口縁部資料である。15は単節縄文の施された口縁部資料である。口唇部は角頭状を呈し内面には横位の撫でが加えられる。16、17は無節縄文が施され

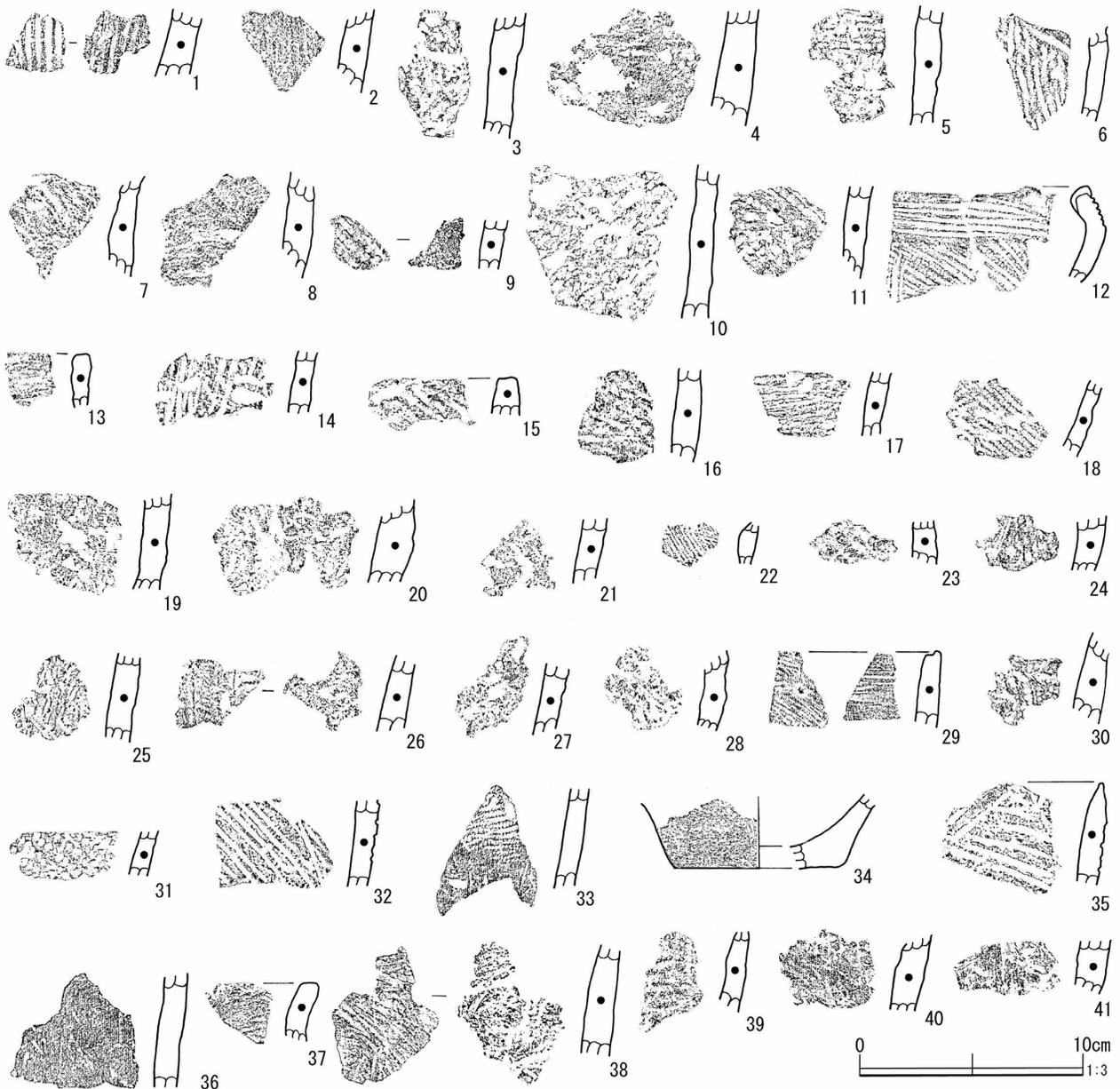


第65图 土坑出土遗物 (5)



第66图 土坑出土遗物(6)

たもの、18は帯内構成の単節羽状縄文が観察されるものである。19は第56号土坑、20は第57号土坑、21、22は第58号土坑、23～25は第59号土坑出土の資料で、無節縄文が施された胴部資料である。26～28は、第60号土坑出土資料である。26は細隆起線の観られる野島式、27、28は無文の胴部資料である。29～31は第62号土坑出土土器である。29は表裏に条痕が観られる早期の資料である。30、31は単節縄文が施された胴部資料である。32～34は、第64号土坑出土資料である。32は半裁竹管で右下がりに斜行する平行沈線を描出するもので、肋骨文の黒浜式土器に該当する。33は細かな単節縄文の観られる無繊維土器で、後期堀之内式に該当しよう。34は平底となる無文の底部資料である。35は、第68号土坑出土の資料で、半裁竹管で右下がりに斜行する平行沈線が描かれた口縁部資料である。黒浜式に該当する。36は、第70号土坑出土の資料で、無繊維無文の胴部破片である。中期加曾利E式に該当する。37～41は第71号土坑出土の資料である。37、38、40、41はいずれも条痕の施された資料である。37は角頭状の口縁部資料で、表裏と



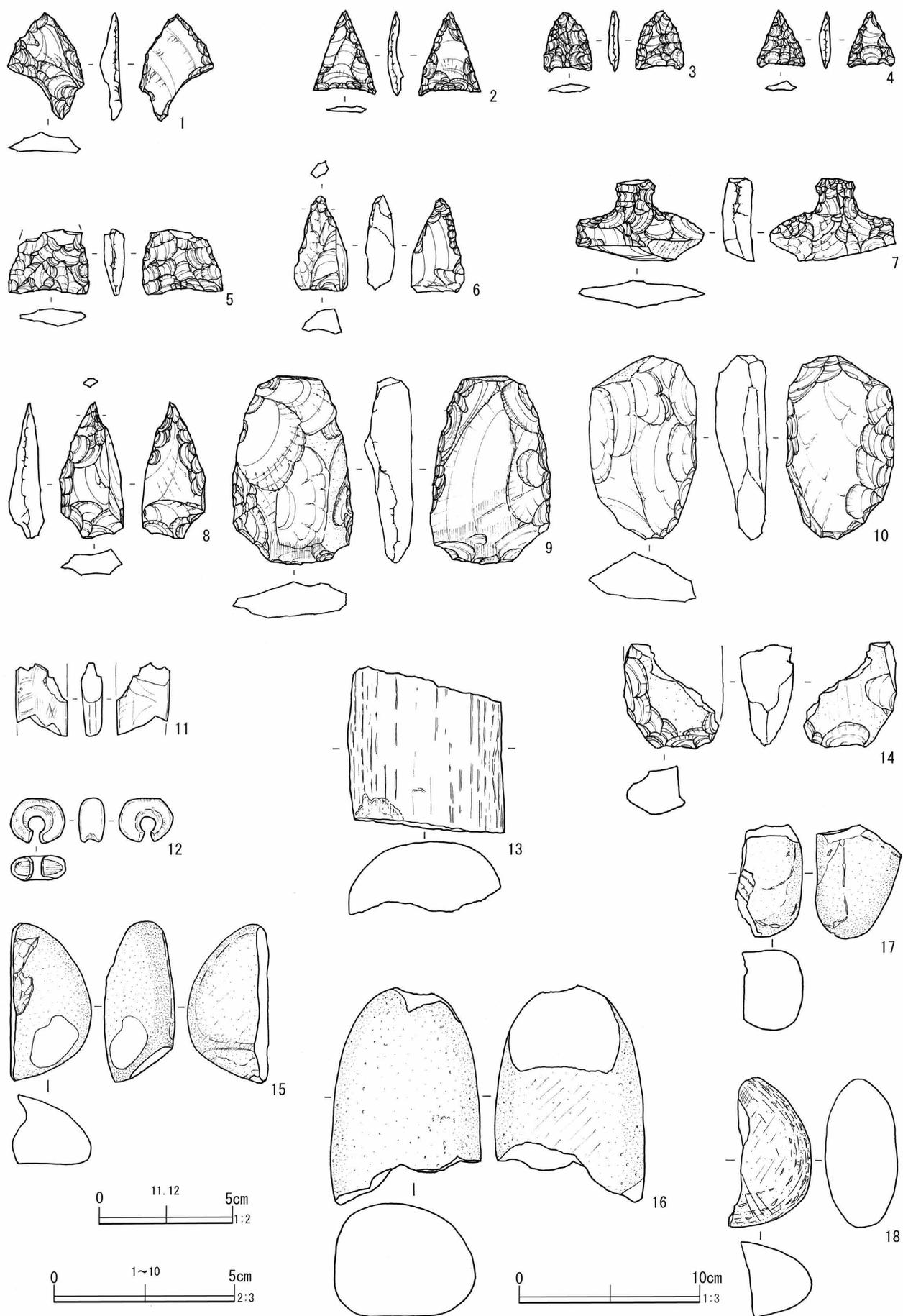
第67図 土坑出土遺物 (7)

も条痕施文後撫で消している。38は、外面も撫でが加えられている。39は単節縄文の施された資料である。
土製品 第61図16～22は第1号土坑出土の土玉である。直径のわかる6点のうち最大のもは18の3.2cm、最小は19で2.5cmである。長軸も18が最も長く3.2cm、最短は16の2.6cmである。

石器 第68図1は2次加工剥片である。横長の貝殻状剥片を素材とし、裏面には主剥離を残す。加工は図上部の尖頭部を作りだすように両側縁に表裏から施されている。2～5は石鏃である。2は基部方向に打点のある剥片を素材とし整った2等辺3角形を形成するが、素材の縁辺をそのまま生かして最低限の調整加工を施しているように見える。3は、側縁が曲線を描く小型の石鏃で、周縁部の調整加工は不規則なものであるが、器厚を薄く剥ぐためには十分な深さのある剥離が施されている。4は裏面に素材剥片の主剥離を大きく残すもので、正面側を中心に器厚を減じる剥離が施されている。5は、大型の石鏃で、先端部ほぼ半分を欠いている。裏面の剥離は長脚の規則的な剥離が用いられている。6は石錐である。厚みのある横長不整形剥片を素材とし、両側縁から細かな調整加工を加えて錐部を作りだしている。7は石匙である。横長の不整形剥片を素材とし、摘み部の整形は丁寧で規則的なものであるが、刃部の整形は未着手であるようで、正面には素材の表皮がそのまま残されている。8は、石錐である。横長の不整形剥片を素材とし両側縁から丁寧な調整加工を加え、錐部を作りだしている。9は、局部磨製の篋状石器である。扁平な楕円礫からとった横長剥片を素材とし、側縁からの階段状剥離で厚みを減じ形状を整えるように調整加工が施されている。正面と基端部に礫表皮を残すが、刃部表裏に研磨を施している。10は削器である。縦長の不整形剥片を素材とし、周縁部に調整加工を施している。裏面中央には素材剥片の主剥離を大きく残すとともに、裏面右側縁には規則的で丁寧な剥離が加えられる。11は垂飾残欠である。細長い器長の上下両端を欠く。12は、玦状耳飾である。素材を直径2cmほどの楕円形に整え、表裏両面から穿孔の上、開口部を擦り切りで開削している。開口部側の小口面に擦り切り前に付けられた槌状の研磨痕が観られる。13は、石棒残欠である。大振りの石棒の中軸部分の残欠である。被熱痕を認める。14は、打製石斧残欠である。左側縁から円刃をなす刃部を残し欠損している。扁平な楕円礫を素材とし表裏に礫表皮を残し、周縁部加工を施したものである。短冊形を呈したものと思われる。15は磨石兼用敲石であろう。扁平な円礫を素材とし裏面下方の屈曲部付近を中心に磨り痕が残されるほか下端の小口や正面右側の割れ口の一部

第12表 土坑・炉穴出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
68	1	2次加工剥片	チャート	3.0	2.0	0.6	2	第10号土坑
68	2	石鏃	チャート	2.2	1.9	0.2	1	第51号土坑
68	3	石鏃	黒耀石	1.7	1.4	0.2	1	第51号土坑
68	4	石鏃	チャート	1.5	1.3	0.3	0	第51号土坑
68	5	石鏃	瑪瑙	(1.7)	2.2	0.6	(2)	第1号炉穴・被熱か
68	6	石錐	赤チャート	2.6	1.5	0.8	2.8	第52号土坑
68	7	石匙	チャート	2.3	3.5	0.8	5.1	第51号土坑・未製品か
68	8	石錐	チャート	3.8	1.7	0.9	5.9	第35号土坑
68	9	篋状石器	黒色緻密安山岩	5.2	3.2	1.0	25.1	第49号土坑・局部磨製
68	10	削器	ホルンフェルス	5.1	3.0	1.4	23.9	第52号土坑
68	11	垂飾	滑石	(2.7)	1.9	0.8	(4.5)	第36号土坑
68	12	玦状耳飾	瑪瑙	1.7	2.0	1.0	3.9	第59号土坑
68	13	石棒	絹雲母片岩	(8.3)	8.5	(3.8)	(459.0)	第5号土坑・被熱
68	14	打製石斧	硬砂岩	(3.9)	6.8	2.8	(71.3)	第5号土坑
68	15	磨石兼用敲石	砂岩	8.6	4.4	3.8	166.7	第5号土坑
68	16	磨石	花崗岩	(12.0)	8.3	6.3	(798.0)	第19号土坑
68	17	磨石	砂岩	(5.6)	(3.6)	4.5	(141.2)	第8号土坑・被熱
68	18	磨石	硬砂岩	(8.1)	(3.9)	(4.1)	(193.4)	第5号土坑



第68图 土坑·炉穴出土遺物

にも敲打痕が観られる。16~18は磨石である。16は長楕円形の円礫を素材とし表裏に加え側面も磨石として使用している。上端に潰痕を認めるが、花崗岩特有の風化によるものか敲打利用によるものか判別しがたい。17は、不正楕円形の円礫を素材とし、正面以上に側面を磨面として使用している。被熱し赤褐色を呈する。18は扁平な楕円礫を素材とするもので、表裏両面に明瞭な磨り痕を残す。

(3) 炉穴

●第1号炉穴 (第69図)

C9グリッドに位置し、第4号土坑に切られる。北側は調査区外、東端は攪乱に切られる。残存部の長径は約2.2m、短径は約2.1mを測る。平面形は不整形で中央部に直径約0.9mの深い掘り込みを有し、確認面からの深さは約0.9mを測る。底面は平坦で被熱はあまり認められなかった。覆土内には多量の焼土粒子を含む。

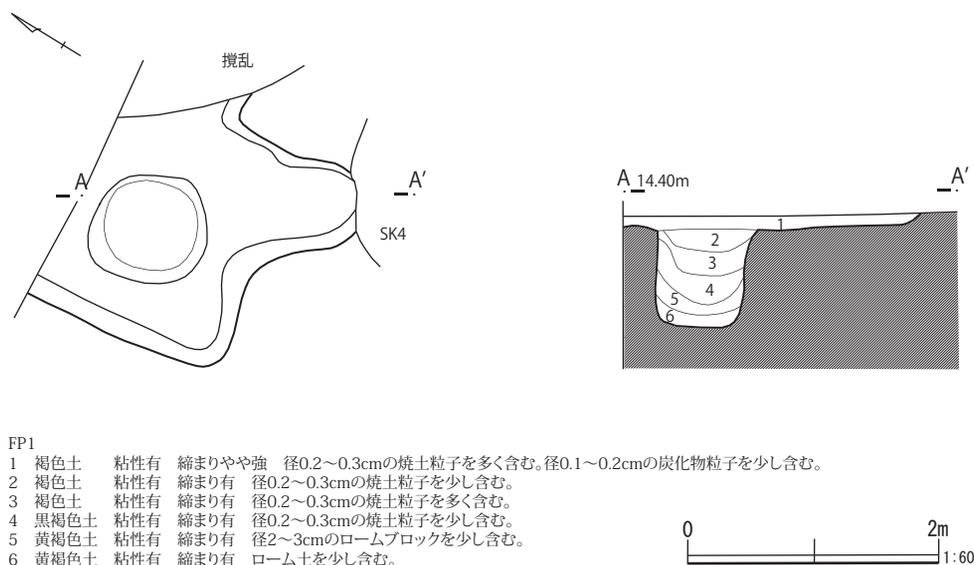
出土遺物 (第70図)

土器 1~20は第1号炉穴出土資料である。1、2は表裏に条痕の施された胴部資料である。3は外面に単節LR縄文、内面に横位の条痕が施された胴部資料である。原体末端を無節縄文で結束しておりその回転圧痕が側面圧痕のように転写される。4は口唇部がわずかに外側に引き出される平縁深鉢の口縁部資料で、単節LR縄文が施される。5は、帯内羽状構成をとる無節縄文の胴部資料、6、7は単節RL縄文の施される胴部資料である。8は平底の底部資料で、底部外面及び底面には単節LR縄文が施される。9、11~15は指痕薄手の木島式土器である。11、12では条線文が観察される。10は浮島式土器と思われる。16は平行沈線間に爪形文を付す諸磯a式土器である。赤彩されている。17~20は中期加曾利E式土器である。

(4) 溝跡

●第1号溝跡 (第71図)

A3・B2・3・C2グリッドに位置し、第63号住居跡と第70号土坑を切る。調査区内を東西に長さ約12.8m延伸し、両端ともさらに調査区外へ延びる。平面形は直線的で、調査区内での最大幅は約0.5m、確認面



第69図 第1号炉穴

からの最大深は約0.2mを測る。

検出位置から判断して、第2地点で検出された第2・3号溝跡に関わるものと思われる。数次にわたる掘り直しが行われ、近世以降に根除けなどの目的で掘られた溝と考えられる。

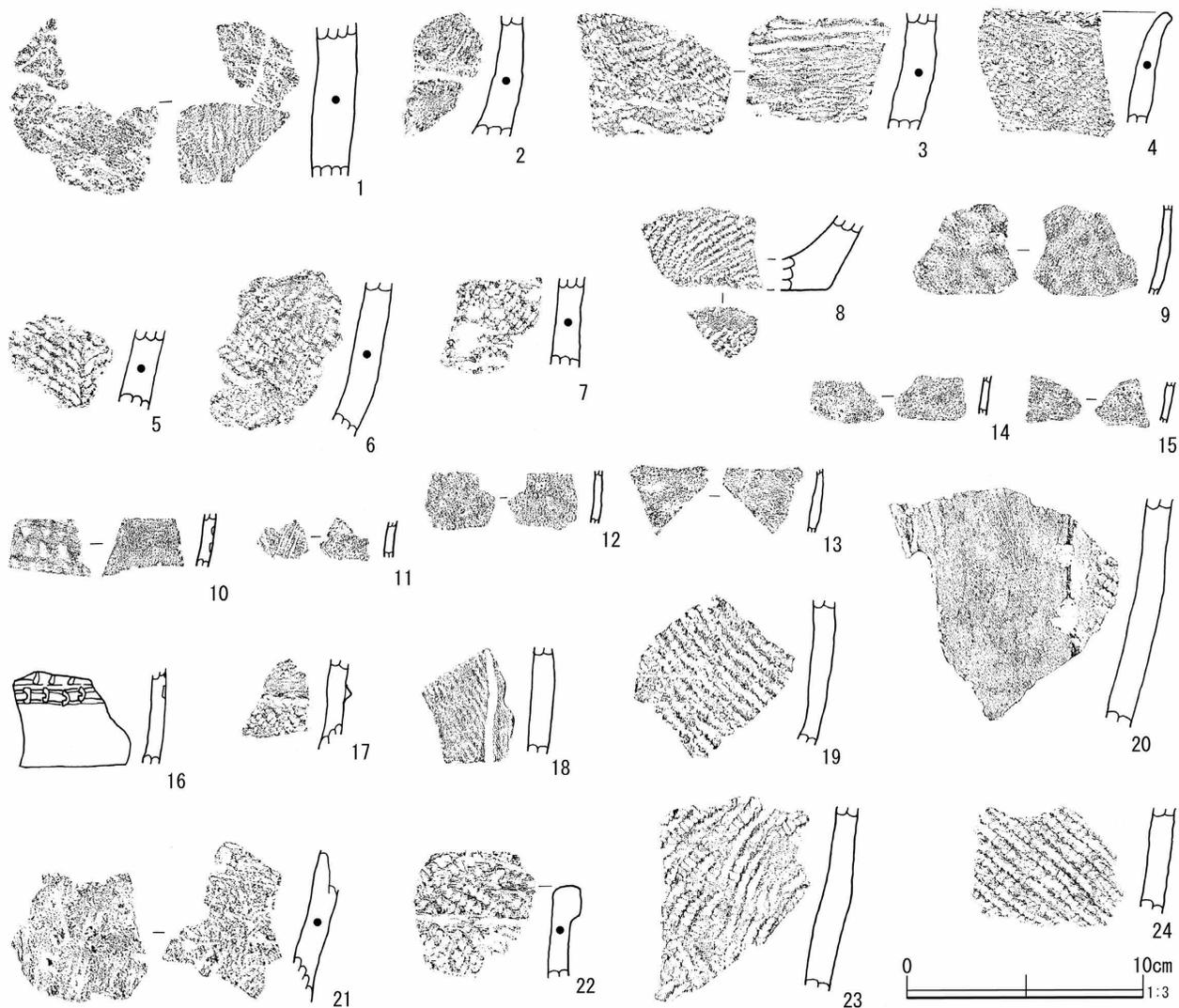
●第2号溝跡（第3図）

A3グリッドの調査区西壁断面図で存在が認められた。断面図で認められる限り、深さは約0.4mを測る。

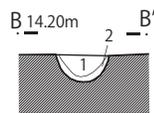
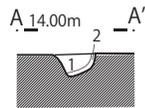
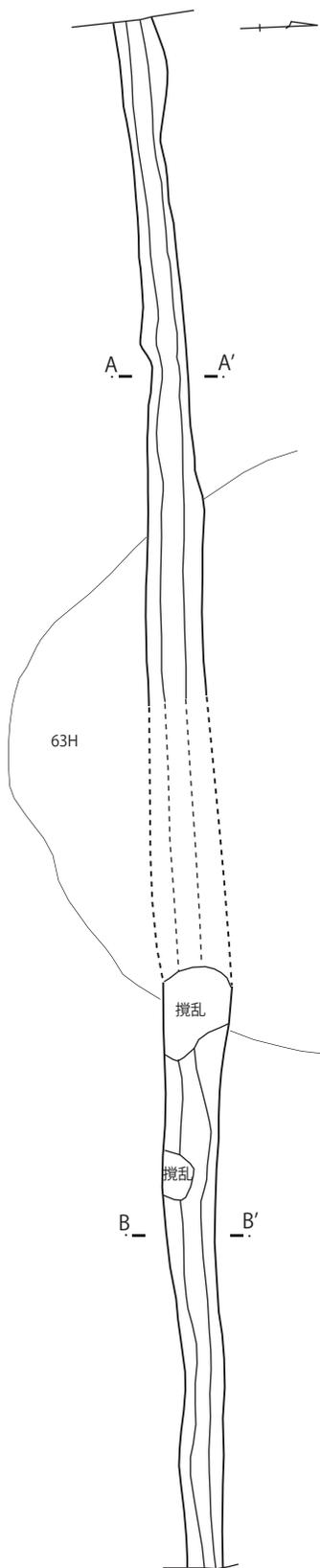
第1号溝跡と同様に、第2地点で検出された第2・3号溝跡に関わるものと思われ、数次にわたる掘り直しの内の1条と考えられる。

出土遺物（第70図）

土器 21～24は第2号溝出土土器である。21は表裏に条痕文の残る胴部資料、22は、肥厚口縁を持つ平縁深鉢の口縁部資料である。肥厚する口縁外面と段下には単節RL縄文が施されるが、口唇端面には単節LR縄文が施され、帯間構成の羽状縄文を形成している。23、24は中期加曾利E式土器の縄文施文の胴部資料である。



第70図 炉穴・溝跡出土遺物



SD1

- 1 黒褐色土 粘性有 締まり有 径0.2~0.3cmのローム粒子を少し含む。
- 2 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。



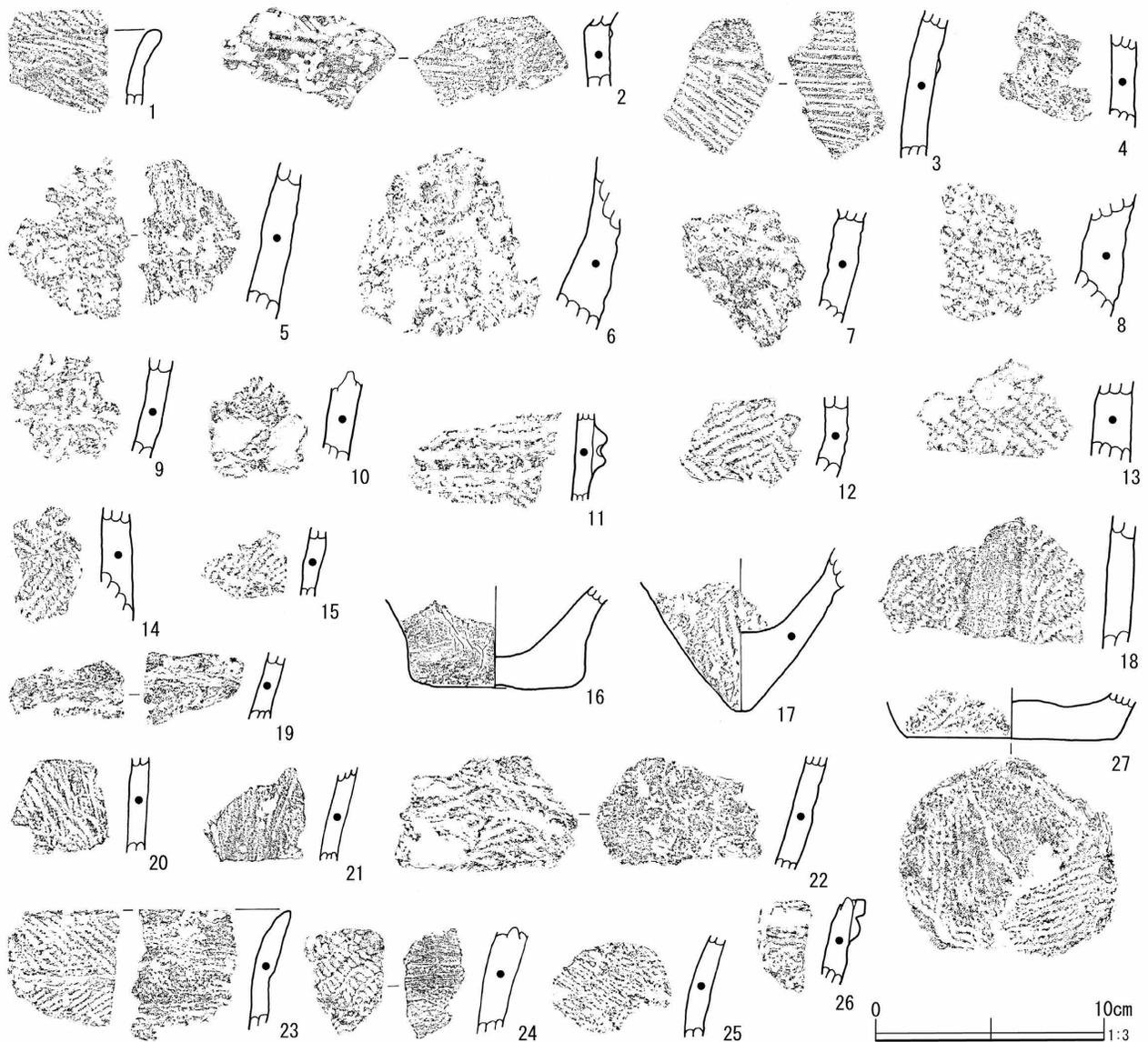
第71図 第1号溝跡

●第3号溝跡 (第3図)

A3グリッドの調査区西壁断面図で存在が認められた。断面図で認められる限り、深さは約0.2mを測る。第1・2号溝跡と同様に、第2地点で検出された第2・3号溝跡に関わるものと思われ、数次にわたる掘り直しの内の1条と考えられる。

(5) 風倒木跡出土遺物 (第72図)

土器 1~18は第1号倒木跡出土資料である。1は、撚糸文土器である。やや外反する口唇部は外面に面を持ち、口唇端面から器面上部にかけて撚糸文が施される。2、3は表裏に条痕文が観察されとともに横走する細隆起線の付されたもので、早期野島式に該当する。4~7は条痕文の施された胴部から底部周辺の資料である。8~10は縄文が観察される胴部資料である。8は単節RL縄文、9は無節L縄文を観ること



第72図 風倒木跡出土遺物

ができる。11は横走する2条の隆帯が貼られた資料である。隆帯には篋状施文具による刺し切るような連続刺突が観察される。隆帯下部には単節縄文と思われる痕跡が観られ、この隆帯が口縁部文様帯と胴部羽状縄文帯とを区画していたものと思われる。12～15は、単節羽状縄文の観察される胴部資料である。12は帯間、帯内構成の羽状縄文をとるもので、ちょうど菱形を構成する部分である。16は、平底の底部資料である。中期加曾利E式に帰属しよう。17は、表裏に条痕の施された尖底土器の底部資料である。内底面はわずかに面を持つ。18は中期加曾利E式の胴部資料である。19～27は、第2号倒木跡出土資料である。20、21は条痕文の観察される胴部資料、22は帯内、帯間構成の菱形羽状となる無節縄文の胴部資料、23は肥厚口縁の平縁深鉢口縁部資料、24は外面単節縄文、内面条痕の胴部資料である。25は細い無節縄文の看取される胴部資料である。被熱還元化し、灰褐色を呈する。26は2条の横走隆帯の貼られた胴部資料である。27は、外面及び内面に単節縄文の施された平底の底部資料である。底径は9.5cmを測る。

(6) グリッド出土遺物 (第73～97図)

土器については、第1地点、第2地点報告書に従って分類の上記述する。

第1群土器 (第73図1～9)

早期初頭、撚糸文系土器群を一括する。決して出土量の多いものではないが、当市の縄文土器としては最古の一群である。第8地点の調査では、第53号住居跡など、複数片の出土を見る遺構があり注目される。1～4は口縁部資料で、1は口唇外面及び口唇端面で施文を変えるもので古手の様相を呈する。

第2群土器 (第73図10～22)

縄文時代早期の条痕文系土器群を一括した。後述する花積下層式に伴う条痕文系の土器群と異なり、胎土の繊維や砂粒の含有量が少なく焼成も良好なものが目立つ。第52号住居跡、第53号住居跡などでは一定量の出土が見られたが、第2地点のように当該期の遺構が形成されている様子は見受けられない。

10は絡条体圧痕文の観察される口縁部資料、11は貝殻腹縁による連続刺突を付す口縁部資料である。12は口唇外面に篋状施文具による連続刺突の施された平縁土器、13、14は口唇端面に刻みを持つもので、細隆起線によるモチーフの区画が行われるものである。16、17、20では太目の沈線によってモチーフが描出される。19、21、22は当該期の胴部資料で表裏に条痕が施される。

第3群土器 (第73図23～第88図14)

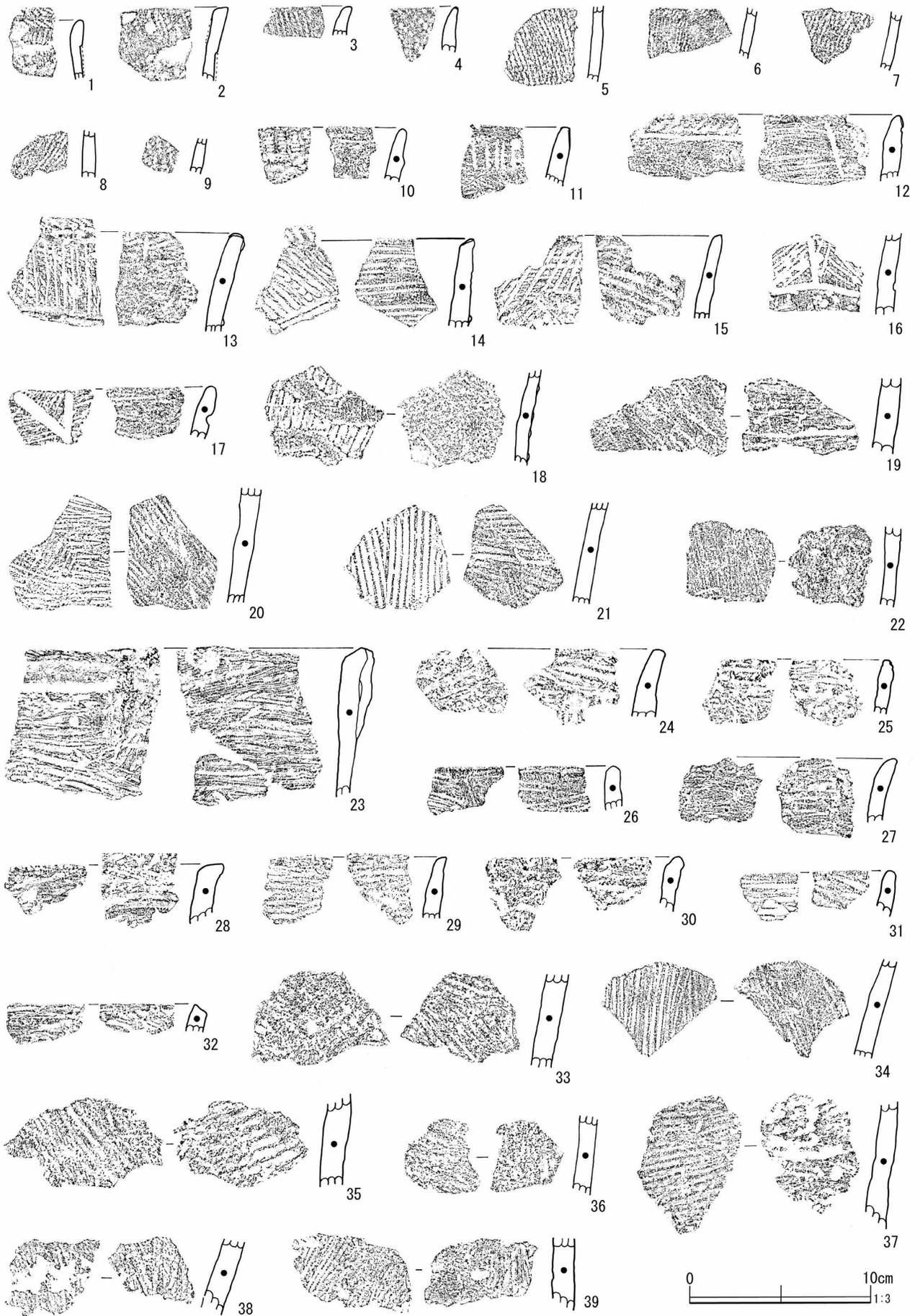
タタラ山遺跡の中核をなす土器群である。縄文時代前期初頭花積下層式土器及び該期に並行する異系統の土器群を一括する。特徴に沿っていくつかに分類して述べる。

第1類

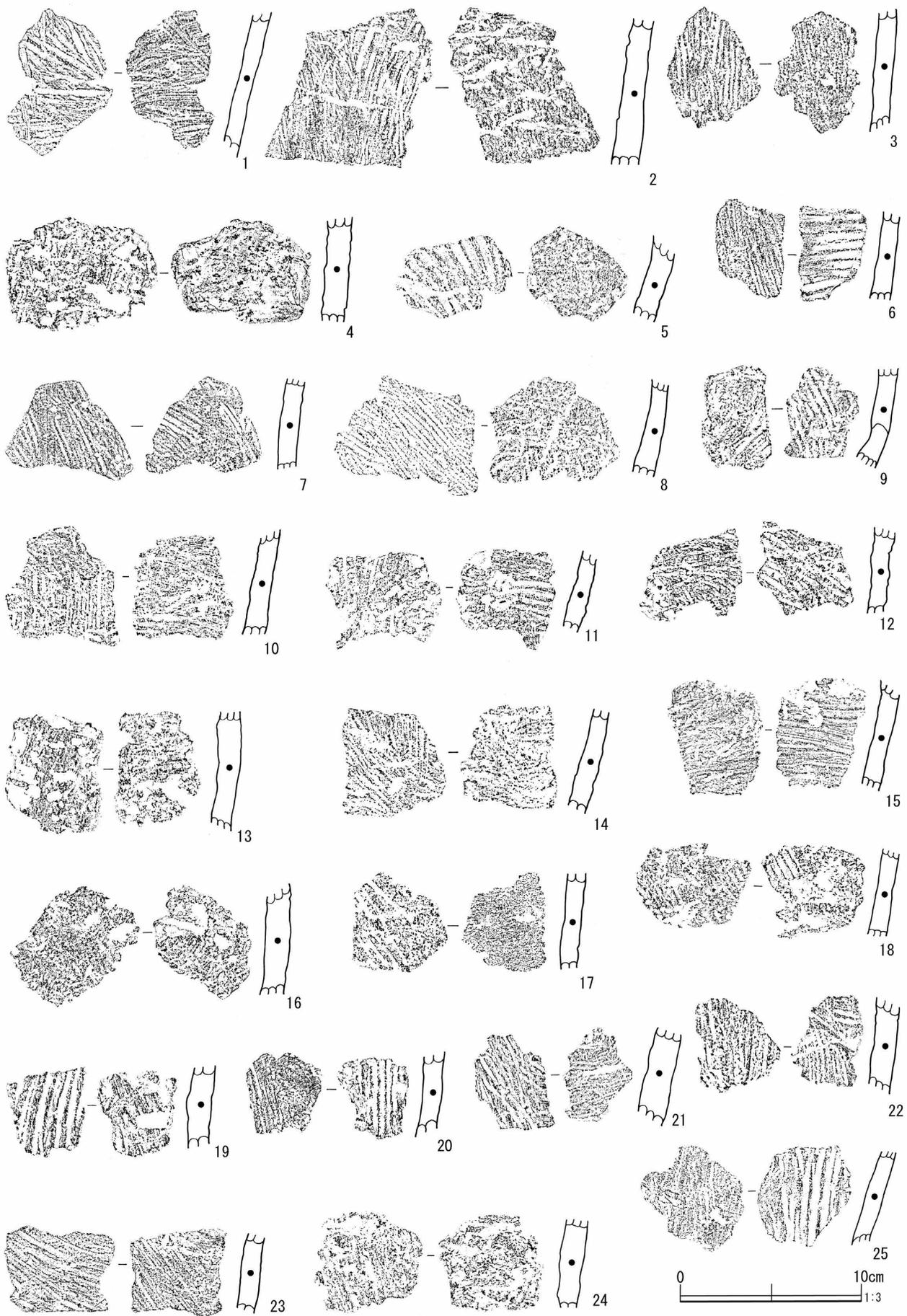
条痕文を施すものを一括する。

A種 (第73図23～第75図29)

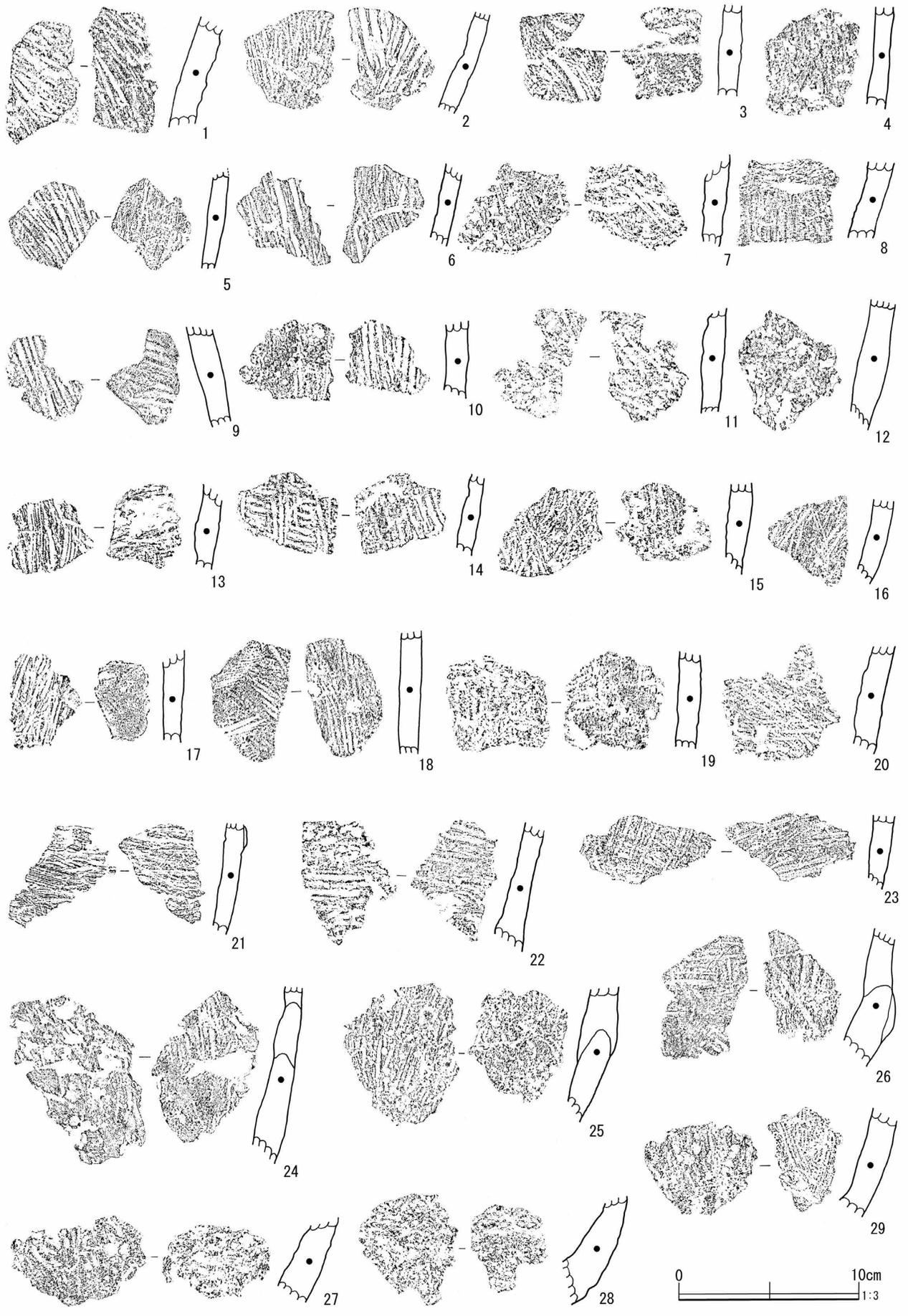
表裏に条痕を残す一群である。第2群土器とは胎土に含まれる繊維や砂粒の量が明らかに異なり、明確に一線を画することができる。繊維脱虚痕や器面の剥落、潰痕が目立つ脆弱な一群である。第73図23～32は、本種の口縁部資料である。23は、横位の条痕の上に丈の低い横走隆帯を貼り、さらに口唇部から垂下隆帯を付すもので、本種より、後述のB種に近いものであるが、B種を特徴づける器面調整手法が全く異なることから本種とした。残る資料はいずれも表裏に横位の条痕が観察されるものである。33～第75図29は本種の胴部資料である。条痕には、大型の貝殻を用いたと思われる太く彫りの深いものから、明らかに



第73図 グリッド出土遺物(1)



第74図 グリッド出土遺物 (2)



第75図 グリッド出土遺物(3)

貝殻ではない工具を用いた条痕を施すものまで多様なものがあるが、器面整形手法として同一のものと判断した。例えば第74図5、6、19、20、25などでは彫りの深い条間の広い条痕が用いられるが、第74図14の外表面や第75図2の外表面、8、16、21などは彫りの浅い繊細な条痕が付される。

B種（第76図1～第77図25）

本種は、条痕施文後これを撫で消しているものである。本種は、胎土に白色針状物質を含む例が顕著であるほか、花積下層式土器に見られない平行沈線を用いたモチーフの描出を行うものを含むもので、南関東の下吉井式土器ないし、これと緊密な関係を持つ土器群と思われる。

第76図1～18は本種の口縁部資料を一括した。1～3、5、6、14では半裁竹管または多裁竹管と思われる施文具を用いて文様帯の区画や鋸歯、曲線などが引かれる。19～26も同様の手法で沈線文が描かれる。27～第77図25は本種の胴部資料である。撫で整形時の乾燥状況や胎土の状況によって、条痕の残存状況にばらつきが認められるが、少なくとも外表面は丹念に撫でを加えて平滑にしようと試みている。

第2類（第77図26～35、第78図1～33、第91図1、4）

貝殻背圧痕文の施された一群を一括する。

第78図1～6は、本類の口縁部資料である。1では、口縁部に粘土紐を貼り肥厚口縁としたもので、肥厚部を含め口縁部外表面及び内表面にも施文が及ぶ。3、4は内表面が条痕となるものである。貝殻の背を押し当てるだけでなく、第77図29や第78図20のように殻頂部を押し当て繊細な放射状の圧痕を形成するものや、第78図29のような殻側面を押し当てるものなどのバラエティがある。また、第77図27や第78図13のように肋の走行方向を揃え、縄文のように見せるものなどもある。分類はしなかったが、縄文と組み合わせると口唇部や底面などだけに使用するものなどもある。

第91図1は、外表面にまばらな貝殻背圧痕文、内表面に斜行する条痕文を残す深鉢形土器の胴部中葉の資料である。残存部最大径は17cm、残存高7cmほどを測る。外表面の潰痕は著しい。4は外表面に貝殻背圧痕文を密に施す深鉢形土器の胴部資料である。内表面は丁寧に撫でが加えられる。残存部最大径は15.5cm、残存高8cmを測る。

第3類（第77図36～42）

指痕薄手の木島式土器を一括する。

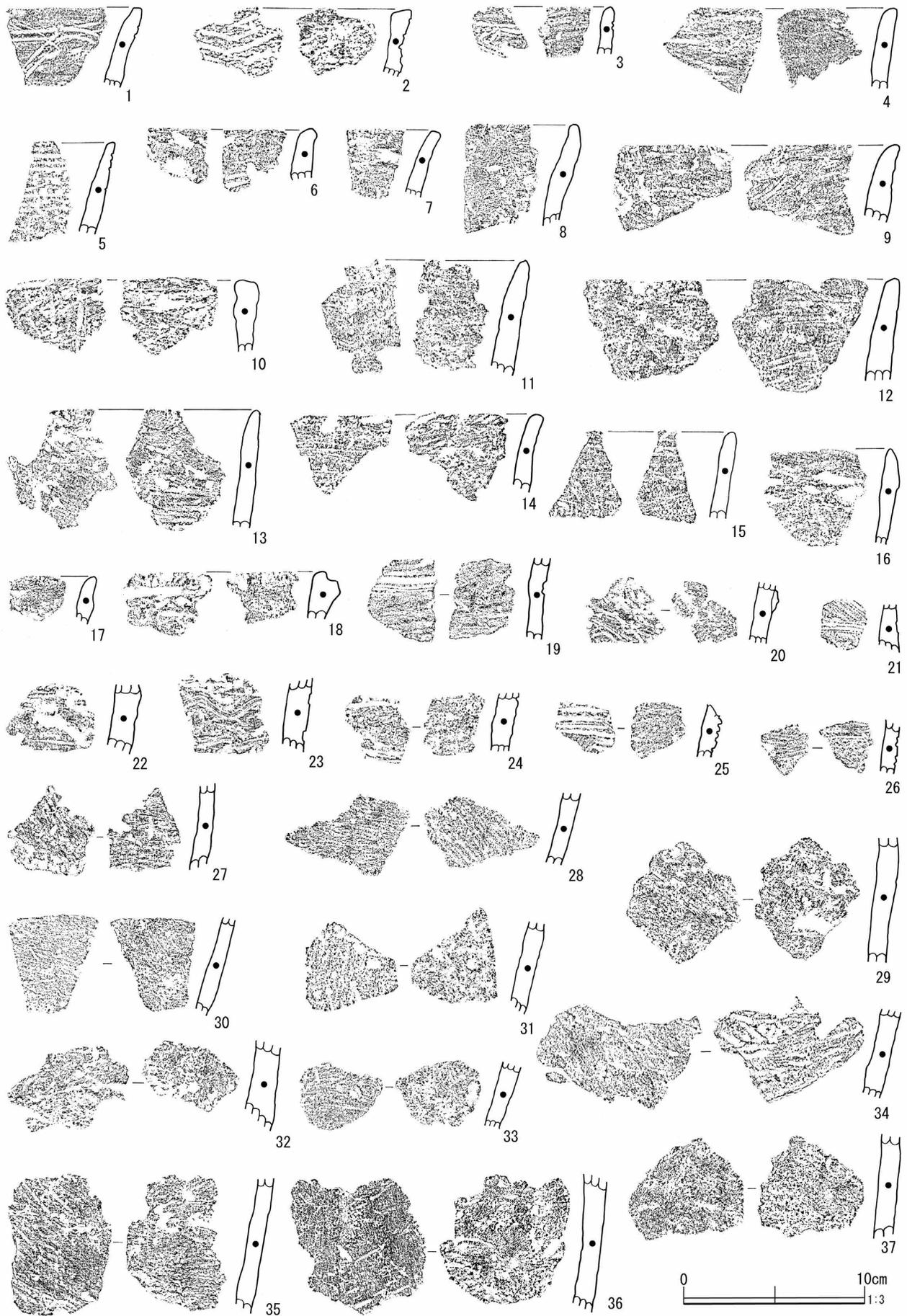
東海地方に分布の中心を持つ木島式は、過去のタタラ山遺跡の発掘調査でも少なからず出土しており、花積下層式土器を軸とした並行期の土器群を把握するときにひとつの指標としても役割を果たす。今回の調査地点では、残念ながら目立った出土はなく、出土しても摩耗していたり小片であったり、存在感の立つものとは言えない。36は口縁部資料で、口唇部に摘み上げるような凹凸文を付す。37は、口縁部下端を区画する凹凸文列が看取されるもの、38、39は縦位の条線文が、40では左下がりに斜行する条線文が観られるものである。

第4類（第79図～第85図、第91図2、3、5、6）

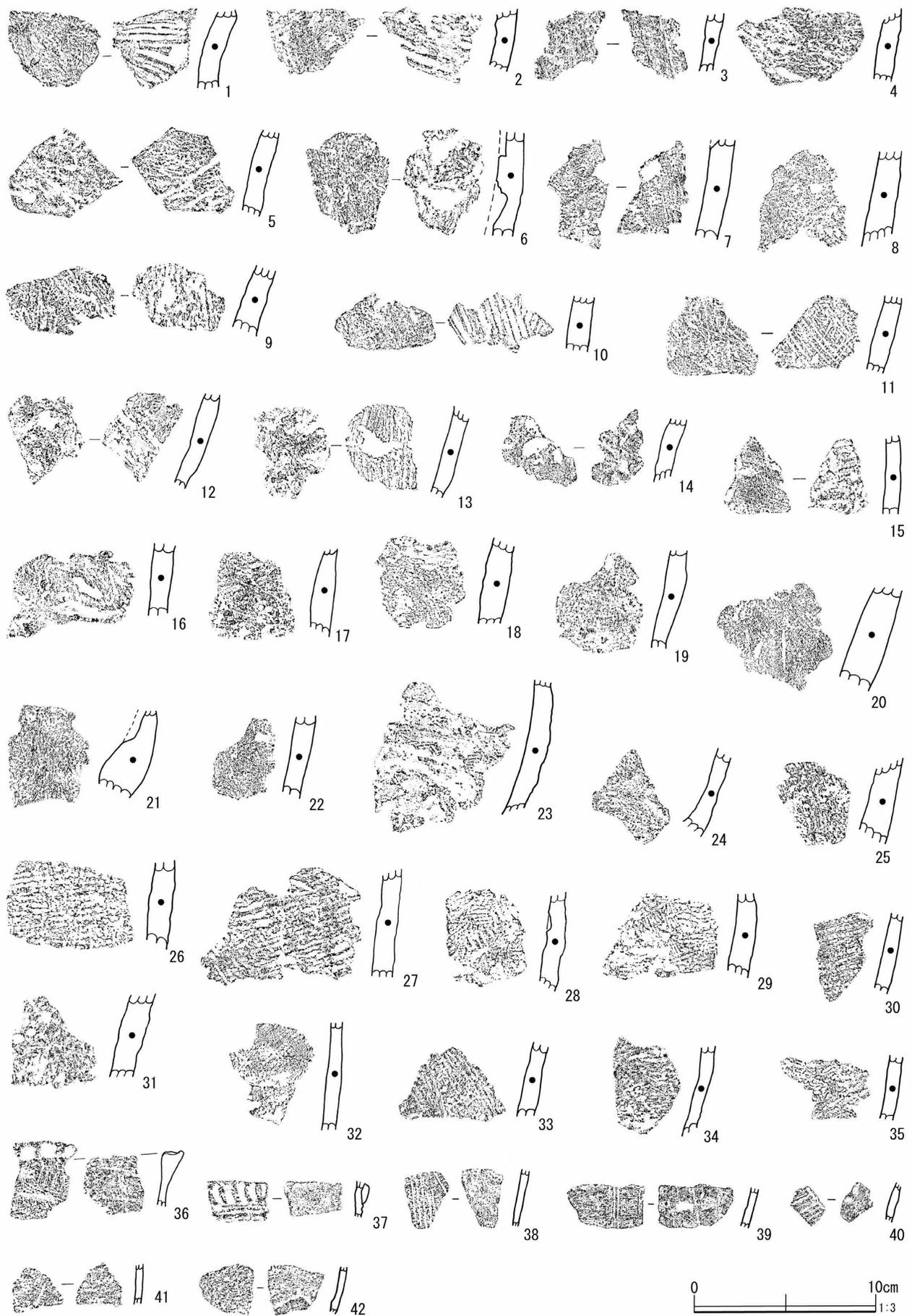
本類は、第3群土器の主体をなすもので、撚糸文を含む縄文が施された一群である。この一群は、単独で用いられるものもあるが、後述の撚糸側面圧痕系の土器や工具文系の土器の胴部資料としても多用される。単節、無節など縄の種類と、内表面の条痕等の施文状況によっていくつかに細分した。

A種（第79図、第80図、第91図3、5）

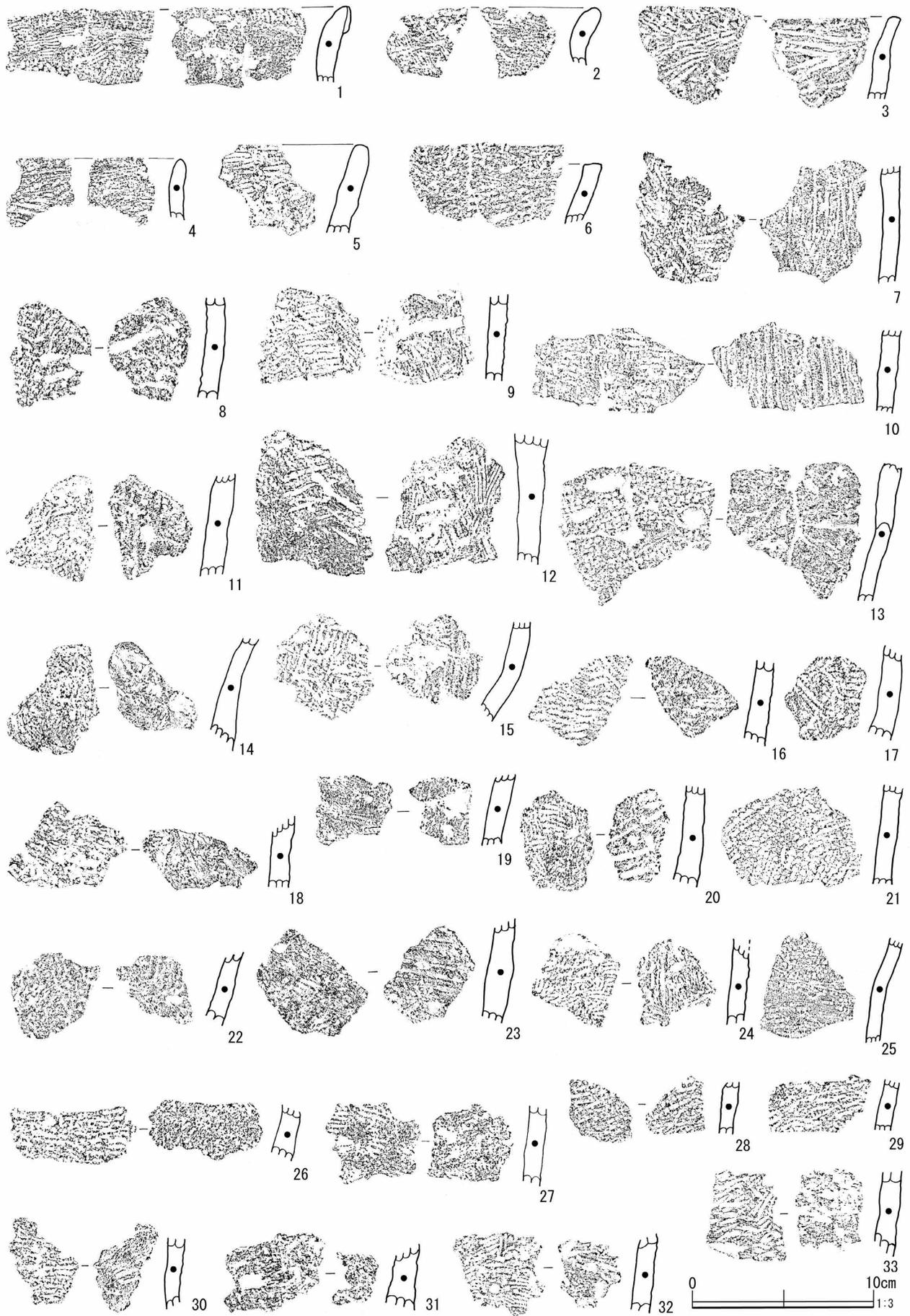
本種は外表面に無節縄文、内表面に条痕文の観察される一群である。第79図1～13は本種の口縁部資料である。1、6、7、11は羽状構成をとるもので、7では帯間、帯内両構成をとる可能性がある。1、2、8では口



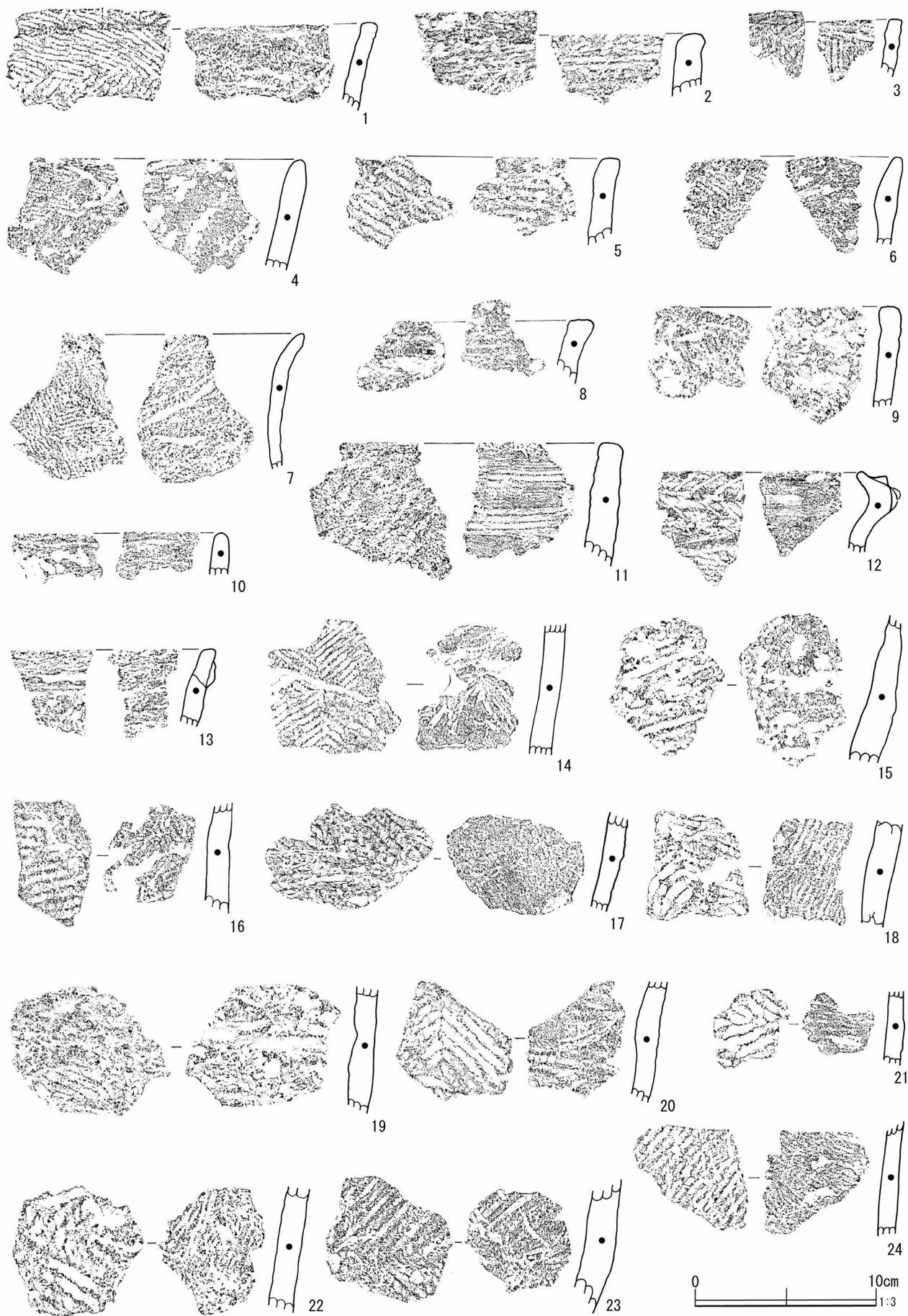
第76図 グリッド出土遺物(4)



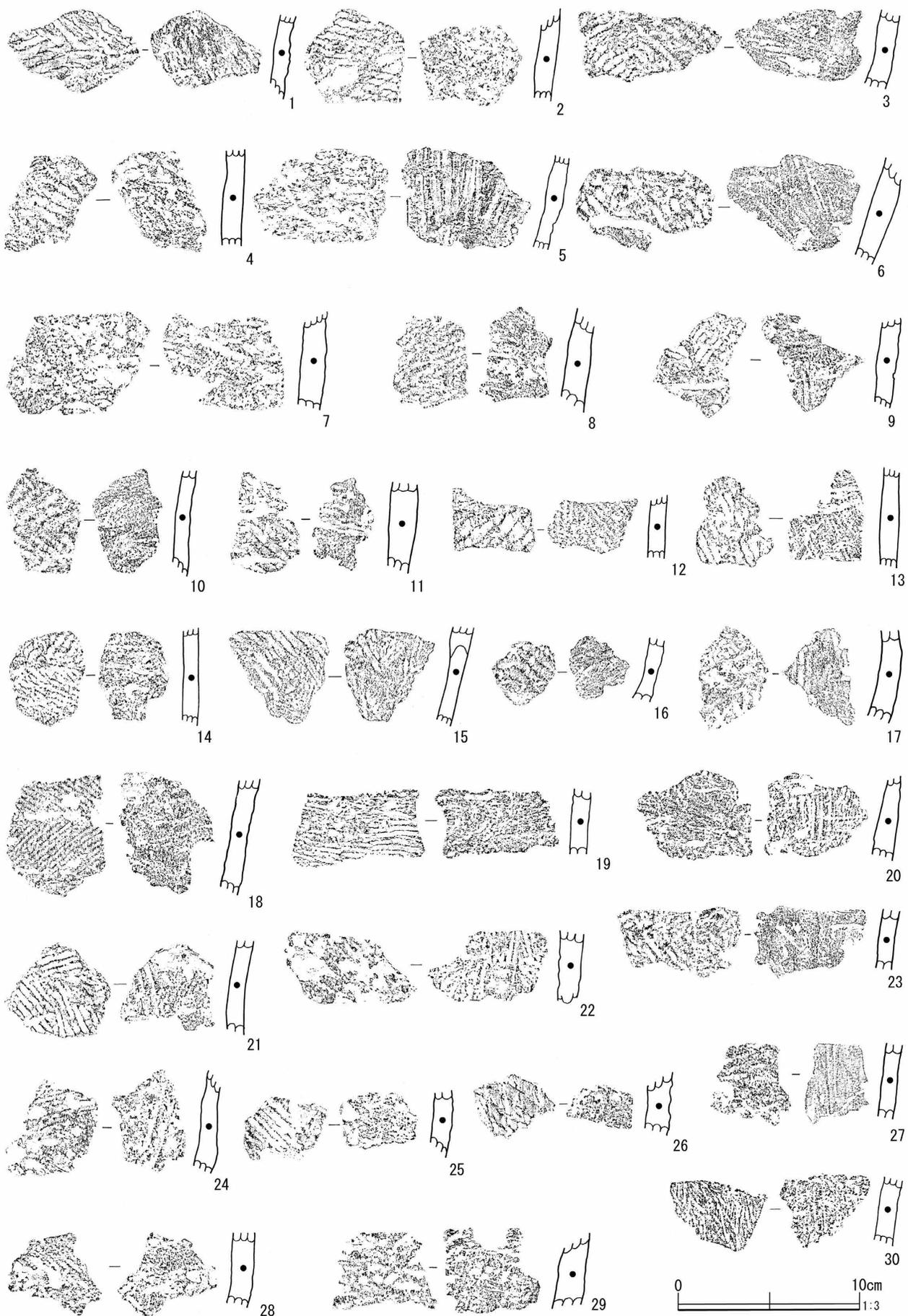
第77図 グリッド出土遺物 (5)



第78図 グリッド出土遺物(6)



第79図 グリッド出土遺物(7)



第80図 グリッド出土遺物(8)

唇部にも施文が及ぶ。12は内折する口縁部外面に隆帯が付され、刻みが施される。13は丈の低い隆帯が付され、肥厚口縁化している。以下胴部資料であるが、第79図14、20～22、第80図1～7など、太く粗い無節縄文が目立つのも本種の特徴である。

第91図3は、帯間、帯内構成をとる羽状縄文深鉢形土器の胴部資料である。内面にも明瞭な条痕が観察される。残存部最大径は22.5cm、残存高12cmを測る。焼成良好、遺存状態も良い。5は、太い無節縄文を用いた帯間構成の羽状縄文深鉢の胴部資料である。条間が広く開いて見えるが、整形後表面が硬化し始めてから施文しているためと思われる。内面は縦位から斜位の条痕が観察される。胎土は洗練され、繊維脱虚痕は少ない。

B種 (第81図、第82図)

本種は外面に単節縄文、内面に条痕または縄文の認められる一群である。

第81図1、2は内面に縄文の認められるものである。全面に施されるものではなく、口縁部周辺にとどまる。3～21は、擦痕風の整形痕や条痕の観察されるものである。21は波状縁となるものである。胴部資料のうち、第82図4、10、16～18、22、23は外面の縄文が、縦位回転施文され縦長の羽状縄文が形成されるもの、第82図2、14は、外面に単節縄文と貝殻背圧痕文が併施文されるものである。

C種 (第83図、第91図2)

本種は、外面に無節縄文が観察され、内面は撫で整形されるなど条痕文の観察されないものである。

第83図1～14は本種の口縁部資料である。1～8は内削、角頭、などの形態をとるが、9～14は隆帯を貼るなどして口縁部外縁を肥厚させるものである。胴部資料では、21は整った菱形構成となるもの、22は残存部最大径11cm、残存高7cmほどの深鉢形土器の胴下半部資料である。33～46は帯間構成の羽状縄文の観られるもので、35、37、45などでは、原体末端の結束痕が看取される。47～49は胴部に横走隆帯を持つものである。

第91図2は、繊細な無節縄文で帯間構成の羽状縄文を形成する深鉢形土器の胴部上半の資料である。残存部最大径は24cm、残存高10cmほどを測る。

D種 (第84図、第85図、第91図6)

本種は、外面に単節縄文や撚糸文が施された一群である。

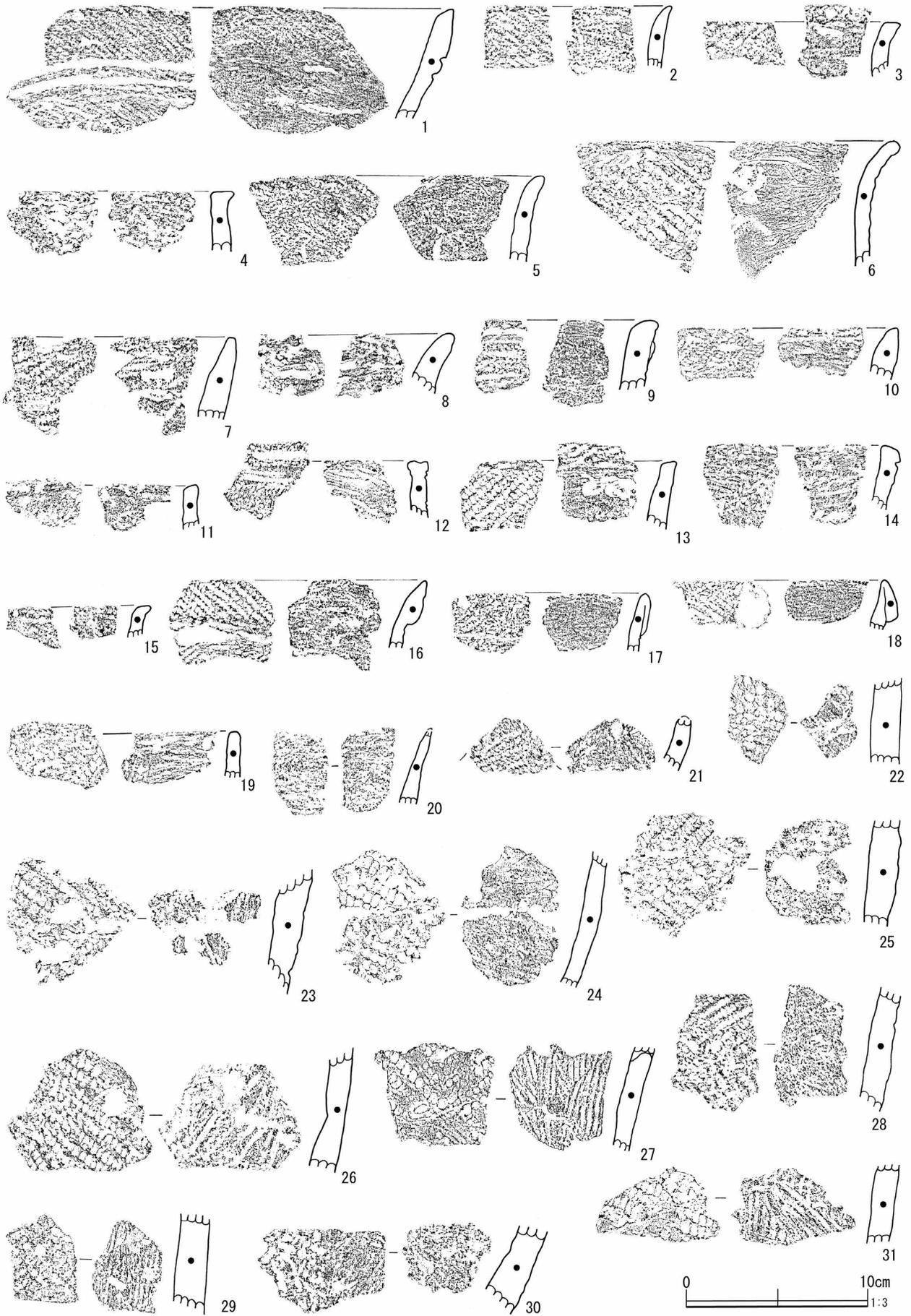
第84図1～12は、本種の口縁部資料である。2、3、5～7は明瞭な角頭状をなすもの、10、11は肥厚口縁となりやや外反するもの、12は波状縁となるもの、13は肥厚口縁とし、体部に撚糸文による縦長の菱形構成の羽状縄文を形成するものである。体部の資料では、14、15が13と同様に撚糸による縦長の菱形羽状を形成するもの、18～20は節の大きな単節縄文を施すものである。そのほか多くが帯間構成の羽状縄文を形成している。第84図39や、第85図7、10、12などでは0段多条の単節縄文が用いられる。また、第85図7、10、28～30などのように原体末端の結束回転痕が観られるものも多い。

第91図6は、帯間構成のほかに帯内構成もとる羽状縄文土器である。深鉢形土器の胴部上半の資料と思われる、大きく外反し口縁部へ至るものと思われる。残存部最大径は18.5cm、残存高9cmほどを測る。

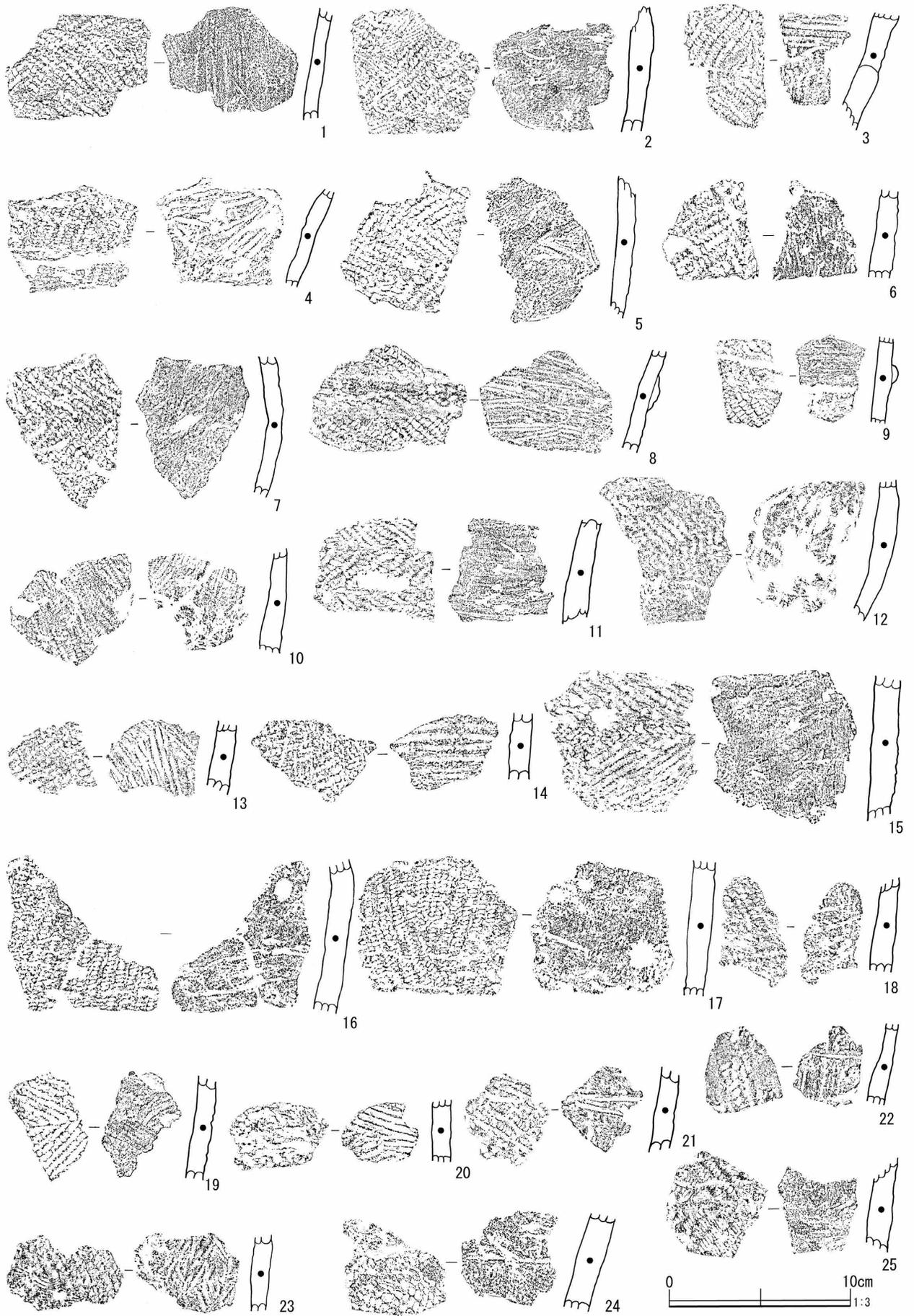
第5類 (第86図1～30、第91図7)

第3群土器を象徴する撚糸側面圧痕文やこれとともに施文される工具文の土器を一括する。

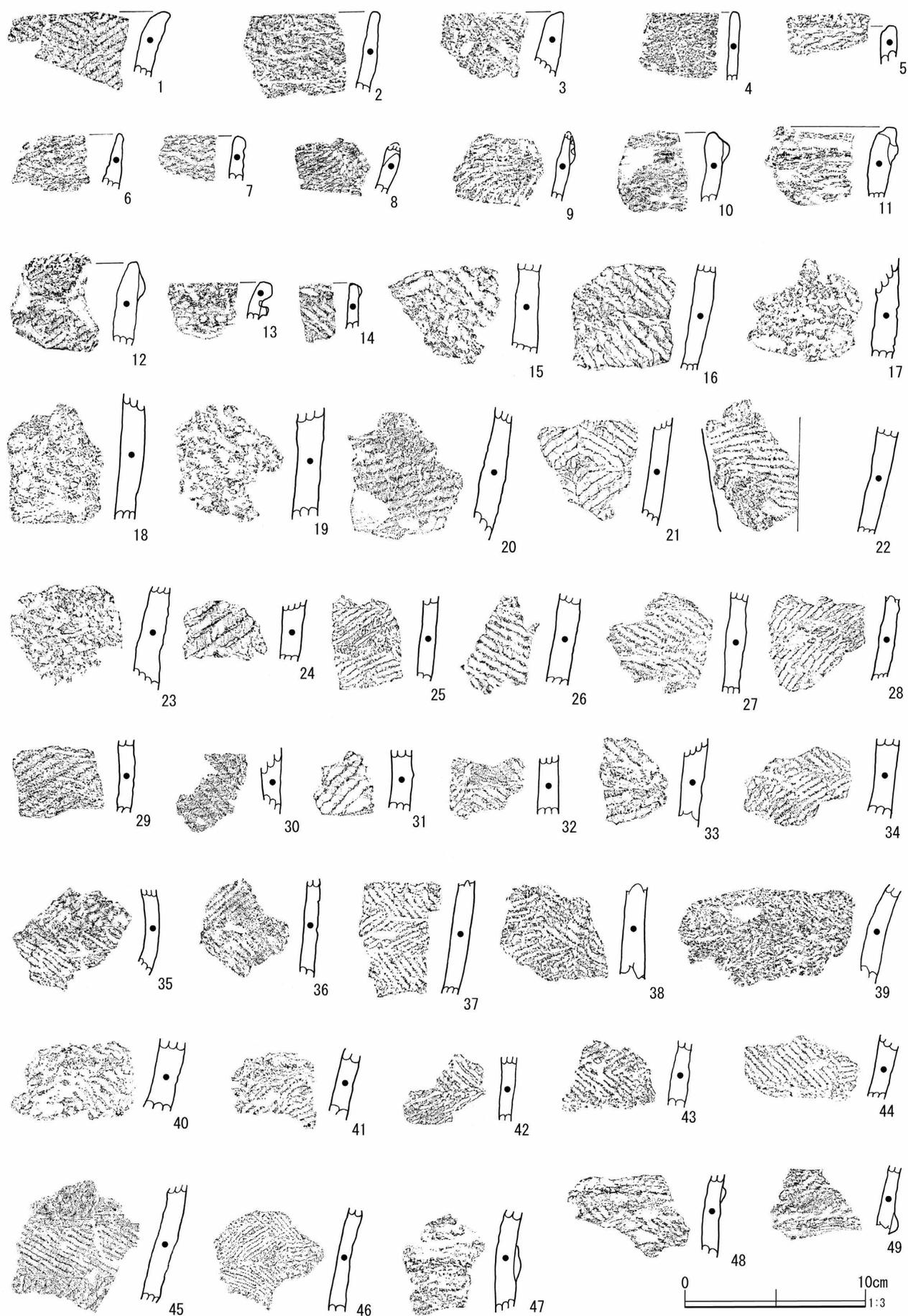
第86図1～14は、本類の口縁部資料である。多様な形態があり、1、2のように外へ引き出されるもの、3のように「く」の字に屈曲するもの、4、5のように横走隆帯を設けるもの、6、7、10のように角頭状の



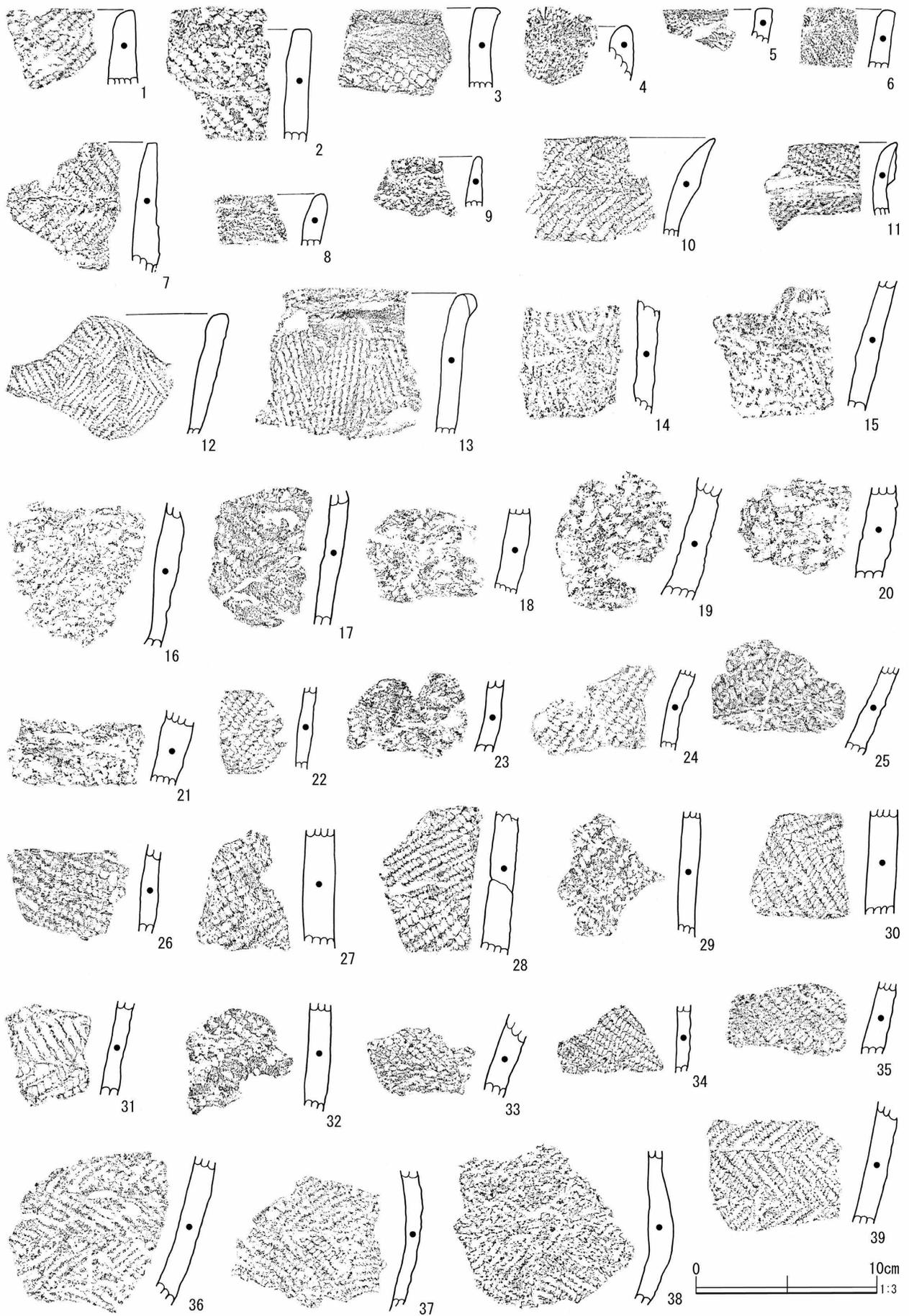
第81図 グリッド出土遺物(9)



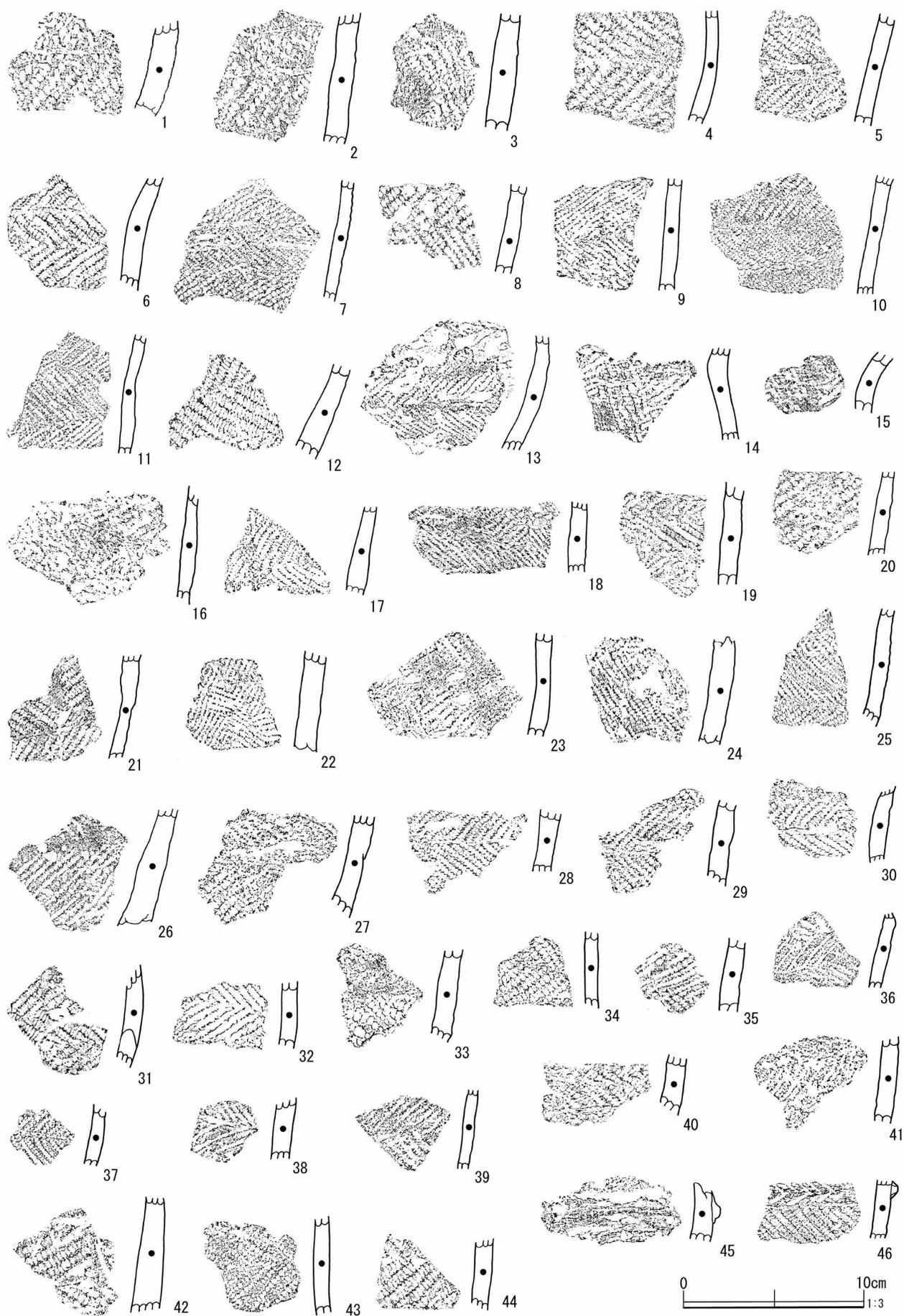
第82図 グリッド出土遺物 (10)



第83図 グリッド出土遺物 (11)



第84図 グリッド出土遺物 (12)



第85図 グリッド出土遺物 (13)

整ったものなどがある。また、施文の観点からすると、12、13のような鋸歯文を持つものや9のような刺突を持つものなどがある。今回の調査では、復元個体や大型破片は少なく、文様構造全体を把握できる資料は少なかった。

第91図7は、尖底となると思われる胴部下半の資料で、表裏に条痕が施された上から、外面に円形竹管による刺突が施されるものである。残存部最大径12.5cm、残存高8cmほどを測る。これまで花積下層式期における円形竹管文の出現は新田野段階までないものと考えてきたが、尖底をなす条痕文系土器に付されたことで、新たな視点での考察が必要である。

第6類 (第86図31～49、第87図、第88図1～14)

第3群土器の底部を一括した。本来、各類に付随して分類されるべきであるが、底面だけの資料や羽状縄文系土器群特有の追加整形接合部での施文転換などを考慮し、あえて底部だけで1類を設ける。

第86図31～49、第87図24～33、第88図1～14は平底となる底部資料である。このうち、第86図40～42、第87図28～33、第88図5～8、13、14は上げ底となるもので、第87図30～32では高台風に底面外縁を整形している。また、底面施文も活発で、単節無節の縄文のほか、貝殻背圧痕文などが多用される。また、平底に分類したが、第88図11のような底面のごく小さいものは転倒せずに自立するかどうか不明である。

第87図1～23は尖底となるものである。条痕文系、貝殻背圧痕文系が多いが、17、18、20～23は縄文の施される尖底土器である。

第4群土器 (第88図15～28)

花積下層式に後続する含繊維の羽状縄文系土器群を一括する。これまでの調査では、関山式などの土器群も検出されていたが、今回検出されている土器群は、黒浜式の工具文系の土器が主体で、これまでにない出土状況である。

15は、格子目文の下部に単節縄文の観察されるもの、16～18は半裁竹管による平行沈線で肋骨文を描出するもの、19～23、25～27は、半裁竹管による平行沈線とC字状爪形文を組み合わせたり、コンパス文と組み合わせたりする一群である。24は附加条2種縄文の地文上にコンパス文が看取される一群、28は附加条2種縄文の底部資料である。

第5群土器 (第88図29～45、第89図1～5)

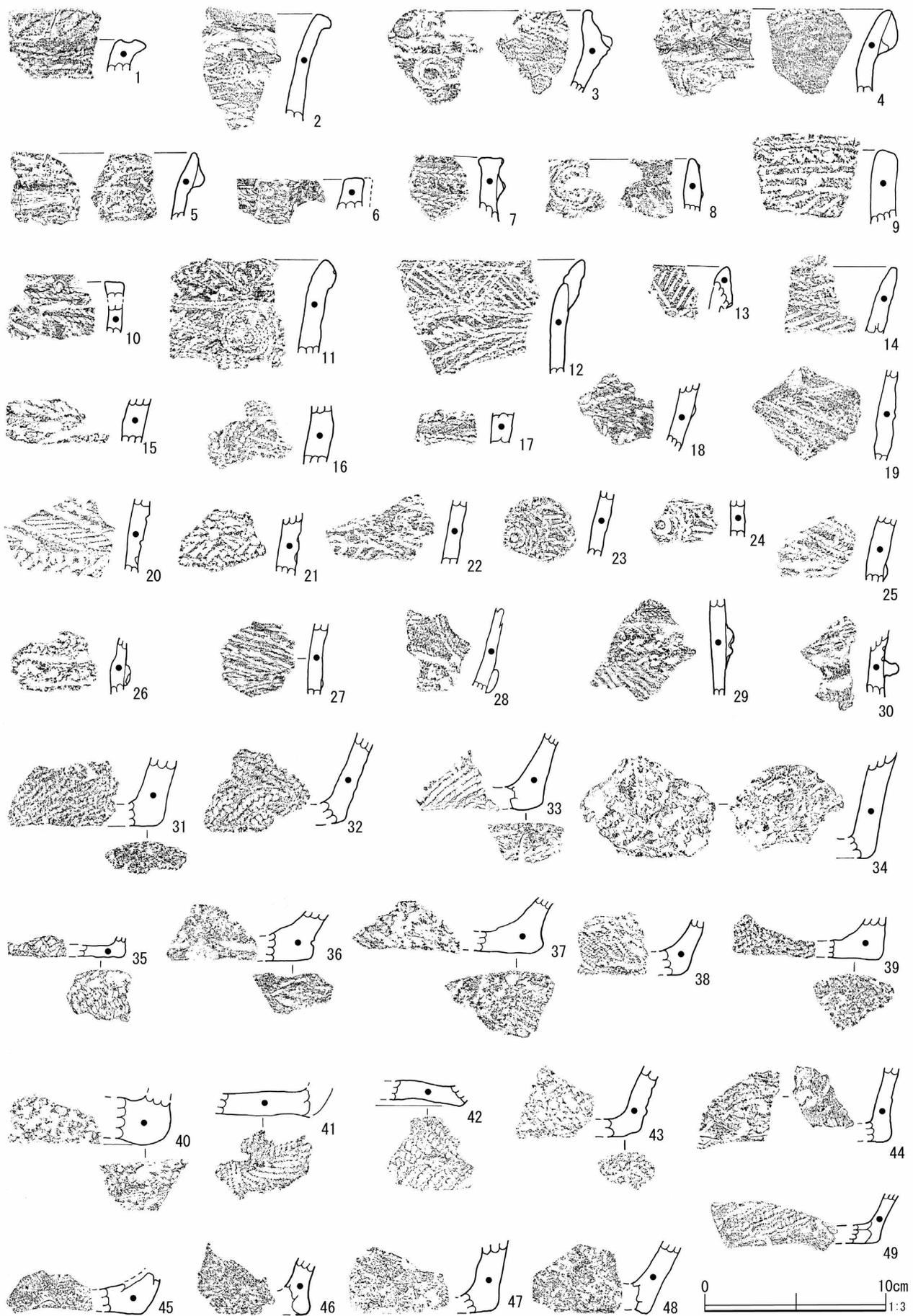
第4群黒浜式に後続する諸磯式及び並行する浮島式に相当する一群である。タタラ山遺跡では従来から本群に伴う土坑などが検出されており、良好な個体資料なども検出されている。残念ながら今回当該期の遺構は検出されなかったが、やはり一定程度の出土があった。

A種 (第88図29～39)

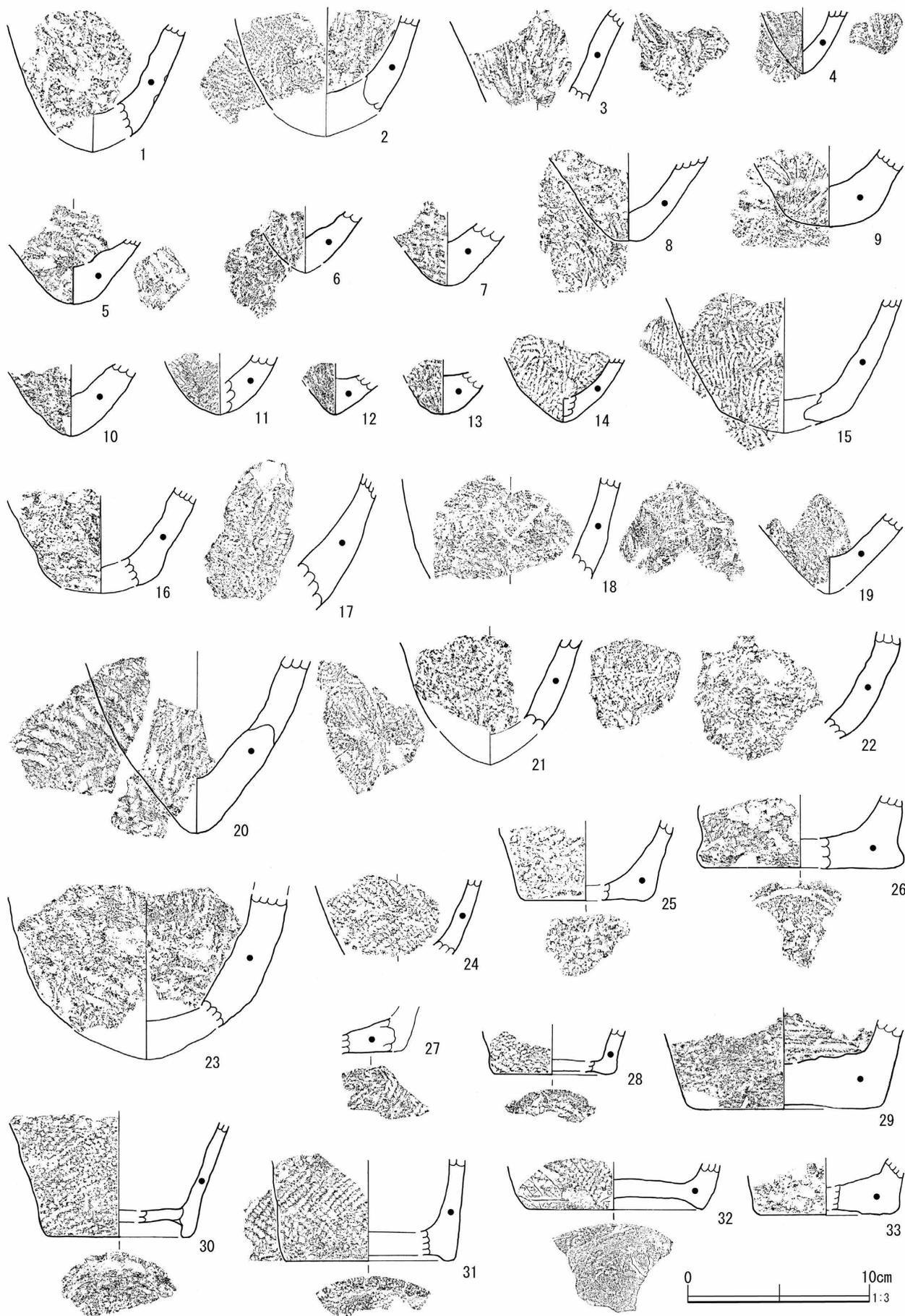
諸磯a式に該当する。29、31～33は多裁竹管を用いた櫛状施文具で蛇行条線を引くもの、30、34～38は、細い半裁竹管を用いて平行沈線を引いたりC字状爪形文を押ししたりする一群である。35、36ではレンズ状のモチーフが看取される。39は該期の縄文施文の土器である。

B種 (第88図40～45、第89図1～4)

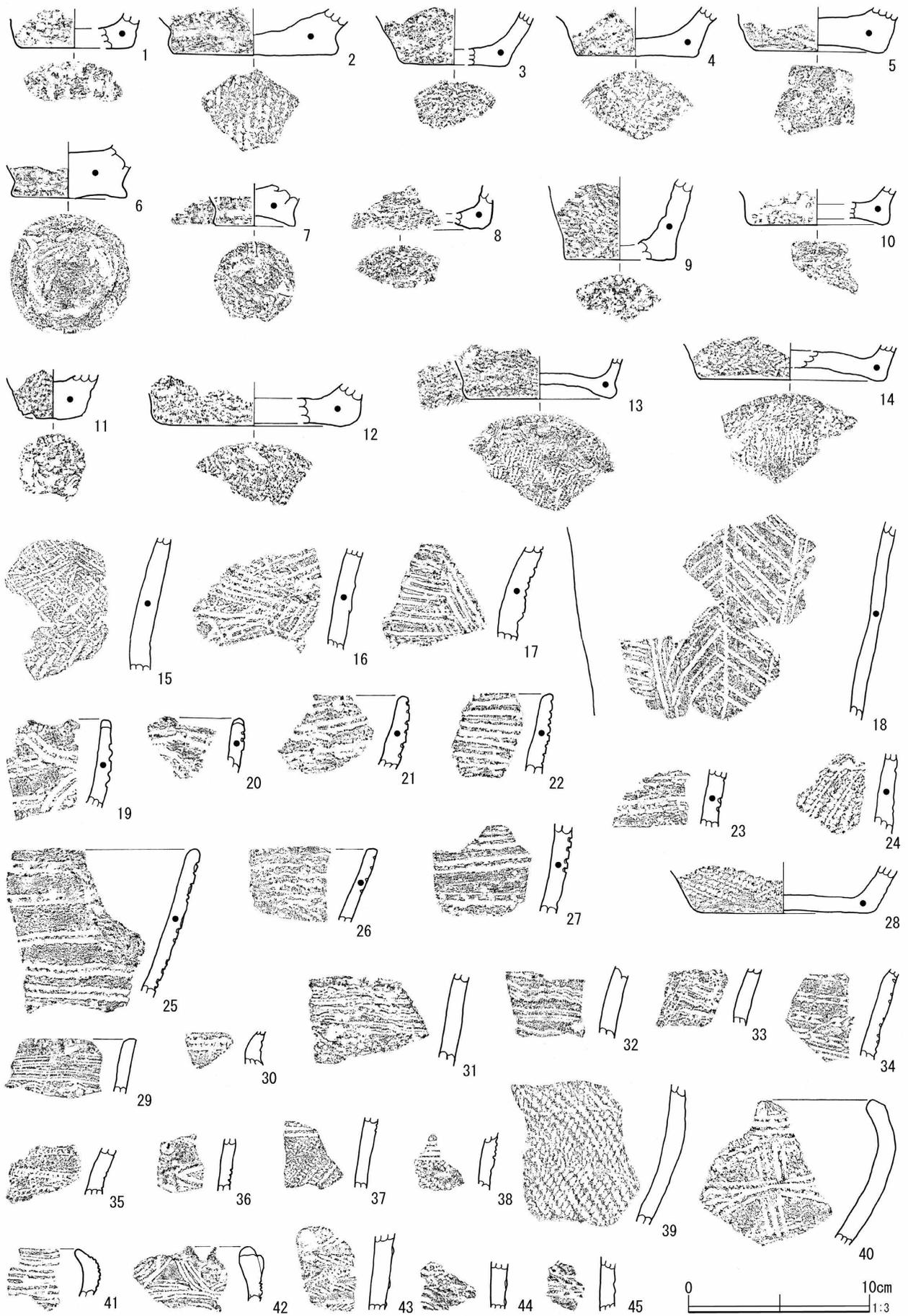
諸磯b式土器である。40は沈線文系のキャリパー形深鉢の口縁部資料で、諸磯b2式に該当する。41、42も口縁部資料であるが40より後出であろう。43～45は浮線文の観察される胴部資料である。第89図1～4は、いずれも諸磯b3式に該当するもので1はキャリパー形深鉢の口縁部資料、2は靴先型の口縁部を呈する資料である。



第86図 グリッド出土遺物 (14)



第87図 グリッド出土遺物 (15)



第88図 グリッド出土遺物 (16)

C種 (第89図5～15)

浮島式を一括する。5～10は外傾する口縁部の外面に篋状工具等による刻みを付したものである。横走する変形爪形文を数条にわたって重畳させるものである。14、15は貝殻腹縁文が観察される。

第6群土器 (第89図16～34、第90図1～8、第91図8、9)

中期後半加曾利E式土器を一括する。タタラ山遺跡では、隣接する山遺跡とともに、本群に伴う集落が営まれている。山遺跡に比べると住居跡の検出例は散漫であるが、今回の調査でも1軒の住居跡が検出されている。

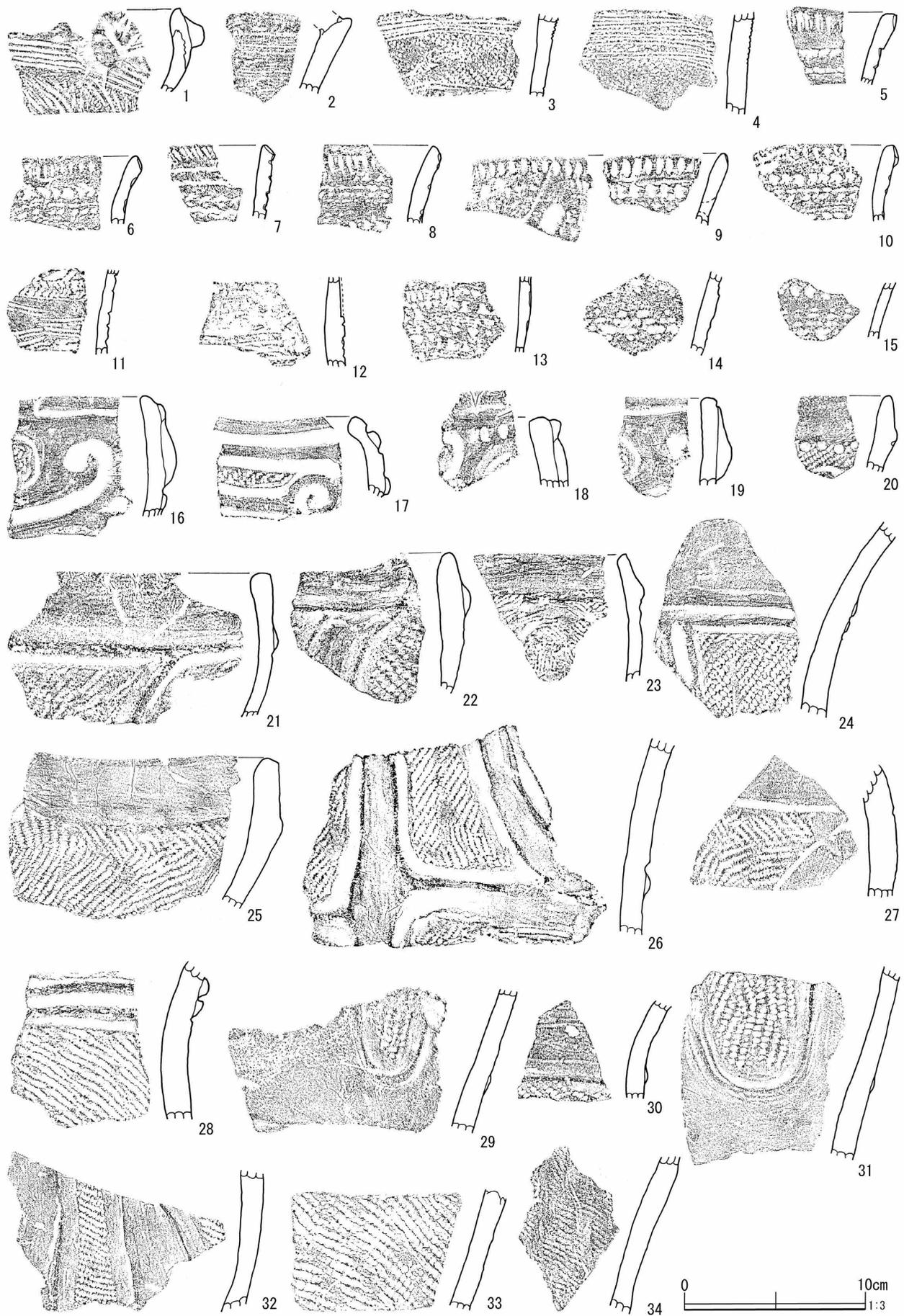
第89図16～23、25は本群土器の口縁部資料である。16～19は加曾利E2式に比定されるキャリパー形深鉢の口縁部資料である。該期の資料は山遺跡を含め決して多くない。20～23、25は加曾利E4式に該当する資料で、タタラ山遺跡や山遺跡で集落形成される時期と合致する。20は無文の口縁部の下端に微隆帯を置き円形刺突を加えるものである。21、22は微隆帯で画された磨消文帯が地文の中に陥入すると思われるいわゆる岩坪類型に類する資料、23、25は、無文の口縁部下端を微隆帯で画し以下を縄文帯とするものである。24は、頸部に無文帯を置く大型のキャリパー形深鉢の頸部資料、26は、隆帯で大型の渦巻文を形成するいわゆる梶山類型といわれる一群の胴部資料、29、31、32は共に微隆帯で磨消文帯を画し中側に縄文を充填させる胴部資料である。33や第90図1～3は縄文施文の胴部資料、4、5は櫛状施文具で蛇行する条線文が描出される胴部資料、6～8は平底となる本群の底部資料である。

第91図8は、単節縄文を縦位施文する胴部資料である。胴部下にある残存部最大径は25.5cm、残存高10cmほどである。9は、D10グリッドから出土した伏甕である。いわゆる吉井城山類型といわれるキャリパー形深鉢の口縁部から胴部にかけての資料である。内湾する口縁部に単節RL縄文を1帯横位施文し、以下に大振幅の波状文を、胴部上半一杯を使って描出し、波状文と噛合うように底部まで貫く∩状のモチーフと、胴部で波の頂部同士が接する∩状モチーフを交互に組み合わせ、ネガティブなH状磨消文を形成する。縄文は口縁部に使用したのと同じ原体を縦位施文して充填する。展開図を確認すると、短い∩状文は、2か所で蕨手文に置き換えられている。また、胴部上半を振幅する波状文は7単位であることがわかる。

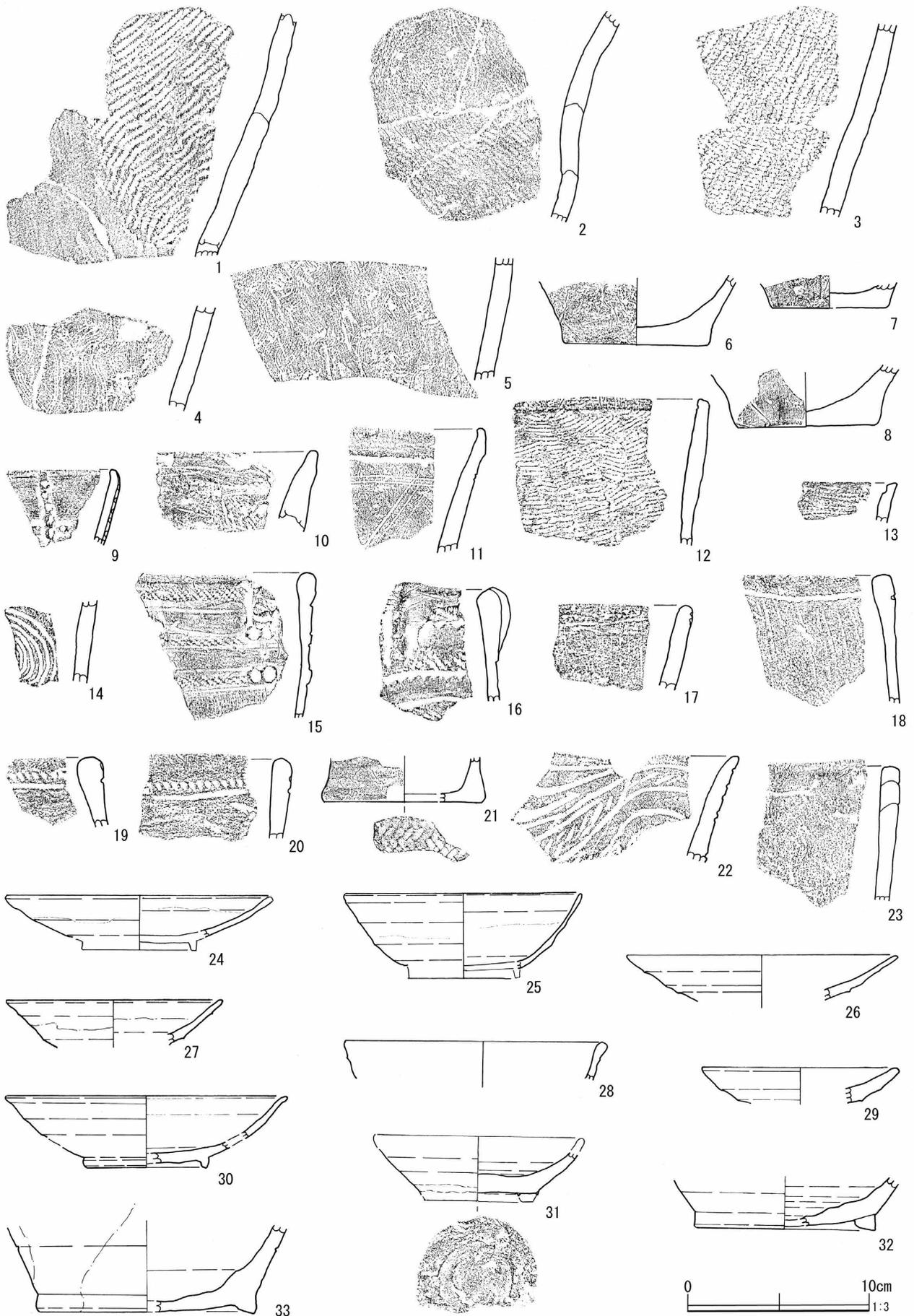
第7群土器 (第90図9～23)

縄文時代後期から晩期にかけての資料を一括した。

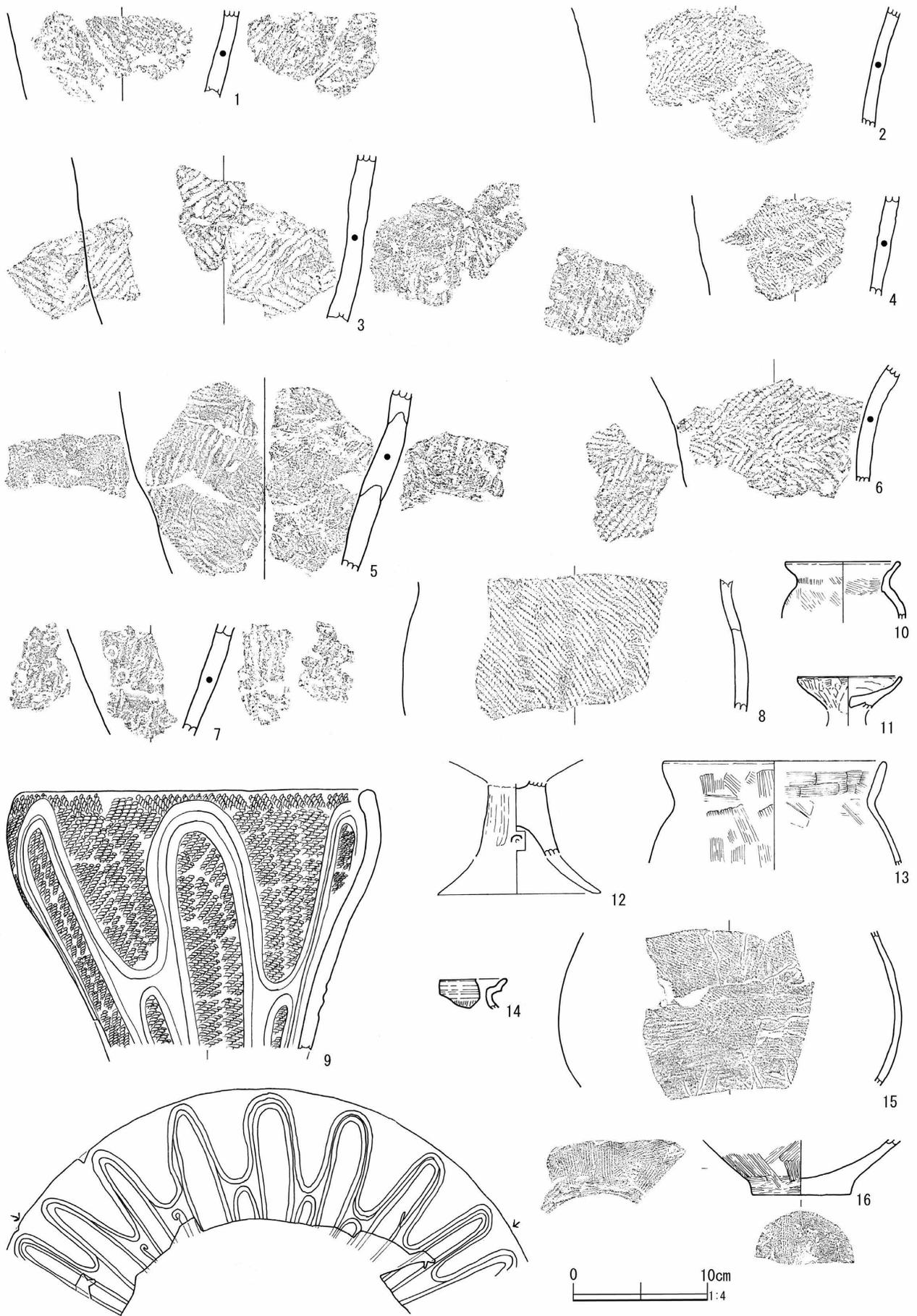
9、11は、口唇部をわずかに内屈させる口縁部を持ち、口縁部無文帯を横走隆帯で区画するもので、前者は口唇部からの垂下隆帯を含め刺突を押した鎖状隆帯とする。後者は、隆帯以下は半裁竹管による鋸歯状の平行沈線を引く。10は乱雑な集合沈線が、12は無節縄文が施される。13は口唇部内面に1条の沈線を巡らせ、外面に集合沈線を引く平縁土器、14は、同心円状の沈線モチーフの認められる胴部資料である。これらは、後期堀之内式期の所産である。15、16は、横走する帯縄文の要所に貼瘤を持つ口縁部資料である。前者は、口縁部に横位の刻みを持つ貼瘤を持ち、以下の帯縄文上に双刺瘤が配されるもの、後者は刻みの無い縦長の貼瘤を持つもので、口縁部帯縄文帯の下端は押し引き沈線によるものである。後期安行式に該当する。17～20は、いわゆる紐線文系の砲弾形深鉢の口縁部資料で、17は連続刺突の付される口縁部下端を横走沈線で画し、以下に縦位の条線の施されるもの、18は、無文の口縁部を押し引き刺突列で区画し、以下に縦位の条線文の施されるもの、19、20は刺突を持つ口唇部下端を横走沈線で画し、以下横位の器面調整が施されるもので、後者では、三叉状入組文の末端と思われる沈線が看取される。後期



第89図 グリッド出土遺物 (17)



第90図 グリッド出土遺物 (18)



第91図 グリッド出土遺物 (19)

から晩期にかけての安行式に伴う粗製土器である。22、23は晩期安行式に該当する資料で、前者は三叉状入組文とこれを鋸歯状に隔てる刺突文帯が看取されるもので、安行3C式に該当するものと思われる。後者は、輪積痕を顕著に残す平縁の粗製土器であり晩期安行式に伴う。21は網代底となる無文の底部資料で、堀之内式から加曾利B式に該当しよう。

第8群土器 (第91図10~16)

古墳時代前期、五領式土器を一括する。タタラ山遺跡では、当該期の集落が展開することも知られており、これまで5軒の住居跡が検出されている。加えて第8地点でも3軒の住居跡が検出されており、出土遺物量も多い傾向にある。

10は小型の壺型土器の口縁部から胴部上半にかけての資料で、口径8.6cm、残存高5cmを測る。刷毛目が残る。11は、器台の坏部で、口径7.5cmを測る。刷毛目整形後粗雑な筥磨きが施される。12は、高坏の脚部と思われる。縦位の筥磨きの痕跡を留める。13は、台付甕と思われ、推定口径は16.5cmほどと思われる。全体に刷毛目が残される。14は、複合口縁となる台付甕の口縁部破片で、体部には横位の刷毛目が観察される。15は球胴をなす台付甕と思われ、胴部最大径は25cmと推定される。16は、刷毛目の施された底部資料である。壺型土器であろう。底面には、穀類と思われる円形の圧痕が多数残される。

第9群土器 (第90図24~33)

古代末以降の土器群を一括した。

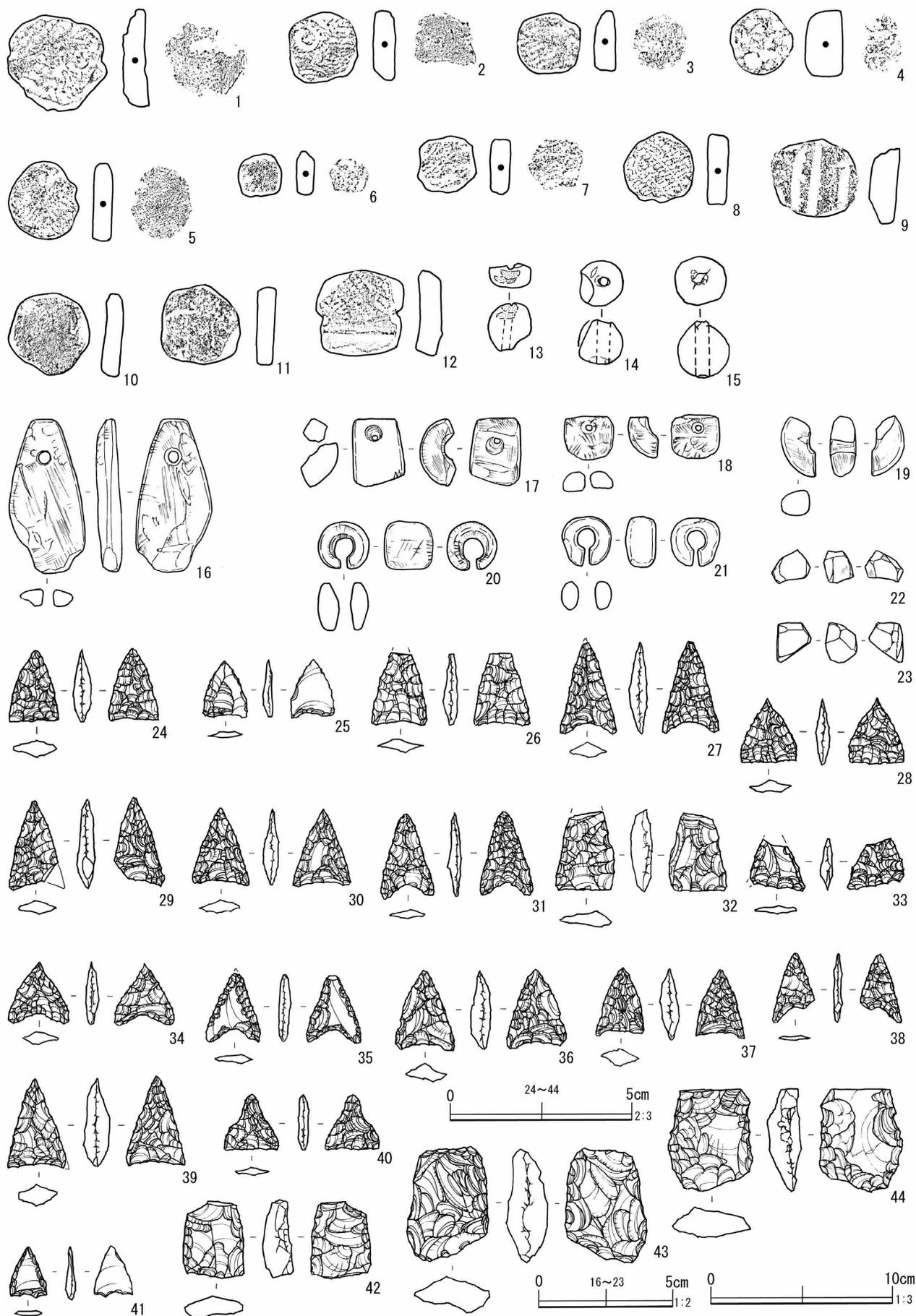
24~27、30は、灰釉陶器である。25はやや器高があり、碗である可能性が高い。26では前面に施釉される。いずれも内外にロクロ水挽痕を残す。30は底部を残し削り出し高台が付される。また、内底面に墨と思われる黒色の痕跡が残される。28は、いわゆるロクロ土師器の碗形土器の口縁部資料である。外面には水挽痕を明瞭に残す。31は、高台付のカワラケで、内外にロクロ水挽痕を残す。底面は、高台を付したときにその内外を撫でており、高台の内側には糸切痕は観察されないが、高台脱落后の底面に回転糸切痕が観察される。32、33は瓶子の底部資料で、両者とも底面に自然釉が観られることから、広口の瓶子であったものと思われる。前者は底径10cm、後者は底径12cmを測る。

土製品 (第92図1~15)

1~11は土製円盤である。2は円形竹管と撚糸側面圧痕が観察される土器片を素材とする。8は、附加条1種縄文の施された土器片を素材とする。9~11の素材土器片は胎土に繊維を含まないもので、9は中期加曾利E式土器の胴部破片を素材とする。12は土器片錘である。5cm弱の土器片長軸に磨り目を入れ紐かけとしている。素材土器片は中期加曾利E式土器である。13~15は古墳時代前期五領式に伴う土玉である。最大ものは15で、直径2.8cm、長軸3cmを測る。

石製品 (第92図16~23)

石製装飾品である。16~18は垂飾である。16は靴筥状の垂飾で上部中央に両面穿孔の小孔が穿たれる。表裏に長軸方向の研磨痕が残される。17、18は块状耳飾からの転用耳飾である。前者は直径2.5cmあまり、厚み2cm弱の块状耳飾を転用し上部中央に両面穿孔の小孔を穿つ。後者は、块状耳飾の環としては1/4ほどの遺存度である。19~21は块状耳飾である。19は1/3周ほどの残欠である。中心孔は大きくない。20は、直径1.8cm、厚さ1.7cmほどの小型の块状耳飾で、中央部に両面穿孔で中心孔が穿たれる。21は、直径1.8cm、厚さ1.1cmを測る块状耳飾である。両面穿孔で中心孔を穿つが、孔径は6mmを測り、耳飾器厚とはほぼ同程度の大きさを持つ。22、23は玉素材片である。多面体をなし、同一石材である。



第92図 グリッド出土遺物 (20)

石器（第92図24～44、第93図～第97図）

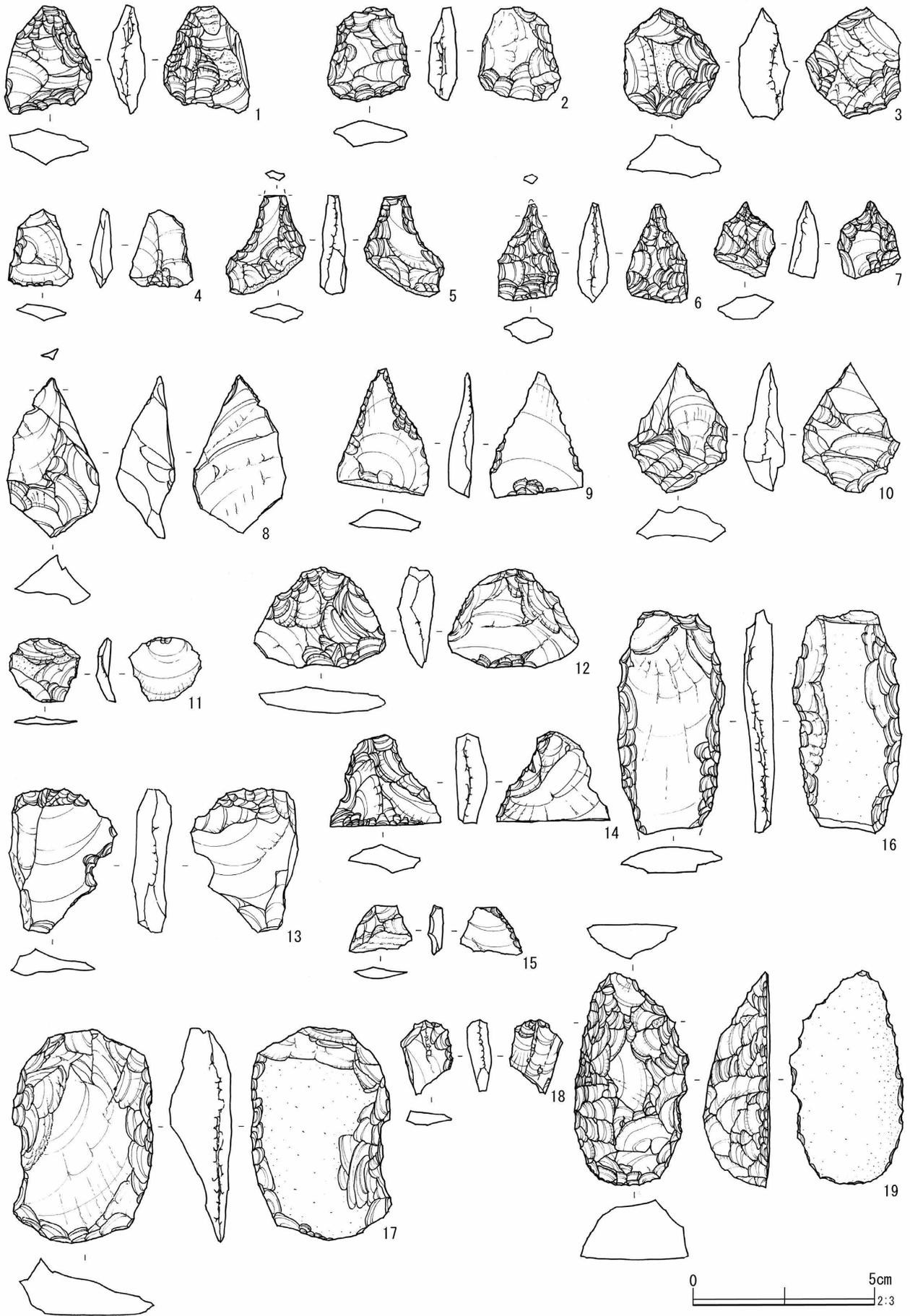
グリッド出土の石器を一括した。第92図24～41は石鏃である。27、29、31、33～38は凹基無茎石鏃である。抉りの深いものは多くなく、最も深い38でも器長全体の1/4ほどである。37は左脚端がわずかに突出するように整形されることから、右脚端も同様であったことを想定して凹基無茎と判断した。このほかのものは平基無茎石鏃である。整形面では、25、35、41は表裏両面に素材剥片の主剥離を大きく残すもので、特に25、41は基部と両側縁にわずかな調整加工を施すのみである。30、33でも片面に素材の主剥離が観察される。反対に、24、27、36、37、39は断面がしっかりとした菱形を呈し、ある程度の厚みのある素材剥片に丹念には剥離を加え成形していることが窺われる。第92図42～44、第93図1～4は、石鏃未製品と思われる2次加工剥片である。厚みを持つ不整形剥片を方形から台形状に整えさらに成形加工を施そうとするものである。第93図5～8は石錐である。いずれも不整形剥片の一端に嘴状の錐部を作るものである。第93図9～12、14、15は2次加工剥片である。9では、嘴状に伸びる両側縁に調整加工を施しているが石錐としての使用は認められない。10は厚みのある基部側に階段状剥離を用い成形加工を施すほか、先端右側縁にわずかな使用痕が認められ、削器としての使用が想定される。11、12、15は貝殻状の剥片を用いたものである。13は、いわゆる抉入石器であろうか。14は上部両側縁に丁寧な加工を施し裏面にある素材剥片のバルブを除去している。ブランティングと思われるが刃部は欠損している。16、17は削器であろう。16は円礫素材の大型剥片を用い縦長の両側縁加工の削器としているが先端部を欠損する。17も円礫素材の剥片を用い正面に主剥離、裏面に礫表皮を残す。正面左側縁にあった素材剥片のバルブを剥ぎ、併せてブランティング加工を施している。右側縁に表裏両面からの調整加工を施し、円刃を形成している。18は2次加工剥片である。19は、円礫から剥離した厚みのある剥片を素材とする搔器である。両側縁及び円刃となる刃部裏面方向から、規則的で丁寧な脚の長い剥離を加え成形したのち細かな調整加工を施している。旧石器時代の所産である。

第94図1～4、6～12、14、15は、2次加工剥片である。いずれも不整形の剥片を素材とするもので、8は削器として機能した可能性があるほか、9、10は石錐である可能性もあろう。第94図5、13、16、17は目立った調整加工は見受けられないものの、鋭利なエッジを持ち刃こぼれ状の細かな剥離が観られることから、使用痕剥片と認識した。

第95図1、2、4、7、9、10は打製石斧である。1はややくびれを持つものの短冊形を呈するもので、円刃をなす。9は刃部を欠き、10は基部を欠くがやはり短冊形であろう。2、4、7は分銅型を呈するもので、4では正面に、7では裏面に礫表皮を残す。3、5、8、14、16、20は筥状石器であろう。タタラ山遺跡では、第2地点でも多数の筥状石器が出土しており一つの特徴をなすものと思われる。形状は小型の打製石斧であるが、大きさから打製石斧として機能したとは思われず別の機能を持つものであったものと考えられる。8、11も違いは剥片素材でないことだけで、筥状石器である可能性が高い。13、18、19は磨製石斧である。13は剥離面に敲打調整を加えておらず局部磨製石斧状に作られたものである。18は刃部再生した磨製石斧である。19は基部を欠く。6、17は敲打石と思われる。12は削器、15は2次加工剥片である。

第96図1～12、第97図1は磨石である。第96図1、3、5、7、10、12では敲打整形以外の敲打痕が認められ、兼用敲打石として用いられたことがわかる。

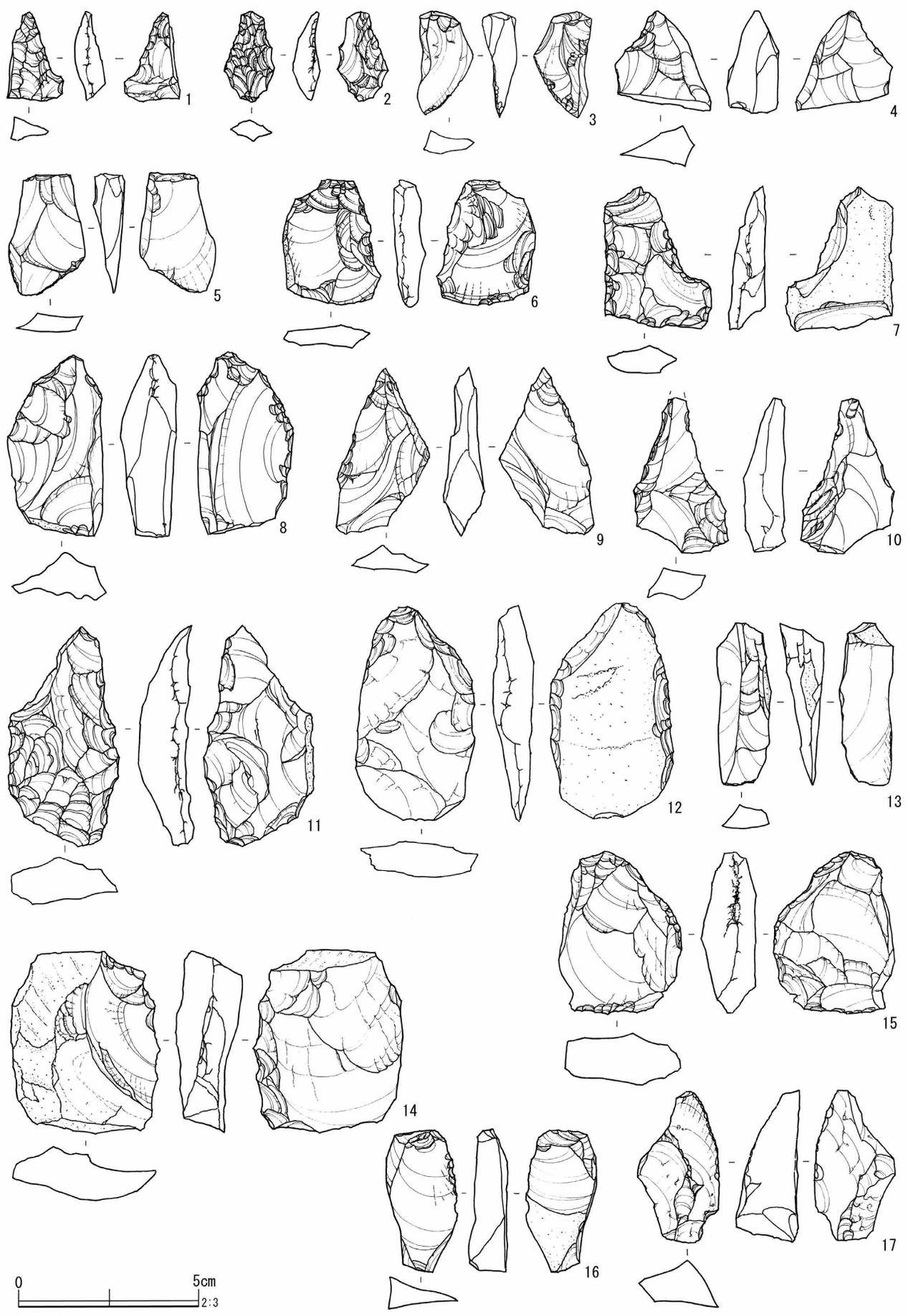
第97図2～5は敲打石である。いずれも小口面に敲打の痕跡をもつ比較的小型の石器である。6、7は石皿残欠である。前者では裏面に6個の窪みを観察することができる。



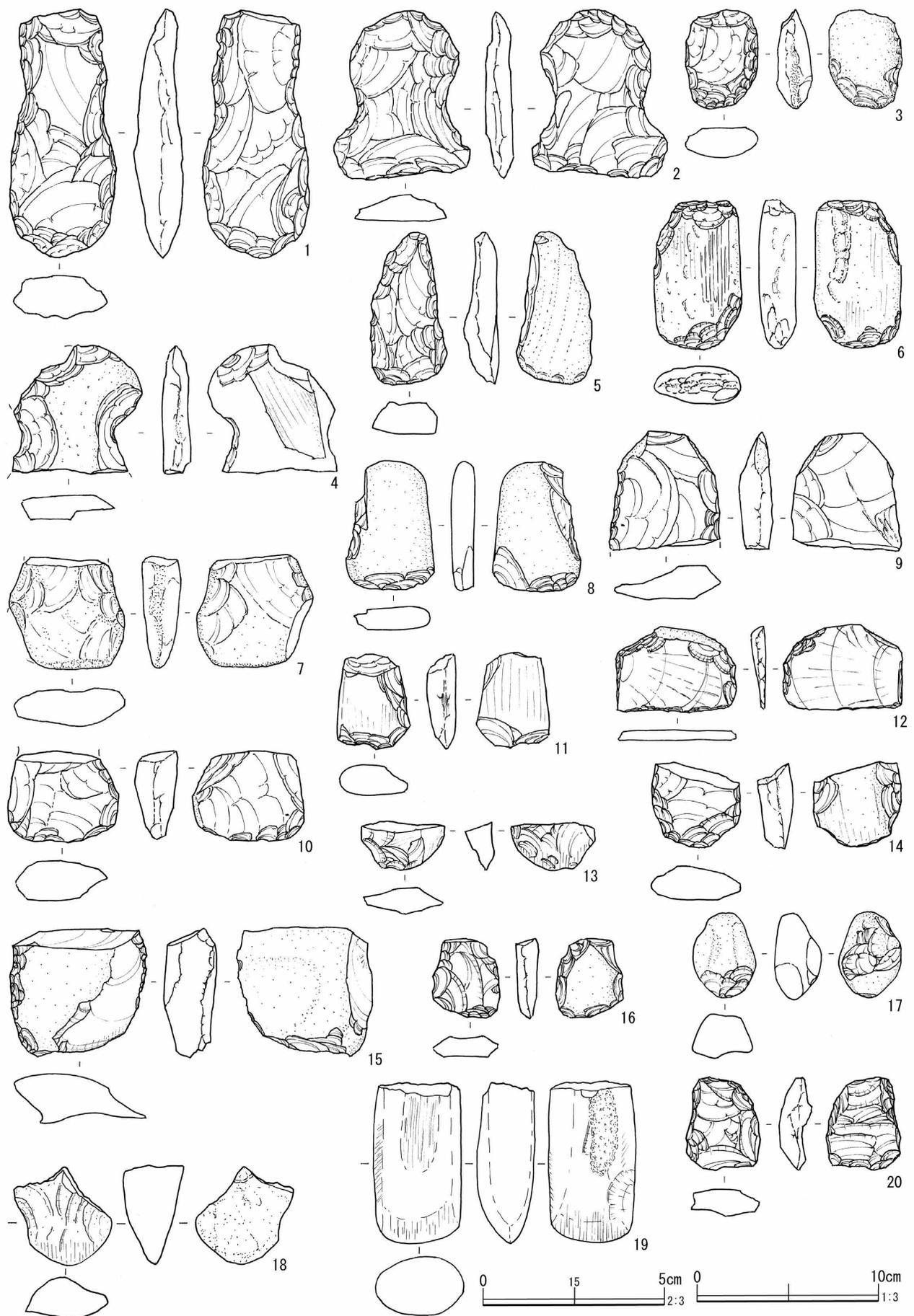
第93図 グリッド出土遺物 (21)

第13表 グリッド出土石器計測表(1)

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
92	16	垂飾	滑石	5.6	2.7	1.0	16	
92	17	垂飾	滑石	2.5	1.9	0.9	8	玦状耳飾からの転用
92	18	垂飾	滑石	1.5	1.8	1.1	4	玦状耳飾からの転用
92	19	玦状耳飾	メノウ	2.3	(1.1)	0.9	(3)	
92	20	玦状耳飾	滑石	1.7	1.8	1.8	8	
92	21	玦状耳飾	石材不詳	2.3	1.8	1.1	3.8	
92	22	玉素材	滑石	1.1	1.4	0.9	1.5	
92	23	玉素材	滑石	1.4	1.2	1.1	1.9	
92	24	石鏃	チャート	2.0	1.4	0.5	1.1	
92	25	石鏃	チャート	1.6	1.2	0.2	0.4	
92	26	石鏃	チャート	(2.0)	1.6	0.4	(1.1)	
92	27	石鏃	赤チャート	(2.5)	1.6	0.5	(1.3)	
92	28	石鏃	黒耀石	1.8	1.5	0.4	0.7	
92	29	石鏃	赤チャート	2.5	(1.3)	0.5	(1.3)	
92	30	石鏃	チャート	2.2	1.6	0.4	1.0	
92	31	石鏃	黒耀石	2.3	1.5	0.3	0.7	
92	32	石鏃	チャート	(2.3)	1.6	0.6	(2.2)	
92	33	石鏃	チャート	(1.2)	(1.5)	0.4	(0.7)	
92	34	石鏃	チャート	1.8	1.7	0.4	0.7	
92	35	石鏃	チャート	(1.9)	1.5	0.3	(0.7)	
92	36	石鏃	チャート	2.2	1.7	0.6	1.5	
92	37	石鏃	チャート	2.0	1.3	0.5	1.0	
92	38	石鏃	黒耀石	1.9	(1.1)	0.2	(0.3)	
92	39	石鏃	チャート	2.4	1.6	0.7	2.1	
92	40	石鏃	チャート	1.5	1.5	0.3	0.6	
92	41	石鏃	チャート	1.4	1.1	0.2	0.3	
92	42	石鏃未製品	チャート	(2.2)	1.3	0.8	(3.4)	
92	43	石鏃未製品	チャート	3.1	2.2	1.1	8.3	
92	44	石鏃未製品	石材不詳	2.8	2.3	0.9	6.4	
93	1	石鏃未製品	チャート	3.0	2.3	1.1	6.2	
93	2	石鏃未製品	石材不詳	2.6	2.2	0.8	5.0	
93	3	石鏃未製品	チャート	3.0	2.6	1.4	9.9	
93	4	石鏃未製品	赤チャート	2.2	1.8	0.7	1.9	
93	5	石錐	チャート	(2.8)	1.7	1.2	(3.4)	
93	6	石錐	チャート	(2.7)	1.7	0.9	(3.5)	
93	7	石錐	チャート	2.2	1.6	0.7	2.2	
93	8	石錐	赤チャート	4.4	2.5	1.6	11.7	
93	9	2次加工剥片	黒色緻密安山岩	3.3	2.5	0.7	5.0	
93	10	2次加工剥片	赤チャート	3.5	2.7	1.1	7.6	
93	11	2次加工剥片	黒耀石	1.8	2.0	0.3	1.1	
93	12	2次加工剥片	チャート	2.8	3.6	1.0	8.7	削器
93	13	抉入石器	チャート	4.0	3.0	0.9	10.7	
93	14	2次加工剥片	黒色緻密安山岩	(2.5)	(3.1)	0.9	(5.2)	
93	15	2次加工剥片	チャート	1.3	1.7	0.4	0.7	
93	16	削器	石材不詳	6.3	3.0	0.8	18.7	
93	17	削器	硬砂岩	5.9	3.9	1.7	29.7	
93	18	2次加工剥片	黒耀石	(2.0)	1.4	0.6	(1.5)	
93	19	搔器	チャート	5.9	3.0	1.8	37.0	旧石器



第94図 グリッド出土遺物 (22)



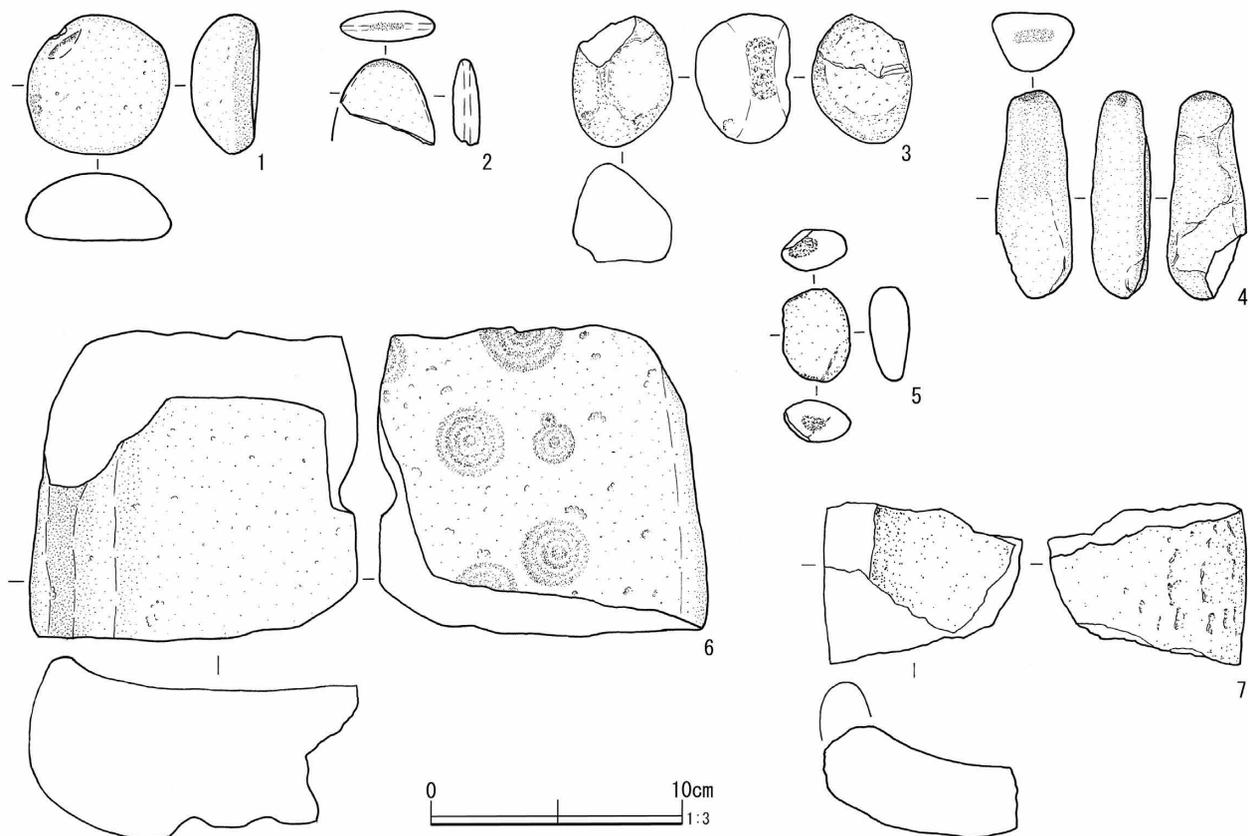
第95図 グリッド出土遺物 (23)



第96図 グリッド出土遺物 (24)

第14表 グリッド出土石器計測表 (2)

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
94	1	2次加工剥片	チャート	2.5	1.5	0.7	2	
94	2	2次加工剥片	黒耀石	2.5	1.4	0.7	2	
94	3	2次加工剥片	黒耀石	2.9	1.5	0.9	3	
94	4	2次加工剥片	チャート	2.9	2.5	1.4	9	
94	5	使用痕剥片	チャート	3.3	2.1	0.8	5	
94	6	2次加工剥片	頁岩	3.5	2.7	0.8	8.1	
94	7	2次加工剥片	チャート	4.0	3.0	1.0	9.8	
94	8	2次加工剥片	赤チャート	5.1	2.6	1.5	19.0	削器か
94	9	2次加工剥片	チャート	4.7	2.4	1.2	7.9	石錐か
94	10	2次加工剥片	石材不詳	(4.3)	2.5	1.1	(9.2)	石錐か 先端欠損
94	11	2次加工剥片	フリント	6.2	3.1	1.4	22.0	
94	12	2次加工剥片	ホルンフェルス	6.0	3.3	1.1	24.1	
94	13	使用痕剥片	チャート	4.5	1.4	1.1	6.3	
94	14	2次加工剥片	赤チャート	5.1	4.1	1.7	41.4	
94	15	2次加工剥片	チャート	4.5	3.4	1.5	25.8	
94	16	使用痕剥片	チャート	4.0	2.0	1.0	7.3	
94	17	使用痕剥片	黒耀石	4.2	2.2	1.7	10.8	
95	1	打製石斧	ホルンフェルス	13.3	5.1	2.3	232.0	
95	2	打製石斧	ホルンフェルス	9.1	4.9	1.6	108.0	
95	3	籠状石器	安山岩	5.5	3.9	2.7	55.3	
95	4	打製石斧	砂岩	(7.0)	(6.7)	1.4	(83.7)	
95	5	籠状石器	ホルンフェルス	7.3	4.0	1.7	71.8	
95	6	敲石	石材不詳	8.2	4.8	2.1	130.9	
95	7	打製石斧	ホルンフェルス	(5.3)	(6.3)	2.1	(112.6)	
95	8	籠状石器	砂岩	7.1	4.3	4.2	67.8	
95	9	打製石斧	ホルンフェルス	(6.5)	5.9	1.8	(85.0)	
95	10	打製石斧	硬砂岩	(4.9)	6.1	2.2	(83.7)	
95	11	籠状石器	片岩	5.3	3.7	1.6	51.2	
95	12	削器	泥板岩	4.5	6.5	0.7	29.2	
95	13	局部磨製石斧	ホルンフェルス	(2.2)	(4.8)	(1.5)	(19.1)	
95	14	籠状石器	硬砂岩	(3.6)	(5.0)	1.8	(60.3)	
95	15	2次加工剥片	頁岩	3.6	3.8	1.4	20.4	
95	16	籠状石器	ホルンフェルス	4.2	3.6	1.1	26.2	
95	17	敲石	硬砂岩	4.8	3.4	2.4	47.4	
95	18	局部磨製石斧	凝灰岩	(5.3)	(5.3)	(3.2)	(71.5)	
95	19	磨製石斧	花崗岩	(8.8)	4.8	3.1	(229.0)	
95	20	籠状石器	ホルンフェルス	(5.1)	(4.0)	1.5	(36.3)	
96	1	磨石兼用敲石	閃緑岩	(4.0)	(8.0)	3.5	(187.1)	
96	2	磨石	安山岩	7.7	(5.0)	3.9	(169.1)	
96	3	磨石兼用敲石	安山岩	(7.1)	(6.7)	4.2	(192.0)	
96	4	磨石	安山岩	(7.8)	(7.4)	4.5	(429.0)	
96	5	磨石兼用敲石	安山岩	(4.7)	7.1	3.3	(154.6)	
96	6	磨石	安山岩	(2.3)	(7.7)	(3.6)	(91.3)	
96	7	磨石兼用敲石	安山岩	(6.2)	(5.8)	2.3	(83.5)	
96	8	磨石	安山岩	(7.6)	(7.1)	4.2	(217.0)	
96	9	磨石	硬砂岩	7.5	5.6	3.3	(188.9)	
96	10	磨石兼用敲石	安山岩	(4.3)	(5.4)	4.6	(146.1)	
96	11	磨石	花崗岩	(4.8)	(6.1)	3.7	(143.3)	
96	12	磨石兼用敲石	安山岩	(5.6)	(8.4)	4.6	(306.0)	



第97図 グリッド出土遺物 (25)

第15表 グリッド出土石器計測表 (3)

図	No.	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
97	1	磨石	花崗岩	5.5	5.6	2.7	(107)	
97	2	敲石	泥岩	(3.4)	(3.5)	1.0	(141)	
97	3	敲石	花崗岩	5.2	3.9	3.9	91	被熱
97	4	敲石	硬砂岩	8.2	3.0	2.3	76	
97	5	敲石	砂岩	3.8	2.7	1.6	19	
97	6	石皿兼用凹石	安山岩	(12.3)	(12.3)	6.0	(1580.0)	
97	7	石皿	安山岩	(6.0)	(8.1)	3.2	(137.7)	

2 第11地点の遺構と遺物

(1) 住居跡

●第80号住居跡（第98図）

上面は削平を受けており、住居の覆土はおろか掘り込みも認められず、炉跡とピット、大型石棒の出土位置から、その存在を確認した。調査区南部を中心に展開していたと推定される。大型石棒はピットの上面で先端を南に向けた状態で出土した。

炉跡は西半部が攪乱に切られる。検出部分のみで長径約1.1m、短径約0.6mの不整形円形を呈す。底面は平坦で、確認面から約0.3mまでは覆土内には多量の焼土粒子が認められ、下層の0.2m程は被熱を受けたローム土が堆積する。

出土遺物（第99図）

土器 1、2は同一個体である。波状縁をなす小型の深鉢形土器で、単沈線で区画した口縁部とやや角ばるJ字文に単節縄文を充填する資料である。3は、比較的大型の深鉢形土器の胴部資料と思われ、単沈線で区画する縄文帯が看取される。この縄文帯から上下にJ字文ないしこれに類するモチーフが派生するものと思われる。4、8はJ字あるいはO字などのアルファベット状のモチーフを縄文帯によって描出するものである。5～7、9は同一個体で、湾曲した縄文帯が看取される。10も左上にわずかに縄文帯が窺われる。11は無文の縦位の磨きの施される資料である。13～18はいわゆる軸縄撚糸が斜位に施された資料である。上述の資料は、本址の炉跡出土の資料である。12は無文の胴部資料、19、20は無文の底部資料で本址の埋設土器に伴う資料である。

石器 第100図2は、円刃を呈する磨製石斧である。表裏にわずかな剥離痕が残るが、きれいに研磨し平滑に仕上げている。3は、大型の石棒である。残存長は42cm余りであるが、完存すれば80～90cmに達するものと思われる。4は、石錐と思われる。横長の不整形剥片を素材とし、裏面に素材剥片の主剥離を残す。5は、石皿残欠である。

●第81号住居跡（第98図）

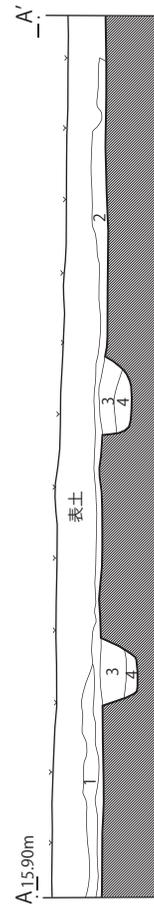
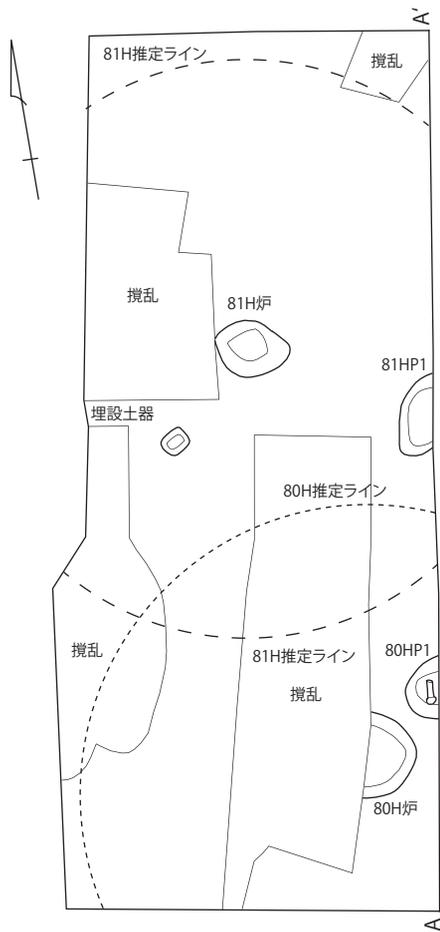
上面は削平を受けており、住居の覆土はおろか掘り込みも認められず、炉跡とピット、埋設土器の出土位置から、その存在を確認した。調査区北部を中心に展開していたと推定される。

炉跡は長径約1.0m、短径約0.7mを測り、平面形は不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.4mを測り、底面は中央が浅く窪む。覆土内には多量の焼土粒子を含む。

出土遺物（第100・101図）

土器 第100図1は、本址の埋設土器である。口径33cm、器高43cmを測る深鉢形土器である。無文の口縁部を持ち、口縁部と胴部括れ部に単沈線で画された縄文横帯を配しその間にいわゆるJ字文を展開させるモチーフを持つ。胴部下半に引かれるべき縄文帯は欠落する。括れ部の縄文帯も器面を全周するものではなく、3/4周で途切れ、この部位には上下2帯を貫通する3帯のJ字文が形成される。

第101図1は、J字文の観察される深鉢形土器の胴部資料である。残存部最大径37cmを測る。2は、口縁部に3cmほどの無文帯を持つ深鉢形土器の胴部上半の資料である。推定口径21cmほどを測る。胴部には単節縄文を斜位施文する。3は無文の胴部資料、5は緩波状縁を呈するキャリパー形深鉢の口縁部資料、6

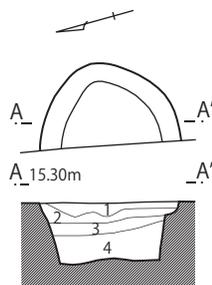


基本土層

- 1 褐色土 粘性有 締まり有 径1-2cmのローム粒子を多く含む。
- 2 黄褐色土 粘性有 締まり有 ローム土を多く含む。
- 80・81Hピット
- 3 灰褐色土 粘性有 締まり強 径1-2cmの焼土粒子を少し含む。
- 4 灰褐色土 粘性有 締まり強 径3-5cmのロームブロックを多く含む。



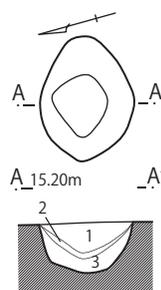
80H炉



80H炉

- 1 赤褐色土 粘性やや弱 締まり有 径2-3cmの焼土粒子を多く含む。
- 2 褐色土 粘性やや弱 締まり有 径1-2cmのローム粒子と焼土粒子を少し含む。
- 3 赤褐色土 粘性やや弱 締まり強 径1-2cmの焼土粒子を多く含む。
- 4 暗褐色土 粘性やや弱 締まり強 被熱を受けて硬くしまったローム土。

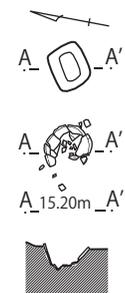
81H炉



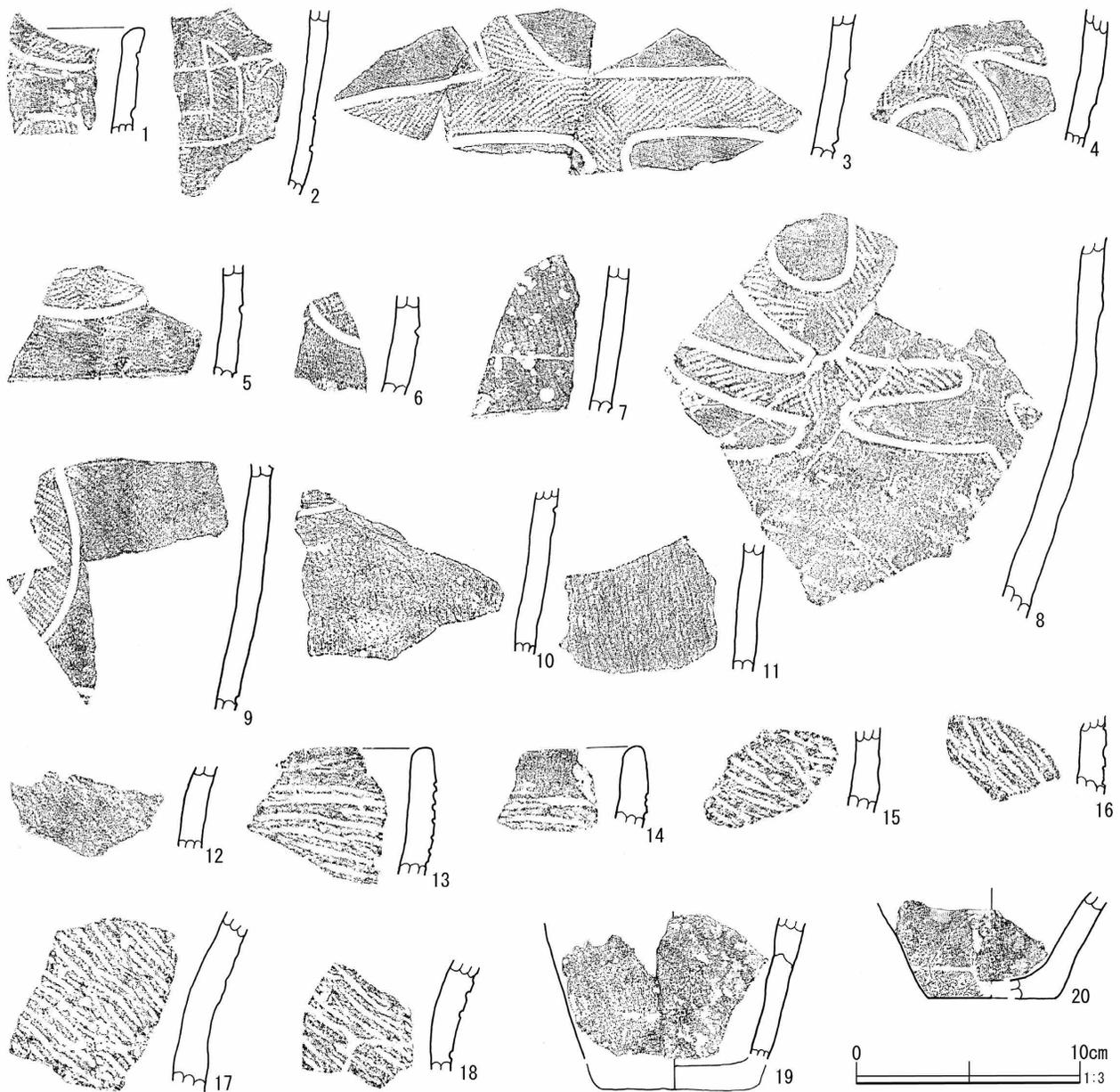
81H炉

- 1 暗褐色土 粘性有 締まりやや強 径1-2cmのローム粒子と焼土粒子を多く含む。
- 2 赤褐色土 粘性有 締まりやや強 径2-3cmの焼土粒子を多く含む。
- 3 赤褐色土 粘性やや弱 締まり強 径1-2cmの焼土粒子を多く含む。

埋設土器



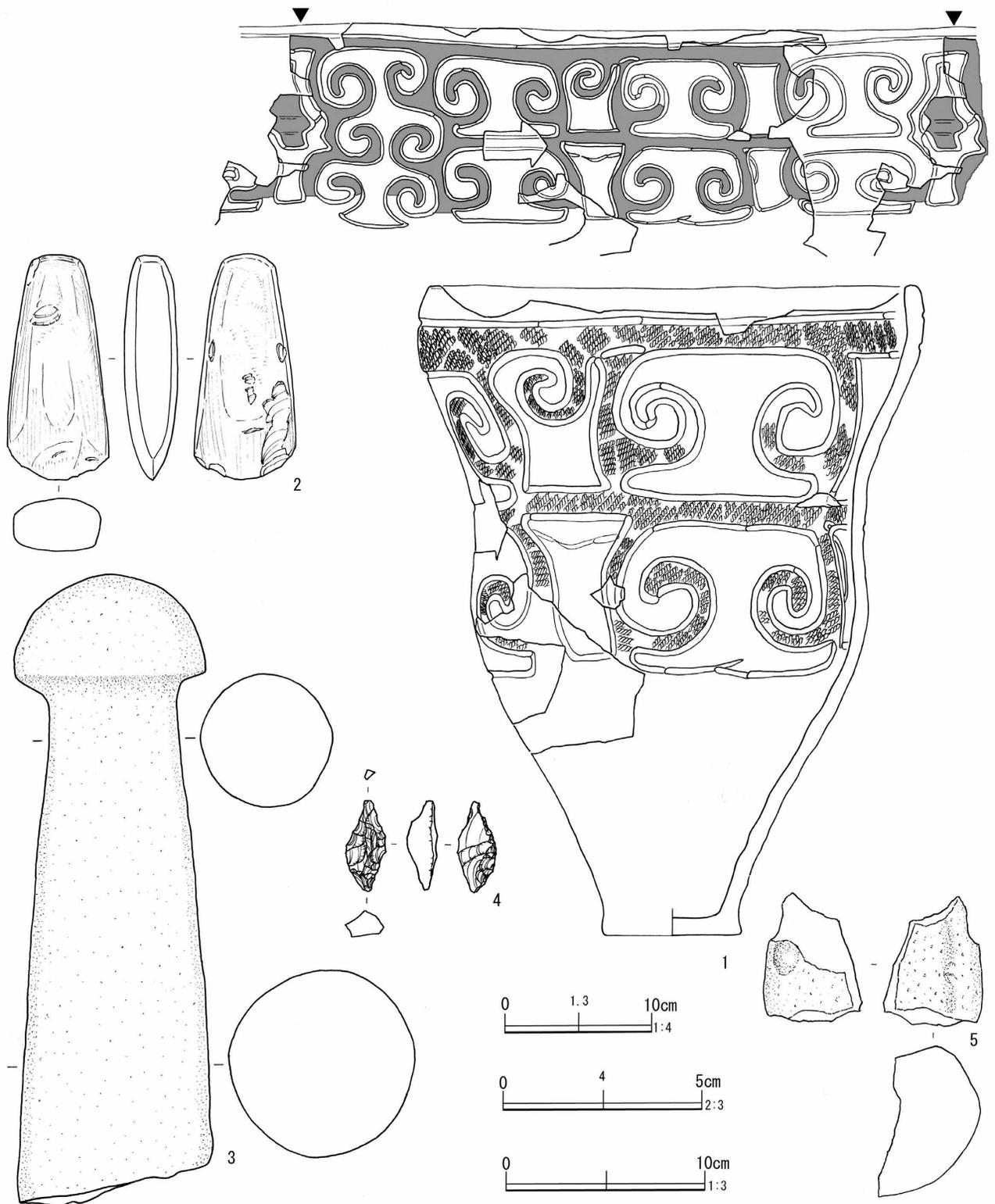
第98図 第11地点全測図及び遺構図



第99図 第80号住居跡出土遺物

第16表 第80号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
100	2	磨製石斧	綠色凝灰岩	11.2	4.2	2.7	238	
100	3	石棒	安山岩	(42.1)	13.1		9,200	
100	4	石錐	黒耀石	2.3	1.0	0.8	1	
100	5	石皿片	安山岩	(6.6)	(5.0)	(7.0)	(265)	

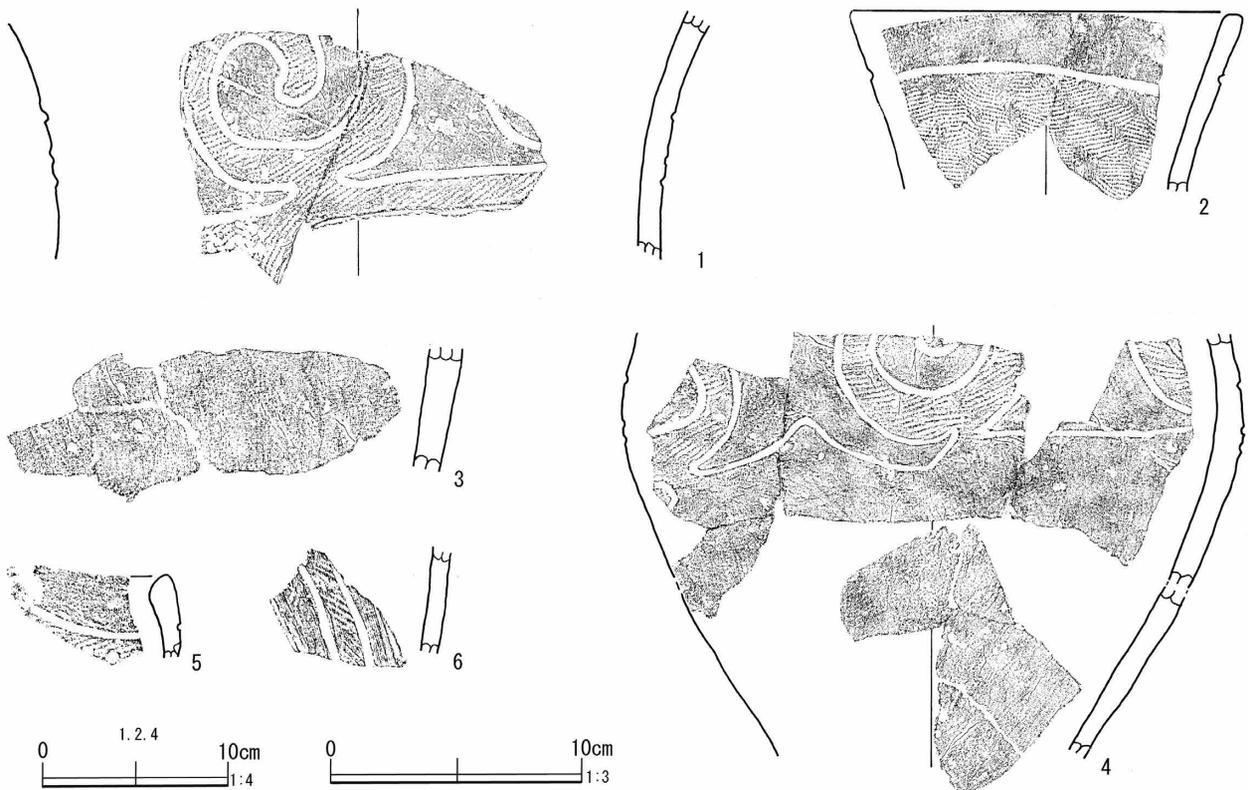


第100图 第80·81号住居跡出土遺物

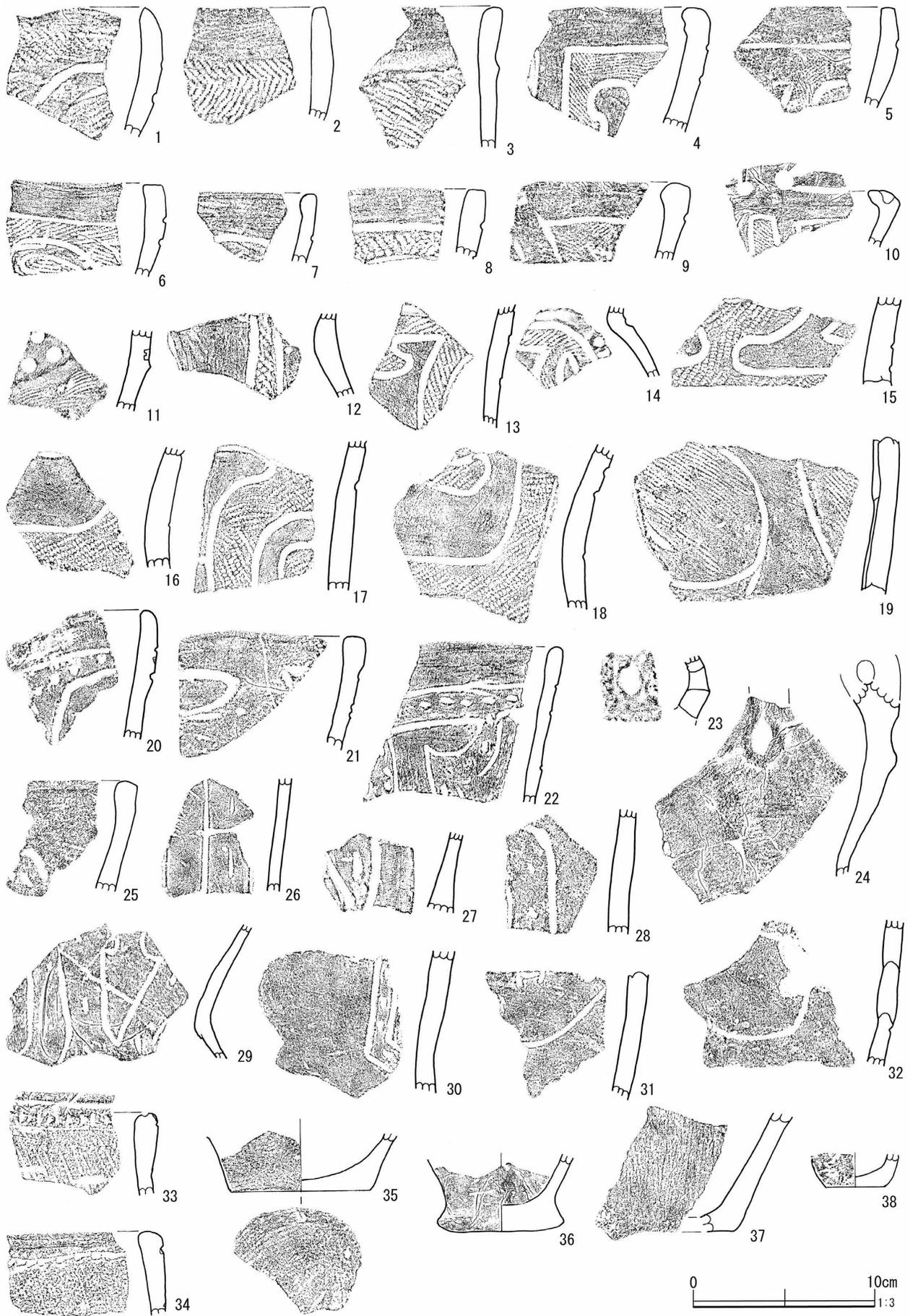
は縦位から斜位の縄文帯の看取される胴部資料である。4は、J字文の観察される深鉢形土器の胴部下半の資料である。残存部最大径は32.5cm、残存高25cmを測る。

(2) 調査区出土遺物 (第102・103図)

土器 第102図1は、吉井城山類型の加曾利EⅢ式土器の口縁部資料である。∩状の磨消文帯が看取される。2、3は、口縁部無文帯の下端を微隆起線で画す深鉢形土器の口縁部資料である。4～10は、縄文帯によるアルファベット状のモチーフが施された口縁部資料である。10では口唇部が「く」の字に内折し、口唇部に円形刺突が穿たれる。11は、微隆起線で画した磨消文帯に円形竹管の刺突列を持つものである。12から19は単沈線で区画された縄文帯でアルファベット状等のモチーフを施す一群である。20～25は、単沈線で区画された刺突を充填する帯でアルファベット状等のモチーフを施す口縁部資料である。23は口縁部の装飾突起と思われる。24では、残存部には同種のモチーフは看取されない。4単位の波状縁をなし波頂部には装飾把手が配される。26～32は、刺突の充填された帯を持つ胴部資料である。29は強く屈曲する胴部資料である。これらはいずれも称名寺式に該当する。33、34は安行式に伴う砲弾形を呈する粗製土器の口縁部資料である。35～38は無文の底部資料である。



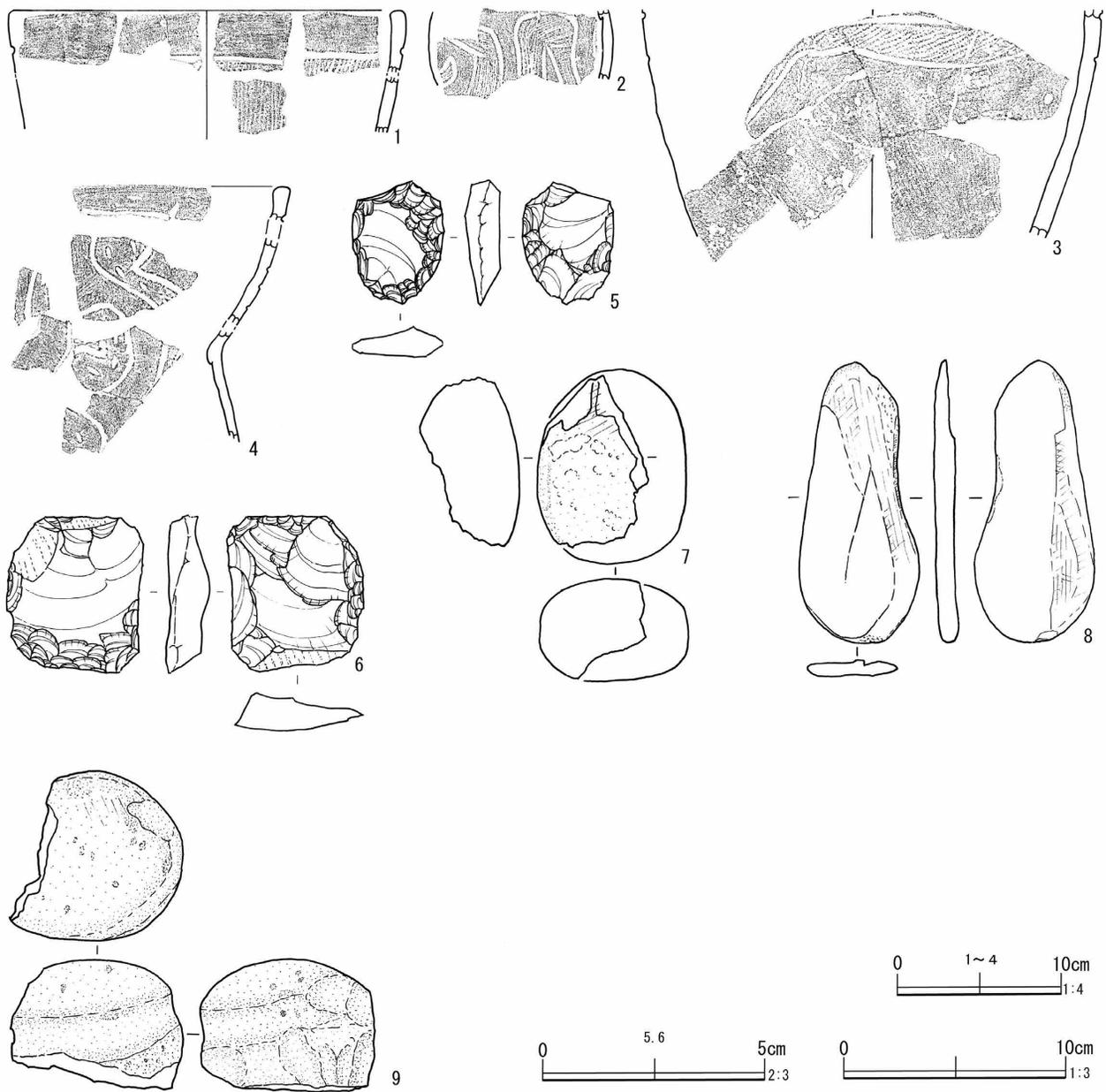
第101図 第81号住居跡出土遺物



第102図 調査区出土遺物 (1)

第103図1は、推定口径24cmを測る深鉢形土器で、口縁部に無文帯を持ち、体部に条線文を施すものである。加曾利E式土器であろう。2は、推定胴径11cmの小型の深鉢形土器で、沈線区画の中に条線を充填する資料である。3は、胴部最大径は28cmほどと思われる深鉢形土器の胴下半部資料である。湾曲する縄文帯が観察される。4は、刺突の充填されるJ字文が施された括れを持つ平縁深鉢である。

石器 第103図5は、搔器である。表裏に素材剥片の主剥離を残す。右側縁は表裏から細かく丁寧な剥離を施す。円刃となる刃部は、裏面は大きく階段状剥離とし、正面側には丁寧な調整を施している。6は削器である。表裏に素材剥片の主剥離を残す。裏面は上部に残されたバルブを剥ぐ剥離を加えるとともに裏面右側縁には不規則ながら調整加工を加える。正面下端は、裏面は平滑な節理面であるがそこから不規則な調整加工を重ね、直刃を形成する。7は磨石、8は砥石である。9は石棒の頭部である。



第103図 調査区出土遺物 (2)

第17表 調査区出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
103	5	搔器	チャート	2.8	2.1	0.7	4	
103	6	削器	チャート	3.6	3.0	1.0	11	
103	7	磨石	安山岩	(7.5)	(5.0)	(4.3)	(144)	
103	8	砥石	泥板岩	12.7	5.5	1.0	69	
103	9	石棒	安山岩	(5.6)	(8.0)	(7.6)	(410.0)	頭部残欠

IV 総括

1 第8地点の成果

縄文時代前期から奈良・平安時代までの住居跡を計32軒検出した。主体となるのは、縄文時代前期の住居跡であり、埋設土器を伴うものが多く認められた。遺構内と遺物包含層からの出土のものを含め、出土土器の多くは、縄文時代前期初頭の花積下層式期のものである。

本地点では花積下層式期の石製装飾品が14点出土した。内訳は珧状耳飾5点、垂飾6点、玉素材3点である。垂飾6点の内、4点は欠損した珧状耳飾からの転用である。既報告資料に本調査地点出土資料を加えると石製装飾品の総点数は58点となる。これは、少なくとも関東圏の当該期の遺跡では随一の出土量と思われる。石製装飾品の量及びバラエティを補強するだけでなく、完存する珧状耳飾のほか、製作途上のもの、珧状耳飾欠損後の垂飾への転用事例など、石製装飾品使用の実態に迫りうる資料や、玉素材の存在から、製作に係る遺跡の性格なども追求する手がかりとすることが出来るものと考えられ、本地点出土資料の意義は大きい。

古墳時代の遺構としては、第2地点で検出されていたものも含め3軒の住居跡と4基の土坑を検出した。出土した土師器甕や高杯の形態から、いずれも古墳時代前期の所産と思われる。住居跡の平面形態は正方形に近い形態を呈し、住居跡内に周溝が巡るものが認められた。

奈良・平安時代の遺構としては、カマドをもつ住居跡を1軒検出した。出土した土師器片や須恵器片から、8世紀後半から9世紀の所産かと思われる。カマドとは異なる焼土の広がり住居跡内に認められ、大口径の羽口片や鉄滓が付近で散見された。本地点全体で合計4774.8gの鉄滓が出土している。

第18表 第8地点出土鉄滓重量表

出土位置	磁 着 度								微小片	合計
	0	1	2	3	4	5	6	7		
第6号住居跡							15.4			15.4
第50号住居跡	1.0		19.0	911.0	35.8	21.0	44.0		11.0	1042.8
第5号土坑	27.0									27.0
第32号土坑				1.0						1.0
第52号土坑			2.0			10.0			1.0	13.0
風倒木跡			8.0							8.0
グリッド	17.7	62.0	109.0	539.0	481.0	555.0	196.0	392.0	72.7	2424.4
表採	0.2		4.0	23.0	55.0	103.0	344.0	88.0	6.0	623.2
試掘			5.0	50.0	31.0		6.0	518.0	10.0	620.0
合計	45.9	62.0	147.0	1524.0	602.8	689.0	605.4	998.0	100.7	4774.8

※単位は全てg

2 第11地点の成果

既存住宅の基礎等で大きく攪乱を受けていたが、炉跡の存在から住居跡2軒の展開を掴むことができた。住居跡に伴う縄文時代後期初頭の称名寺式期の埋設土器や大型石棒の出土は特筆される。

写真図版



掘削作業状況 (1)



掘削作業状況 (2)



実測作業状況 (1)



実測作業状況 (2)

図版2



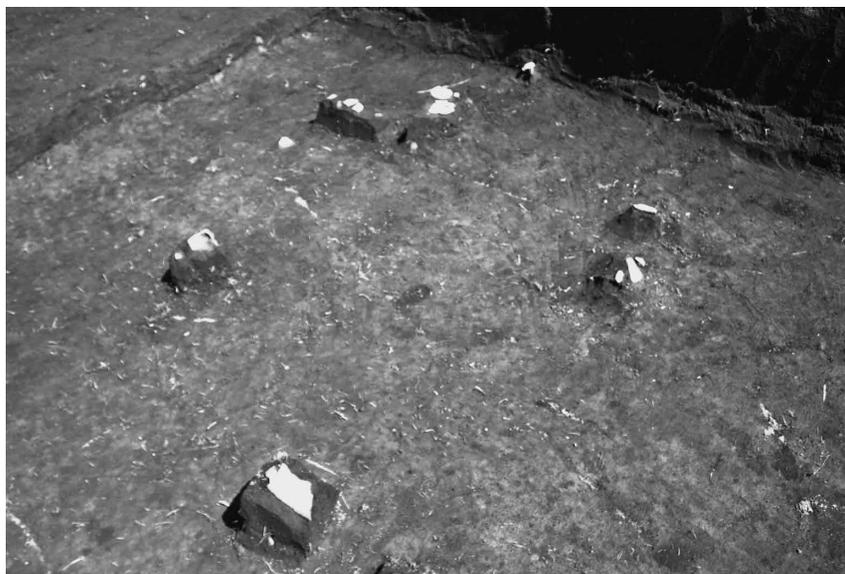
第8地点調査区北半部全景



第8地点調査区南半部全景



第49号住居跡



第49号住居跡遺物出土状況



第50号住居跡

図版4



第50号住居跡羽口出土状況



第50号住居跡焼土遺物出土状況



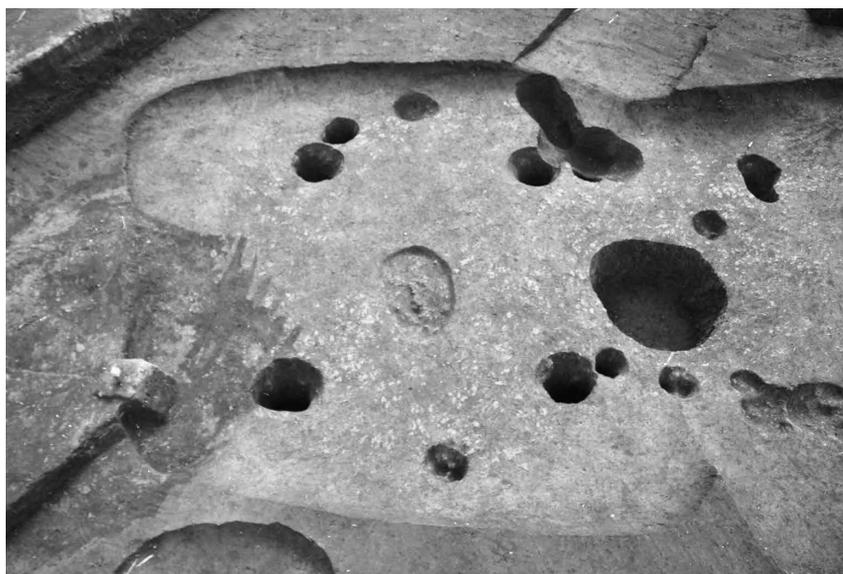
第51号住居跡



第51号住居跡遺物出土状況



第52・53号住居跡



第52号住居跡

図版6



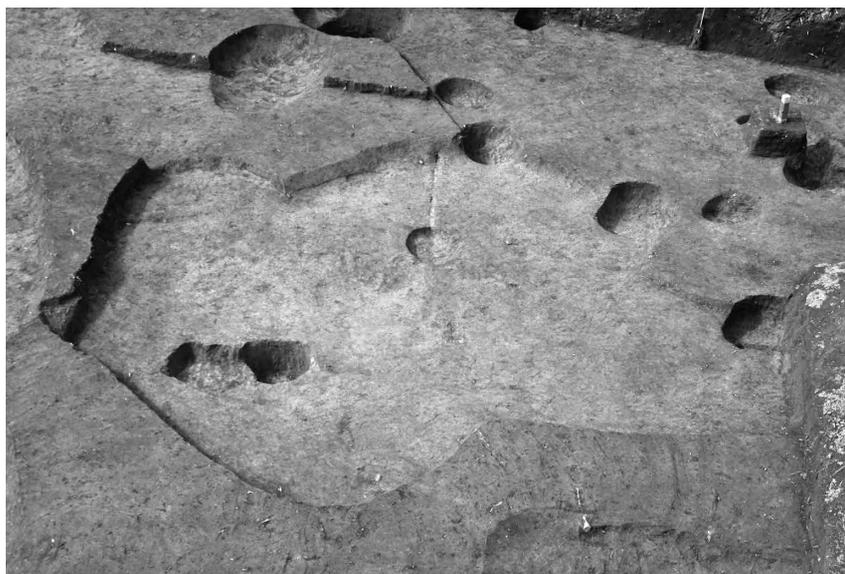
第52号住居跡石製耳飾出土状況



第53号住居跡



第54号住居跡



第55号住居跡



第56号住居跡



第57・58号住居跡

図版8



第57号住居跡埋設土器検出状況



第58号住居跡埋設土器検出状況



第59号住居跡

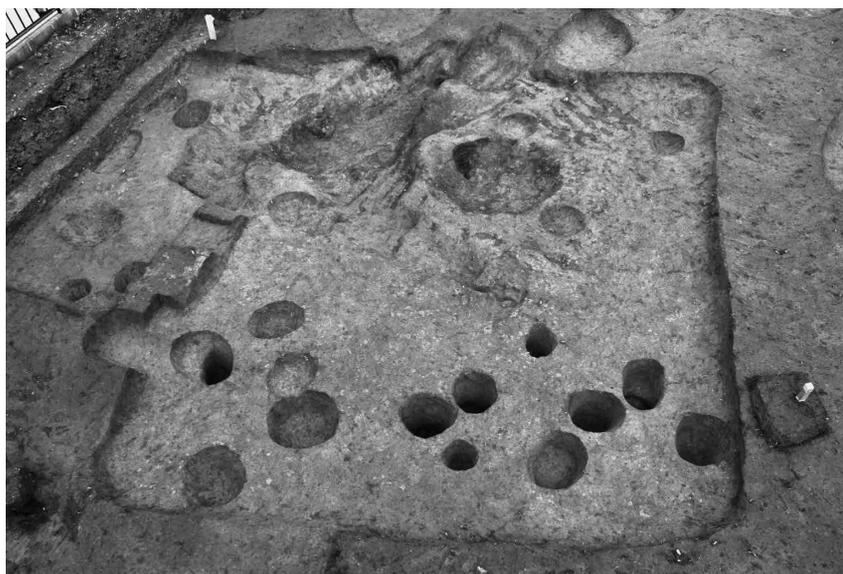
第59号住居跡埋設土器検出状況



第60号住居跡



第61号住居跡



図版10



第6・62号住居跡



第6号住居跡



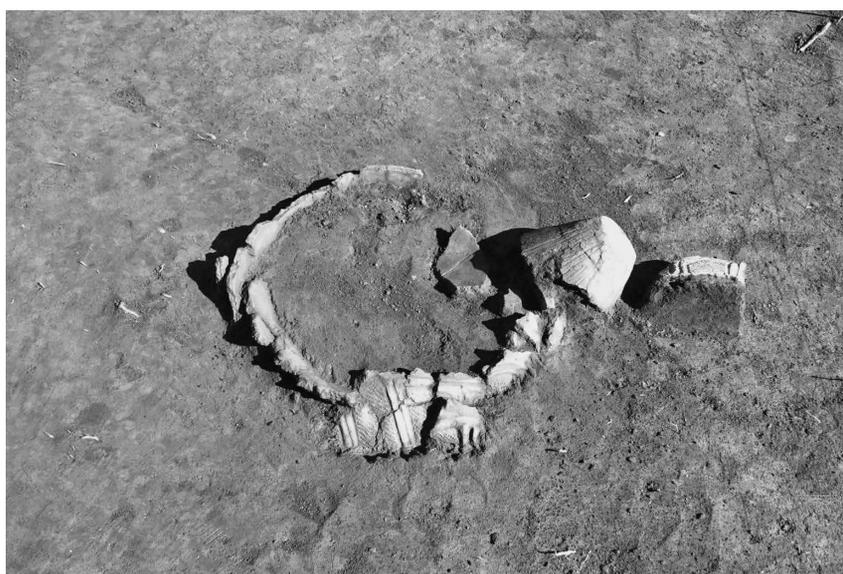
第62号住居跡埋設土器検出状況



第63号住居跡

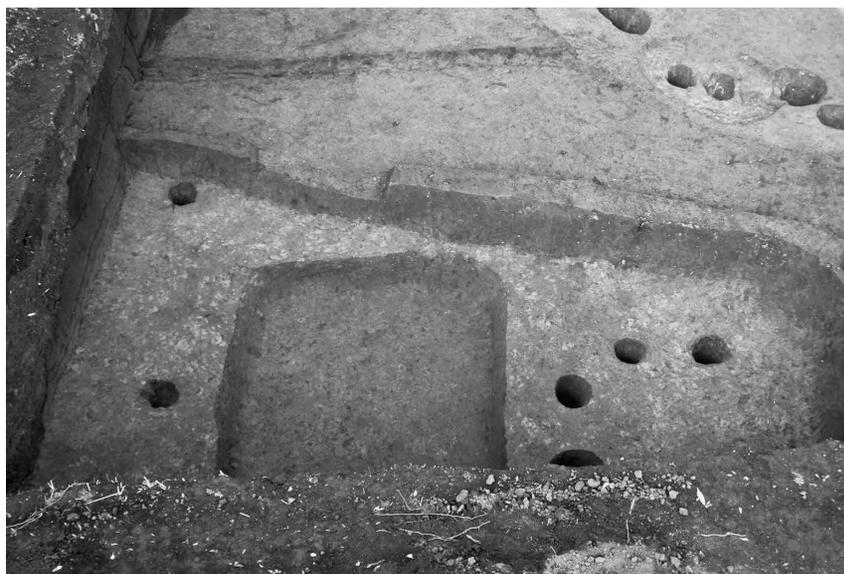


第63号住居跡遺物出土状況



第63号住居跡炉体土器検出状況

図版12



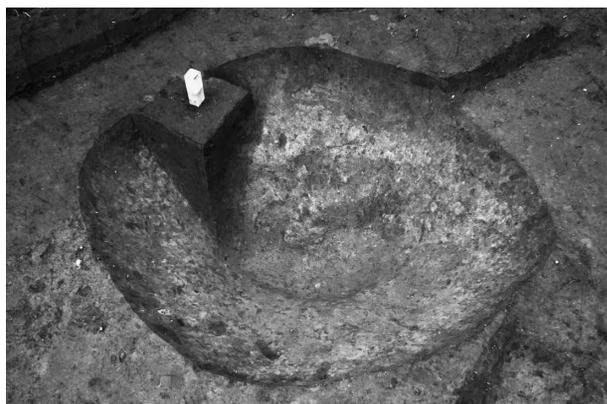
第64・65号住居跡



第65号住居跡



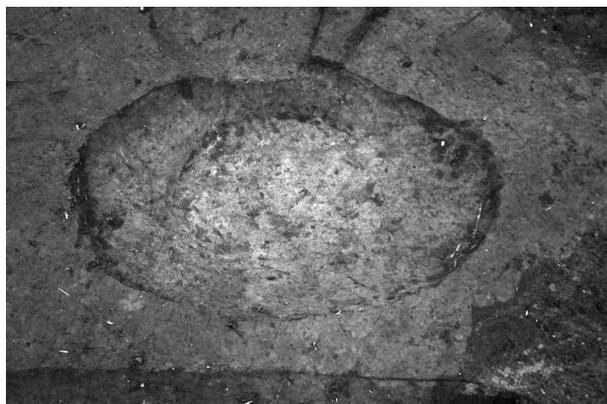
第66号住居跡



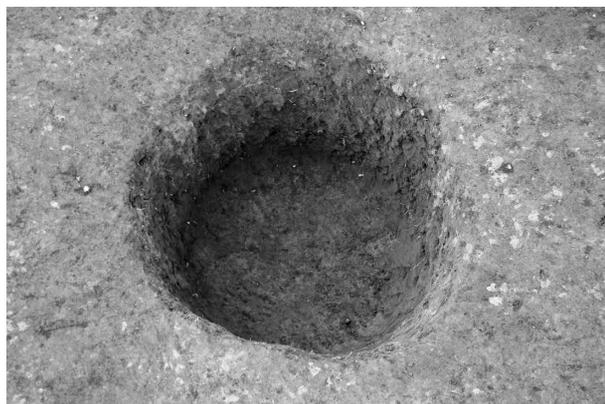
第1号土坑



第1号土坑遺物検出状況



第4号土坑



第5号土坑



第8号土坑



第9号土坑

图版14



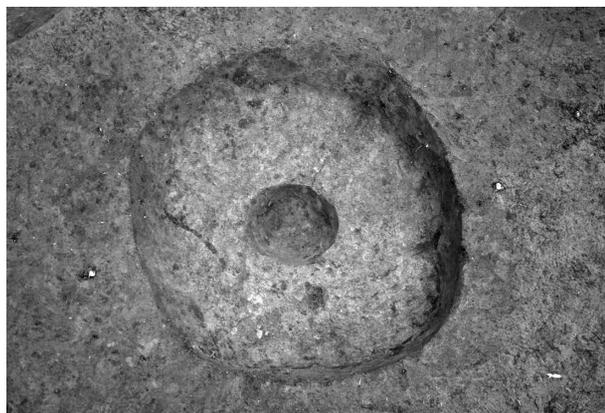
第10·11·14号土坑



第12·13·15号土坑



第12号土坑伏甕検出状況



第16号土坑



第19·20号土坑



第24·25号土坑



第26号土坑



第29~32号土坑



第33~35号土坑



第35号土坑埋設土器検出状況



第38・39号土坑



第41・42号土坑

图版 16



第46号土坑



第47号土坑



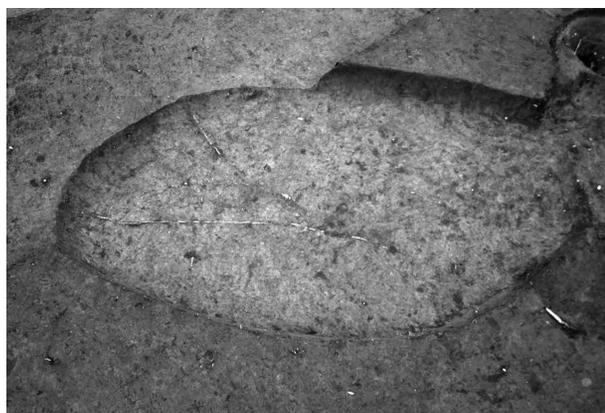
第49号土坑



第50号土坑



第51号土坑



第54号土坑



第58号土坑



第60号土坑



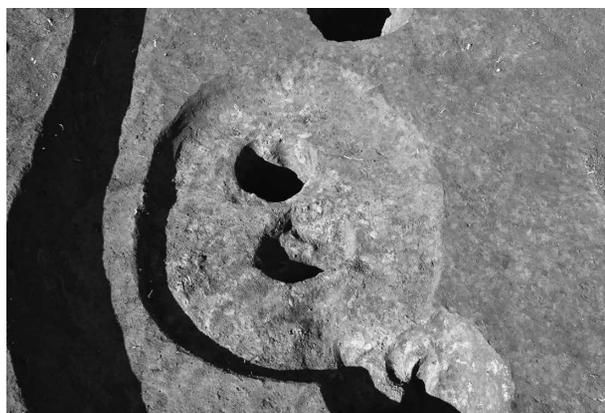
第62号土坑



第65号土坑



第71号土坑



第72号土坑



第1号炉穴



石製耳飾出土状況 (1)



石製耳飾出土状況 (2)



第6号住居跡出土遺物 (第6图)



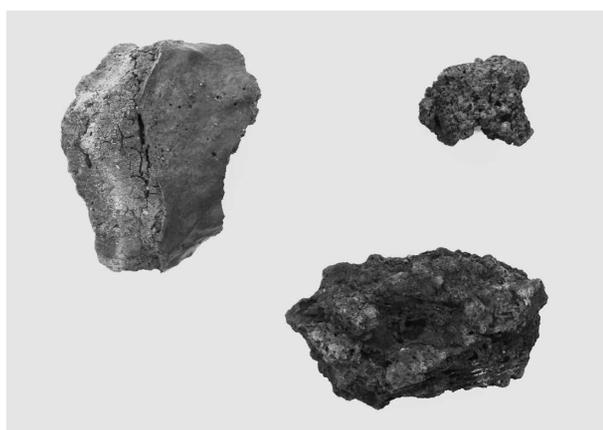
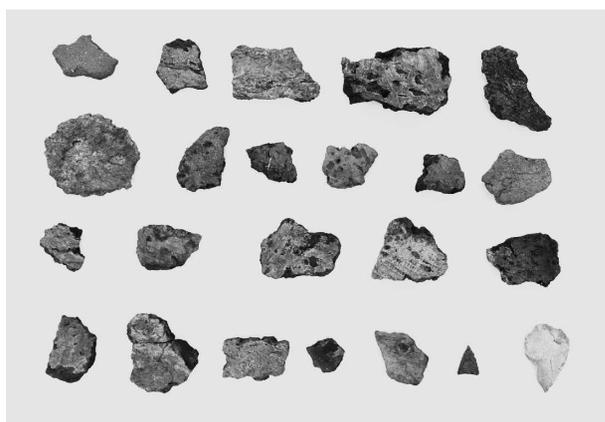
第50号住居跡出土遺物 (1) (第11图)



第49号住居跡出土遺物 (1) (第8图)

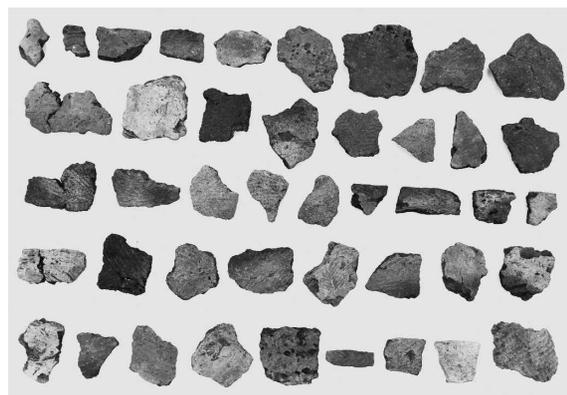


第49号住居跡出土遺物 (2) (第9图)

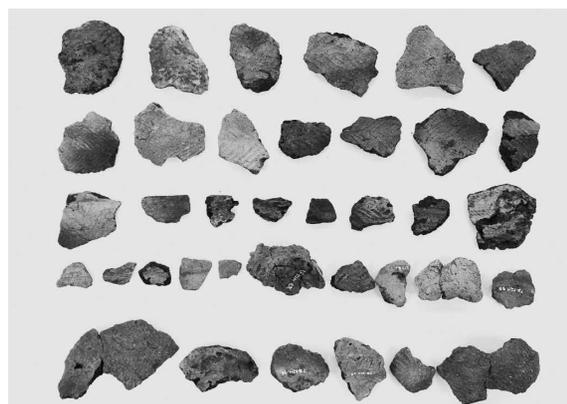


第50号住居跡出土遺物 (2) (第12图)

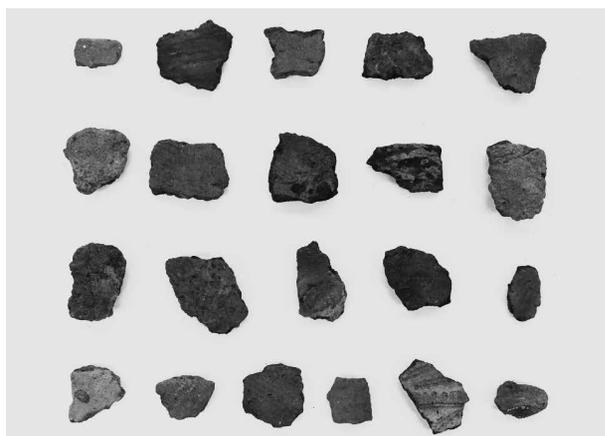




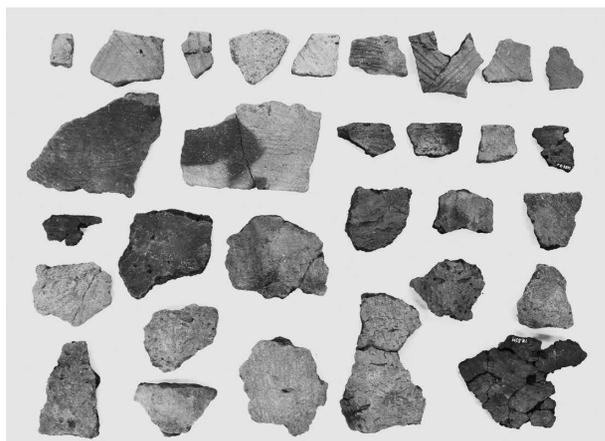
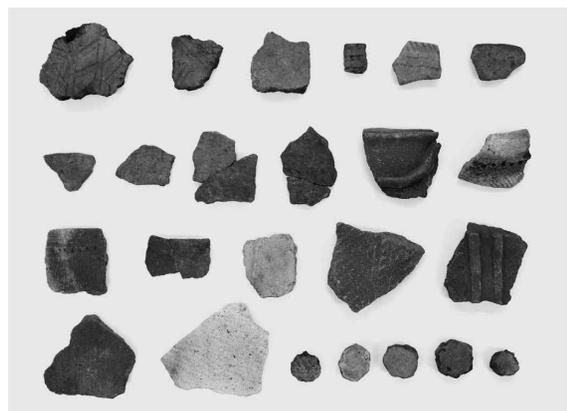
第52号住居跡出土遺物 (2) (第18图)



第52号住居跡出土遺物 (3) (第19图)



第51号住居跡出土遺物 (第14图)



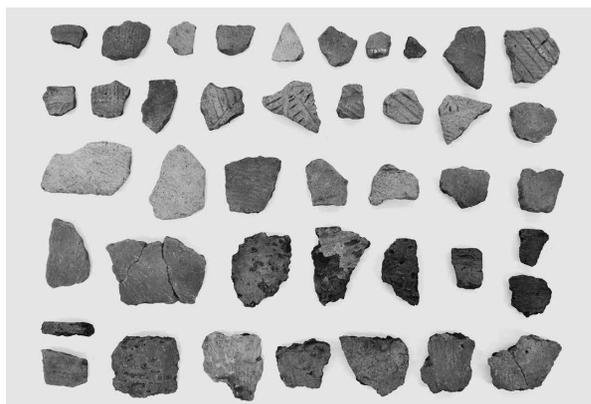
第52号住居跡出土遺物 (1) (第17图)



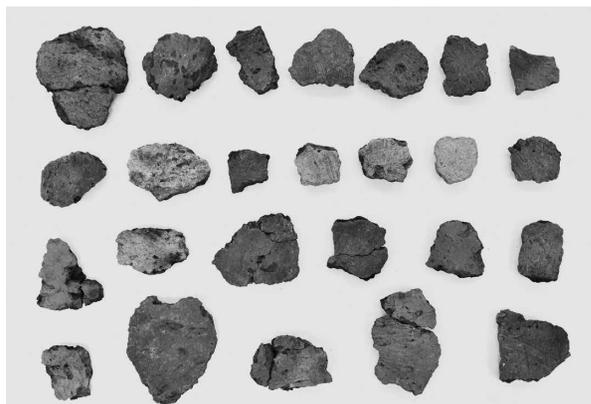
第52号住居跡出土遺物 (4) (第20图)



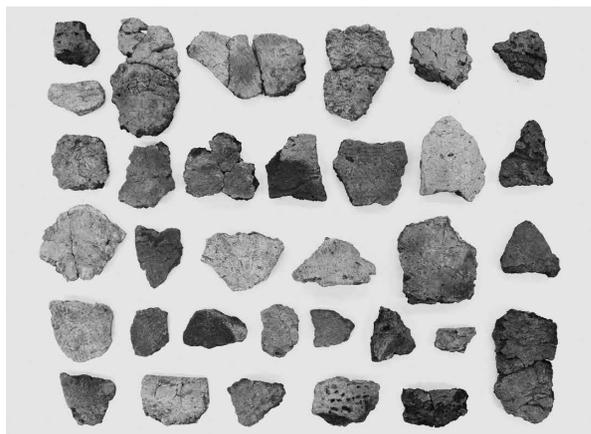
第 52 号住居跡出土遺物 (5) (第 21 图)



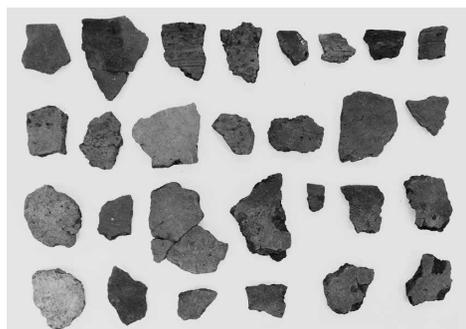
第 53 号住居跡出土遺物 (1) (第 22 图)



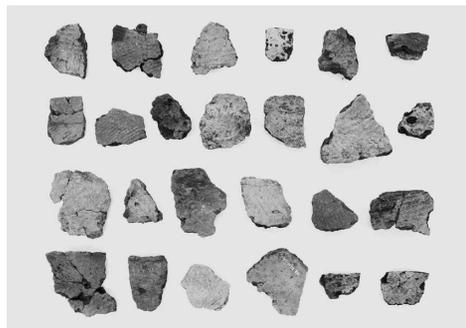
第 53 号住居跡出土遺物 (2) (第 23 图)



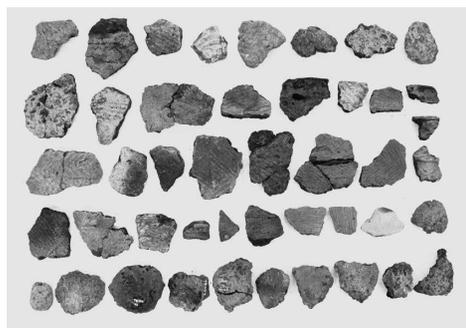
第 53 号住居跡出土遺物 (3) (第 24 图)



第 53 号住居跡出土遺物 (4) (第 25 图)



第 53 号住居跡出土遺物 (5) (第 26 图)



第 53 号住居跡出土遺物 (6) (第 27 图)

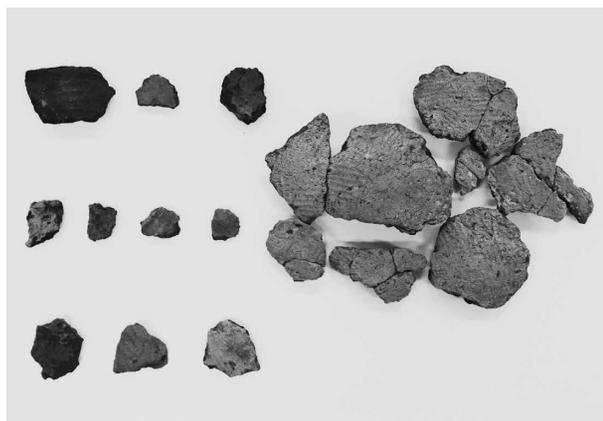


第 53 号住居跡出土遺物 (7) (第 28 图)

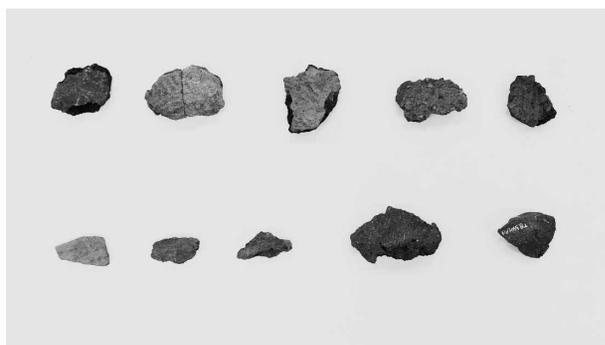
图版 22



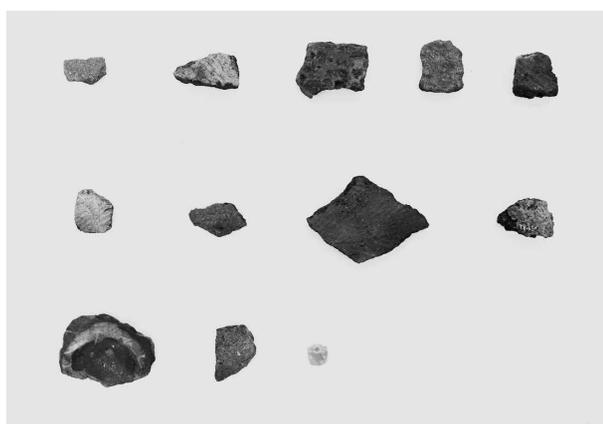
第53号住居跡出土遺物 (8) (第29图)



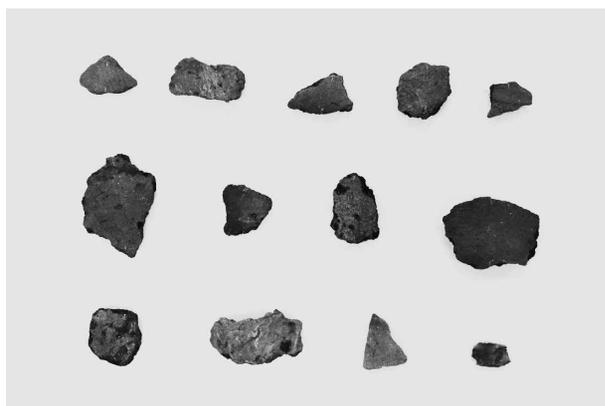
第57号住居跡出土遺物 (第34图)



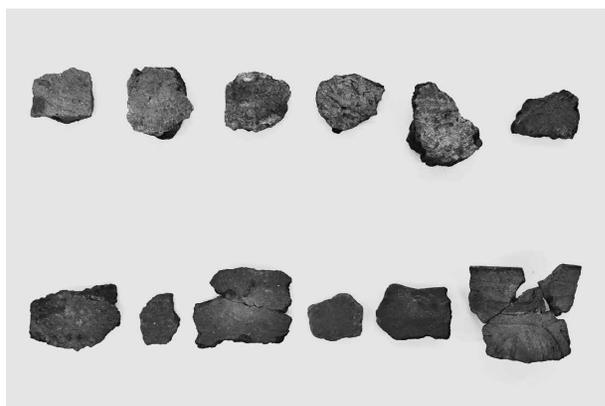
第54号住居跡出土遺物 (第30图)



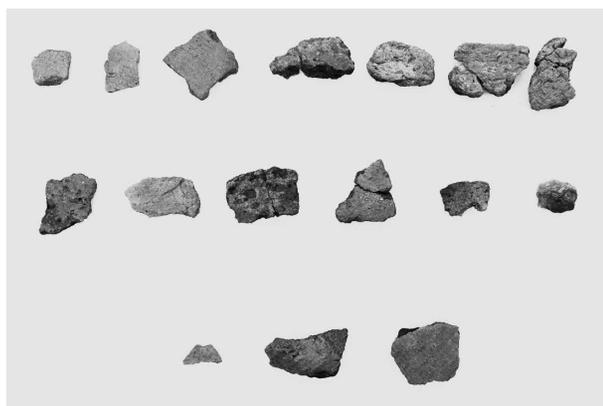
第58号住居跡出土遺物 (第35图)



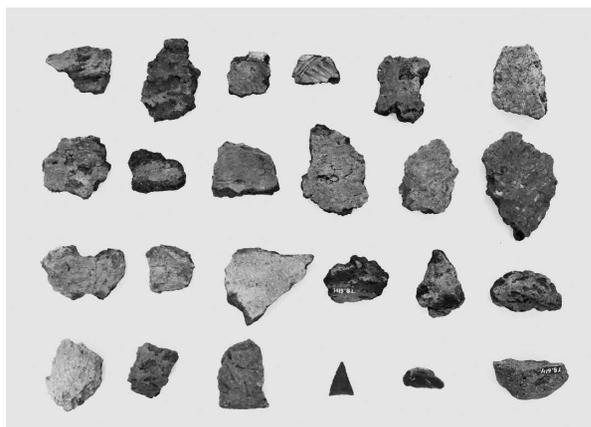
第55号住居跡出土遺物 (第31图)



第56号住居跡出土遺物 (第33图)



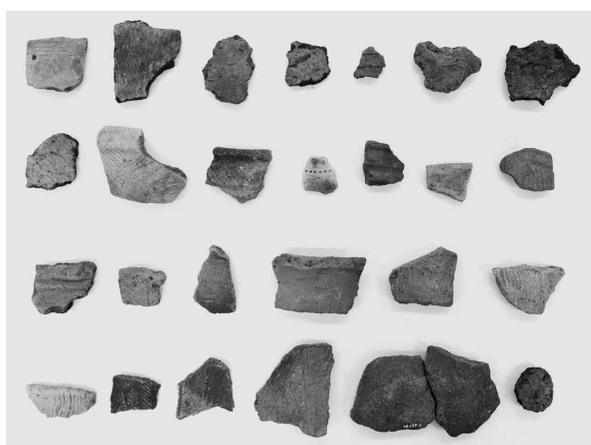
第59・60号住居跡出土遺物 (第38・39图)



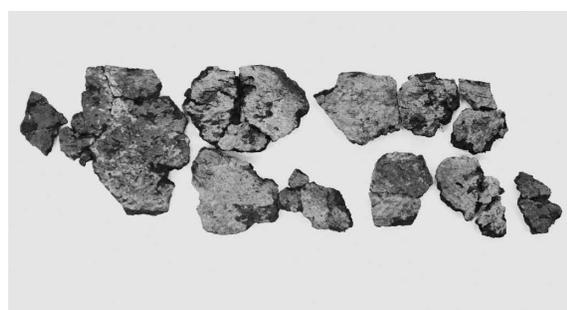
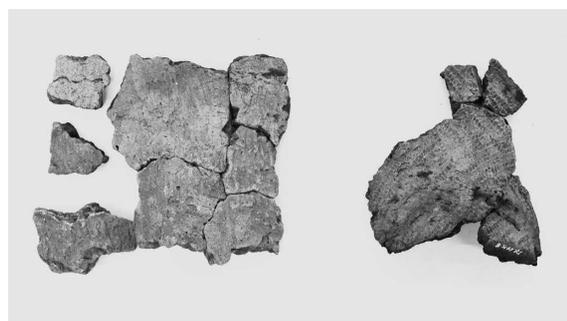
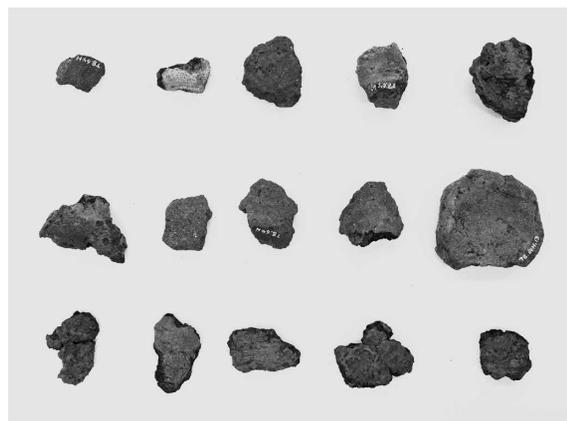
第61号住居跡出土遺物 (第40图)



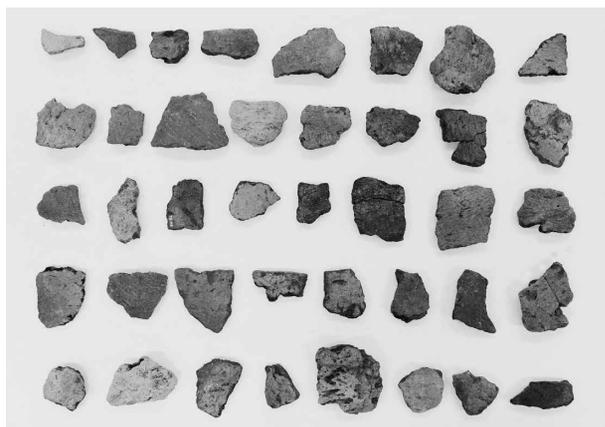
第62号住居跡出土遺物 (第42图)



第63号住居跡出土遺物 (第44图)



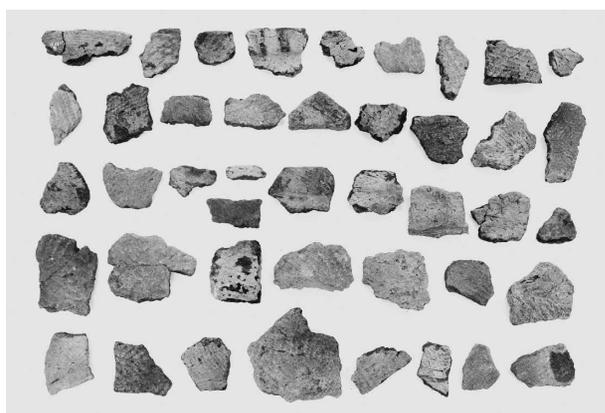
第64号住居跡出土遺物 (3) (第48图)



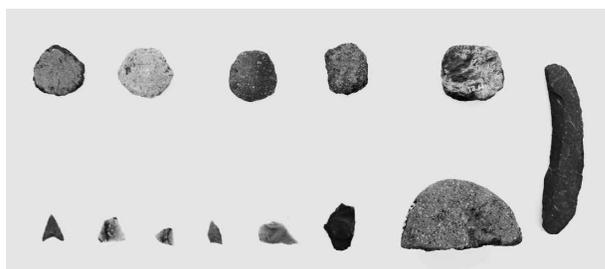
第64号住居跡出土遺物 (1) (第46图)



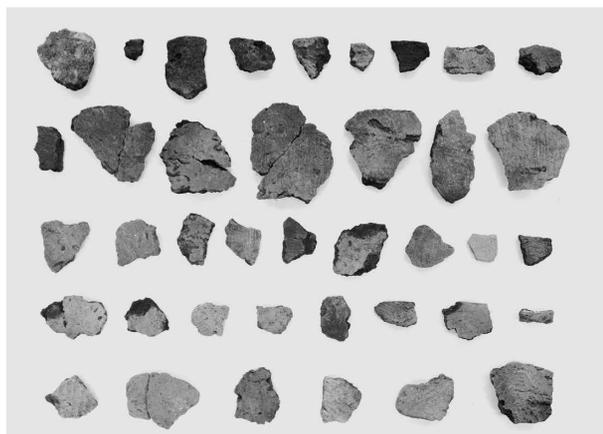
土坑出土遺物 (1) (第61图)



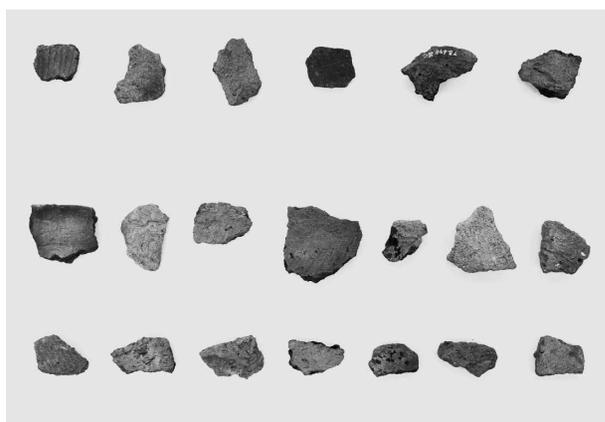
第64号住居跡出土遺物 (2) (第47图)



第64号住居跡出土遺物 (4) (第49图)



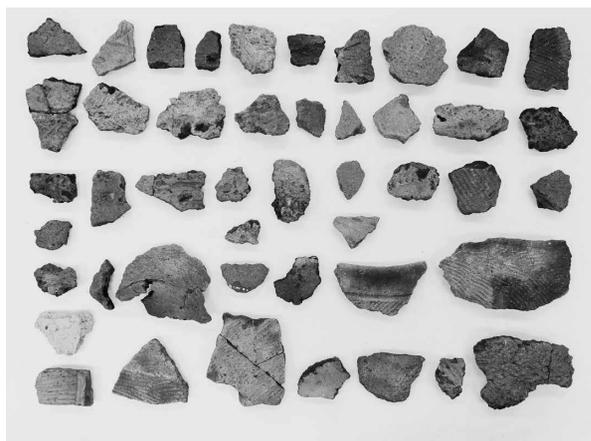
土坑出土遺物 (2) (第62图)



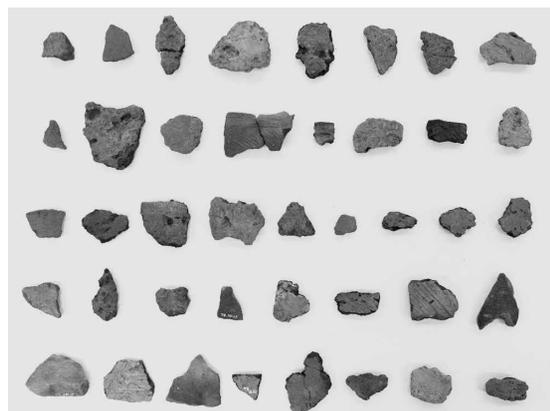
第65・66号住居跡出土遺物 (第50・52图)



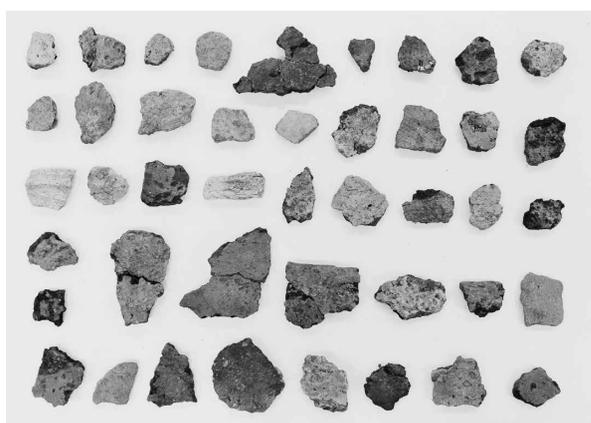
土坑出土遺物 (3) (第63图)



土坑出土遺物 (4) (第64図)



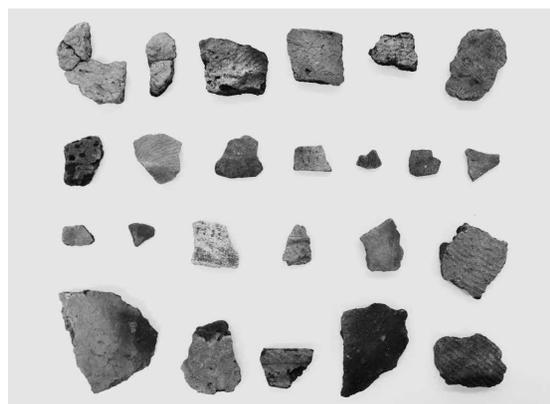
土坑出土遺物 (7) (第67図)



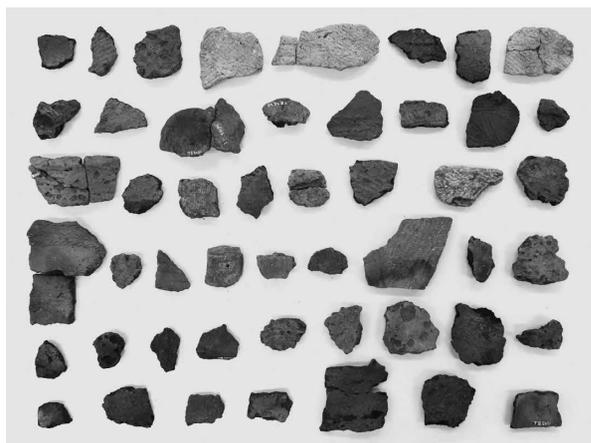
土坑・炉穴出土遺物 (第68図)



土坑出土遺物 (5) (第65図)



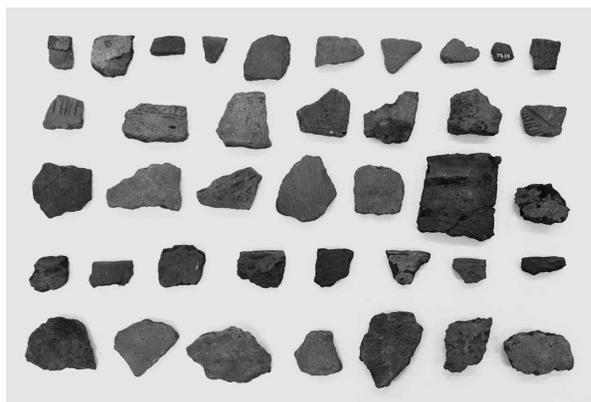
炉穴・溝跡出土遺物 (第70図)



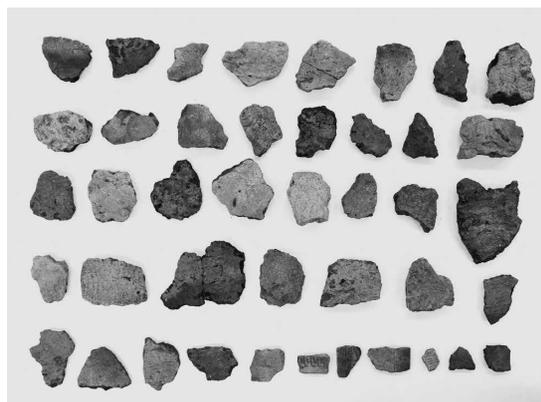
土坑出土遺物 (6) (第66図)



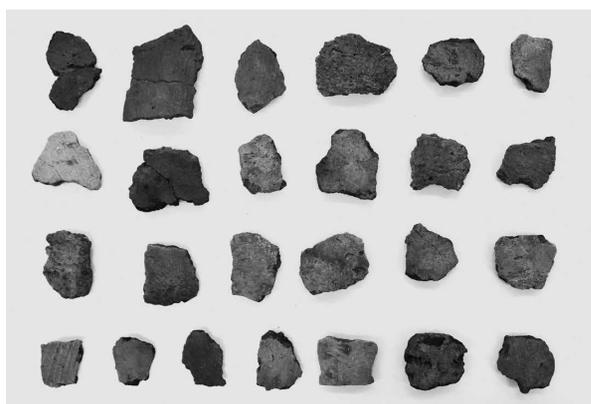
風倒木跡出土遺物 (第72図)



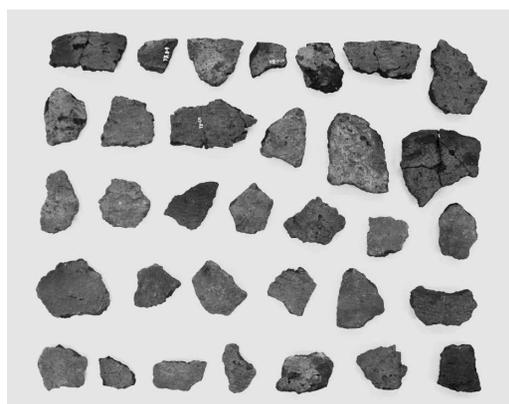
グリッド出土遺物 (1) (第73図)



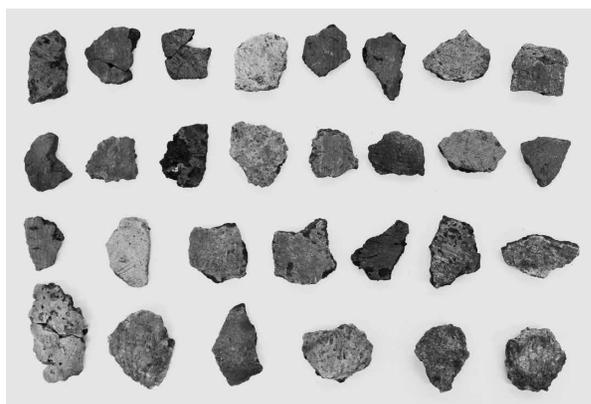
グリッド出土遺物 (5) (第77図)



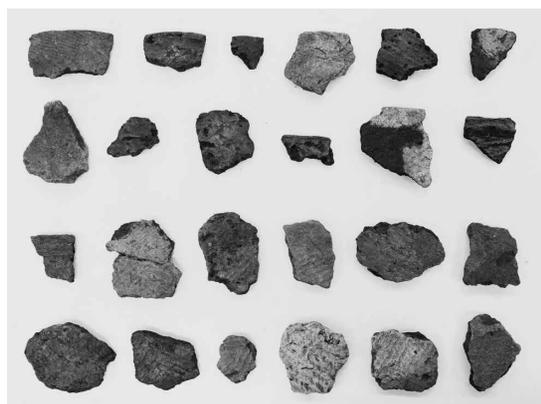
グリッド出土遺物 (2) (第74図)



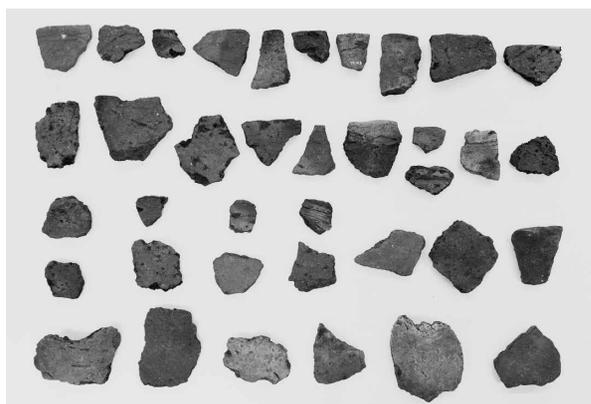
グリッド出土遺物 (6) (第78図)



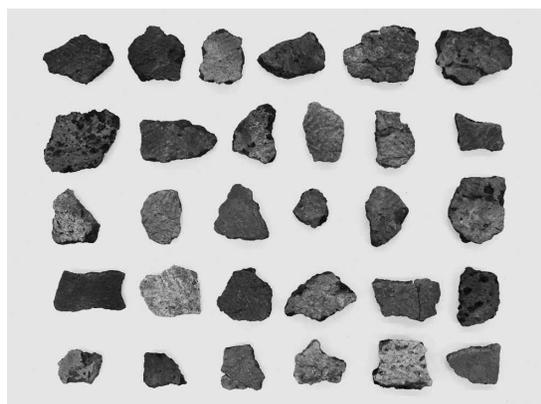
グリッド出土遺物 (3) (第75図)



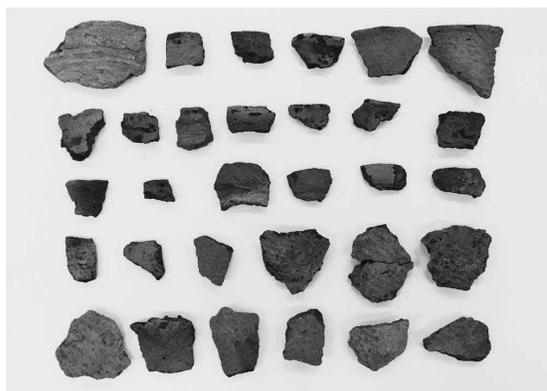
グリッド出土遺物 (7) (第79図)



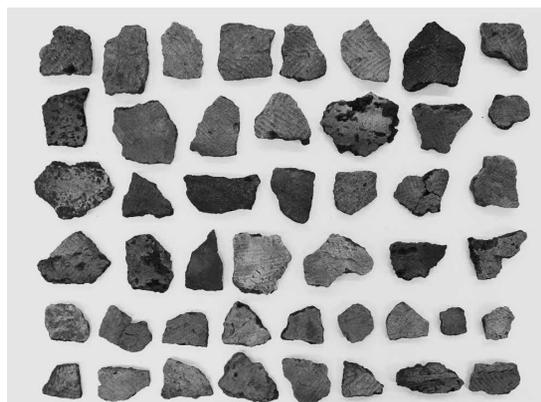
グリッド出土遺物 (4) (第76図)



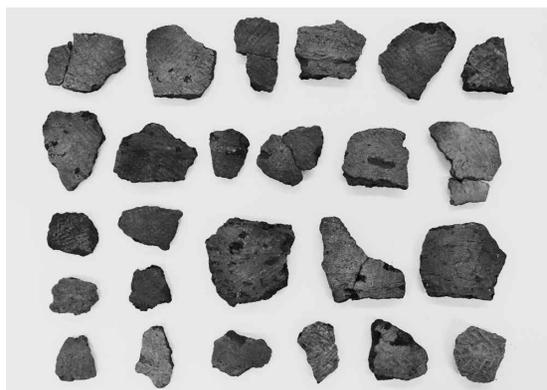
グリッド出土遺物 (8) (第80図)



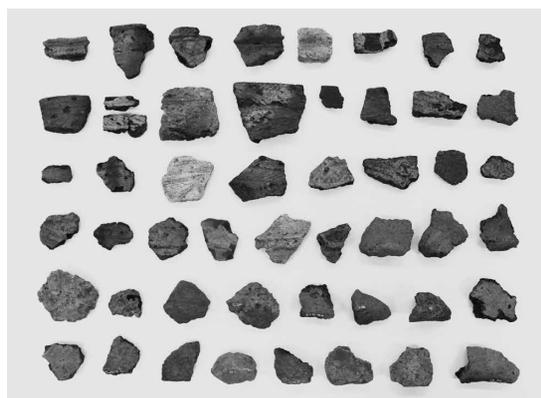
グリッド出土遺物 (9) (第81図)



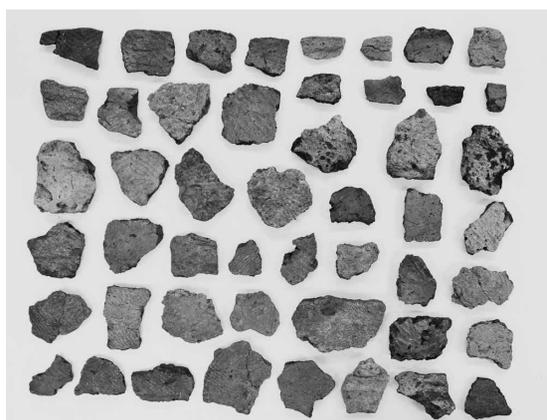
グリッド出土遺物 (13) (第85図)



グリッド出土遺物 (10) (第82図)



グリッド出土遺物 (14) (第86図)



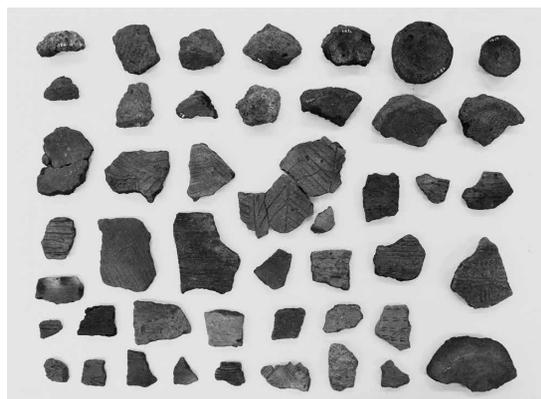
グリッド出土遺物 (11) (第83図)



グリッド出土遺物 (15) (第87図)



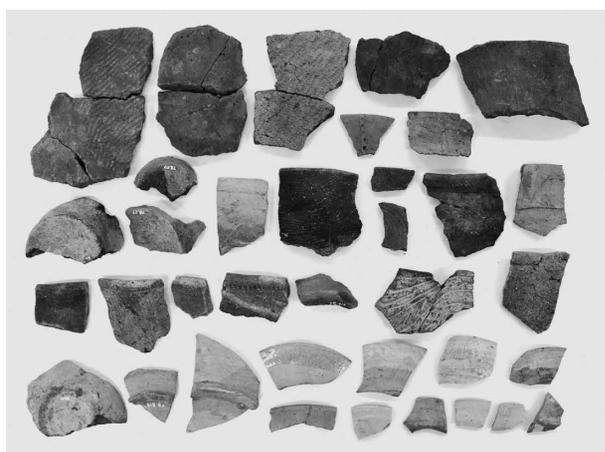
グリッド出土遺物 (12) (第84図)



グリッド出土遺物 (16) (第88図)



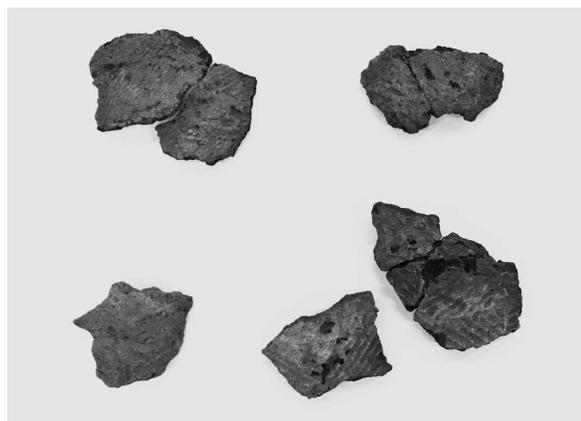
グリッド出土遺物 (17) (第89図)



グリッド出土遺物 (18) (第90図)



グリッド出土遺物 (20) (第92図)



グリッド出土遺物 (19) (第91図)



グリッド出土遺物 (21) (第93図)



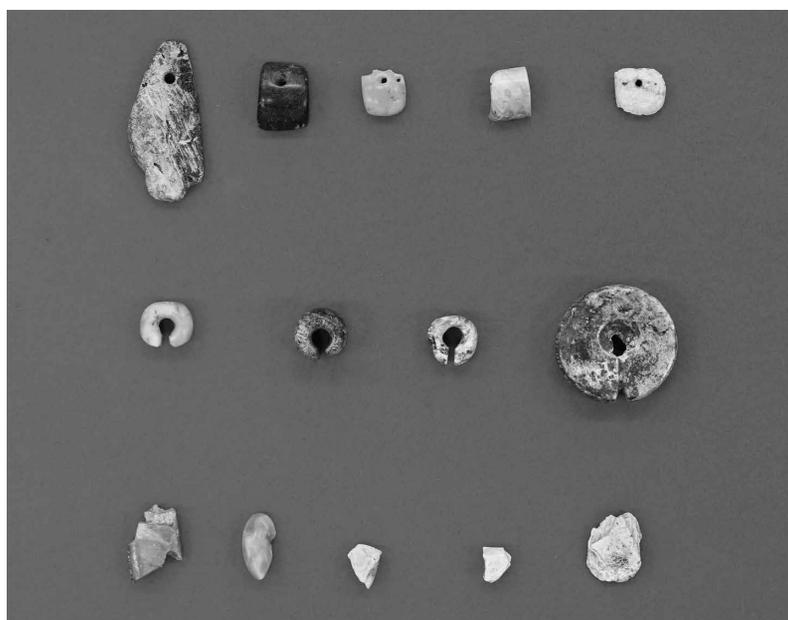
グリッド出土遺物 (23) (第95図)



グリッド出土遺物 (22) (第94図)



グリッド出土遺物 (24・25) (第96・97図)



第8地点出土石製装飾品



第11地点調査区北半部全景



第11地点調査区南半部全景



第80号住居跡炉跡



第81号住居跡炉跡



埋設土器検出状況 (1)



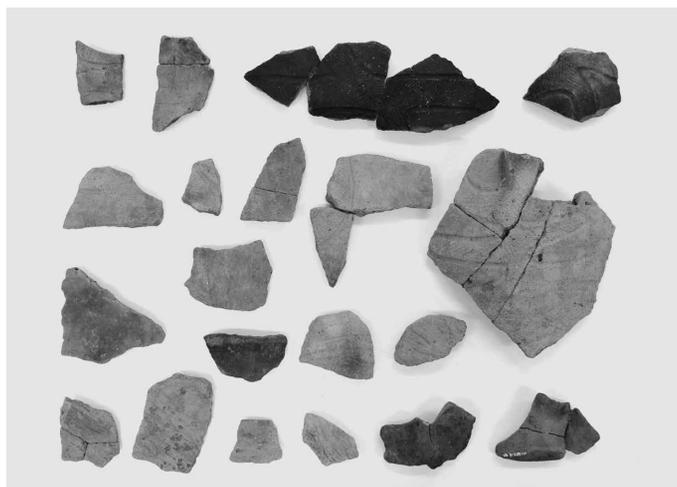
埋設土器検出状況 (2)



磨製石斧出土状況



大型石棒出土状況



第80号住居跡出土遺物 (第99图)

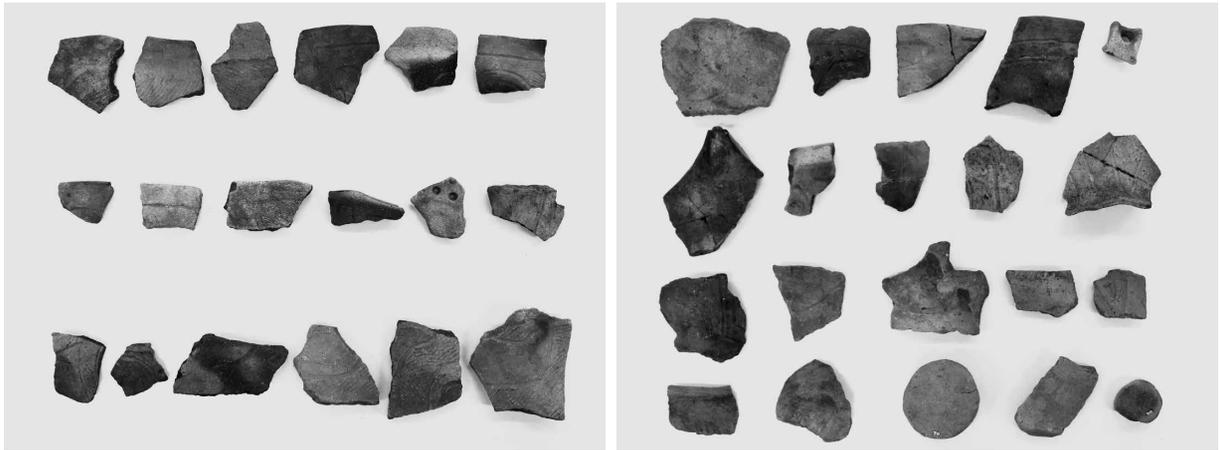


第80・81号住居跡出土遺物 (第100图)



第81号住居跡出土遺物 (第101图)

図版 34



調査区出土遺物 (1) (第102図)



調査区出土遺物 (2) (第103図)

報告書抄録

	タタラヤマイセキ(ダイハチ・ジュウイチチテン)							
書名	タタラ山遺跡(第8・11地点)							
副書名	市内遺跡群発掘調査報告書XXX							
シリーズ名	白岡市埋蔵文化財調査報告書第31集							
編著者名	奥野 麦生 杉山 和徳							
編集機関	白岡市教育委員会							
所在地	〒349-0292 埼玉県白岡市千駄野432 TEL 0480-92-1111							
発行年月日	2022(令和4)年3月31日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
タタラ山遺跡 <small>ヤマイセキ シラオカ</small>	第8地点 白岡696-1の一部	11445	014	36° 00′ 40″	139° 39′ 23″	第8地点 20130902 ～ 20131122	第8地点 666.1 第11地点 86.12	記録保存調査
	第11地点 白岡760-10			第11地点 20210608 ～ 20210616				
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
タタラ山遺跡	集落	縄文時代前期・中期 平安時代 中・近世		住居跡34軒 土坑72基 炉穴1基 溝跡3条		縄文土器・土師器・土製 品・石器・金属製品		縄文時代前期の石製装 飾品が14点出土した。
<p>遺跡の概要</p> <p>縄文時代から奈良・平安時代までの住居跡を34軒検出した。主体となる時期は縄文時代前期であり、住居跡には埋設土器を伴うものが多く認められた。</p>								

白岡市埋蔵文化財調査報告書第31集

タタラ山遺跡（第8・11地点）

市内遺跡群発掘調査報告書XXX

令和4年3月28日 印刷

令和4年3月31日 発行

発行 白岡市教育委員会

印刷 朝日印刷工業株式会社